
時空戦艦『大和』

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空戦艦『大和』

【Nコード】

N1156S

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

坊ノ岬に戦艦『大和』が沈まなかった戦後日本。幾多の困難を乗り越え、多数の敵を退いてきた大和だが、核兵器によってビキニ環礁に沈もうとしていた。標的艦として沈ませぬと立ち上がった者達の同盟『大和会』は21キロトン級の閃光と衝撃を境に、戦前日本へとやり直しの旅に出る。滅び去る筈だった夢幻の艦隊と共に……。

第1話 大和、沈マズ

第1話『大和、沈マズ』

1945年8月15日

広島県呉市

呉海軍工廠は静寂に包まれていた。

いつもは工作機器の駆動音、それに負けない位、胸から張り上げられた工員達の声が大気を揺るがし、色褪せた作業着、履き古した作業靴で、たゆみなく動き回っていた。

艦船にとつて、彼らは血液の様なものだった。体内を休みもせず、に循環し続け、生体機能を可能としている。先月、大規模な空襲を被った呉の港にしてみれば、今こそ血液が必要となる。しかし、まだ正午だというのに作業は中断され、補修を何日も、何週間も待っている艦船は整然と並べられたままだった。機能が停止しているその要因は、朝早く 午前七時に流されたラジオ放送だった。

呉海軍工廠の一角、とある軍艦に休息と修繕を提供する船渠は、他に比べても明らかな差が確認出来る。長さ314m、幅45m、深さ11mのそれは、大日本帝国が誇る超大型戦艦 『大和』の為、拡張工事がなされて造られた船渠だった。史実には今、その主の姿は無い。

しかしながら、戦艦大和は其処に居た。厳重な警備態勢、徹底した秘密主義、しかし最期は悲惨であった 大和は確かに、堂々と、しかるべき場所に居た。

どうして大和が終戦間近の呉海軍工廠に居るのは、四ヶ月前の四月上旬に遡る。

太平洋戦争末期 『菊水作戦』に大和が起用され、入念な準備が進められていた中、連合軍は裁きの鉄槌を下した。午前11時、豊後水道上空。銀翼を煌めかせ、B-29『スーパーフォートレス』計800機に及ぶ大爆撃編隊は、多数の護衛機を付け、山口県徳山市に侵入した。

天然の良港、徳島湾を備え、石油精製業を中核と成す重化学工業地帯である徳島市は地理的位置からもそうだが、山口県東部における中心都市であった。

大日本帝国海軍はここに『第三燃料廠』を置いていた。燃料廠とは、海軍で必要とする燃料、潤滑油の生産・加工・研究開発を行う施設である。徳山市に置かれた第三燃料廠は日本最大の規模を誇る呉の軍港を支える為の重要な補給拠点であった。連合艦隊旗艦の大和を始め、呉の軍艦の多くはこの徳山の第三燃料廠にて、燃料補給を行う。

そんな重要拠点が空襲の被害を受けるのは、時間の問題だった。800機に及ぶB-29が大編隊を組んで、真昼間から堂々と攻撃を図ったのは、完全なる力押しを狙った結果だった。B-29は四基のライトR-3350エンジン 通称『デュクレップスサイクロンエンジン』を吼え立たせ、徳山の空を轟々と越えていった。12・7mm重機関銃に守られた超空の要塞は、いかなる存在をも阻み、護衛機の助けを借りずとも十分に徳山に到達出来る力があつた。

史実では一ヶ月後の五月十日に行われるこの大空襲は、徳山の重工業と燃料拠点としての機能を、完膚無きにまで叩き潰した。B-29は高射砲陣に阻まれたはしたものの、800機という大軍勢を前にはどうしようもなかった。

爆撃手が地上に向けて、怒涛の如く爆弾を投下する。その眼下に

は、業火に包まれ、紅く染まった徳山の街が広がっていた。今回の爆撃作戦は、軍事目標だけではなく工業地帯も狙ったのもので、都市全体を破壊する結果を招いていた。市内中心部に位置する第三燃料廠は周囲に民家を備え、パールハーバーの十倍は悲惨な実情に至る事となった。開口した機体爆弾倉から飛び出した多数の焼夷弾と爆弾は、その強力な火力を存分に発揮し、全てを粉碎した。

こうして、燃料廠としての機能が失われた徳山の惨状はすぐさま報告され、大和を主とする艦隊は、燃料の喪失から基地への逆戻りを余儀無くされた。

一九四五年七月、米海軍の二度に渡る空襲に対し、大和は軽微の損傷のみに済んだ。

そして 今に至る。

八月十五日正午、玉音放送が流れ出した。

第1話 大和、沈マズ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2話 夢幻の艦隊（前）

第2話『夢幻の艦隊（前）』

1937年7月1日

九州ノ坊ノ岬沖

その日、静寂に包まれた坊ノ岬沖海域を駆る一隻の戦艦の姿があった。

運命の時間 僅か数分ではあったがその時、戦艦のマストに居た一人の見張り員の視線は頭上に釘付けとなった。覆い、煌めかせ、突如として青空を切り裂いたその光景は、21キロトン級の置き土産。突如の天変地異 奇想天外な現象に、比較的ひ弱な乗組員達は世界の終わりにかという具合に恐れ戦いた。屈強な精神を持ち、危機的状況を熟知した乗組員達はその刹那、故郷の友人や家族の上にもこれが見え、何か危険な目に遭っていたらどうしようかと不安を抱きながら、心配そうに空を見上げた。

双陽の刻。彼等はこの事象をそう呼んだ。

数分後、太陽は一つとなった。だが、全ては始まりに過ぎなかった。戦艦の乗組員達は、水平線上に浮かび上がった異変に気付いた。

巨大な戦艦を核と成す、『夢幻の艦隊』の出現である。

それから30分ほど後の戦艦に、数十人の男達が連れ込まれた。怪物の様な戦艦、『大和』とされるその戦艦の艦橋で、彼等は見つかった。全員が意識を失い、倒れていた。その後、搜索に出た乗組員はその男達を艦内より救出、医務室にて簡易検査と身元の確認が行われた。

そんな興味ある身元不明者達の中で一際注目が集まった男が居た。格調高く堂々とした面構え、何より大日本帝国海軍の正装に身を包んでいて、肩に二つの星を戴いていた。その階級章と風貌から、かくも名高き海軍中将 自分達とは訳の違う地位の方であると認識した。その他、大佐、少将の階級章を備えた男も居たが、彼は身元不明者の中では最高位の軍人であった。

双陽の刻の後、坊ノ岬の空は厚い雲に覆われた。そんな光の遮られた艦内の暗き通路を、一人の男が駆け抜けた。当海域で起こった一時的な電波障害、不可解な現象に男は面喰らった表情を浮かべていた。

「艦長！」

医務室で看護を続けていた軍医は慌てて敬礼した。

「容体は？」

「意識は未だ回復せず。しかし脈はあり、身体には問題ありません」

艦長は扉を閉め、窓の外を眺めた。忌々しくも、雲は太陽を隠し続けていた。軍医は、自身のデスクの椅子を艦長に勧めた。艦長は用意された席を丁寧に断り、身を屈めて身元不明者の一人、海軍中将とされる初老の男の顔を見据えた。

「他人とは思えんな」艦長は呟いた。「何とも奇妙な感覚だ」

艦長が浅く頷き、物想いに耽る中、男の意識は戻りつつあった。その事に最初に気付いたのは軍医だった。彼が慌てて男の元に駆け寄ると、艦長も慌て、男の顔に視線を向けた。男は睡眠不足で、気候の差から来る若干の異常を身体に覚えている様だった。軍医がデスクからカルテと聴診器を取る中、艦長は姿勢を整え、直立不動の体勢を取った。

「閣下」

最初、男は艦長の声が幻聴の如く聞こえていた。しかし、徐々に正しく認識出来る様になり、はつきりとしないう意識も戻ってきた。視界が開き、眼前の光景が瞳から脳内へと、神経信号として送信さ

れる。それが映像となり、男の脳内に浮かび上がった。

「……ここは？」男は訊いた。

艦長は背筋を伸ばし、威風堂々とした態度で、男に向かって言った。「『榛名』です」

「『榛名』？呉に沈んだ筈だ」

男の言葉に、艦長は首を振った。「いえ閣下、貴方は何か勘違いをなされています。私は当艦『榛名』の艦長、伊藤整一大佐であります」伊藤艦長は言った。

若干の静寂が開き、男は 口をあんどりと開けて啞然とした。

「恐縮至極ですが、ぜひ閣下のお名前と階級、所属をお聞かせ願いたく存じます」

「名前か……」男の顔は死人の様な表層だった。「俺の名か……」

「伊藤……整一」伊藤は言った。「階級は中将、そして現在予備役だ」

1945年7月28日

広島県呉市

幻想と思いたくなるような光景が、此处呉軍港を包んでいた。厳重な防御の呉軍港を無力化し、帝国海軍に大きな痛手を負わせたかったアメリカ合衆国海軍は、別名『ブル・ハルゼー』日本人嫌いでザ・アメリカ軍人というステレオタイプの海軍将軍、ウィリアム・F・ハルゼー大将と約950機の艦載航空機を送り込んだ。それまでに米海軍はマーク・ミッチャー中将と約350機の艦載機を送り込み、大規模な空襲を仕掛けてはいたが、全てを破壊するには至つ

ていなかった。

戦艦『大和』は四月、坊ノ岬沖には沈まなかったが、呉鎮守府における警備艦としての任を受ける事となった。対空火器・副砲等は陸上防衛用にと撤去され、迷彩塗装といったカモフラージュを施されて、その存在を隠した。

その日、無数の米海軍艦載機が空を覆い尽くす中、北の空に少数の機影が見えた。

奇妙な機体構造。二対の樽の様な物を翼下にぶら下げ、若干の後退を見せる翼を持つ。その大日本帝国軍の最新鋭戦闘機は、太平洋戦線では未知と言える存在だった。その機に対しては、S B 2 C『ヘルダイバー』急降下爆撃機はおるか、F 6 F『ヘルキャット』戦闘機でさえも追い付けず、歯が立たなかった。

S B 2 C急降下爆撃機小隊が、最初に敵の洗礼を受けた。突如、帝国軍機の翼下から何かが放たれた。白い尾を曳くそれは猛スピードで接近、一瞬の内に固まっていたS B 2 Cを連続撃墜してしまった。更に、帝国軍機は機首の五式30mm機銃を向け、その大口徑弾によつてS B 2 Cの機体を切り裂いた。火を噴き墜ちる僚機に、敵編隊は散り散りとなる。そこに大和の対空兵器『零式弾』『三式弾』を撃ち込み、敵機をまとめて焼き払った。大和は沖縄特攻用に温存していた砲弾を全て使ってしまう事にしたのか、迫り来る第38機動部隊の艦載機群に怒涛の大砲撃を浴びせ掛けた。

ごく近くで戦艦『榛名』『伊勢』『日向』が沈む中、大和は沈む気配が無かった。空を駆る正体不明の最新鋭戦闘機のおかげか、それとも満載に積まれていた零式弾・三式弾の成果か、はたまた幸運の女神の抱擁でも受けたのか、大和は沈まなかった。

湾内に沈む『榛名』を見て、伊藤は頬に涙を滴らせていた。呉軍港空襲、24日と28日の攻勢の後の事であった。この一連の戦いを乗り越え、大和は沈まなかった。

この眼前に映る呉の惨状を不幸中の幸いと言うべきか、伊藤は悩んだ。呉　そして戦艦『榛名』に伊藤は思い入れがあった。戦艦『榛名』には1936年頃、艦長として乗艦した。その後、時代は混沌の1937年に突入した。その時、世の中には日中間の大戦争開戦間近　という風潮が渦巻き始めていた。満州を取られ、手痛い目にあつた身としては当然の行為だが、中国は反日を謳い、断固とした決意で日本を非難した。そんな中、7月7日　『盧溝橋事件』が勃発する。

その後、『榛名』艦長の任を解かれ、第二艦隊参謀長に就任した伊藤は、更なる巨大な戦艦『大和』以下特攻艦隊を指揮する任に最終的に就くものの、それが実行される事は無かった。戦後、予備役に編入された伊藤は『大和』の末路を憂い、『大和会』なる組織を結成する。

戦後、日本統治を始めたGHQ　連合軍最高司令官総司令部は、呉に残った戦艦『大和』について、議論を行う事となった。一つに、米海軍に編入し、太平洋方面の要とする案が出たが、太平洋・ヨーロッパ両戦線に大規模な兵員を送り、経済が破綻寸前のアメリカにとって、大和のような金喰い虫は必要なかった。米国の造船産業は東海岸に集中しており、ハワイや西海岸の設備では大和は運用出来ない。しかし大和はパナマックス　パナマ運河の通過限界以上の大きさを誇り、東海岸に向かうにはホーン岬を回航しなければならなかった。それらの問題もあるが、日米共に重要であると思いついた『航空主兵主義』の台頭により、そもそも超大型戦艦は既に時代にそぐわないものだった。

そこで第二の案　戦艦『長門』同様、核実験の『標的艦』にする　が採用された。これを強く推したのは、GHQ最高司令官ダグラス・マッカーサーであった。マッカーサーはかつての帝国海軍の象徴、戦艦『大和』の最期は米本土、祖国に送って記念艦にする

か、完全に破壊するかのもう一つにするべきだと考えていた。それは過去の栄光に触れ、日本国民が米国に反発する可能性が極めて高いと考えたからである。最初の内は無駄の象徴、旧体制の悪玉として家族や我家を失った悲しみ、軍部による圧政の苦しみを思いだし、大和を非難するであろう。しかし、ある程度復興が進めば、彼等は過去の栄光を欲し、またもや軍事国家に逆戻りする。少なくとも、アメリカに反発するだろうとマッカーサーは考えた。

そこで、当初思いついた考えを踏まえ、事を進めた。まず、GHQは諜報機関を通じ、日本各地に戦艦『大和』の歴史と実態、そして標的艦として最期を迎える顛末を噂として広めた。次に大和を一般公開し、日本国民に旧体制の残酷さとその結果を思い起こさせ、悪の芽を摘んだ。最初は呉の地元民を呼び、次に日本各地の軍港に回航して、日本中に大和を見せ付けた。

その行為に反発し、大和の最期を阻止しようと結成されたのが『大和会』である。

第2話 夢幻の艦隊（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第3話 夢幻の艦隊（中）

第3話『夢幻の艦隊（中）』

【自分の声がよく認識出来ないのと同じで、過去の自分の顔を見た所で最初はよく分からなかった。無論、他人とは思えないような奇妙な感覚を覚えた事は確かだった。昔、鏡で見た自身の顔、写真に写った顔は記憶の片隅に埃を被って保存されていた。それでも、“あの日”以来、鏡は見ていなかったもので、中々過去の顔を認識出来なかった。過去の私が私の名を語り、私が私の名を語ると、一間の沈黙が両者間の全世界を凍結させ、長き沈黙を起こした。その時間は一生を通り越して、永遠にも思える程に長く感じたものだ。結局、最初に口を開いたのは 過去の私だった。】

（伊藤整一口述回顧録・第1部第2章『運命の日』より抜粋）

1937年7月1日

九州ノ坊ノ岬沖

「戦艦『榛名』医務室」

伊藤整一中将は相手の気持ちを斟酌する聞き手であり、若き日の伊藤大佐は忖度する聞き手であった。それは年の功 人生における経験値の差だった。補足すれば、忖度は相手の心情を推し量る事であり、斟酌はそれを汲み取った上で、必要な処置を施す事である。帝国海軍での4年間の戦争の中でも、彼は軍令部次長として気配りしてきたし、軍令部や海軍内で好戦況に浮かれ上がる参謀連中の話を聞くのにやぶさかではなかった。しかし、その中において彼は駐

米経験から日本とアメリカの国力差を察しており、アメリカの力を甘く見ないようにと発言していた。今にしてみれば米国の戦力を樂觀視するのは不思議にしようがないが、最初の1年を考えてみれば妥当な考えであつた。

「何を仰るかと思えば……ご冗談を」伊藤艦長の声は明らかに引き攣つていた。

「いや、本名だ」伊藤は言った。「無論、同姓同名の他人ではない。時を越えて来た未来の君　今から9年後の君だ」

現実離れた、到底信じられない嘘だと、伊藤艦長は斥けようとした。空に浮かび上がった二つ目の太陽、一時的な電波障害、夢幻の艦隊……。複数の奇怪な現象の上、未来の自分と何が何だか分からない異常現象の数々に、彼は舌を抜かれた様に終始沈黙してしまつた。

「すまない。荒唐無稽な話だと思うが違ふんだ。事実なんだ」

それでも彼が納得していないと見て取つて、伊藤は窓の外に指を差した。横付けされた巨大戦艦、名を『大和』　というその戦艦は、筋骨隆々たる鋼の巨軀を惜しげなく晒し、荒れた坊ノ岬に沈む気配を一切見せず、浮き続けていた。砲は三基、見た事も無い程に大きく、この戦艦『榛名』に積まれた主砲、45口径35・6cm連装砲でさえ、見劣りしてしまうほどに優れているのが見て取れた。伊藤は大和に指を差し続け、口を開いた。「これが4年後、呉が出るんだ」

【この運命の日、つまりは9年前のこの日、私は榛名に乗艦していたか思い出せない。実際の所、恐らく中国方面に対する威圧任務の為、榛名は向かつていたのだと思うが、未だに真偽は分からない。年のせいかな、はたまた9年の時を逆行した副作用か。どちらにせよ、私は年だという事には変わりはないのだが……】

（伊藤整一口述回顧録・第1部第2章『運命の日』より抜粋）

翌朝早く、戦艦『榛名』とその直衛艦隊は、最寄で最大規模の海軍基地、呉軍港を訪れた。朝霜が降り、空は曇天であつたので、見づからずに入港する事が出来た。榛名の後ろには見た事も無い程に巨大な戦艦『大和』が綱で曳かれ、その直衛艦には戦艦『長門』、軽巡洋艦『酒匂』、航空母艦、未知の艦形をした潜水艦等、多種多様ながらも力強い歴戦の軍艦達が曳航されていた。戦艦『大和』の建造が始まつた軍港として、呉鎮守府では盛んに作業が進められていた。

呉軍港の一角では、呉鎮守府司令長官、加藤隆義中将が立ち、旗艦『榛名』率いる艦隊停泊の為のスペースを開ける最終作業を自ら指示しながら到着を待っていた。加藤は海外駐在経験 特に駐仏経験が多く、航空兵力の有用性を訴えた。しかし米英に対し強硬な意見を持つていながらも、米国には一度も行った事がなく、冷徹で理論的な温かみもへつたくれもない彼は、伊藤としては全てを話すに値するか、不安に思える人物だった。

純白の夏服を身に纏い、きちんと短く刈られた黒髪に口髭。元気に満ち溢れた加藤は、戦艦『榛名』の接岸作業を見張った。ホイッスルを首から紐で吊っていて、加藤はきびきびと音を鳴らす。接岸し、艦舷にタラップが掛けられると、艦長の伊藤が榛名から退艦した。

伊藤艦長は敬礼し、加藤もそれに答えた。

「伊藤艦長、緊急の案件とは……これか」

戦艦『榛名』の後ろ、見た事も無い超弩級戦艦の姿を見て、啞然とした。呉鎮守府司令長官とはいえ、国家の最高機密に値する戦艦『大和』の情報は殆ど知る由もなく、彼は最初、その背後関係より、存在自体に驚愕していた。

「それに空母、巡洋艦、他の戦艦も……」加藤は愕然として言った。「しかしこれらのフネを一体、何処で見つけたか？」

「九州南方海域、坊ノ岬沖です」

「坊ノ岬沖……か」

加藤が物想いに耽る中、伊藤艦長は次の一手を打つ準備を進めた。

「それで閣下、実はこれが全てではありません」

伊藤艦長の言葉に、加藤は目を丸くした。「何、本当か？」

「本当です」伊藤艦長は頷いた。「佐世保他、各地の海軍基地には一応、曳航の要請を図っておきましたが、呉の方には、実際にお話させて頂くと思ひまして。閣下には、坊ノ岬沖に多数確認出来る、漂流艦の回収にご尽力頂きたく存じます」

加藤は一瞬迷ったか、首を縦に振らず唸った。しかし、戦艦『大和』の姿と、伊藤艦長の真剣な眼差しを見て、考えを整え直した。

「分かった。事の重要性は把握した」加藤は言った。「回収艦を送るが、その間に一連の事柄について、説明して貰いたいのだが……」

伊藤艦長は頷いた。「その場に“客人”を入れても宜しいでしょうか？」

「“客人”……とな？誰だ？」

「伊藤中将です」

1937年7月2日

広島県／呉鎮守府庁舎

石畳の道を進むと、赤煉瓦造りの巨大な建物が聳え立つ。呉を代表する煉瓦構造物である呉鎮守府庁舎は、延べ床面積1,990?の壮麗な建造物だった。外壁の煉瓦はイギリス積み。赤煉瓦と御影石を組み合わせ、美しい景観を生み出している。1907年竣工の

この建物は巨額の金が注ぎ込まれて造られたものであり、戦艦『大和』同様、海軍の象徴的意味合いの強い建物でもあった。現代では海上自衛隊呉地方総監部庁舎となり、100年以上も前の建物ながら使われ続けている。

1945年4月の沖縄特攻作戦を前に、伊藤は何度かそこに入った事があった。地元では最大で、なおかつ最も豪華な外内装の建物で、御影石の玄関と眼前に続く階段は、何一つ変わっていないかった。正面玄関に掲げられた海軍の紋章、桜と錨を仰ぎ、一同は進んだ。玄関奥の階段は赤絨毯が敷かれ、二階に続いている。建物は陸側、海側二つのファサード（建物正面）があり、陸側からは自動車、海側からは内火艇でアプローチ出来る。つまり、呉鎮守府庁舎には裏手が無いのだ。加藤、伊藤艦長、そして“客人”の三人は中に入って、長い廊下を進み、司令長官室へと足を運んだ。

「道中聞いたが、やはり信じられんな」

開口一番、デスクに着いた加藤は言った。

「そう感じるでしょう」「客人」伊藤は言った。「しかし事

実なのです。あの戦艦『大和』の事も話しましたが、私は9年後の伊藤大佐 予備役の伊藤中将です」

加藤は洪顔を浮かべ、二人の顔を見据えた。言われれば似ている。しかし、それが事実を示す証拠にはなりえないと加藤は胸に呟いた。「ではこれを」

伊藤は一冊のノートを取り出し、見せた。中には、戦時と戦後の新聞の切り抜きが複数張られ、複数の意見が書かれていた。いわゆる『スクラップノート』である。その中の一節、日本降伏やマツカiserと天皇陛下のツーショット写真 日本国民に敗北を知らしめた一枚 が張られていた。これら、いわゆる米国のプロパガンダ入りの記事連ねられた一節を加藤に見せ付けた。

「何たる事か！」加藤は怒号を発した。「このような捏造をして騙くらかす気か貴様！」

伊藤は首を振った。「いえ、捏造ではありません」伊藤は言った。

「これは私の物ではなく、一人の若人 戦艦『大和』の将兵の一人の物ですが、真実の証拠には違いありません」

その刹那、伊藤の冷静沈着な瞳、その奥底に燃え上がる怒りの炎を加藤は見た。伊藤は冷静に事を伝え、自身の存在に信頼を得て貰うべく、その怒りを抑え込んでいたのだ。それに気付いた加藤は俯き、口を閉じ、ただ只管、ノートを見据えた。

【加藤大將はあの時、何を思ったのか？恐らく、時と現実の惨さだろう】

（伊藤整一口述回顧録 - 第9部第1章『代償』より抜粋）

第3話 夢幻の艦隊（中）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第4話 夢幻の艦隊（後）

第4話『夢幻の艦隊（後）』

【もう話す事は何もなかった。加藤大將は無言で頷き、しっかりとした決意を胸の内に固めた。私はその時、これからの5日間は快適で円滑の中で事を進められるだろうと確信していた。まだ剃る髭もなく、向こう見ずなバーの若人よ。君から私は学んだ。“歴史を忘れるな”という事を。】

（伊藤整一口述回顧録・第1部第3章『接触』より抜粋）

1937年7月2日

広島県／呉市

賑いの海軍街、呉市には海軍向けに複数の商業施設があった。1889年、呉鎮守府が開庁し、設備の拡張資材と人員の流入が始まるとともに、金も流れ始めた。やがて『小野浜造船所』が『仮設呉兵器製造所』となり、『仮設呉兵器製造所』は『呉海軍造兵廠』となった後、合併等が繰り返し行われ、1903年には現在の『呉海軍工廠』という名になった。その間、日本は着実に力を付け、海軍も力を付けた。金の流れは速くなり 今、それが最高潮を迎えようとしている。

戦艦『大和』の建造である。

その未曾有の計画により、流入する兵員は増え、周囲に築かれた街 『呉』は繁栄の絶頂期に達した。そんな街が8年後に辿る事となる、哀れな最期を知る者達は、大いなる目標と正義感を持って、

呉の街を颯爽と歩んでいた。

【回収艦艇一覧】

・戦艦

『大和』 『長門』 『アーカンソー』

『ニューヨーク』 『ネバダ』 『ペンシルベニア』

・重巡洋艦

『ペンサコーラ』 『ソルトレイクシティ』 『プリンツオイゲン』

・軽巡洋艦

『酒匂』

・航空母艦

『インディペンデンス』 『サラトガ』 『天城』

・駆逐艦

『アンダーソン』 『ヒューズ』 『ランソン』

『リンド』 『ラルフタルボット』 『スタック』

『ウェインライト』 『ウィルソン』 『カニングム』

『フラッサー』 『マグフォード』 『マスティン』

『メイラント』 『トリップ』

・潜水艦

『シーレイヴン』 『スケート』 『スキップジャック』

『ツナ』 『アポゴン』 『パーチー』

『パイロットフィッシュ』 『伊・四〇四』

・戦車揚陸艦（LST）

計六隻

・大型歩兵揚陸艇（LCI）

計六隻

・戦車揚陸艇（LCT）

計二十四隻

・攻撃輸送艦（APA）

計十九隻

・攻撃貨物輸送艦（AKA）

計一隻 『アルテミス』

・その他

『ARDC - 13』 『LSM - 60』 『YO - 160』

- 1937年7月3日 - - - - -

（大日本帝国海軍 - 機密作戦書『Y作戦』より抜粋）

伊藤整一中将は、車の排気煙が充満する街路から、檜や草の香りに包まれた建物の中へと足を運んだ。呉本通二丁目に位置する料亭『五月荘』は1903年、明治36年創業の老舗である。趣と歴史を秘めたこの料亭は呉屈指の食事処であり、古くから地元の海軍将校達に親しまれてきた店でもあった。呉鎮守府司令長官官邸にて、台所で作られた料理、熱い風呂、客用寝室での仮眠のお蔭で気分の良くなつた伊藤は、世捨て人寸前の風貌から一転、大艦隊を指揮する司令官に還った。

『梅の間』に通された彼は、伊藤艦長、加藤呉鎮守府司令長官、そして森下信衛少将の三名とともに入室した。夕刻の早い内に到着したので、外はまだ明るく、窓の外は茜色に燃えていた。

女将と仲居が膳の支度を終えるのにそう長くは掛からなかった。目の前に築かれた懷石料理は、海と山の幸を盛り込んだ、色鮮やかで新鮮なものであった。その横にぬる燗酒が入った徳利が添えられ、一同が手に持つ盃へと注がれた。その後、四人は非公開で私的な案件を話したいという理由から、給仕達を下がらせた。

「……戦争では、このような贅沢は楽しめんな」

伊藤は懷石の一品、白身魚のけんちん蒸しを箸で解し、その身を味わう。口の中に広がる至高の味は、涙が出そうな程に美味だった。彼は一間置き、それをぬる爛酒で喉に流し込んだ。

「成程な。それはいかん」加藤中将は呟いた。「しかし、帝国海軍が敗北を喫すとは……。未だに信じられんのだ。伊藤中将」加藤はぬる爛酒を喉で転がした。「今の我が海軍の底力であれ、米英諸外国には負けんと私は確信している。先の戦争は何処で軸が狂ったのだ？」

「それは……」森下少将は唸った。「一概には言えませんが……」
「うむ、森下君の言う通り。一概には言えませんが」伊藤は言った。
「勝手ながらも言わせて貰えば、帝国海軍は海上護衛を怠った時点で、敗北は見えていたのではと私は考えております」

「海上護衛？」

「閣下も承知だと思いますが、戦争は強力な兵器や、一回の大勝利で勝ち取れる程に甘くはありません。連合軍はアメリカを軸に、イギリス・ソ連・オーストラリア・中国と、圧倒的領土と資源、そして人的資源を持ち合わせた国ばかりです。いわば……我々は世界を相手にしていたと言えばよく分かるでしょう」伊藤は区切り、語を継いだ。「連合軍は鉄道、海運、自動車、馬、歩兵等、輸送の面で圧倒的に優勢です。また、資源面でも優勢にあります。そして、何と言つても大規模な工業力もあります。物を造る資源、そしてそれを加工、製品化する工業、更に世界中に送る事の出来る輸送手段

—

「成程、敵はその三つを世界規模で展開出来た……と？」

伊藤は頷いた。「そうです。対するに我々枢軸国は、アジアとヨーロッパ・アフリカの領土　つまり自国の国境内でかき集めなければならなかった」伊藤は言った。「もし、もう一度戦争を起こすのなら、世界に通用する資源量・工業力・輸送手段を確立し、尚且つそれを恒久的に維持出来る数の人間が必要となる訳です」

「更に補足すれば、そもその兵士も維持しなければなりません」
加藤艦長は言った。

「ならば原子爆弾は？」加藤は言った。「あれをアメリカに落とせば……」

「アメリカは領土に言わせれば世界の一角ですが、連合軍の核を担える程に強い国です」伊藤は言った。「例え原爆を作れても、先ずは三要素の一つである“輸送手段” 鉄道、海運、爆撃機を確立させておかなければ、宝の持ち腐れというものでしょう」伊藤は更に言及した。「そして、それらをもし確立させて、西海岸に落とせた 若しくはワシントンに落とせたとしても、日本の様な危機的状況下にも陥れなければ怒りを助長するだけです」

「しかし、漬け込む隙ぐらいはある だろう？」

伊藤は頷いた。「講和ですね。しかし、山本長官も成し遂げられなかった」

【その言葉が口から出た途端、伊藤閣下は黙り込んでしまわれた。閣下は過去の事を思い出されたのだろう。親しき仲にあった山本長官の死。そんな彼の置き土産に人生を注ぎ、持つ妻子さえも自ら投げ出されてしまった。そんな幾つもの重圧を抱え、閣下は心が挫けそうになったのではないだろうか？しかし、閣下は他者にはそのような様子を微塵も見せず、常に皆の先頭に立たれたのだ】

（森下信衛手記より抜粋）

森下信衛少将は『大和会』において、軒を連ねる知識人達とは異色の人物だった。海軍時代から軍人らしさはあまり見られず、部下に対しては厳しい訓練を強い、決して評判は良くなかった。しかし、

その気取らない、野武士的な豪放的さに、次第に部下達は信頼を寄せていった。その操艦技術は海軍屈指で、大和艦長として参加したレイテ沖海戦では、神業的な技術で多くの危機を脱した。

「閣下、お話があります」

伊藤が口を開き、今日の肝となる話を始めた。

「5日後、盧溝橋にて日中両軍の衝突がある事はご承知だと存じます」伊藤は言った。「戦争を防ぐ為、若しくは先の戦争に一片でも勝利の可能性を加える為には、日中間の戦争は――」

「阻止しなければならない……であろう？」加藤は頷いて同意した。「しかし、海軍は今回の戦争では影響力を持てる……とは言いがたいぞ？頭の堅い陸軍連中が戦争を望まない訳がない。それを僅か5日で変えたいのなら、よつぼどの口達者でないと――」

加藤はかぶりを振った。「それでも、無理だと私は思う」

「しかし、早期の停戦までは漕ぎ着けるでしょう」伊藤は言った。加藤が頷いた。「成程、悪化しない内に……か」

一体これから何をするのか、伊藤は話してはいない。しかし、加藤は無言で一枚の包みを渡し、伊藤の前に差し出した。中には幾分かの金が包まれていた。

「要り様……と見てな。勝手ながらも用意させて貰った」ぬる爛に咽喉を湿らせた加藤は言った。「1日であつたが、世界の観方を変えて貰った礼だ。未来を知るといふのは、幾分も良い気持ちでな私も此処で尽力を尽くします故、貴殿にも尽力を御貸し頂きたいと会う相手に伝えてくれ」

宴が終盤を迎える頃には、夜の帳は既に降りていた。

包みを取り、見物するのも一興ですよ、と伊藤は言った。見物するものには事欠かない筈ですよ、と伊藤は請け負った。何しろ

ここから歴史が変わっていくのですから。

【私は舞い立った。行き先は 三羽鳥の巣だ】

（伊藤整一口述回顧録・第1部第3章『接触』より抜粋）

第4話 夢幻の艦隊（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第5話 三羽鳥の巣（前）

第5話『三羽鳥の巣（前）』

【ヒトラーの結果を知る者は居る。ヒトラーの野望を知る者もいる。しかし、ヒトラーの理念や思想を詳しく言及する人間が何処に居ようか？陸軍内で、ポーランドでの電撃作戦を学ぼうとする人間に限って、世界に蔓延していた筈の“絶滅収容所”や“民族浄化”の噂を知ろうとした者は一人も居なかった。そしてその前にも、確かにナチスは避妊手術や国外追放を劣等人種に向けて行っていた。そして陸海軍の親独派は知る由も無い。それが自らの首を絞めている事になるうとは。】

（原茂也 - 『第三帝国の闇』より抜粋）

1937年7月3日

兵庫県／神戸市

やや芝居掛かった最後の台詞を胸に、伊藤は呉を発ち、加藤呉鎮守府司令長官から頂戴した包みを懐に入れて、駅に向かった。伊藤は呉軍港近くの旅館に戦艦『大和』とともに歴史を逆行してきた一同を残したが、一人だけ同行させた。

五十幾何の齢の男、原茂也は駐独経験豊富な陸軍士官の一人だった。ドイツ語が達者で、戦前はヒトラーとナチス政権の辿った歴史の変遷や、ヨーロッパ方面の実情を調べるようにと命ぜられ、幾度かヨーロッパを赴いては、現地で緻密な調査を進めた。そしてその情報は1940年9月27日の『日独伊三国同盟』に少なからず役

立てられる訳だが、原は同盟締結に激怒し、上司に『軍部は愚行を、過ちを犯してしまった』と発言して大目玉を喰らう事となる。そんな原と、日独間軍事同盟を嫌う海軍三羽烏を会わせば、何が起こるか伊藤は薄々気付いていた。

無論、三羽烏の暴れっぷりを見たかっただけでは無い。陸軍内に精通する彼ならば、頭の堅い陸軍連中を説得出来るだけの第三帝国の悪行を伝えられると考えたからだ。

神戸駅に着き、二人は『燕』に乗り換えた。超特急『燕』は、1930年10月1日、東京・神戸間で運転を開始した列車で、1929年、東京・大阪間を運行していた特急『富士』『櫻』に比べ、同区間であれば2時間30分近く短縮した8時間20分ほどで運行出来た。また、東京・神戸間は9時間ほどで運行出来た。この事から、『燕』は『超特急』の名を冠する。

二人は正午近く、その燕に乗った。やがて大阪に着き、名古屋を越えていった。夜の帳が降りた頃には食事が用意され、二人は超特急の味を舌鼓した。食堂車に二人が入ると給仕が現れ、メニューを手渡した。それから数十分後、二人の目の前には、湯気の上がつたビーフカツカレーが姿を見せた。

その晩は、寝る事よりもお喋りの方に時間が費やされた。今後の歴史改変にまつわる事と、海軍三羽烏に会った際の事。そして3年後に迫る『日独伊三国同盟』の阻止が命題となった。後に悲劇を生む結果となる三国同盟の締結は、何としても防ぐべき問題であった。

「閣下はヒトラーを如何ほどに知っておられますか？」

原は言った。「彼は恐ろしい人間ですよ」

第三帝国総統、アドルフ・ヒトラーは元を正せば画家志望の平凡

な青年であつた。幼少期はカトリックの聖歌隊に所属、一度は聖職者を目指した彼を変えたのは、心の奥底に潜む悪魔と、現実に実体化した悪魔。父アロイスに他ならない。不幸と横暴。事業に失敗し、そこから来る怒りのはけ口を、アロイスはヒトラーに“体罰”という形でぶつけた。ここで既にヒトラーが傾倒し始めていたドイツ主義。ドイツ人及びドイツ系から成る統一国家構想。は、後の『アーリア人至上主義』のナチスドイツ、ヒトラーや人種差別主義者達の悪の巣窟。『第三帝国』へと変貌を遂げる。

第三帝国の負の象徴、『ユダヤ人絶滅計画』はオーストリア、ウィーンでの生活から始まる。1905年、ヒトラーは芸術の都ウィーンに渡り、美術を学ぶ事に決めた。その後、二度の挫折を味わう。この頃のヒトラーは古典主義。いわば、中世ヨーロッパに描かれた壮麗な絵画こそを“芸術”と認め、近代芸術は屑だと考えていた。この墮落した時代。公園のベンチで1日を過ごし、食うにも困った青年を誰が未来の“総統”と考えただろうか？その後、第一次世界大戦下、ヒトラーは伝令兵として勇猛果敢に戦場を駆け、多くの報せを伝えていく。そして1918年、マスタードガスで一時的に視力を失い、戦争は終わった。この時には、彼の中では自身が神に選ばれた存在。ドイツを救う事を使命と考え、戦争を敗北に終わらせたユダヤ人を根絶する具体的な決意を固める事となる。

「第一次世界大戦前、ヒトラーは複数の秘密結社に関わっていました」

燕が夜の東海道を駆け抜ける中、原は語った。ヒトラーは画家志望の青年時代、複数の秘密結社の会員達と親密な関係にあった。その中でも興味深いのが、アドルフ・ヨーゼフ・ランツとグイド・フオン・リストの二人だった。自称、“イエルク・ランツ・フォン・リーベンフェルス”と称するこの男は、『神聖動物学』と呼ばれる著書を出していた。内容は急速に発展する科学と、オカルト的な宗

教的地見地を混ぜ込み、それを二で割った様な仕上がりだった。そこでは、ランツはアーリア人を『神人』と呼び、劣等人種を『猿人』として平然と罵っていた。彼に言わせれば、“猿人”は去勢・不妊手術・国外追放・奴隷化ないし強制労働に処すべき存在だった。更に、ヒトラーにとつてのヒントであろうアーリア人の血統を守る『人種隔離』という案も出ていた。これが後にユダヤ人絶滅、スラヴ人強制移住に繋がっていく。そしてグイド・フォン・リストもまた、同様の思想を抱いていた。

両者の特筆すべき思想は『アリオゾフィ』と呼ばれるアーリア人至上主義を抱いている事だった。アリオゾフィとは、『アーリア』と『ゾフィ（叡智）』の合成語である。その中の民族主義、反ユダヤ主義はオーストリア、そしてドイツに広がった。ランツが造ったこの教説は彼のオカルト組織、『新テンプル騎士団』^{フォルク} 通称『O N T』で支持された。そしてこの教説は後のナチズムに踏襲される。「ここで重要なのは、劣等人種ウドウミ（猿人）にはユダヤ人のみならず、有色人種が含まれているという事です」原は言った。「ここでいう有色人種とは、アーリア人以外の全ての人間です。無論、我々も例外に値する筈も無いでしょう」

ヒトラーは公衆の面前においては、カルトを禁止していた。無論、O N Tも例外ではなく、1938年のオーストリア併合後、ランツは著作物の発表を禁止された。ランツが書いた『オースタラ』は昔、ヒトラーにも購読されていたが、ヒトラーはナチスの地盤を固めた後、ランツの著作『オースタラ』も含め を読む事を禁じ、自分以外のカルト組織を禁じていった。これによりトウーレ協会、フリーメイソン、そしてO N T等、私的組織は次々と解散させられた。

これらの行為は、ヒトラーがナチズム以外の競合相手を拒んだ為である。

第三帝国にとって ナチズム以外のカルトは必要がなかったのだ。

第5話 三羽鳥の巣（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第6話 三羽鳥の巢(中)

第6話『三羽鳥の巢(中)』

【私は舞い降りた。三羽鳥の巢へ】

(伊藤整一口述回顧録・第1部第4章『三羽鳥の巢』より抜粋)

1937年7月4日

東京府

その晩、伊藤は青山南町の一軒に足を運んだ。『山本』という表札が目につき、伊藤は目頭を抑えた。感慨無量だった。1946年から1937年に舞い降り、死を迎えた筈の人間に会おうとしている。その人の名は 山本五十六。後に連合艦隊司令長官となり、ブーケンビル島に散る男。そんな彼は現在、海軍中将の位に着き、海軍次官の職を担っていた。その山本に伊藤が連絡を取れたのは、加藤呉鎮守府司令長官の尽力の賜物だった。

青山南町、山本邸に足を踏み入れた伊藤はその晩、書斎で自身の事を伝えた。無論、加藤ほどではなくとも、最初は半信半疑だった。既に気付いていた伊藤は持ち合わせた証拠の類を見せ、何とか信じさせられる事に成功した。また謀略や陰謀でない事も、十分に伝えた。

「それで、俺は如何に死を迎えるのでしょうか？」と、唐突に山本は言った。

山本五十六の死は太平洋戦争中期の1943年、昭和18年4月18日。米軍は日本軍の暗号電報を解読、それは山本司令長官の前

線視察を行うというものだった。ウィリアム・F・ハルゼーはこれを機に山本の抹殺を計画。ガダルカナル島ヘンダーソン飛行場よりP-38『ライトニング』18機を送り込み、山本の搭乗した一式陸上攻撃機を撃墜。山本はブーケンビル島上空にて戦死した。いわゆる『海軍甲事件』である。とはいえ、未だにその謎は多く、1946年からやって来た、事件に直接関わっていない伊藤としては、戦死の報と国葬の記憶ばかりが頭の中を埋めていた。

「すみません」感慨に耽る伊藤の顔を見て、山本は言った。そしてランプの入った箱を卓上に出した。「では、ポーカーなどは？ご一願います、伊藤閣下」

その晩遅く、伊藤は青山南町の山本邸の書斎で、山本と原とともにポーカーを興じ、酒を煽りながら、先の日中戦争や日独伊三国同盟についての見解と憤懣をぶちまけた。盧溝橋での騒乱から拡大する中国戦線、そしてドイツ・イタリアとの軍事同盟締結。後に開戦を迎える太平洋戦争、大東亜共栄圏の占領戦略や通商路防衛戦略についてが話の主だった。

「にしても、米国は恐ろしいものですね」

山本は言い、チップを投げ出した。「帝国海軍とは桁違いの工業力を持つのは、以前より良く知っていましたが……相手は十隻以上の空母を建造し、尚且つ数百隻もの駆逐艦や巡洋艦が釣りに来るのは」

訪米経験を持ち、アメリカの工業力をよく知る彼はエセックス級空母の数については然程、驚きはしなかった。それよりも恐れたのは、本当に建造出来るだけのアメリカの工業力だった。太平洋戦争中、アメリカは24隻のエセックス級を建造したが、大日本帝国海軍も戦前から30隻に及ぶ空母の建造を計画していた。戦後に急策として出された改マル5計画では、雲龍型空母を15隻（後に13隻に削減）、改大鳳型空母5隻の計20隻の建造が予定されていた。

しかし、実際に戦況は悪化。起工されたのは6隻で、完成したのは4隻。改大鳳型空母に至っては、1隻も建造出来なかった。ミッドウェーで大敗を喫した結果の行為だが、それを計画出来ども、実際には造れない。一方、この改マル5計画の1年後となる1943年には、アメリカは12月8日までにエセックス級7隻、インディペンデンス級8隻を計画通りに竣工させた。

「輝かしい大日本帝国海軍の大和魂も、空母戦力比1.5対1の前には役に立たなかった」という訳ですな」山本は言った。「では、大建造を……と、言いたい所ですが……」

伊藤は静かに頷いた。「現在の日本では、無理でしょう。大和型戦艦の建造を中止し、仮にその資材と予算を空母建造に回したとして、最終的には20隻を超える数の空母を造る……いや、それ以上造れるだけの力を米国は持っている。彼等を相手にするには」

「……工業力の増強」山本はカードを卓上に置いた。「ですな」ポーカーやブリッジの名手である山本が出したのは「フォーカード。同数字が四つ並ぶ事で成立するその組み合わせは、4165分の1の確率で出る組み合わせだった。」

一方、伊藤はスリーカード。原はフルハウスで山本の勝利となった。

「その運が妬ましいものですな」伊藤は笑みを浮かべながら言った。

第6話 三羽鳥の巣（中）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第7話 三羽鳥の巢（後）

第7話『三羽鳥の巢（後）』

1937年7月5日

東京府／青山南町

その日、海軍三羽鳥の二羽、井上成美少将と米内光政大將が山本邸に姿を現したのは、晩遅くの事だった。山本と伊藤と原が玄関前で迎え、書齋に招き入れた。この時、伊藤の中では一つの明るい見通しが見えていた。それは、第一次近衛内閣の海軍大臣、米内が来てくれたからだった。米内は対独、親米英派、山本・井上と並んだ左派『海軍三羽鳥』の一角にあった。しかし、日中戦争を強く推し、近衛総理に「国民政府を對手とせず」と言わしめた人物でもあった。伊藤は彼こそが歴史改変のキーパーソンであり、2日後に迫る盧溝橋事件の先の日中全面戦争の有無は、彼を如何に心変わりさせるかという所が焦点であると確信していた。

山本が終始兩名に説明し、伊藤は焦土と化した東京の街や、ミッドウエーの顛末。広島・長崎の悲劇について、証拠を織り交ぜながら延々と語った。二人は顔を見合わせ、望ましくない顔色を浮かばせていた。欺瞞であると、考えたのだろう。しかし、山本・伊藤・原の真剣な表層と、現在の海軍内で進行中の戦略を知り尽くしている点を見て、二人は静かに首を振った。

「2日後、盧溝橋にて日中両軍の衝突があります」

伊藤は先の事件、そして後に始まる日中間全面戦争。更に1940年の日独伊三国同盟の締結と、開戦の火蓋が切って落とされる太

平洋戦争について、事細かに伝えた。この時、伊藤が最も心を悩ませていた懸案事項は、叩き潰された都市や果たせなかった工業力増強、海上護衛戦略の顛末を話した後でも、盟友として握手を果たせるのと同じように、米内が簡単に日中講和に心を開けるかどうかということだった。相手は陸軍が推進した講和　ドイツのオスカー・P・トラウトマン駐華大使が間を割って試みた日中講和工作『トラウトマン工作』を断念させた人物である。ドイツによるアジア地域での策略を止めようとしたのかどうかはそれとして、泥沼化する日中戦争は二正面作戦を強い、戦力の低下、アメリカへの進攻を妨げる原因となつたのは言うまでもない。

「『大和』なる戦艦は私の耳にも届いておる」米内は言った。「我が海軍でも、既にその砲弾等の補給品は造り始めておるのだ。兵を育て、乗せ、中国沿岸部を火の海にせしめれば、彼奴等は恐れ戦いて自ら降伏を宣言するであらう……」

戦艦『大和』の存在が、必ず海軍を有頂天にさせてその思考を妨げる事は、伊藤は始めから知っていた。かつてから、戦艦『大和』はそうであった。しかも、今回はタダで手に入れた『大和』である。国家予算の数%を注ぎ込んで造られたそれよりは、使い勝手も良いというものだ。更に伊藤が恐れたのは、この『大和』が中国戦線で成果を出す事により、海軍内に『大艦巨砲主義』が良しとされ、『航空主兵主義』が重要視される事なく蔑ろにされる風潮が生まれてしまう事だった。その風潮下では、歴史改変日本の最低目標、空母30隻を戦前中に完全建造（若しくは戦時も含め）という要求は、まず無理だ。

「中華民國の国民は、幾多の渡洋爆撃にも侵略にも負けず、降伏は認めませんでした」伊藤は断固として言った。「日中間の戦争は米英諸国に対日思想を植え付け、アジア介入を付け込む大きな隙を生みます。そうなれば　」

「敗戦が待っています」

山本は言った。「考えがあります」

「どうするつもりだ？」

「『大和』を動かし、上海を火の海にするのです」山本は言った。「そしてその内に侵略を進め、南京を攻め落とす。そして早期に傀儡政府を樹立したら、さつさと中国から兵を撤退させる」

山本の戦艦『大和』による上海砲撃案は、日本の戦艦の能力を世界に知らしめる事と、中国に恐怖の根を植え付ける事、そしてその後の外交を日本側が優位に進めさせる為のものだった。事前にビラを撒き、砲撃を知らせておく。更にそれを米英にも伝える。それにより、意図的に『大和』の存在と力を示し、尚且つ日本が野蛮な猿の国ではなく、紳士の国だと伝え、対日感情をドイツに向けさせるというものだった。後に始まるオーストリア併合、そしてポーランド進攻と事が進む頃には、砲撃の事は風化し、焦点は日独間の軍事同盟締結に向けられる。その際には、この海軍三羽鳥に十分頑張つて貰う必要があるものの、上手く行けば対日感情を消し去る事が出来る。

「自ら『大和』の存在を知らせる　　というのか？」米内は言った。

「そうです。それで米英に火を着け、不必要な戦艦を造らせてしまふのです」山本は言った。「そして、我々は大和型戦艦の建造を中止、高速戦艦や空母、駆逐艦にその予算を回します。」

「しかし、大和型に手を加えた『改大和型戦艦』は1、2隻ほど造る必要があるかと存じます」

伊藤は言った。

「『改大和型』……とな？」

山本、井上、米内の三名は首を傾げた。改大和型戦艦はマル5計画時に打ち出された大和型戦艦2隻、第110号と第111号の改良型戦艦である。46cm砲対応という厚過ぎる装甲を薄くして機動性を向上、対空レーダー機器と高角砲、対空火器の増強等、対航空能力を重点とした新世代の戦艦だった。

「敵はモンタナ級等、巨大戦艦を建造中止にしないでしょうが、

航空母艦は予定通りに造るでしょう。仮に少ないにせよ、エセックス級は20隻以上建造する筈です」伊藤は言った。「ミッドウェーでの敗北を踏まえれば、先の戦争に空母のエスコート艦は必須です。ミッドウェー後の空母戦力比1.5対1等には嫌でもなりたくありませんからね」

伊藤の計画の成否は、隠密性と工業力と戦術の要素に懸かっていた。そんな訳なので、工業力の強化は自然と話の中で議論される事となった。工業力の増強は、伊藤が最低目標とする『戦前に空母30隻を完全建造』に欠かせないとはいえ、次の大胆な一手がこの堅物達に認められるとは限らないだろうと、伊藤は不安を覚えながらも語り出した。

「人的資源は重要ですが、戦争中は多くの技術者・科学者・職人が徴兵を与儀なくされました」聞く三名は頷き、唸った。「今回も同じ事でしょう。だからといって彼等を徴兵させないとしましょう。とはいえ、男の数は戦争の経過とともに減少するのは見えています。最終的には、行かせざるを得ない状況に至り、技術水準は低下するでしょう」

「何か考えでも？」

井上の問いに、伊藤は頷いた。

「それら専門的な技術を女子に伝え、生産の要とするのです」

その提案に対し、最初に顔を顰めたのは米内だった。

「女子に出来る事等、たかが知れておる。家事に育見だ」

「いえ、女子というのは器用なものですよ。裁縫仕事を見れば分かるでしょう」伊藤は言った。「洗濯、炊事……それに並行し、子の世話もする。繊細ですぐ泣きじやくる赤子をあやすのも、女子の丁寧で繊細な感性の賜物というものです」

訪米経験を持ち、十歳年下の妻を持つ伊藤は女性の秘めたる力を

よく知っていた。米国では生産能力の向上の為、大量生産に当たっては本工場で部品を作り、それを各地の工場に送った。部品組立はその各工場で行われるが、その時は男女混合の作業チームが組まれ、男は体力を要する作業。女はその他の仕事という風に分ける事が多かった。女性には男性に比べ手先が器用で部品の組み立てを任される事が多かった。また、機械化の進んだ米国であれば十分活躍出来る環境が整っていた。

一方、日本は戦時中、女子学生の多くが軍需製品の製造を強制させられていた。その環境はお世辞にも良いというものではなかった。機械化も進んでいない為、肉体を使った過酷な重労働を強いられる事となる。伊藤はこれらの環境を改善、女性の熟練技術工を育てる事こそが、戦争経過によって勃発する日本国内の産業の空洞化生産能力の衰退と、技術水準の低下を阻止する最善の策であると考えていた。

「手始めに、女子工業学校を各地に設立。周辺は工業地帯である事が望ましいです。そこで熟年の技術工を教師として招き寄せ、時には実地学習として工場に向かわせる。生徒達は座学や理論とともに、肌で技術を学べる」伊藤は更に続けた。「各生徒の錬度を見て優秀な者は陸海軍に直接関連した事業に活躍の場をやり、中間点の者は実習先の工場に優先的に入社、悪かった者に関しても救済策を講じればよいかと思えます。また、卒業生をそのまま教師として迎える等すれば、更に専門技術を伝えられ易くなるでしょう」伊藤は言った。「まあその前に、統一した品質基準を設けておく事が必要でしょうが……」

「うむ、大胆な案ですな」山本は言った。「だが問題は、昔気質の人間がそれを許すか……という所だな」

それは伊藤の中にも少なからずあった不安な点だった。軍人、政治家のみならず、男性至上の世論がそれを許すとは考え難かった。教師となる技術者 町工場で働く頑固親父達もそれを認めず、「女は家事でもやってろ」という具合の気持ちにあった場合、生半可

な技術しか教えなければ意味もないし、生徒もやりがいを感じないというものだ。

「私としては、将来的には海軍内の航空機パイロットとしても、女子を採用して頂きたいです」

「それは絶対に……許されんような」

山本は言い、井上も頷いた。米内は渋面を浮かべている。裏方ならともかく、戦争に直接関与する事は、面子に傷が付くと海軍は考えるだろう。海軍は山本・井上・米内の三名で動いている訳ではない。それならば、日独伊三国同盟に海軍は全員、一貫して最後まで反対し、同盟を破棄するようにと発し続けた筈だ。しかし、現実はその甘くない。ポーランドを征服し、ヨーロッパ各所を手中に収めていくドイツに対し、誰が同盟は不利益になるというだろうか？ヒトラーの魔術に魅了された者は、誰一人として信用出来ないのだ。

仮にアメリカを信用することにしても、同様の危険がある。フランクリン・D・ルーズベルト大統領は狡猾で人種差別意識を持った男である。『全ての人間は平等に造られている』と書かれた独立宣言書から成り立つアメリカ合衆国だが、この『全ての人間』とは13州の白人、英国から移住してきたアングロサクソン人であり、人間以下とみなされた奴隷やインディアン、黄色人種は例外であり、基本的人権など認められてはいない。しかし、恒久の平和を望むには、米英諸国からの国家としての同意が必要だった。さもないと、計画は成功しない。

「しかし、形振り構ってはいられない世は迫っている」山本は言った。「男女と言ってられる場合じゃありません。誰にでもチャンスはあり、優れた者は成功する。それが仮想敵国の夢 『アメリカンドリーム』……というものですからな」

「そんな考えを大日本帝国に持ち込む気かね？」米内は言った。

「無論、そのままでは入れますまい。彼等も少なからず、ドイツと同じ考えを持った者ですからな。ヒトラーほどではありませんが

……」

それから話は3年後に迫る日独伊三国同盟に移った。これには一同、全員一致して破棄を望んだ。しかし、伊藤は一つの案を代案とし出し、締結するべきだと語った。

「日独伊三国科学・技術協定？」山本は言った。

「そうです。技術面において、双方の利益となる物を交換・提供し合い、技術革新を進めていく　という協定です。ナチスドイツは驚異的な科学力を誇っており、我々には必要だと思います」

「米英から批判が来るのではないのでしょうか？」

井上の問いに、伊藤は頷いた。「ええ、恐らく。しかし、三国同盟よりはマシでしょう」

「しかし、我々から提供出来るものなどあるだろうか？」山本は言った。

「幾つもあります。魚雷技術、水偵、そして『大和』」

「『大和』？設計図を送るのか？」米内は顔を顰めた。

「最終的に言えば、ドイツは敵です」伊藤は言った。「造れるとは思えませんが、建造を進める工程で多くの軍事資源を浪費させる原因を作り出せます。それに大きな恩も作れるでしょう」

「敵とはいえ、英国を屈服させ、米国を掻き回す為には、ドイツには空母を造らせた方が良いのではないか？」山本は言った。「今からなら、まだ間に合うだろう」

「失礼ながら閣下」沈黙を守ってきた原は口を開いた。「英国を我が帝国と同盟関係にすれば、そのような心配もありますまい。それにヒトラーにみすみす至高の知恵を与えるのは、個人的には許せないのです」

原は我に帰り、申し訳なさそうに山本の顔を見た。「失言でした」山本は笑みを浮かべた。「言いますな。しかし、英国をどう同盟に引き入れるのか？」

「策はあります」伊藤は言った。「しかしそれは後ほど。ドイツとの接触時に」

山本は顔を顰めた。「何？ドイツとは親交を深めぬのではなかったのですか？」

「無論です。しかし、それは一時的なものですのであしからず」

「しかし、我々はドイツから何を貰うべきか？」米内は言った。魚雷技術・水偵。果ては『大和』までも提出する以上、貰う物は貰わなければならない。「対空レーダー、暗号機、そしてジェットエンジンか？」

「はい、大半はそれらですね」伊藤は言った。「しかし、工業力の増強に於いては、工作機械や資材、人造石油の製造技術等を頂戴する必要があります。他にも、陸軍の戦力増強の為に、戦車やトラックの類の技術、対戦車ロケット砲も」

「しかし ジェットは要りません」伊藤は言った。

「何故？」山本は言った。「将来を率先するならば……」

伊藤は三人の顔を見据え、原の顔を見た。原は後ずさり、一本の長細い容器を取り出した。やや色褪せ、傷が付いたそれを原は開け、中から一枚の図面用紙を取り出した。

「心配なく。ジェット戦闘機の設計図は既に持っていますよ」

【それは『橘花』。私と『大和』を守ってくれた救世主だ】

（伊藤整一口述回顧録・第8部第1章『橘花』より抜粋）

第7話 三羽鳥の巣（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第8話 盧溝橋事件

第8話『盧溝橋事件』

【時は8日を告げた。私は不安と歯痒さを噛み締め、ただ淡々と夜を過ごした。この時、既に運命は動き出していた。ゆっくりと。しかし、確実に 帝国は別の道を歩み出していた】

（伊藤整一口述回顧録 - 第2部第1章『盧溝橋事件』より抜粋）

1937年7月8日

刻は12を過ぎ、7月7日が終わりを告げ、明日が顔を見せる頃、伊藤は寝付けなかった。伊藤はベッドに腰掛けて、物想いに耽る。そして呉で『大和会』の面々によって用意され、渡された“ある事件”の概要報告書の束に目を通した。事の発端は7日の夕刻で、当時の新聞記事や陸軍筋の人間による事後報告を書き記したもののばかりだった。

大日本帝国陸軍支那駐屯軍、歩兵第一連隊第三大隊第八中隊はその日の夕刻、夜間演習の為、豊台にあった兵営を出発、135名から成る兵は清水節郎大尉に率いられていた。今回のこの演習は、近づく戦闘演習定期検閲に備える為だった。出発時、清水大尉は第三大隊を指揮する一木清直少佐に一礼し、兵の士気が上がっていると意気揚々に告げた。しかし実際の所、その言葉は現実とは似ても似つかぬほどに大きく食い違っていると、伊藤は推測した。当日、豊

台を始め周辺地域は気温40度以上、夜半にかけても30度は軽く上回っていた。その事や、演習時の兵装の総重量を考えれば、灼熱の砂漠を砂袋を何個も持つて延々と進むのと同じぐらいに思える程、過酷な状況にあったと考えるのが妥当だろう。第八中隊の士気は大分落ちていた。

午後7時30分、永定河に架かる石造りのアーチ橋　マルコ・ポーロの賞賛を受けた事から西欧では『マルコ・ポーロの橋』とも呼ばれた　盧溝橋で演習は開始された。闇の中、滞りなく進むかに思われたこの演習だが、事態は急変する。午後10時40分、何者かによる発砲が、清水大尉率いる第八中隊に対し行われた。清水は演習を中断、隊員を集合させて人員検査を行い、被害を確認した所、一人の兵士が行方不明である事が分かった。その間、清水は臨戦態勢を取らせつつ、豊台の第三大隊長一木と連絡を取り、実弾発砲を報告した。無論、兵士一名の行方不明も。

豊台の第三大隊長、一木清直少佐はこれに激怒した。一木は後、精鋭第七師団の歩兵第二十八連隊を基幹とした尖兵集団、『一木支隊』とともにガダルカナル島ヘンダーソン飛行場奪回に尽力するも死を迎える。一木は当初覚えた憤りを一旦置き、兵の行方不明を重視した。後に『インパール作戦』　悲劇の作戦　を指揮する牟田口廉也第一連隊長に反撃の意志を伝え、大隊の急行を命じられる。その後、第三大隊は現地に到着、清水率いる第三中隊は無事合流した。

ところが午前3時半頃、待機する大隊に対し、龍王廟方向から3発の銃声が響き渡った。これを聞いた牟田口大佐は午前4時20分、攻撃許可を出した。

その直後、一木は中国第二十九軍顧問をしていた桜井徳太郎少佐と出会った。桜井は第二十九軍副長の秦徳純と会い、この件について問い質した所、「第二十九軍は絶対に兵を県城外に配置していない。きつと匪賊の仕業だろう」と弁明したという。龍王廟から発砲はあったと確信する一木は、これを責任逃れの発言と受け止め、ま

すまず憤りを募らせた。そして、攻撃を続行した。

……というのが、本来の歴史にあるが、既に歴史は別の兆しを迎えつつあった。桜井少佐とともに、ある一人の男が一木の説得に現れた。

それは 今村均である。

7月6日午前、今村均少将は親友山本五十六中将从届いた電報に書かれた事を驚嘆の目で見張った。その内容は9年後からやってきた人間、戦艦『大和』等々。奇々怪々な内容に埋め尽くされた報告は、笑うしかなかった。やがてその直後、米内海軍大臣によってお膳立てされた直接面談を受けた所で、彼は『盧溝橋事件』の勃発を知る人間の一人となった。

7月6日の事、山本と同行者の男 伊藤は現れた。

その朝、山本と伊藤は米内によって手配された九六式陸上攻撃機に乗り、機は満州へと向かった。様々な手続きを済ませ、面談に現れた山本とその9年後からやってきた人間 伊藤を見た今村は目を丸くし、親友の訪問を歓迎するとともに、疑心暗鬼の目で見据えた。

「しかし、酒に酔って冗談交じりの電報でも送ってきたかと思っただが……」

今村は啞然として言った。「真実なのか？」

山本は静かに頷き、伊藤は証拠を見せた。その後、盧溝橋事件の概要を綴った報告書、日独伊三国同盟の締結、太平洋戦争、泥沼化する中国戦線、ドイツ降伏、そして 原爆投下による日本無条件

降伏までの流れを説明した。この時、今村の口は開きっぱなしだった。

「明日、全てが始まる」

山本は言った。「俺も、最初はこの戦争、こつち側の一撃で終われるやもと思つてみたが、やはり無理難題なようだな。講和や何や、一悶着の後じゃ、何をしても禍根が憑いて残つちまう」

「なら、最初からやるな……と？」

「そうだ」山本は頷いた。「何にせよ、戦争は無いに越した事はない」

戦時中、インドネシア等地域での占領政策の多くが賞賛される今村均だが、同時に『対支一撃論』に傾倒しており、中国における戦争を欲していた。山本が言う、蒋介石の国民政府が折れずして敗戦迎える大日本帝国の末路を知った今村は心変えをし、7月7日の夕刻になって、今回の事件の收拾に努める事を心に決めた。

当時、関東軍副参謀長の座に着いていた今村は、桜井とともに一木の前に姿を現した。それまでに、今村は牟田口に連絡を取り、一木からの攻撃要請を受け付けず、待機させる様にと釘を刺しておいた。残念ながら、今村が完全に心変わりしたのは盧溝橋の一件が報告された後なので、盧溝橋の事件自体を白紙とする事は出来なかった。その点で、自身の決断力の無さは否めないと、今村は痛感した。また、佐官時代からの親友たる山本の事を信じる事が出来なかった点についても、自身を言及し続けた。とはいえ、それと同時に、今回の事件が帝国海軍による陰謀ではないかという考えは無くも無かった。

「閣下、貴方も何か御用ですか？」早く終わらせたくて苛々しながら、一木は訊いた。

今村は幾つか考えていた事があつたが、一つに絞られていた。少なくとも、「支那人を皆殺しにしろ」や「貴様の忠誠は何処にある

か」という言葉でないのは確かだった。

ただ簡単に「退け」と言った。更に「攻撃許可は出されていない」と付け加えた。

「あの闇の先に奇襲攻撃を仕掛けた卑怯者が居るのですよ！」眼前に立つ今村の顔を睨み付け、漆黒に包まれた先を指差した。「報復を与えるのは、当然の権利にあります！」

まあ待て、と今村は言った。それからしばらく話し合い、何とか一木をなだめかした。問題は、血の気の多い一木がこのまま待ち続けるかどうかである。何にせよ、指揮下にある第三大隊自体も攻撃を受けている以上、報復を行うのは当然だと一木は主張し続けるだろう。そんな相手にどう説得するのか。闇に潜む正体不明の敵と、復讐を目論む兵達に両挟みされたこの状態。厄介な役を押し付けられたなど、今村は嘆いた。

その後、厳正なる調査と審議の末、攻撃した者が判定し、死を持つて償わせる場合となった暁には、第三大隊にて正義の剣 三八式歩兵銃 で制裁を加える許可を何とか取ってやろうと言い、今村は何とか一木を説得する事に成功した。そして、一木率いる第三大隊と、清水率いる第八中隊を撤退させ、事態を収拾させた。

第8話 盧溝橋事件（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第9話 千八

第9話『千八』

【人は自分が見たいと欲する現実しか見ようとしない】

（ガイウス・ユリウス・カエサル）

盧溝橋事件から2ヶ月程、瞬く間に戦争へと突入する筈のその動乱は史実とは違い、既に収束していた。米内海軍大臣の働き掛けにより、政府は事態の不拡大化を決定。当問題収拾の責任者として米内等に支持された石原莞爾陸軍少将や今村均陸軍少将は日中合同による調査を開始、政府そして天皇陛下により、東条等陸軍中枢部は沈黙と協力を仰がれ、何人にも手出しをさせなかった。

調査開始から2日後、中間的な発表として拳がったのは「中国共産党による策謀」という見解だった。当日、銃撃を受けたのは清水大尉率いる第八中隊だけではなかった。中国国民軍も同様の発砲を受けていたのだ。無論、双方は戦闘状態に陥る前に米内・今村等の手回しで事態を収束された。実際、それが双方共に事態収拾を図る最善の策に他ならなかった。と同時に、両軍は「一定の間」を取る必要性を覚え、帝国陸軍支那駐屯軍の一部戦力を豊台から通州への移動が必要との見解も表明される。これには、国際条約尊重の念から以前から反対してきた梅津陸軍次官が強く猛抗議する事となる。

結果的に歴史は変わり、日中間全面戦争は回避されるが、それは帝国陸軍にとっては望まざる事であった。史実通りであれば3個師

団の投入が決定され、臨時予算が降りる事となるが、無論そういう訳にもいかなかった。

そして 次世代の帝国陸軍主力中戦車『チハ』が存亡の危機を迎える。

1937年9月10日

愛知県

その朝早く、伊藤は鹵獲したM4『シャーマン』中戦車の性能実験に立ち会う為に、伊良湖試験場を訪れた。此处、伊良湖試験場は大日本帝国陸軍の技術機関、『陸軍技術本部』の技術試験場の一つだった。諸外国から輸入した大砲や国産の戦車砲等の弾道データを収集する目的の施設で、戦前や戦時中にも数々の重要なデータを生み出した。

何故、今この時代にM4中戦車があるかというと、それは伊藤とともに時代を逆行してきた『夢幻の艦隊』の艦種の一つ、戦車揚陸艦(LST)や戦車揚陸艇(LCT)の一部に艦載されていたからである。また、他にもM3『スチュワート』軽戦車やM3ハーフトラック、ジープ等もあった。恐らくは放射能汚染等、核実験のデータ収集の一環として艦載されたものである。しかし、それらは戦時の余剰品、廃棄品と思われ、大半は初期型であった。中にはエンジン等が抜かれた車体もあった。ただ、伊藤のすぐ近くに置かれ、射撃試験間近のこのM4は、エンジン・砲弾等が車載された運の良い車両の一つであった。

伊藤が見学席の中間に位置し、陸軍上層部の人間が列を成していた。作業を行う試験場要員はそれらの人物達に緊張しながらも、事を進めていった。

突然現れた鋼鉄の巨人は、チハの装甲をいとも容易く打ち破った。

九七式中戦車 『チハ』の焼け焦げた25mm前面装甲板には、大きな貫通痕が開いていた。その結果は、本来の戦闘で想定された仮想敵の兵装には該当しない76.2mmの主砲を持つ戦車を相手としたのだから当然と言えば当然だった。M4は100m地点で通常徹甲弾を発射すれば、130m程度の貫通力を誇る。一方のチハは改良型でも精々60mmだ。明らかに勝負は見えている。

問題は、次に行われた鹵獲兵器の射撃試験だった。M4に車載された副兵装による射撃試験が行われた。機関銃手が、手にするブローニングM2重機関銃から12.7mm徹甲弾を九七式中戦車の25mm前面装甲板に叩き込んだ。100m程度では、M2機関銃の威力は20m前後で左程ダメージは見受けられなかったものの、徐々に距離を縮めていけば、十分に装甲にダメージを与える事が出来た。そして、側面装甲を用いた試験では、M2機関銃の50口径12.7mm徹甲弾は装甲を簡単に貫通した。

この結果は、九四式37mm戦車砲を使用した試験を経て決定された筈のチハの装甲を根底から否定するものだった。中国軍の37mm速射砲を300m前後で耐久しうる様にと想定され、その際、確かに装甲は150mからの戦車砲の攻撃を防げた筈だった。しかし、事実はその結果とは食い違っている。これに陸軍上層部は震撼した。

ブローニングM2重機関銃はジョン・M・ブローニングが第一次世界大戦末期に開発し、1933年に制式採用された米軍の重機関銃である。50口径機関銃なので『キャリバー50』や『ファイティーンキナル』等と呼ばれる。1933年に制式採用されて以降、今日までM2は米軍内で親しまれ、同時に太平洋戦争では旧日本軍を苦しめ続けた。とはいえ第二次世界大戦時、M2重機関銃は決して米軍の全戦車に搭載されていた訳でもなく、未搭載車両の方が比較的多かった。

一方、M2重機関銃の攻撃で穿った九七式中戦車『チハ』の装甲は、九四式37mm戦車砲で行われた性能実験ほど、優れた防御力を誇るものではなかった。装甲に用いられた浸炭鋼装甲は、表面の炭素含有量を増やし、表面を焼き入れして鋼板の硬度を高める方法である。しかし、硬度は高くした反面、衝撃に弱く割れ易い欠点もあった。

それでも、現場からはチハが求められた。本来は30mmの装甲を渴望していたものの、それは叶わなかったものの、とにかくチハは当初は優れていた。ただ、低性能ながら、安価で量産出来る『チ二』中戦車の事を考えると、車体だけでも当時の値段で14万円以上（零戦は7万、九五式軽戦車は7万8600円）のチハは高級過ぎた。結局、陸軍はチ二の方に傾倒していくが、1937年7月7日、チハは生き長らえる。

盧溝橋事件から発展する日中戦争により、陸軍は臨時予算として予算増額がなされた。その結果、1937年度は5億円だった陸軍の予算は、翌年には一気に17億円となった。この3倍以上の予算を手に入れた陸軍は性能面で勝っていたチハを採用、生産を開始していく。確かに登場当初は、諸外国と比較しても優れた性能を誇るチハだったが、太平洋戦争末期には強敵M4が犇めき、中には新型戦車M26『パーシング』という、更なる怪物が出現した。この頃になれば、というより以前から、九七式中戦車は戦車として米軍に認められない存在になっていた。

そしてチハがそれらの敵に勝つ唯一の方法は、ゲリラ戦法か特攻の二つに一つであった。

これから陸軍が胸を張って流そうとしたであろう、チハの誇大妄想気味な性能の噂は、完全にお蔵入りとなった。それはチハの主砲、九七式57mm戦車砲を用いた射撃試験の事だった。エンジンが抜かれ、装甲の塊でしかなかった一台のM4が試験場に運ばれ、

九七式57mm戦車砲の前に配置された。

300m地点から放たれた最初の一発は、見事に跳ね返された。M4前面装甲は若干の傷を残しただけだった。その後、徐々に距離を縮めていけど、前面装甲を貫通するには至らなかった。結局の所、主力中戦車たるチハは至近距離側面から薄いエンジン部の側面装甲板をようやく撃ち抜く事に成功したのだが、そのお粗末な火力を見た陸軍上層部の人間達が拍手喝采を挙げる事は無かった。

九七式57mm戦車砲が正面攻撃を仕掛けても勝てない理由の一つに、M4の前面装甲の形状がある。M4の前面装甲は傾斜していて、直撃を受けても弾を跳ね返してしまう。一方、チハの装甲は25mmと薄く、M4のように傾斜も付けられていない。結果、あらゆる角度から砲弾は貫通してしまうのだ。この為、M4も斜面や窪地を走行し、前面装甲が垂直になれば、チハの砲撃が貫通する事もあった。但し、300m以下の至近距離からの攻撃だが。

「先にM3を送るべきだったか」

伊藤は啞然とする陸軍上層部の顔を見て呟いた。ただ、貫通力が向上した一式47mm戦車砲を搭載した改良型チハならともかく、旧式の九七式57mm戦車砲を搭載した初期型では、例えばM3『スチュワート』軽戦車でも勝ち目は薄いのだが……。

これら一連の試験を終えた後、伊藤が考えるのは 陸軍がその敗北を認めるか否かだった。高級戦車『チハ』さえこの有様の中、低価格で低性能の『チ二』では、勝機は破滅的だった。もし、この事に目を瞑り、M3やM4を主体とした新構造の戦車を造って貰えなければ、先の戦争は更なる敗北で幕を閉じる事だろう。

それだけではない、これは『精神論』に凝り固まった大日本帝国陸軍の思想を変える為に用意した事でもあった。『チハ』や『チ二』という、一分野の問題を改善するだけのものではない。残酷な現実を見て、彼等がユリウス・カエサル シーザー曰く「人は自分が

見たいと思う現実しか見ない」という考えに傾倒した時、その目蓋を無理矢理にでも引っぺがしてやり、全てを見せてやる。そんな想いが伊藤にはあった。

現実を見るか、盲目となるか。

伊藤は前者を望んだ。

第9話 チハ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第10話 金星は暁の空に舞う

第10話『金星は暁の空に舞う』

1937年9月25日

長崎県／大村

東彼杵群に位置する大村飛行場は、次の一幕にうつてつけの舞台だった。周辺地域を佐世保鎮守府と大日本帝国陸軍歩兵第四十六連隊の二重の防衛線で囲まれた平坦地で、家主が海上自衛隊に代わった今日でも、大日本帝国海軍時代同様に主要な航空拠点としての存在感を留めている。しかし、日米地位協定に則って、米海軍の艦載ヘリの為にとされた一部の施設もある。此処には現在、大日本帝国海軍大村海軍航空隊と空母『加賀』の艦載機が置かれているが、その中には本来存在しない筈の戦闘機の姿があった。

M4『シャーマン』中戦車の底力を見た伊藤だったが、その興奮と恐怖はまだ冷め切っていなかった。更に、彼は別の興奮と畏怖を覚えていた。時は5日前の20日の事、愛知県伊良湖の陸軍技術本部試験場から呉、そして19日に帝都へと到着した彼はある人物との謁見を許された。

丸一日置いて、米内海軍大臣がやってきて、伊藤を皇居に連行した。

まず米内は粗相のないよう、協力を仰ぐのであれば全身全霊を持つて帝国の憂いを説明せよと言った。米内は伊藤が緊張しているのは十分に理解出来た。動揺し、触れただけで崩れそうな位、繊細な様子が垣間見えた。陛下は盧溝橋の一件を好く思っていると米内は言い、緊張しなくてもいいと肩に手を置いた。

皇居にて、伊藤を迎えたのは昭和天皇その人だった。米内は頷い

て同行を示し、伊藤は指示を求める様な顔を変えて、昭和天皇の顔を見据えた。

「動乱の世の阻止、大儀であつた」

天皇の声が耳をこだます中、伊藤は自身の生立ちやこれまでの行動の意味、そして未来を伝えた。終始沈黙に包まれた後、伊藤は危機感を抱いた。信じていないのか？いや、信じるという方が無理難題だろうか……。

そんな伊藤の様子に気付いた天皇は微笑を浮かべ、静かにかぶりを振った。何もかも見越していたのかは定かではないにせよ、天皇は清世を築く為、尽力をは惜しまぬと告げた。

「しかし、私も大村に行つてよいものですか？」山本五十六海軍中將は車内後部席にて、右隣に座る伊藤海軍中將に言つた。今日25日をもつて、彼は海軍中將の階級を戴いていた。前代未聞、異例である事は言うまでもない。だが、これは清世を築く伊藤に対する、昭和天皇の贈り物であつた。更に事を円滑に進める為、新たな戸籍も取得した。新たな名は藤伊一。ふじい はじめ元の名の中の『整』を除いた名を用いられて作られた“アナグラム”である。

「また書類仕事があるだけでしょう？」

「それはそうでしょうがね」山本は笑つた。「一難去つたと言えど、貴方は働き詰めだ。私にしてみれば、それが1番心配な事です」

車は舗装された道路を離れ、飛行場内に入つた。史実通りなら今頃、7月7日の一件を受けて木更津海軍航空隊の一団が此処から広東方面に渡洋爆撃を仕掛けていた事だろう。飛行場内部は渡洋爆撃とはまた違つた、ある興奮と熱気に包まれていた。

それは 先月の伊良湖試験場、M4中戦車の射撃試験に似ていた。

零式艦上戦闘機 略称『零戦』。史実での初飛行は1939年4月だが、既に大村の上空を1、2度程飛行していた。飛行場には計12機の二一型、14機の新二型、そして1機の新四型が駐機されていて、それぞれが『夢幻の艦隊』の一隻、空母『天城』に載せられた廃棄品だった。

戦後、本土決戦に備え大東亜共栄圏の各地から回収された零戦の将来は決まっていた。廃棄である。一部は鹵獲され、調査が進められたが、F6FやP-51に幾度となく負け続けてきた老朽機から学べる所は少なく、戦力を削ぐ為にも、零戦の多くは埋め立てや、焼却処分に至っていた。

一方、雲龍型空母『天城』は1945年7月25日、28日の呉軍港大空襲を生き残った艦船である。史実通り、呉の対空砲台として軍港内に停泊していたが、沈む事はなかった。戦艦『大和』の対空砲撃と、ジェット戦闘機『橘花』の到来による成果の賜物であった。GHQはこれを復員艦の一つとして利用するとともに、戦艦『大和』同様、核実験の標的艦とする事を決めた。そして、余剰した零戦を艦内一杯に詰め入れ、核実験で処分する事としたのである。烈風等は加えられなかった。ビキニ環礁での核実験前に他艦との合流の為、ハワイに向かった天城はこの時、ついでの任務としてハワイの海軍技術者達の為にある特別な機体を2種類載せていた。

それが零戦五四型と『橘花』であった。

零戦五四型は五二丙型の動力源、栄エンジンを三菱製金星六二型に換装した型である。これまでも計画され続けてきた金星搭載型零戦だが、これは初めての完成品であり、数少ない試作機でもあった。1945年4月、この五四型の試作機が完成するが、既にその頃には全てが遅かった。心臓部たる金星六二型エンジンの生産ラインは空襲によって破壊されていたからだ。その後、試作機として造られた2機はテスト飛行を行う事も無く、地上で終戦を迎える。

その後の五四型の運命も悲惨と言えば悲惨だった。ハワイに送ら

れたはいいいものの、技術者や海軍上層部の多くは、純粋なMe262のデータを元に造られた『橘花』にばかり目を向けていた。その結果、五四型は“不要”と判断され、天城や余剰の零戦とともに、ビキニ環礁へと送られる。

1945年7月、第三四三海軍航空隊『剣部隊』に所属する橘花は呉上空に飛び、迫り来る艦載機群を駆逐した。史実とは違い、伊号二十九型潜水艦はバシー海峡で沈む事はなかった。貴重なドイツ産、Me262とMe163、ウルツブルクレーダーにエニグマ暗号機等を日本へと持ち帰る。その後、Me262をベースに開発された『橘花』は当初から純粋な戦闘機としての開発が進められ、予想以上に早く試作機が完成。その後、生産がある程度進み、剣部隊に配備される。7月25日、28日には松山飛行場から飛び立ち、最初で最後の戦闘を経験する事となる。因みに伊号二十九潜水艦は再度ヨーロッパへと赴き、そこでR4M『オルカン』ロケット弾の設計図等を持ち帰る。R4Mは何とか国産化されたものの生産はごく少数で、呉軍港空襲の際、剣部隊はその大部分を消費した。しかしながら、結果的には相手に甚大なダメージを与え、『大和会』に元設計陣所属者とその複製設計図をもたらす事となる。

伊藤が車を降り、零戦と九六式艦上戦闘機の列に加わると、山本は伊藤を質問攻めにした。この暗緑色の戦闘機は何という名前か？どれ位の性能があるのか？更に伊藤が予想していた通り、何時頃、帝国海軍はこれを完成させるのか？という事を聞いてきた。伊藤は一つ一つ、細かく噛み砕いて伝え、その後専門的な面を教えた。無論、欠点も。

伊藤の危惧する事は概ね、零戦についてだった。陸上戦闘機、艦載戦闘機、そして特攻機若しくは焼却・埋め立て・解体経由でその生涯を終えた零戦は、戦争が進むにつれ、その惨めさが増していった。F6F『ヘルキャット』の台頭、戦争中期を迎えた頃には、零

戦は『空飛ぶ棺桶』、『空飛ぶ的』に落ちぶれる。元々、翼内という敵機に最も狙われる部分に燃料タンクを載せながらも、タンクに防弾処置等を施していない零戦は、脆弱としか言い様がないのが現実だった。その脆弱性を解決するが為、後期には機体強化を図り、生存性向上に努めたものの、逆に現場では自らの命を削つても航続距離・格闘性能の高い初期型機、零戦一一型を好く者が多かった。そんな考えの違いも多々あった。

「零戦は強い。でも諸刃の剣なんですよ」伊藤は言った。「本当に。例えばじゃなく」

伊藤が山本にそう話す中、一人の海軍将校が零戦に乗り込んだ。五四型、金星六二型を搭載した機体である。それは今回の飛行試験の一環だった。

「1944年、マリアナ沖で大規模な海戦がありましたね」伊藤が言うのは1944年6月19日、20日に行われたマリアナ沖海戦である。ここで大日本帝国海軍は航続距離と格闘性能の高い零戦を送り出し、米海軍に差し向けた。一方のアメリカはF6Fを出した。圧倒的性能は元より、零戦搭乗員の錬度不足、対空レーダー、VT信管の前に零戦の大部分は駆逐され、迎撃機群を逃れて米機動艦隊に直接攻撃出来たのは僅かだった。結局、海戦はアメリカ側に軍配が上がる。

「諸刃の剣の代償ですね」伊藤は言った。「それまでに1度の戦闘で幾人ものパイロットが零戦で散ってしまった。だが現場はその後、改良機が送られても死と隣合わせの環境を欲した」

「欲した……ではなく、欲するしかなかった……だろうね」

「ええ。仰る通り」伊藤は頷いた。

「だから女子をパイロットに？」

「いえ、それだけという訳じゃありませんがね」伊藤は言った。

「大日本帝国は陸海軍ともに『精神論』が渦巻いていましたから、私はそれを廃したいと思ったのです。その末路なんて、こんなものですよ」伊藤は言い、自分を差した。「手っ取り早く変化を付ける

には、私の歩んだ歴史とは違う事、物、戦力を造ってやればいい、
と思ひましてね」

伊藤はその時、ある懸念を例として更に説明した。その懸念とは、
先の伊良湖試験場で行われたM4中戦車の射撃実験である。

「あれは成功ではないのですか？」

伊藤は静かに頷いた。「ある意味ではそうですが、またある意味
では違います。あの後、陸軍がM4同様の性能を誇る戦車を技術者
達に求めたとしましょう。技術者は無理難題と知りながらもそれに
近い戦車を造ったが、カタログスペックが満たなかった。陸軍上層
部はM4への危機感と苛立ちから、この結果を技術者達の態度のせ
いにし、開き直ったら……」

「つまりこうですな。『貴様らは精神が弛んでおるから造れない
のだ』と？」

伊藤は頷いた。「それでは余計、彼等は精神論を推奨していくで
しょう。実際には、現在の帝国の工業力が問題だとしても」伊藤は
言った。「その後も無理な事を成し得ようとして失敗すれば、根性
で解決しろと言ってふんぞり返り、現実から逃避する」伊藤は言っ
た。「逆に後々、それに近いものが出来れば『ほら見る』と言わん
ばかりにしゃしゃり出て、精神論を語る」

伊藤は唸った。「それに、これは海軍にも言える事ですよ」伊藤
は言った。「零戦もまたその例の一つですからね。高過ぎる性能に
悩み、出した“答え”がこれです」

そう言い、伊藤は零戦を指差した。「命と引き換えに、一定の性
能を満たしたんです」

伊藤はそこで黙り、空へと飛び立とうとする零戦五四型に目を向
けた。機体は曙光に煌めき、包まれた。金星六二型エンジンが咆哮
し、轟音を立てて零戦は進む。

そして、
暁の空に零戦は飛び立った。

第10話 金星は暁の空に舞う（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第11話 菊花の蕾は各地に実る

第11話『菊花の蕾は各地に実る』

1937年11月16日

広島県/呉

伊藤と森下の乗る車両は、午前中半ばに呉軍港内に到着した。港内に位置する呉海軍工廠で停泊する戦艦『大和』は回収された当時、戦時中の武装撤去作業により、3基の45口径46cm3連装砲しか持たなかったが、現在ではその本来の姿を取り戻しつつあった。航空戦力への対応能力を求めた“藤伊一”海軍中将 伊藤整一の『整』を除いたアナグラム名 は、途中で復元計画を変更した。他鹵獲戦艦から失敬した防空レーダーを元に新型電探を搭載し、副砲跡は新型の高角砲で埋め尽くすという計画だった。高角砲も信頼性たるものが求められ、砲弾に関してもVT信管の開発が進められた。鹵獲戦闘艦の対空火器等の中には、そのまま砲弾が詰まっているものもあり、海軍はその砲弾から信管のサンプルを大量に入手出来た。工業力の増強と並行して信管開発は進められていき、最終的には国産を達した。

この突然の計画変更に憤りを露にしたのは、海軍上層部だった。昭和天皇、そして米内等の後援で中将階級を戴いた伊藤だが、無論藤伊中将などという海軍提督は誰も知らなかった。更に彼が海軍内に席を置いた瞬間から航空主兵主義を主張したのも、大艦巨砲主義渦巻く海軍内で奇立ちを覚えさせる要因の一つだった。決まっていた筈の『大和型戦艦』建造計画 マル3計画までもが、伊藤の差し金で中断され、大和型戦艦第1番艦『大和』建造が中止。建造費1億円以上は宙に浮いた。

謎の提督藤伊一について、当時の海軍内では色々な噂が流れたが、中でも顕著な例は山本・井上・米内と繋がっているという噂だった。度々、それら三人との会合、接触が目撃された。そして航空主兵主義を謳う彼を大艦巨砲主義者達は主に『三羽烏の腰巾着』と呼んだ。その事に関して伊藤は何を言うでもなく、沈黙を守り続けたが、身内や三羽烏達には「嘘ではない」と呟いた事もあった。伊藤自身は特に気にしていなかった訳である。

彼にはもう一つ、『Mr・海防』という渾名もあった。通商路等、陸海軍の海上の生命線防衛に傾倒した事から付けられた名である。戦争中、海上護衛は軽視されていたが、見直すべきだと伊藤は考えていた。だが、何もそれがその行為自体を軽視してはいないと彼は考えた。

『短期決戦』を提唱した山本五十六聯合艦隊司令長官は、米英諸国に勝利するには主要海戦にて敵主力艦隊を粉砕する事が重要だと考えていた。圧倒的な国力差、工業力の差を米国留学時代から嫌という程見てきた彼は、帝国海軍が保有する駆逐艦、潜水艦の数では中途半端な海防しか実行出来ないと考えた。一方、アメリカは主要海戦と海防、双方に十分な数の戦力を送り込める。ならば、海上護衛に回す戦力の大半を主力艦隊に回し、数で優位に立って主要海戦に勝利する他無いと彼は考えた。短期決戦という構想を掲げた以上、そうなるのは当然と言えば当然の事だった。

しかしいざ戦争が始まると、アメリカは長期化させようと画策し、計画は破綻した。かのミッドウェーで大敗を喫し、太平洋上の制空・制海権を奪取されると、帝国海軍は通商路のありがたみを痛感する事になる。長期の戦争の可能性を覚えた伊藤は、それを憂慮した。

そして『海上護衛隊』構想が挙げたのは、藤伊一中将台頭の直後であった。

「しかしまた『大和』を動かせるとは……」森下信衛少将 現在の名は木下攻呉海軍大佐 きのした・こう は、この戦艦『大和』の姿を見るや否や、嬉々として言った。「艦橋でピカドンの奴めを見た時には、もう叶わぬ夢かと思いました」

伊藤は笑みを浮かべ、子供見たく燥いでいる森下の顔を見据えた。海軍屈指の操艦能力を誇る森下は1944年のレイテ沖海戦にて、神業とも言える技術で幾多の危機を乗り越えた経験を持つ。その能力を伊藤は昭和天皇に売り込み、伊藤同様に仮の籍と名を手に入れた。また、二人だけではなく、『大和会』の全員は歴史改変という偉業を達成する為には利便上必要であろうという、昭和天皇の粹な計らいにより、新たな戸籍と名を頂戴していた。森下はその中でも新生『大和』の乗員達に訓練を付けるという、重要な役割を担っていた。

「今は海で存分に暴れられんがね」伊藤は言った。「まあ我慢してくれ」

森下は嬉々として頷いた。

1937年11月23日

神奈川県／横須賀

終戦直後の日本で開発されていた軍需品の中で最も高価だったのが、大日本帝国海軍初のジェット戦闘機『橘花』だった。ボディは中島飛行機の製作所で、ジェットエンジン 噴進機関、タービンロケット『ネ20』は此処、海軍航空廠（後に空技廠）で造られていた。各工場は、部品調達合理化の為、零戦や銀河の部品を流用し、過酷な状況でも量産出来る体勢を整えていた。零戦製造の2分の1の生産工数で造られた橘花は、陸軍のジェット襲撃戦闘機『火龍』とともに、各地に送られた。

伊藤は、零戦や銀河の部品を流用せずとも、十分に量産が出来る戦況に至っておきたいと考えた。現在、航空廠では荒唐無稽な戦闘機の開発に力を注いでいる。名を『橘花』という。

航空廠施設内の建物に入った伊藤は、山崎功治技師と再会を果たした。山崎は『大和会』の一員であり、当時は中島飛行機の技術者であり、『橘花』の生みの親の一人であった。彼は戦後、焼却炉に入る運命であった機体設計図を見た。それは山崎関わった努力の結晶であり、人生の印だった。その時、彼は密かに設計図を写し、同時に隠した。本来の設計図は処分され、灰に還る中、その設計図は生き残り、今航空廠に鎮座している。

後に彼は橘花の心臓部、『ネ20改』の設計者と会い、それを話すと設計者は感銘を受けた。彼自身も同じ事をしていたのだ。既に大きな勇躍を見せていた橘花は国家機密に値し、敗戦間近には『ネ20改』も連合国軍に渡る前に、全て廃棄される運命にあった。設計者はネ20改を息子の様に思い、やりきれなかった。そして山崎と同じく、自身の設計図を書き写した。二人は複製図をまた写し、共通の秘密という意味を込めて、双方に複製図の複製図を手渡した。山崎が『大和会』に入るきっかけは横須賀での『大和』一般公開の時だった。GHQのプロパガンダ投射機の如く、片言の日本語を話す米国人には見向きもせず、彼は超弩級戦艦『大和』に目を奪われた。その後、プロパガンダ投射機は『大和』の末路を伝え、冷やかな笑みを浮かべた。

それから数日後、彼は『大和会』の存在を知り、伊藤整一の家を訪れる事となる。

風雨を経て古びた『橘花』は、航空廠の一角にあった。それは、空母『天城』に載せられ、ハワイへと送られる筈だった1機である。当時、米海軍は『橘花』という日本海軍が開発したジェット戦闘機に胸が躍る気持ちであった。ドイツ方面におけるMe262はソ連

や米陸軍が持つていき、海軍は殆どあり付けない状態だった。

しかし 橘花は違う。大日本帝国海軍によって開発されたそれは米海軍直轄下において回収され、本土へと送られた。

だが、実際の所はその後橘花の技術に海軍はあり付かなかった。1回目に、輸送艦による本土への旅は大嵐によって幕を閉じた。橘花は艦船ごと転覆し、海に消える。2回目は、艦艇自体に問題が生じ、橘花は海上投棄を与儀なくされた。

そして3回目こそが、空母『天城』による輸送だった。ビキニ環礁での核実験前、標的艦はハワイに集まった。海軍内ではこの時に、橘花を標的艦の1隻、強固で不幸な空母『天城』に載せるべきだと考えた。この不幸とは、呉軍港内の境遇や前に同じ名を持っていた空母の不遇に由来する。橘花はその時、載せた艦艇を何らかのアクシデントに導く『不幸の戦闘機』と称され、運ぼうとすると日本人の祟りで船が沈められると噂された。それを意識したかどうか知らないが、米海軍上層部は「不幸には不幸」という具合に天城に橘花を2機載せ、ハワイへと出発させた。そして1機は既に載せた時から損傷を受けていた。積み込み時のアクシデントが原因だった。結局、橘花1機がハワイで研究の対象となり、もう1機は零戦五四型とともに、核実験処分である。

1937年に舞い戻った後、天城に載せられた橘花は横須賀の海軍航空廠へと送られた。山崎がそれに動向し、機体設計図と『ネ20改』の設計図を開発陣に見せた。彼は機体開発の責任者に命ぜられ、とりあえず動力源の開発も進められた。

しかし、動力源となるネ20改は設計図はあるものの、当時の技術水準では理解にも苦しむものだった。これは橘花のみならず、『夢幻の艦隊』の鹵獲艦艇、鹵獲機全てに該当する。未だ、鹵獲兵器の仕分けも進んでおらず、驚異的なテクノロジーにいちいち驚嘆し続けていた。各地に技術解明の為にプロジェクトチームは造られた

が、当面の見通しでは全ての兵器の構造を解明するだけでも1年、そこから国産するには最低でも2、3年は掛かるだろうと伊藤は考えていた。

「閣下、久方振りです」

山崎は言い、自分の前で口を開ける技術者達の前を通り過ぎて伊藤の元に向かった。

「彼等は開発陣だな？」伊藤は言った。

「未だ分からない事が多いので、講義を……」山崎は言った。「9年分の知識ですからね。なるべく最善を尽くして一から教えているのですが……」

「まあ気長にな」

そうは言ってみたものの、伊藤は今の日本には一刻の猶予も無い事を知っていた。最低でも4年後に迫る嵐に対し、それを乗り越えられる家　工業力の構築には金・時間・労力が必要となる。その内、金は圧倒的に足りないし、時間の猶予もない。それに、低賃金では技術者達の意欲が低くなるのは明白であり、金が無ければ労力の質も減る。

時間は前述した女子工業学校に絡んでくる問題だった。伊藤も後々気付いたが、この案には圧倒的な問題点があった。つまり、時間である。本来、職人は最低でも8年、一般には10年働いて一人前になる。しかし、この女子熟練工育成はどうか？女子工業学校などという突拍子も無い案が国会を通過するだけでも、2、3年は掛かるだろう。しかし、ターニングポイントとなる年までは後4年である。それは、かつての歴史にも訪れた悲劇　即ち、ようやく慣れてきた時には、日本は既に駄目だった　の再来ではないだろうか？零戦パイロット達も戦争中期には錬度は熟していたが、その頃には支える枝　大日本帝国　は腐り、その枝ごと落ちてしまっていた。女子熟練工もそんな例に漏れず、半人前になった頃には終戦という結末を迎えているかもしれない。そんな考えが伊藤にはあった。

結果を言えば、全てに金が絡んでくる。資源も人員も技術力も乏しい今の大日本帝国では、先行きはやはり暗かった。

しかし 決して闇黒という訳ではなかった。

第11話 菊花の蕾は各地に実る（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第12話 聖火の道は帝都に通ず

第12話『聖火の道は帝都に通ず』

1938年8月16日

東京府/荏原群

伊藤が最後に駒沢ゴルフ場としての姿を見る事が出来たのは、去年の暮れの事である。現在、建設作業が急ピッチで進められる駒沢ゴルフ場敷地には、複数の競技場の骨組みが立ち、空に向かって伸び続けていた。史実では駒沢錬兵場として、軍国色に塗り替えられたこの土地も、改変された“新歴史”の中では、1940年に控えた夏季オリンピックの会場建設地として、国際協調とアジアの地位の確立を目標に、完成が急がれていた。

史実、1940年度の東京夏季オリンピックは、日中戦争の煽りを受けて中止された。長期化する中国戦線を見越した陸軍は、「戦略物資の確保の為鉄鋼を用いず、木材か石材を使え」などと無理な注文を出した。また、杉本元陸軍大臣もオリンピックの中止を発言したり、河野一郎といった議員らの猛反対もあり、結局1938年7月15日の閣議を持って、正式に開催権を返上する。この結果は、当時にして90万円もの五輪関係費用と国際関係を溝に捨ててしまふ様なものだった。そして、解散権返上から数えてその1ヶ月後に当たる8月16日、日独友好関係を深めるヒトラーユーゲント訪日を実現する。

『目指すは体育青少年!!』

その様なフレーズが流行り出したのは、今日1938年8月16日からの事だった。その日、大日本帝国には盟友ドイツ 第三帝国の青年団、ヒトラーユーゲントが訪日していた。陸軍主導の下、行われた訪日歓迎のムードだが、史実程には国民も熱を上げていなかった。これもまた、海軍と政府内に対独意識を広めた謎の提督、藤伊一中将 伊藤と『大和会』による工作の賜物と言えた。対独親米英を謳う彼は、日独伊三国同盟締結の阻止の為に、日本国民にドイツの歓迎ムードを作らせてはならないと考えていた。そこで彼は『大和会』の一員であり、元陸軍対独情報士官であった原茂也の収集した数枚のフィルムや写真を、各地にて公開する事にした。自身はヒトラーユーゲントの活動である。

伊藤はその中に何があるかは知らなかったが、それを見てようやく気付いた。それは、全裸で海辺を駆け、無邪気に触れ合う青少年少女達の映像だった。ヨーロッパであれば、開放的なレクリエーションの一環と言って済ませられるだろうが、日本では訳が違う。不謹慎、淫ら、野蛮等の単語で片付けられ、ドイツの国民性のイメージダウンに繋がってしまうだろう。それが原の思惑だった。

他にも映像はあった。例えば、ヒトラーユーゲント同士の殴り合いである。ヒトラーユーゲントは軍事教練ではなく、スポーツ活動や山林での交流を行う。言わばキャンプである。しかし、その中には必ず戦争を意識した行動が含まれていた。その中でも顕著な例が殴り合いだった。『身体による交流』と位置付けられ、青少年同士が本気の殴り合いを展開した。やがて1940年頃になると、これまでのキャンプ気分から一線を脱した、軍事教練キャンプ（通称WE）が設置され、ヒトラーユーゲントはこれまでのスポーツを用いた精神向上の場ではなく、兵士としての訓練を施された。

この上記のフレーズが生まれたのは、ヒトラーユーゲント訪日の影響が一重に大きかった。手本にする というよりは、4年前の

ベルリン五輪で、開催国にして計89個ものメダルを獲得したドイツへの対抗心の現れの意味合いの方が要因としては強かった。その当時、日本は18個という大量のメダルを獲得した。その数は先進国にあった筈のイギリス・オランダを上回り、確かに日本国民も歓喜に湧いた。

しかし、国民は更なる躍進を欲した。アジア初のオリンピック開催国として、欧米諸国に一泡吹かせたいという欲があった。伊藤等が流したドイツ不信の噂もまた、その思想を後押しした。

駒沢の五輪主会場では、何もかもが揃っていた。重機、工作機器、外国人建築家、車など、普段であれば軍備拡張の懸念から渋られる大量の先端技術の日本への輸出も、『国際協調の場、スポーツの祭典の構築とアジア繁栄の為』という名目の下であれば、何とか許された。出し渋っていた米英はようやく、更なる工作機械、石油、鋼鉄の輸出を許可し、日本に送り届けた。ただ、それらの多くは帝都のインフラ整備のみならず、陸海軍や一般産業の増強に使われた。

「零式輸送機の開発が始まったと聞きましたが？」駒沢町を駆け抜ける一台の黒塗りの車。その車内には、伊藤と山本五十六中将の姿があった。伊藤は山本に対し、『零式輸送機』の開発の進捗具合を訊ねていた。

「金星は既に現存の稼働器がありますからな。それを基に開発した金星四三型の量産が早くて来年頃に始まれば、零式と言わず、九式輸送機として海軍にも納入されるでしょう」山本は嬉々として言った。「五輪が始まる頃には、国内線や東南アジア方面の空路から成る国際線で存分に成果を発揮する事でしょう」

零式輸送機とは、大日本帝国海軍の主力輸送機である。三井系列の新設企業である昭和飛行機工業は当時のベストセラー旅客機、ダグラスDC-3のライセンス生産権を取得、国産化された機体が、この零式輸送機であった。

1937年6月5日、設立された昭和飛行機工業だが、その経験の無さと設備不足が仇となった。ライセンス生産の権利を獲得したものの、その時には大規模な工場すらなかった。一から施設を建て、1938年頃から工場は稼働を始めたはいいが、DC-3の国産化には未だ及んでいなかった。3年という開発期間を経て、完成したDC-3国産機は『零式輸送機』と名付けられ、海軍に納入された。今歴史において、零式輸送機の開発は比較的スムーズに行きそうだった。『橘花』開発にも関わっていた山崎功治技師は中島飛行機時代、この零式輸送機一型の開発に少なからず絡んでいた。横須賀の海軍航空廠の『橘花』開発と並行して、零式輸送機の開発にも携わった。

零式輸送機の開発はなるべく急がされていた。その一因にあったのは、東京五輪である。日本での開催を望まない「地理上の不便さを解消する為」「アジアへの交通の便を良くする為」として、日本は米国に旅客機用にと航空揮発油と工作機械の輸出を求めた。それに並行し、『真の国際空港建造』（その当時はフランス領インドシナへ向けた国際線の運路が活発化し、それに併せて『東京国際飛行場』と言われていた）と称し、東京飛行場の拡張工事も進んでいたが、全ては後の日米間戦争に備えたものだった。海軍内でも有数の航空輸送プラトホームである零式輸送機は必要不可欠であり、なるべく早い量産が求められた。そして、東京飛行場の拡張は、後々に造られる予定である『富嶽』戦略爆撃機や各種軍用輸送機用の、設備補填の作業であった。圧倒的な潜水艦を送り出せる米海軍に対し、空は安全な輸送路の一つである。故にそこから何らかの可能性を見出す事は必要だろうと伊藤は考えていた。

また、この頃には東京オリンピックに向けた、東京・ヨーロッパ間、東京・アメリカ間直通便計画の一環として、長距離旅客機・輸送機の名目で『キ74』『キ77』等の開発も、史実より早く始まっていた。

こうして、米英から資源・工作機械、技術等を輸入し、東京オリンピックに向けた東京市開発は工業力の増強とともに進んだ。1940年、オリンピックによる経済効果の恩恵を受ける頃には、国内のインフラは整えられ、大日本帝国軍は潤沢な資源と精密機械を蓄える事が出来た。聖火の火種が満州国を通過し、日本列島へと持つて行かれる時には、既に廃れつつあった対日意識も立ち戻るが、後に勃発する劇的事件により、対日意識は忘れ去られ、別のある国が同様の立場に立たされる事となるが、それはまた別の話である。

更に日は戻り、その同年、1940年2月。冬季札幌五輪も開催され、盛況の中閉幕する。

二つの五輪を迎え、見事に成功させた大日本帝国は工業力の大きな躍進と、諸外国からの信頼を勝ち取った。潤沢となる経済で基盤を盤石のものとし、伊藤らによる技術革新を遂げた大日本帝国はもう一つの1940代を歩んで行く事となる。

第12話 聖火の道は帝都に通ず（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第13話 水ガソリン詐欺事件

第13話『水ガソリン詐欺事件』

【この経験は、結果的には私にも山本閣下にも、上手く作用したと確信している。何故なら、海軍は私が想像していた以上に『精神論』を重視し、『化学』に疎い組織として変わっていなかったからだ。本多維富という魔術師は居なかったが、預言者は居た。本多は『水』から『油』は造れなかった。しかし、海軍が進むべき道を示したのだ】

（伊藤整一口述回顧録・第6部第1章『水ガソリン事件』より抜粋）

1938年9月21日

東京府

伊藤は、薬品と欺瞞の入り混じった臭いの充満する実験室内で、眼前に居座る無礼な男を見張った。ビーカーを持ち、芝居掛かった弁を弄する“自称町の化学者”は、言うまでもなく、化学者ではなかった。伊藤はそれまで噂と信じて疑わなかった話を思い浮かべながら、『奇跡』を上演しようとしているこの男の姿を、洪面を浮かべながら見据え続けた。

事の発端は1938年、実業家辻嘉六の元に一人の男が現れた所から始まった。男の名は 本多維富。自称『町の化学者』を謳う本多は、気味の悪い笑みを浮かべ、「水を原料に石油」を造るのに

成功した」　と言った。辻は戯言だと思ったが、面白いので実験をその場で実演させてやった。

辻は只の実業家ではなかった。日本化学産業の代表取締役にして、政界の黒幕的存在だった。原敬存命時には深い親交があり、立憲政友会の黒幕だった。亡命中の孫文を援助した事もあった。戦時も戦後も戦前も、生があり地に2本足を着けて、脳を働かせている時は政界を影から操り、常に黒幕に徹して表舞台にはあまり立とうとしない人物だった。そんな男だが、本多の口達者ぶりによって騙されたのか、それとも目が節穴で水入りの瓶を石油入りの瓶にすり替えた事に気付かなかったのか、とにかくにも本多の実験は成功し、辻は信じ込んでしまった。そして、辻は本多に対し、資金提供を約束した。そして、辻は本多が造ったガソリンを乗用車に使い、方々に自慢して回った。

伊藤がその余波を受けるのに、そう時間は掛からなかった。政界に広まる噂の波は、米内との懇談時に到達した。米内は意気揚々と伊藤に告げた。「近衛総理から聞いたのだが、何でも『水』から『石油』を造ってしまう天才が居るのだそうな」と、米内は嬉々として言った。「これは帝国千年と言わず、永久の繁栄を約束されたのではないか？」

伊藤は渋面を浮かべ、引き攣った笑顔を見せる以外に何も出来なかった。この頃、事件は既に動き始めていたからだ。米内は海軍省の内部部局、『軍需局』局長の氏家機関中将にその男の事を伝えていた。史実通り、氏家はそんな噂を信じようとはせず、それを『詐欺行為』だとして、軍需局では受け入れるべきではないと結論付けられた。やがて本多が軍需局を訪れ、実験の申込みを申請したが、軍需局はこれを拒否し、相手にしなかった。

予想を裏切られた本多は次に、海軍航空本部へと向かった。その名の通り、航空機や航空兵器を研究・開発し、航空要員の育成に励むこの組織であれば、航空機用にと、この嘘が信じられ、大量の予算を騙し取れると考えたからだろう。

まず、本多は海軍航空本部教育部長の大西龍治郎少佐 後の前代未聞の奇襲作戦『真珠湾攻撃』の立役者にして非人道的奇襲戦法『特攻』開発関係者 に近付き、弁を振るった。大西はこれで本多を信用し、航空本部長豊田貞次郎中将や、海軍次官山本五十六中将等に働き掛けて、海軍管理下での実験が承諾された。それが今日、伊藤の眼前で繰り広げられていた。

当時、海軍内に居た頃、伊藤は今回の実験ではなく、別の実験についての噂を聞いた事があった。史実では続きがある。何度も言う様に、本多は『水』を『石油』に変えられるとしたが、それを信じる者は居なかった。しかし、何には信じる者が居た。それが大西、石川、豊田、そして山本等である。この中でも、石川信吾大佐は異色な存在だった。横須賀軍需部総務課長という職に着き、軍需の面を知っていた彼は、本多の発見に感銘を受けていた。それが尋常なものではなく異常で、常軌を逸していた といっても過言ではなかった。

史実では、今回の第1回目の実験は 成功しなかった。本多はすり替え不可能と判断したのか、体調不良を訴えて実験を中止、逃げ帰ってしまう。これに元々疑心暗鬼の目で見ていた海軍関係者達は本多を詐欺師と結論付けたが、石川は違った。

「実験が失敗したのは、彼を信じていない人間があつたに居たからです！」そう言ったのは、何を隠そう石川だった。海軍きつての政治将校だった彼は、対外交渉ではその才能をいかんなく発揮した。しかし、その口達者な彼も、元々自然の法則に逆らっている本多のペテンに際しては、旧海軍らしい科学軽視の精神論を飛ばす事しか出来なかった。

「見世物はここまでですな」

伊藤は背後を気にし、顔中に汗をかく本多を見て言った。「この男は化学者でもなければ魔術師でもない……詐欺師だ。我々が居眠りでもするのを待っていたようだが、どうやら今日は駄目だと判断されたらしい。お引き取り願いましゅう……」

「なッ……」本多は後ずさりした。「何を申されるかと思えば。私が詐欺……、詐欺師とは!!」

明らかな動揺の色に気付いた山本は、ようやく我に帰った様だった。史実では最後まで山本は騙されていた。実験に立ち会った山本は大福饅頭まで持参し、詐欺師本多に食わせて応援していたほどに、この実験に傾倒していた。

山本五十六の『名将』神話に大きな傷を付けるこの事件は、最終的には呆気なく終結した。翌年、海軍航空本部で行われた実験は昼夜3日間掛けて行われた。30名程の監視員達が衰弱の色を見せ、居眠りした後、本多の手によって確かにビーカー内の『水』は『石油』に変貌していた。軍需局から派遣された渡辺監視員は、こんな事もあるのかと実験用ビーカーの全ては番号付けて記録していた為、これはすり替えられた物と見破られ、本多は警察に引き渡された。

事件後、大西は詐欺の詐術を見破った関係者達に謝り、全ての人間に詫びの手紙を書いて送った。しかし、山本は謝りもしなかった。やはり、エリートであり、中將であるが故のプライドの問題なのだろう。訪米経験を持ち、かのハーバード大学で勉学に励み、航空機の有用性を一早く気付いた人物だが、自然科学に関する知識は殆ど持ち合わせていなかった。英語は達者で、外交交渉ではわざわざ通訳を付け、相手の態度や表情を見たり、駆け引きの時間を延ばす等優れた軍政治家だった。しかし、それと同時に彼は、水から石油が造れると本気で考えていた人間でもあった。

史実より早く、事件は解決した。藤伊中將　伊藤整一中將の進言により、山本・大西らは本多を追い返した。ただ、石川だけは相も変わらず「実験は成功する筈だった。誰かのせいで潰れた」

と発言し続けた。史実と違う点は、実験が成功しなかった。（水入りビーカーを石油入りにすり替えられなかった）為、史実では「成功」と言っていたが、「成功する筈だった」と改変された点である。そして史実通り、大西は謝罪したが、山本が頭を下げる事はなかった。

伊藤が暴いた驚くべき事実を前に、まだいささか不機嫌であった山本は、黙然と伊藤の後を通り過ぎ、車に乗り込んだ。慌てて伊藤も乗り込み、車は発進した。

「……私も馬鹿なものだ」

山本は言った。この言葉の後に、何かの言葉が継ぎ足される事は無かった。伊藤としては、今回の事件での山本の行動は、『資源確保』への危機感が原因　と、頭の中では考えたかった。しかし、『大和会』の戦後反省会において、多くの民間科学有識者や元海軍関係者達と話していた過去の記憶を振り返ると、海軍の科学軽視は酷かった事は否めなかった。伊藤はこの時、海軍内に蔓延る「精神論」は現状として、タイムスリップした後でも変わっていないと確信した。

1938年9月22日

東京府/青山南町

その翌日の晩、山本と将棋を一手打った後、伊藤は大日本帝国の新資源について、その場に居た米内、井上を含めて話す事にした。これを話そうと思ったきっかけは、無論昨日の『水ガソリン詐欺事件』である。ただ、過ぎた事を話しても仕方が無いかもしれないしかし、陸海軍内の溝を埋めない事には絶対に戦争に勝てない事

は、戦後の『大和会』戦争反省会において、長く論じられた。実の所、昨日の事件はこれが最初ではない。実際には7年前、陸軍も同様の詐欺に遭っていた。陸軍関係者は海軍にて実験が開始される折、7年前の資料を提供しようとしたが、これを大西大佐は「海軍は海軍のやり方で決める」と一蹴していた。

「残念だな、やはり嘘だったか……」米内は言った。「しかし、我々にはまだ希望がある。人造石油だ。当面はその早期量産化を願おう」

去年1937年から、大日本帝国では『人造石油製造事業法』が定められた。1913年、フリードリッヒ・ベルギウスによって開発されたベルギウス法が生まれた時点から、人造石油は知られ始めた。他にも、フィッシャー・トロプシュ法もある。ヒトラーの下、ドイツでは人造石油がそれまで以上に造られ、量産化が進められた。努力の末、1940年の時点で年産350万トンの規模の石油を精製するに至った。

その例に倣い、日本も人造石油の開発に乗り出した。三井財閥がフィッシャー・トロプシュ法の特許譲渡契約を正式に交わし、ドイツから技術がもたらされた。1940年頃には各工場も次々と完成し、開発が進められたものの、フィッシャー・トロプシュ法での製造は中々難しかった。それに、そもそもフィッシャー・トロプシュ法で造られた油は、航空機に使える代物ではなかった。ドイツでは精製ワックス・潤滑油・油脂等に使用され、航空燃料には殆ど使っていない。

一方、ベルギウス法は日本ではあまり採用されず、更に優れた水素添加法については、1945年1月。ドイツは終戦間近、日本は敗戦の道の佳境に入った時点で、日本に特許実施権が与えられた。水素添加法では、96オクタン価という高精度の航空燃料を精製出来た。残念ながら、技術・資金・時間等の問題が重なり、日本では実用化されなかった。

「FT法は航空機には使えんのか」山本は唸った。

「使えない事もないでしょうが、低オクタン価では先が見えていきます」伊藤は言った。「この際、本土と満州国に造る人造石油施設は、ベルギウス法か水素添加法に統一した方が良いでしょう」

「とはいえ、水素添加法は確立もされておらんではないか」米内は言った。「如何にして引き出すのだ？技術協定を使うのか？」

伊藤は頷いた。「しかし、不安な点もありましてね」

「何です？」井上は言った。「それに見合った技術なら、帝国には幾つかあるのでは？」

「そうですが、本当にドイツが合意するかどうか……」

基本、96オクタン価のガソリンを精製出来る水素添加法は、高オクタン価の航空揮発油を望む帝国海軍にとっては必要不可欠なものだった。

無論、最終目標は100オクタン価ガソリンの国内量産化だが、その精製技術は現在、米国の手中にあって、日本には届かぬものだった。

第13話 水ガソリン詐欺事件（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第14話 河豚計画

第14話『河豚計画』

1938年12月7日

東京府

その日、麻布区に位置する藤伊一海軍中将の私邸の前に一台の外国車が停まった。そして、一人の初老の外国人が車から降りてきた。初老の外国人の名は レオ・シラード。ハンガリー生まれのユダヤ系物理・分子生物学者である。シラードは正面玄関の前で出迎えた使用人に案内され、藤伊中将の書斎に案内された。

藤伊は同じ様に軍服姿の男を二名、引き連れていた。ひよろりと痩せた中柄の体格で、どこか隠退生活者の趣があり、畏敬の念を感じさせる『何か』を秘めていた。それもそのはずで、1945年をもって予備役編入され、『大和会』なる組織を一から築き上げた苦勞を持つ。無論、シラードは1946年からの“時の旅行者”

とは思ってもよらないだろう。シラードは藤伊の気難しげな、そして逞しさを覚えさせられる彼の瞳の奥底に、得体の知れない憤りの炎を彼は見つけていた。何故だ？とシラードは思った。無礼な事でもしたのかと思っていたが、それは違った。

藤伊は一変、瞳の奥底の炎を鎮火し、書斎に招き入れると、扉を開けて入ってきた使用人に紅茶の用意をさせ、持ってこさせた。

10月にチェコスロバキア、ズデーデン地方がドイツ第三帝国の手中に落ちて間もなく、定職に有り付けずにその日暮らしの生活をしているニューヨークの生活を考えれば、シラードは紳士的に迎えてくれた東洋人海軍武人藤伊の態度がとても有り難かった。

シラードは、眼前に置かれた真っ白な陶器のティーカップを手に

取った。紅茶の色が映える東洋テイストのカップは、肉厚で冷めにくい物だった。彼は久方振りの至福を噛み締めつつ、温かな紅茶を口に含んだ。全ての発端の記憶が脳裏に浮かんた。

イギリスには戻れず、職の当ても中々つかなかった10月の事、『日本の特使』なる男がシラードの元を訪れた。滞在先のニューヨークから、職のあったイギリス、オックスフォード大学に戻ろうと考えていたシラードだが、10月10日までを期限としたズデーデン全域の割譲がドイツに決まった後、彼は英国を含んだ動乱がヨーロッパで勃発するであろうと予測し、帰るに帰れなくなった。そんな彼に最初にアプローチを掛けたのが、日本の特使だった。当時、『日独伊防共協定』について知っていた彼は不信任を覚えつつも、特使からの話を聞いた。それは、日本における『原子物理学分野の研究』 即ち、ウランの核連鎖反応の実現だった。

シラードは落ち込んでいた。ニューヨークでの実験は実を結ばず、10月のズデーデン地方割譲、何らかの変化を得たかった。とにかく彼は、ドイツ以外の国が先に原子爆弾を保有する事を望んだ。特使は『国家規模の計画』と言い、『満州国』と呼ばれる国での勤務だと告げられた。シラードは満州国を知っていたし、そこに日本が『ユダヤ人自治区』を創ろうとする計画を少なからず耳に入れていた。亡命したユダヤ人科学者達も居る、と言った特使の言葉に、シラードの心は決まった。ドイツより先に核連鎖反応を実現出来るのでは？と考えたシラードは満州国での核計画の参加に合意したのだ。

永遠の居住先だった筈のイギリスにああいう仕打ちを受けた後だけに、シラードは伊藤と日本政府の丁重で親切な態度がとてもありがたかった。純粋な研究意欲からか、それともユダヤの同胞達を助けてくれた恩義からか、はたまた同好の士だと見て取ったからなのか。伊藤は純粋な知識欲と、同胞の救済、そして第三帝国への対抗馬と、その3つ全ての観点を合わせて我々に協力したのではないか

と考えていた。複雑なものだが、原爆計画には彼の存在が大いに役立つ。

「如何ですか、日本は？」

藤伊中將が英語を話せると知って、シラードは喜んでいた。これまで会った軍人の中では、有数の教養を持つていると察したからだ。少々ヤンキー訛りながらも丹念な英語は、渡米経験を示す証拠だった。シラードが洞察する通り、伊藤には駐米経験があった。1927年、伊藤は米国日本大使館付け海軍駐在武官として米国に派遣されていた。その当時はアナポリスから出て間もない卒業生、レイモンド・A・スプルーアンス海軍中佐と親交があった。史実では後に、彼等は戦場で再会する訳だが、今物語では違う。敗戦後、スプルーアンスは個人的な私用として伊藤と再会し、一夜を飲み明かした。

「美しい国だ。ヨーロッパの景勝地とはまた違った美しさだ」シラードは言った。「貴方がたの下で研究が出来るのを、1日も早く望みます」

学者らしい熱心さだが、同時に伊藤は1つの記憶を呼び覚ました。1945年8月、広島・長崎に落とされた原子爆弾の生みの親は「ロバート・オッペンハイマー」だが、その親を生み出す親となったのが レオ・シラードだった。

1939年、ドイツへの危機感と知識欲を覚えた彼は、アルベルト・アインシュタインとともに、時のアメリカ合衆国大統領、フランクリン・D・ルーズベルト宛ての、原子力と軍事利用の将来性を説いた手紙を出した。当初はアインシュタインもシラードも、米国に原子爆弾を造らせる事には合意しかねていた。しかし、ドイツが原子爆弾を完成させるのは時間の問題だろうと考え、焦りから彼等は手紙を大統領に渡す事を決断した。それから6年後、数十万人の人間が死、病、被曝等で人生を狂わせられる事となる。全ての種を撒いたシラードも、最終的には原爆投下に国旗を翻したが、結局聞き届けられる事なく、広島・長崎は核の炎に焼き尽くされた。

そんな未来を微塵も知る由のないシラードに、伊藤はやりきれな

い憤りを覚えていた。

「落ち着きなさい」

肩に手を置き、山本は言った。伊藤の気持ちを察したのか、シラードの前に躍り出て、話は全て自分をお通し頂きたいと伊藤は言った。

山本が英語に達者なのは、伊藤もよく知っていた。日常的な英会話の機会が失われたとはいえ、十分に会話出来る程のレベルに達していた。

前日、五相会議の折に決まった事を伊藤が話すと、シラードは大いに喜んだ。その決まった事とは 『猶太人対策要綱』と題する日本の対ユダヤ指針が定められた事だった。

「それは真ですか？」シラードは訊ねた。

猶太人対策要綱とは、ユダヤ人排斥が非人道的な、人種平等の精神に合致しないというものだった。ただ、方針のメインは純然たる人道的政策の事ではなく、日本や満州国の権益を中心とした政治色の強いものであった。2年後に東京オリンピックが控え、聖火ルートに入るとはいえ、満州国経済も先細りを見せていた。それに11月の『水晶の夜』から、ドイツと関係を持つ日本は、米英からの圧力が少なからずあった。それに対応すべく、ユダヤ資本の導入を願ったのが、この政策の真髄だった。

シラードが11月の水晶の夜を聞いたのは、太平洋上の事だった。ラジオから漏れる声は、ナチスドイツ 第三帝国で繰り広げられた反ユダヤ暴動は、酷いものであった。ルーズベルトのみならず、シラードもこれに激怒し、憤りを露にしていた。

しかし、これに何か意見を述べはしなかった。

「本当です。我々は来年までに、少しでもユダヤ人を満州に入りたい」山本は言った。来年、即ち1939年には第二次世界大戦の発端を生む、独ソ両軍のポーランド侵攻が待っていた。9月1日に

始まるその戦争までには、伊藤はユダヤ人を一人でも多く満州国に入れるか、ヒトラーを日本に招き入れてドイツ海軍の重巡洋艦『プリンツ・オイゲン』と戦艦『大和』を見せたかった。そして未来を話し、総統にポーランドへの侵攻を心変わりさせたかったのだ。そうすれば、諸外国にユダヤ人を強制移住させているドイツに対し、比較的優秀且つ即戦力となるユダヤ人を回してもらえ、尚且つ戦争に突入しないので、ソ連経由でユダヤ人を満州国に入れる事が出来た。

計画の根幹には、元の歴史でも進んでいた『河豚計画』があった。河豚計画は、『在支有力ユダヤ人の利用により米大統領及びその側近の極東政策を帝国に有利に転換させる具体的方策について』という長い表題の付いた計画書である。これは米国や世界のユダヤ資本を満州国に牽引し、アメリカ経済での大きな影響力を持つ事により、米国の対話を有利に進める為の策だった。

ロスチャイルド家等、アメリカ経済はユダヤ系財閥によって支配されている　と計画者達は考えていた。同時に、ヨーロッパではナチスドイツの急激な台頭によって故郷を追われたユダヤ人が多く、助けを必要としていた。計画は、そのユダヤ人の経済力の恩恵を日本が享受するとともに、アメリカからの信用を獲得し、資本を引き入れ、『満州国』という国家の存在の既成事実を創る事にあった。当時としてはこれといった資源も見つけるに至らず、国際的な孤立から満州国の経済の成長具合は目に見えていた。故に、海外資本が必要だった、アメリカやイギリスはそれを良しとしなかった。自分達の手で満州国、そして中国大陆を支配したかったのだ。

そこでヨーロッパから方々に散らばるユダヤ人を招き、世界のユダヤ資本を投下させようとした。そして、日米打開の糸口を見つけようとしていたのである。

しかし、最終的にはユダヤ人自治区まで作ろうとしたこの計画は

突如、消滅する。1940年9月27日、『日独伊三国軍事同盟』が締結されたからだ。

そもそも、それまでの経緯の中で、既に計画は破綻していた。当計画の対米戦略上で重要視された人物、ステイーヴン・サミュエル・ワイズ世界ユダヤ人会議議長、米政財界有数のユダヤロビーにして、ルーズベルト大統領の側近にして、反日家は日本を全く信用せず、満州国移住計画『河豚計画』には賛同しなかった。そして三国同盟は成立し、河豚計画は破棄された。

伊藤がこの『河豚計画』を実現させる系口だと考えたのは、ラビステイーヴン・ワイズを何とかする事だった。計画成功は日米関係の強化、米資本の参入、国内産業の活性化に繋がる。ワイズはユダヤロビー、即ち、数百万というユダヤ系アメリカ人から成る組織だった。人口にしてみれば取るに足りない数だが、ユダヤ系アメリカ人の地位は高かった。実業家、政治家、大学教授等々、上流階級層に多く、社会的影響力は高かった。それ故、大統領選においては数%の人口ながらも、組織化され、社会的発言力の強いユダヤロビーは、その数十倍の票を獲得出来るも同然の存在だった。その中の最右翼が何を隠そうワイズであり、ルーズベルトの側近だった。因みに、ユダヤロビーは民主党を支持し、ルーズベルトも民主党に所属していた。

原子爆弾という巨大な計画を実現する場合、途方も無い資金・人材・機材が必要だった。そして、それを最も手っ取り早く入手する方法は、満州国を利用した米資本や世界のユダヤ資本の投下だった。1年後に迫るポーランド侵攻が始まれば、日本は過酷な状況に強いられるのは間違い無かった。ルーズベルトはヨーロッパ戦線介入の糸口を見つける為に日本に重荷を背負わせ、日米開戦を狙ってくるからだ。そんな中では、ルーズベルトの手先とも言えるワイズが『ユダヤ人満州国移住計画』を同意するのは絶望的だろう。

「ではどうする？」シラードを宿泊先に帰した後、山本は言った。「方法は2つですね」伊藤は言った。「1つは暗殺。そうなれば、

少なくとも変化は得られる筈ですからね。強盗に遭ったとでも見せかければ楽に殺せるでしょう」

ただ、この案には伊藤はあまり気乗り出来なかった。大日本帝国の諜報機関は未だ未熟である。中途半端な事をすれば、必ずしつぺ返しを食らう事になるのは目に見えていた。それに、ワイズを殺した所でルースベルトの同意が得られなければ、どうしようもないのだ。

「もう一つは？」

「対話　ですかね」伊藤は唸りながら言った。「とはいえ、時間を稼がれるか、最終的には断られるかの2つの可能性が高いのは確かですが……」

ただ、計画自体は双方　大日本帝国とユダヤ人　が得をするものだった。日本はユダヤ人達に、ヨーロッパを渦巻く嵐から逃れる事の出来る安住の地　『満州国』を与えた。ユダヤ人迫害はナチスドイツ台頭以前から続く、キリスト教の悪弊だった。ナチスが1935年にニュルンベルク法を制定する以前から、世間一般的にユダヤ人の生活は制限されていた。

しかし、神道を国家信教とする日本では、ユダヤ人を虐げる理由はなかった。

伊藤と『大和会』による関与の下、『河豚計画』はゆっくりと、しかし確実に実現しつつあった。そして、また歴史とは異なる1940年代の中で、計画は違った結末を迎える事となるのだ。

第14話 河豚計画（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第15話 富嶽はワシントン爆撃の夢を見るか？

第15話『富嶽はワシントン爆撃の夢を見るか？』

1938年12月18日

神奈川県／横須賀

その日、伊藤は海軍航空廠の頭脳の源、機密書類保管室に入り、一通り書類を閲覧していた。それは、伊藤と『大和会』が引き連れてきた『夢幻の艦隊』における、航空兵器に関連する鹵獲品目録だった。1年掛かりで纏められた兵器の名は延々と続き、そこに眠る知的財産は、大日本帝国の技術経験の1020年を併せても足りない程に高価な代物だった。書類戸棚から取った分厚い目録書類を、横に置かれた一台のテーブルに置き、電気を付けて伊藤は読み耽った。

航空廠が用意した目録の中には、F6F『ヘルキャット』やF4U『コルセア』の様な米海軍最新鋭の“零戦キラー”から、『グラマン鉄工所製』渾名を持つ鈍足堅物機F4F『ワイルドキャット』の様な旧式機もあった。大抵は対空火器、艦載機等、海軍関連の鹵獲品が目立つが、ただ一つ『米陸軍関連鹵獲品』の項目もあった。

【ライトR-3350サイクロン18】

カーチス・ライト社が開発しているとされる空冷星型18気筒エンジン。同発動機は長距離戦略爆撃機として開発される『B-29』に搭載されるとの推測。鹵獲品は“燃料噴射方式”を採用したとされる機種で、比較的状态は良好だった。太平洋戦線に配備された余剰品と推測される。『大東亜戦争』時、東京及び主要都市、

主要軍事拠点に爆弾を落とすとされるB-29に搭載され、残虐の極みが如き米軍の蛮行に多用された。

【プラット・アンド・ホイットニーR-4360】

プラット・アンド・ホイットニー社が開発するとされる空冷4連星型28気筒エンジン。鹵獲輸送艦の一隻に積載されていた同発動機は、恐らく事務的ミスで間違つて載せられたか、廃棄品として載せられたと推測されるが、後者では状態が良過ぎるので、前者の可能性が高い。

厚い書類綴りを閉じ、右壁の書類戸棚に目録書を戻すと、伊藤は部屋を後にした。伊藤がこの部屋に赴いたのは、目録の中に記録された2種類のエンジンに興味を抱いていたからだ。

伊藤がこの2種類のエンジン『R-3350』と『R-4360』に興味を抱いたのは、対米戦略の一環として発案された『Z飛行機計画』に向けて、国家規模で事が動き始めていたからだ。連合国軍の爆撃戦略 B-29の無差別爆撃を早く知った中島飛行機創始者、中島知久平は史実より早く、陸海軍に向けて未曾有の戦略爆撃機『富嶽』開発を提案した。

史実の1942年、中島飛行機創始者である中島知久平は米国との戦争帰結を憂い、『Z飛行機』を立案した。この超大型長距離戦略爆撃機『Z飛行機』は、千島列島から出撃して太平洋を横断、アメリカ本土を爆撃してそのまま大西洋を横断し、同盟国ドイツかの占領地に着陸する という壮大且つ大胆な奇策だった。更に、ヨーロッパで車輪（離陸時に強制廃棄されている為）・燃料・爆弾を補給した後、再びアメリカ本土を往復爆撃し、戻る というのだ。

そもそものZ飛行機 後の『富嶽』 のカタログスペック自体が、驚嘆に値するものだった。全長45m、全幅65mと、機体

はB-29の1.5倍に匹敵する大きさで、爆弾搭載量は25t。航続距離に至っては19,400km。心臓部のエンジン出力は5000馬力と、行き過ぎた理想が詰め込まれた機体だった。中でも5000馬力のレシプロエンジンというのは、米国も実用化出来なかった代物だ。

この『Z飛行機』計画の原点となった中島知久平発案の『必勝防空計画』では中島がそれぞれ描いた派生機案もあった。基本的に描いたのは通常の戦略爆撃機『Z爆撃機』で、これが最も無難。

次に、『Z掃射機』がある。これは富嶽原型機からウエポンベイを撤去し、その代わりに胴体下部に数十 数百もの機銃を備え付けるという案だ。主に20mm機関砲96門を搭載するタイプと、77mm機銃400門を搭載するという2つのタイプが考え出されており、前者は爆撃機編隊に随行し、敵の戦闘機を上空から攻撃するというコンセプト。後者は敵艦船の対空火器、航空母艦の飛行甲板、地上の歩兵や非装甲車両、列車といった軟弱な敵に対する攻撃をコンセプトとして挙げていた。

またこの他、大型魚雷を20本搭載し、艦船に向けて攻撃する『Z雷撃機』や、200名の兵員搭乗可能という『Z輸送機』、100名程度の搭乗が可能という、『Z旅客機』なんて案もあった。

少しでも頭に良識がある人間なら分かるが、6発型の爆撃機を造るという時点で、富嶽の実現性は遠のいていた。4発機もまたもに量産出来ない状態だった帝国軍に6発航空機 ましてや5000馬力の怪物発動機を造れるだけの時間も金も技術も労力も無かった。更にZ爆撃機やZ輸送機ならともかく、すぐに空になったり、命中精度も低い20mm機関砲や、貧弱な77mm機銃を取り付けたZ掃射機。何故、高高度活動を目標とした筈なのに低空を飛行するリスクを冒してしまうZ雷撃機等、問題外だった。そもそも、開発中に日本軍は制海・制空権を奪われ、爆撃機や掃射機を飛ばせる空は無かった。

R - 4360『ワスプ・メジャー』 3000馬力の怪物は、米国の航空機メーカー『P & amp; W』社がB - 29の新たな動力として、開発を進めていた空冷4連星型28気筒エンジンだった。R - 4360はP & amp; W社の『ワスプシリーズ』の最終機種であり、同社のピストンエンジン技術の最高峰であった。本来は前述した様に、B - 29の新しい動力を目指していた。

しかし1945年8月15日をもって戦争は終結。余剰品のR - 4360エンジンはB - 29の改良機『B - 50』に搭載され、やがて未曾有の戦略爆撃機B - 36 通称『ピースメーカー』に搭載された。

コンベア社が開発したB - 36は、富嶽に勝るとも劣らない戦略爆撃機だった。無論、5000馬力のエンジンは存在せず、代わりに3000馬力のR - 4360 - 25エンジンを6基搭載、更にGE社製ターボジェットエンジンを4基搭載の計10基 即ち『10発爆撃機』という途方もない怪物を生み出したのである。やがてR - 4360は型が更新され、3500馬力、3800馬力と上がり、軟弱だったジェットエンジンも力を高めていった。

ただ、爆弾搭載量21t、最大航続距離は16,000kmと、日本の遙か上を行くアメリカでさえ、富嶽のカタログスペックには敵わなかった。

無論、1946年の7月から時を逆行してきた伊藤は、B - 36という超大型戦略爆撃機が存在を知らない。Z飛行機 後の富嶽が本当に空を飛べるかと言われれば、洪面を浮かべるのが関の山だった。アメリカ本土爆撃など、論外であった。

しかし、伊藤が読んだ鹵獲品目録の大馬力エンジン『R - 4360』を考慮すれば、可能性はあった。海軍の航空廠の技術陣は、R - 4360を調査・分析してカタログスペックを纏めた。そこで彼等は、R - 4360が3000馬力の能力を誇ると裏付けていた。戦後アメリカの怪物エンジンが役に立つと考えた中島は、深山に生

を与える寸前だった中島飛行機の頭脳集団を駆り集めた。

海軍から提供された知的財産 R - 4360エンジンだが、開発は困難を極めた。

まずは解明。海軍航空廠の面々は、元中島飛行機の山崎技師の下、『橘花』噴進戦闘機の開発に忙しかった。研究チームもそれに人材を割かれていた。そこで中島の頭脳集団は残った研究チームの人員と資料を基に、R - 4360エンジンの技術構造の完全な解明、そしてそのコピー試作品の開発から着手した。

しかし、おいそれとP & amp; W社の秘術 1946年の知的財宝を見て、同等の物が造れる訳もなかった。確かに中島は、中島飛行機の最も優秀な技術者達を選び出した。だが、それは時間と工業力 8年間と数十倍規模の工業力 との戦いだった。血眼とか、馬車馬になって働くとか、全身全霊を尽くすとか、一つの物事にのみ絞るといった意味合いの言葉は多くある。しかし、そのような精神云々で国産化に漕ぎ着ける程に、事は甘くは無かったのだ。

やがて技術データが揃ってくると、いよいよ設計陣が動き始めた。当初案の5000馬力エンジンは妥協案の3000 4000馬力程度に引き落とされ、補助動力機関として『橘花』計画でも開発が急がれる『ネ20改』の大型改良エンジンが搭載される事になった。そして神が操ったが如く、新史のZ飛行機『富嶽』は B - 36に酷似していた。

中島は史実より早く、陸海軍と共同で東京北多摩群の三鷹に50万坪の用地を確保していた。ここに後の富嶽開発拠点 三鷹総合研究所や中島が晩年まで暮らす泰山荘が築かれ、超大型戦略爆撃機『富嶽』誕生の地として、後世の歴史に刻まれる事となる。

「しかし、持たざる国が大型兵器を持つべきなのだろうか？」

そう呟くのは、山本だった。航空廠の一角、R-4360エンジンを取り囲む様にして配置された技術陣の作業風景を彼は見ていた。「前史ではそれが間違いだっただけではありませんかね？」山本は言った。「『大和』や『武蔵』の前例は否定できますまい。富嶽もその二の舞なつてもおかしくないでしょう」

その考えには伊藤も賛成だった。基本的に今の日本は、基礎戦力の基盤を固めるのが先決と言えた。伊藤ら『大和会』が時空転移をしてからというもの、歴史は確かに変わったが、それ故に帝国軍の基本戦力は明らかに弱くなっていた。陸軍では、後の一式中戦車に莫大な予算をつぎ込む為、九七式中戦車『チハ』は少数生産に留められ、満州国に集中配備された。そして一方の海軍では、零戦の設計の抜本的見直しを図られ、1940年までに配備出来るか不透明だった。

「航空主兵主義の世に入れば、富嶽は空の『戦艦』として、抑止力を持つと私は思いますね」伊藤は言った。「原爆開発を進める以上、富嶽の他に米本土を爆撃出来る機種はいませんし」

大日本帝国は密かに原爆開発を進めていた。日独伊三国科学・技術協定により、ドイツから知識を頂き、また1938年という混沌の時代の中、ヨーロッパから追い出されたユダヤ系科学者の多くを雇い入れていた。その多くは後に『マンハッタン計画』に参加した者が多く、レオ・シラードが既に日本側に引き入れられている以上、アメリカの原爆開発は史実より遅れるのは明らかだった。しかし、いつまでもそれが続くかと言えば 違った。

「再来年にはイギリスも同盟関係に入る筈です。そうなれば、状況は改善する」

伊藤は言った。「日本一国では手に負えない事業かもしれませんが、イギリス・ドイツ・イタリア等の国々と共同で進められれば不可能も可能になる。早ければ、我々が時を逆行した8年後ぐらいには完成するかもしれません」

「8年後か」山本は言った。
「爆弾の雨が首都ワシントンに降り
注ぐ日は、案外近い様だ」

第15話 富嶽はワシントン爆撃の夢を見るか？（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第16話 東條の懷刀（前）

第16話『東條の懷刀（前）』

1938年12月20日

東京府／麻布区

これから5ヶ月と12日ほど後の1939年5月11日に、かの有名な『ノモンハン事件』は勃発した。この事件に軍中央部は終始一貫して、不拡大・局地解決の方針を取るが、満州国 現地での絶対的権限を振るつた関東軍という存在の為に、1万を超える死傷者を出し、近代戦の要たる重砲、戦車、航空機の多数を喪失する事となった。これらの犠牲拡大の一環には、藤伊邸に現れ、主の前に座る一人の陸軍参謀 辻政信の行動が大きく関わっていたのは、言うまでもない事実であつた。

辻少佐は史実に近い形で、関東軍参謀部に席を置いていた。陸軍参謀本部時代、課長の東條英機大佐 後の大日本帝国総理大臣 に従い、士官学校の生徒隊中隊に任命された。そこで彼は本性を露とし、士官候補生をスパイに用いて叛乱分子のクーデター計画を阻止した。いわゆる『陸軍士官学校事件』である。その後、盧溝橋事件が未然に防がれ、対支戦が行われなくなった為、北支那方面軍は結成されなかったものの、史実通りに辻は関東軍作戦参謀の職に至った。

『盧溝橋事件』の折、辻は事件収束の裏に今村均少将が関わっている事を牟田口や一木の筋から聞く所となった。今村は当時、関東軍副参謀長であり、辻の上司に当たる。そして主君と言える東條中将が、その上に位置する参謀長であつた。今村の謎の行動に疑問を抱いた辻は、東條と連絡を取り、秘匿任務として事実関係を調査し

始めた。

足取りを掴むのは簡単だった。事件前日、1機の九六式陸上攻撃機が内地から満州国へと降り立っていた。搭乗者のリストには今村の親友にして日独間同盟の反対派、山本五十六中将と“藤伊”、ただ苗字のみ書かれた一人の乗客の名があった。この二人が今村に接触したと思われた。付近の筋からの情報では、今村は二人と面談を済ませた後、物想いに耽って軍務も身につかない状態だったという。辻の調査はそこで行き止まり、東條への報告書には『海軍の謀略』との見解が記された。面目を施した辻はその成功故に、関東軍作戦参謀に任命された。

1938年3月、少佐に昇格した辻は、新京に置かれた関東軍参謀部本部内において、一冊の奇妙な報告書を受け取った。海軍の正式なレターヘッドと、責任者蘭の“藤伊一”中將の名を見て、差出人が競合相手 即ち帝国海軍だと、一目で分かった。

題名は『昭和十三年二於ケル張鼓峰ノ防衛態勢ヘノ意見具申』と言うものだった。内容は海軍纏めとする、張鼓峰地域に対するソ連赤軍の侵略行為をシミュレーションした というもので、最終的な大日本帝国朝鮮軍側死傷者が1000人超という、日露・シベリア出兵の経験からソ連赤軍を過小評価するのが常識的だった帝国陸軍側してみれば、誤りだらけの誇大妄想評価と言わしめる内容だった。一蹴するのが常識だった。そして、戦力強化も何もなされなかった。無論、帝国陸軍の強さを信じていた辻も、海軍の戯言だと思っていた。

しかし、8月に入ってから勃発した『張鼓峰事件』が、関東軍を震撼させた。海軍シミュレーションとは若干数違うが、少なくとも1000人超の死傷者が発生した。1938年に入ってから100件を超える国境間紛争の中でも、最大規模の敗北と言えた。

辻はこの事件勃発に戦慄を覚えた。敗北もそうだが、5ヶ月も前に提出された海軍側の報告書が脳裏を過り、深く刻み込まれた。書類庫へ急ぎ、本棚から湿気を帯びて草臥れた報告書を引っ張り出す

と、最後の行、責任者の項目に視線を据えた。

藤伊一中将。「ひよつとして、『盧溝橋』の一件で今村を口説いた人物ではないのか？」辻はあえて推測を口にした。海軍側報告によれば、1937年9月25日をもって海軍中将に昇格した男の名に、“藤伊一”があつた。陸軍筋では、『M4』なる海外製鹵獲中戦車を用い、伊良湖試験場で九七式中戦車『チハ』の脆弱性を指摘し、中戦車更新を1941年頃まで延期にしたという噂があつた。一方、海軍筋からは同期も居ない、謎の多い人物 としての様々な噂が絶えず届けられた。

「そうかもしれない……いや、そうだ！」辻は叫んだ。先の盧溝橋の一件に渦巻く海軍の陰謀、その関係者 若しくは張本人かもしれないと、辻は確信していた。多数の鹵獲兵器が内地で話題になっているという話を聞いたが、藤伊の姿が確認されたのも、その時期に近かつた。これまで誰もそれを結び付けて考えようとはしなかったが、辻は即座にその結論に至った。

そして1938年12月20日、辻は藤伊との会談を受け入れられた。陸軍次官であり、陸軍航空總監部航空總監を兼務する主君、東條中将の力添えを頂き、実現した事だった。8月に勃発した『張鼓峰事件』の事後報告と今後の国境線防衛に関する意見具申 という名目で帝都へと上京した辻は、東條によって実現された藤伊との会談の為、その足を運んだ。その間、やはり辻は藤伊近辺の情報を集め、人物像の構築とこれまでの経歴について、ある程度の想定を組むに至っていた。

藤伊一。階級は中将。艦隊司令官や海軍内部局の軍務に就いている という事実は一切無く、どのような職に就いているのかは誰一人として、知る由もなかった。時折、訪米経験の節を感じさせる噂も耳にしたが、やはり過去は分からなかった。

結果として辻が導き出した答えは 謎だった。無論、身分抹消

という点から、海軍特務機関の要職でもしているのではないか、という推測は思い付くが、それなら何らかの職に就いて、偽装するのが常識　というものだった。しかし、彼は職に就いていない。

向こうに行けば事実は直に分かる。辻は考えるのを止め、その胸の内に呟いた。最終的な面会許可を得ると、翌朝早くに、辻は調達した車に乗って、藤伊の元へ急いだ。

寒暖の差が激しい満州国を離れ、海軍関係者の冷たい視線を浴びながら、辻は家の中へと入った。中に入れば更に風当たりはきついだろうと辻が予想した通り、藤伊の側近である木下攻呉海軍大佐の冷たい視線を浴びる所となった。

どこであろうと、満州の真冬よりはマシだと、辻は胸の内に呟いた。満州国では、この時期は氷点下 - 30 度から - 40 度にも達する。石炭ストーブ程度では、手先を暖めるに留まる程にきつかった。

辻は木下に案内され、藤伊の書斎へと入れられた。藤伊中将

帝国海軍の謎　はソファに腰掛け、辻に席を進めた。辻は頷き、腰を下ろした。

「で、本日は如何様で。辻少佐？」

辻は頷いた。「先ず、この場をお借り致しまして、当懇談を承諾致してくれました事について、感謝の意を述べたく存じます」辻は芝居掛かった様子で言った。「聡明にして賢明なる閣下は帝国の繁栄と永遠の栄華の為、方々に活躍しておられる……とか。そんな中、私如きのような一介の陸軍将校に御時間を割いて頂けた事は、私にとっては感激の至りに」

「前置きはいいい」藤伊は言った。「貴様に割く時間は精々1時間だ。本題に入り、要点だけ話して結論を言え。でなければ時間が足りんぞ」

この唐突な言葉に、辻は冷や水を浴びせ掛けられた様な顔を浮かべた。

「しかし閣下。貴方に関して興味深い噂を幾つか聞いていますね」辻は媚諂うような笑みを浮かべた。「何でも、九七式中戦車の更新に一節、意見を述べた……と」

「だからどうした？」藤伊は動じず、淡々と答えた。

「いえ、私もこれには賛同しております。帝国軍人たる者、鋼鉄の肉体と精神を育まなければいけませんからな。機械に頼る様では、腑抜けた人間になってしまう」やがて辻の言葉に熱が帯び始めた。

「日露の先人達には、戦車や装甲車等という物は無かったです。しかし、代わりに堅強な脚をもって大地を邁進なされたのです。彼等は数寸も違う程に巨大なロシアの蛮兵達に対しても怯まず、逆に当然の事です……圧倒なされた」

「なら聞くが」藤伊は言った。「その日露戦において帝国陸軍は、二十八糎砲を持たずして旅順攻囲戦に勝てたのか？」

「当然ですな。第1回目の総攻撃の折には、確かに帝国陸軍は敗北した」辻は言った。「しかし、その時点でロシア軍には甚大な損害を被らせ、同時に軟弱な精神を持つロシア兵の士気は完全に挫かれていたのです。二十八糎砲がなくとも、第2回目では圧勝したに違いない！」

「敵の機関銃の弾を鋼鉄の肉体とやらで跳ね返せたら、私もそれを信じよう」藤伊は言った。「だが、突撃した兵の多くは、ロシア軍の十字砲火を受けて死に至った。そこで軍司令部は突撃という愚策を捨て、二十八糎砲と塹壕を用いる戦法に変えた。それが勝利の要因だ」

「閣下、日本海における艦隊決戦においては貴方の方が博識は高いでしょう」辻は顔を赤くして言った。「しかし、これは陸の事！関東軍作戦参謀職に就き、恩賜の軍刀を賜った私は全てを承知しております。閣下には是非、海の上にて帝国陸軍の勇躍をご観覧するに留めて頂きたいツ……！」

「それは、海軍の私が陸軍事には出しゃばるな　という事か？」藤伊は言った。「随分と大層な事をして悪かった……」とでも言えば

いいのかな？」藤伊は腕を組み、辻を睨み付けた。案内役の木下は憤慨して、鼻息荒かったが、藤伊はそれを制止していた。

辻は沈黙したままだった。

「何か言いたい事があるなら　はつきり言ったらどうなんだ！

」

藤伊は憤りをぶちまけた。辻は、先の『水ガソリン事件』の詐欺師本多に似ていると藤伊　伊藤は考えていた。勿体振った話し方、躍動大きい手振り、感情のコントロール……。その点を思うと、伊藤は辻がこの状況を自ら作り出したのではないかと考え始めていた。恐らく、辻は藤伊一の秘密を知りたいのだろう。しかし、藤伊は賢く、話す訳もない。ならば、感情を爆発させて理性を崩させ、その中で秘密を聞き出そうとしているのではないかと。

考え過ぎとも考えられたし、辻の事を考えればそうとも考えられた。そこもまた、辻が狙っているのだろうか？はたまた、これもまた深読みの深読み、なのかもしれない。

「もういい。最初に言った通り、本題を要点だけ話せ」伊藤は言った。

「では、お聞かせ願いたい」辻は言った。

「貴方は　何者か？」

第16話 東條の懐刀（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第17話 東條の懷刀（後）

第17話『東條の懷刀（後）』

1938年12月20日

東京府／麻布区

辻訪問2時間前。

木下攻呉海軍大佐 森下信衛は、何故伊藤が辻との面会を承諾したのか、疑問に思っていた。例え東條英機陸軍中将の権限があったとしても、それは陸の事。海軍に属し、昭和天皇や米内等政府重鎮達によつて擁護され、独自の権限を持つに等しい伊藤であれば、辻どころか東條でさえ一蹴出来た筈だ。では伊藤閣下は故意に面会を承諾したのか？今回の辻との面会は何らかの考え、何かとてつもない思惑を持った上で、承諾した事なのだろうか？

森下は問うた。「閣下、何故辻めにお会いになられるので？何か思案でも？」

「ああ……」伊藤は頷いた。「辻は野心深い男だ。その地位と名誉を上げる為なら、部下の命1つさえ犠牲に厭わんだろう」伊藤は言った。「故に価値はある。奴は野望を感付く第六感でも持ち合わせている様だ。だからこそ、常に軍の裏で暗躍してきた。陸軍内の改革には、奴の策謀と行動力が必要不可欠だと私は考えたのだ。そこで」

「まさか閣下！」

「気付いたか」伊藤は言った。「辻に全て話す事を」

「私の勘違いならばご指摘頂きたいが」森下は言った。「奴は東

條一派の急先鋒。東條英機の“懷刀”にありませんでしたか？」

辻の実態は、伊藤も聞き及んでいた。陸軍士官学校に始まり、盧溝橋、満州国、ノモンハン、マレー、シンガポール、フィリピン、ポートモレスビー、ガダルカナル……。闇の噂だけで辞書一冊分は作れる程に暗躍し続け、時には幾人もの死者を生み出してきた。バンコクで大日本帝国の命運が尽き、戦後日本に至った後も、帝国復活という壮大なる野望を胸に抱き続けた。その野心家ぶりはGHQから『第三次世界大戦さえ起こしかねない男』として、危険視される程であった。

「両手を血で真っ赤に濡らした様な男と、友好の握手をするつもりですか？」

森下の言う事を、伊藤は否定しなかった。辻が重要な役割を担えと判断した中には、これら確認出来る事柄も含まれていた。無論、この噂の他、辻の危険性を示す事例がどれだけあるのか、伊藤は見当もつかなかった。しかし、伊藤には一つの思惑があった。

「例え全てを話したにして、奴が信じたとしても、他の人間がそれを信じると思つかね？」伊藤は言った。「辻もそれ程馬鹿な男じゃない。確固たる証拠も無く、東條や陸軍上層部に話す事はないだろう。仮に証拠を掴んだとしても、東條程度に何が出来る？」

「しかし……」

「奴もいずれば『大和会』の正体を突き止めた筈だ。帝国の末路を聞けば、気も変わる」伊藤は言った。「それに、いずれ東條も総理 少なくとも政府が陸軍の要職に就く。そうなれば、嫌でも奴に話さなければならぬ時が来るんだ。全てを天皇陛下が承知し、推奨し、応援している事を伝えれば、東條も協力する他無いだろうからな」

「結果的に言えば、辻が言うも良し。私が言うも良し。辻が言い、1日でも早く陸軍内でも変革運動を東條一派が起こしてくれば、尚の事良し という訳だ」

「ですが」

「勝手に暴れて取り返しのつかない行動をされるよりは、我々の手元に置いておいた方が良いというものだよ。森下君」

「飼犬にする　という事ですか」森下は言った。「しかし飼えるでしょうかね。あんな無愛想で躰の成っていない野良犬を……」

「まあ、噛まれた時は噛まれた時さ」

伊藤は言った。「躰け直すか　きつちり処分してやればいい」

2時間後。

「貴方は　何者か？」

その前の激したやりとりとは一変、冷徹な顔を浮かべた辻は言った。深紅に染まった筈の頬は冷め、雪の様に白くなっていた。眼鏡を擦り、位置を整える。迎撃態勢にでも入った辻には、反論出来る余地は何処にも見られなかった。

「藤伊一」

それに対する伊藤の答えは短く、明確そのものだった。偽造戸籍が身分を証明しているし、伊藤は帝国海軍で精勤して忠誠を示している。「大日本帝国海軍所属。階級は中将　だ」如何に辻へ主導権を与えないか。それは難しい所だった。自分自ら正体を明かしてしまふのだから、どう足掻いたって会話の主導権を伊藤が持つ事は出来ない。

「私は貴方が盧溝橋の一件に噛んでいる事を知っている」と、辻は言った。「貴方は戸籍上、登録された御方だが、家族も家柄も同期の友人も居ない。架空の人間　造られた存在だ。海にいる貴方が関東軍参謀部や司令部に口応えする権限はない」辻は身を乗り出した。「私にもやるべき仕事はあるし、これ以上言及するつもりはないが、満州国や陸軍内で好き勝手やる事は許可出来兼ねません。」

今後も我々に関与するのなら、その正体に――

ようやく話す時機を見出した事を褒めるべきなのか、もつと迅速に行動しなかった事を激しく叱責するべきなのか、よく分からなかった。

先程まで遠回しに、そして今は唐突に追及する辻を前にして、そこで伊藤は打ち明けた。

「貴様の分析眼は本当に賞賛に値するな。そんなに知りたいのなら、話してやろう」

伊藤が一通り話し終えた後、辻の顔色は完全に悪くなっていた。憤りを覚えているのだろうか、鼻息の荒さは、野武士の如く大和を駆らせた森下に匹敵する程だった。辻によれば、“創り話なら赤子と愚か者と臆病者の前でやってくれ！”との事。捜査を続行する事を決然と告げると、辻は脅しの言葉を並び立てた。その後、彼は立ち上がって背を向け、そこを出ようとした。

頭に血が昇っている辻に負けず頑固者だった伊藤は、一冊のスクラップノートを机上に叩き付け、「これを見る！中将命令だ！――と、大声で怒鳴った。

その行動とは裏腹に、そつばを向いていた辻は直にそのスクラップノートを手にとった。その時、奴の目は憤りからではない、何らかの衝動から目が血走っていた。そんな辻の表情は　蔓延の笑みだった。

「やられた」と、伊藤は呟いた。これも奴の計算なのか？

ノートに一通り目を通した辻は、最後には頷き認めた。帝国の末路は危うい　という事に。伊藤は『大和会』に帝国陸軍内の監視役兼先導役として加入する事を提案した。

数分後、辻は同調した。

ようやく適切な行動を取った辻を褒めるか否か、伊藤にはよく分からなかった。結局、称揚する　という結論に至った。猜疑心の塊であり、何らかの謀略を動機に加入したのは見えた話だったが、味方になったのだ。今はそれで十分だった。

辻は盛んに、大和会の歴史改変計画の概要を訊いた。伊藤と森下はそれを伝えた。辻はいちいち賞賛やら何やらを芝居掛かつてやらかした為、二人とも苛立った。ついには、自分の考えた案を出し始め、計画の難点　主に帝国陸軍への負担となる事柄　を指摘し始めた。

しかし、それは伊藤が望んでいた事の一つだった。帝国存亡の中、陸軍の面で事を疎かにすれば、結局は史実と変わらない結果に終わってしまう。辻を招いたのは、計画の中での現役陸軍人の意見を聞き、細かい疑問点を確かめるのが目的だ。

「まずは『これだけ読めば戦は勝てる』　という君が後、作成に関わる本についてだ」

『これだけ読めば戦は勝てる』とは、1941年に台湾第八二部隊第二課が作成した書物だ。第二課で辻は課長をしていた。この第八二部隊は『台湾軍研究部』　大本営の『南方作戦研究部』で、南方作戦を極秘に企画立案していた。陸軍有数の参謀、有識者達によつて編成された頭脳組織であった。その第二課課長を務める辻は、同計画の指揮者に位置する。

南方作戦の展開地域　つまり東南アジアはどのような所か。何故戦わなければいけないのか。又、如何にして戦うか。軍の信条から南方地域の環境。華僑。健康管理。様々な戦闘の対応策。毒蛇、毒蛇、猛獣への対策。特殊地形での行動等、南方戦域という未踏の戦場を生き抜く上で重要とされる事柄が書かれた同書は、経験も無い緒戦では大きく活躍した。しかしやがて、敵の物量戦、ゲリラ部隊からの攻撃、補給線の崩壊によつて生じる飢え、更には南方の病気が重なり、最終的には役に立たなくなってしまう。それに、陸軍で

字を読める人間はそう多くないのだ。田舎育ちの兵達は、同書を有効に使うには至らなかった。

「更に内容を増やす必要がある」伊藤は言った。「主にはペニシリンの精製法。次に食する事が出来る植物・魚・虫の分類。人体図止血法等、適切な応急措置の方法。尿の蒸留法（排泄した尿を飲み水に変える方法）等々だな。医薬品は常に不足するから、兵士達にペニシリンを精製法を教えておけば、多くの命が救える筈だ」

伊藤が言う程、ペニシリンの精製は容易ではなかった。特に、ジヤングル等の精製に必要な器具が限られた環境下では尚の事である。素人ならば、先ず殆ど不可能に近いだろう。

「私が知る所では、イタリアでは既にペニシリンの精製に成功しているとか」辻は言った。「病院を造るかと思えば、戦車も造る。イタ公はおかしなものですな」

9年前に転移した伊藤だが、今世界におけるイタリアは過去の記憶とは似ても似つかない国だった。ムッソリーニは世界恐慌の損失を最小限に食い止め、医療水準の向上を試みた。そしてヨーロッパ、ひいては世界最高水準の医療を確立した。諸外国の中・上流階級の患者と難民を受け入れ、代わりに各国に『受入予算』なるものを要求した。『命の秤』とも言われたこのムッソリーニの発言はヨーロッパ最高水準の医療　つまりは“命”を保障する代わりに金を払えというもので、これによって各国医療難民の受け入れ数を決めるのだという。各国は世界恐慌の余波が残る中、競う様に支払った。そして同時に、ムッソリーニは定員越えの違法入国難民に対抗すべく、国土防衛の為にと軍備増強を開始。戦車・航空機・艦艇等の充実に力を注いだという。

史実では1929年、英国のアレクサンダー・フレミング医師によつて発見され、それから10年後にアメリカが開発に成功し、1943年に大量生産が開始されたペニシリンだが、既に1930年頃からイタリアはその開発に着手。1937年には精製に成功。これを機に現在、イタリアはペニシリンの実用化を進めている。因み

に、史実で日本は1944年から開発を開始。粗製ながらも精製には成功したが、終戦までに実用化出来なかった。

「日独伊三国科学・技術協定でその技術を頂けばいい」伊藤は言った。「来年には新たな凍結装置が完成する。フリーズドライ技術が確立されれば、ペニシリンの大量生産も成る筈だ」

ペニシリンは肺炎、淋疾等、多くの細菌性疾患に優れた効果を示す。人への害が少なく、病原微生物に障害を与えるこの抗生物質は当時『魔法の弾丸』と称された。1944年のノルマンディー上陸作戦時には、その効力をいかになく発揮し、多くの命を救った。

後の1941年、史実とは異なったプロセスを介し、作成された『これだけ読めば戦は勝てる』は、サバイバルブックとしての色を増した。そして帝国陸軍兵達の愛読書となった。軍人の他、当時では考えられない事だったが、民間人 東大等名門大学教授、専門家、医者 も作成に参加した。内容は漫画家によってコミック風に纏められ、絵が中心の分かり易い仕様になった。南方に生育する植物、魚、虫の中から食べられる物、食べられない物も分類して書かれ、尿や現地水源の発見等による飲料水の確保の方法も記された。また、ペニシリンの精製法も記された。流石に素人では難しかったが、中にはペニシリンの精製に成功する兵も出た。こうして同書は、自給自足の軍隊を作り上げるのに一役買った。

また同書は、辻の他者から意識を変えるきっかけともなった。同書を出した当初には、陸軍内では酷評を受けた辻だが、後々には大きく評価されていた。

また、後世の歴史においては、『大和会』に属し、時には野心的行動を見せながらも、有益な結果を残し続けた事柄も少なからず評価され、辻は帝国陸軍の『智将』 また『恥将』 の一人として挙げられる事となる。

第17話 東條の懐刀（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第18話 Last - Christmas

第18話『Last - Christmas』

1938年12月25日

アメリカ合衆国

黄昏が迫る。

ニューヨーク州ハイドパークには、一軒の広大な屋敷が聳え立っている。一部が凍結した、12月のハドソン川を望むその屋敷の主の名はルーズベルト。オランダ語で『赤いバラ』を意味する名を持つその老人は、アメリカ合衆国大統領を歴任した男、フランクリン・D・ルーズベルトその人だった。屋敷の一室、燃え滾る暖炉の前に車椅子で座し、ただ本を読み耽っていた。

1882年1月30日、フランクリンはこのルーズベルト邸で生まれた。父、ジェームズ・D・ルーズベルトはデラウェア・アンド・ハドソン鉄道の副社長であり、裕福な地主であった。何不自由なく過ごし、1905年にはアナ・エレノア・ルーズベルトと結婚。ニューヨーク州上院議員、米海軍次官、弁護士、ニューヨーク州知事と順調にキャリアを積んでいった末、1933年には第32代アメリカ合衆国大統領に就任する事となる。

しかし、ルーズベルトは代償も払った。39歳の折にポリオを患い、それ以降下半身不随となってしまう。それから12年後の1933年2月、大統領選挙当選1年後の時には、フロリダ州マイアミにて暗殺されそうになった。

だがルーズベルトはアメリカ合衆国第32代大統領に就任した。身体に重度の障害を患い、健康状態が悪いながらも彼はそんな事は無いかの様に見せ、徹底した情報統制によって国民には知られな

った。しかも4回の大統領選挙で再選を果たし、1933年3月4日から1945年4月12日まで大統領の職務を全うした。それから彼は大統領の職に就けなくなってしまう。1945年4月12日、脳卒中に倒れ、フランクリン・D・ルーズベルトは世を去った。

そのルーズベルトが今顔を上げ、目を見開いて「ファラ」と小声で囁いた。

数cmほど開いた書斎の扉を鼻で押し開け、愛犬ファラは部屋に飛び込んできた。ルーズベルトは愛犬の方にチラッと目をやった。

「入って」ファラは背を伸ばし、大きなあくびを一つ吐くと、車椅子に座るルーズベルトの足元に擦り寄ってきた。

スコティッシュ・テリアのファラは、犬好きとして知られるルーズベルトの中でも、1番のお気に入りだった。1943年にはファラ自らがファラ役で出演したドキュメンタリー短編映画『Fala』が製作、公開された。また、ルーズベルトが国中を回る際には車のみならず、列車、船舶にまで乗せ、共に旅をしたという。

その逸話から出たのだろうか、1944年。ルーズベルト4回目の大統領選挙の際、共和党はルーズベルト政権の税金の無駄遣いを主張する1つの例として、ルーズベルトの愛犬ファラの話を挙げた。アラスカ遊説の際、ルーズベルトはアリユシャン列島に置き忘れたファラをホワイトハウスに戻す為、アメリカ海軍の駆逐艦を派遣した。という内容のでっち上げ話を主張した。

それに対し、ルーズベルトは言った。

「共和党のリーダー達は、私の人格を攻撃しただけでは満足しない。いまや私の可愛い愛犬ファラをも容赦なく攻撃する様になった。ファラはとても敏感な犬である。ファラは誇り高きスコットランド出身だ。私がアリユシャン列島にあの子を1度捨てた後、多額の税金を使って駆逐艦を派遣して、取り戻したというでっち上げ話を聞いた途端、ファラのスコットランド魂に火が着きました。まるで別犬の様になってしまったのです。私への悪意に満ちた嘘なら聞き慣れています。しかし、犬への中傷に対しては遺憾を表明し、異議

を申し立てる権利があると思います」

無論、この時ルーズベルトの腹腸は煮えくりかえっていただろう。しかし、冷静な判断から生まれたこの『ファラスピーチ』は、同時に4回目の勝機に少なからず貢献した。共和党のトーマス・E・デューイも善戦したが、結局は大差を付けてルーズベルトが勝利した。

やがてファラは膝元に擦り登ると、膝の上で寝込んでしまった。

図々しくも愛苦しい顔で就寝するファラを起こすまいとして、ルーズベルトは気遣った。カール・H・マルクス著『資本論』を読み終え、床上に置かれた新渡戸稲造著『武士道』英訳版に手を伸ばした最中、ファラは耳をピンと立て、ルーズベルトの膝の上に置き上がった。

「起こしてしまったか？」

ルーズベルトを尻目に、ファラは書斎を飛び出した。こういう時、ルーズベルトは下半身を見据え、自分の運命と39歳の忌々しい象徴に腹を立てずにはいられなかった。

ファラがさつと扉の向こう側へ引つ込むと、その数分後にはすぐ戻ってきて、ルーズベルトの膝元に寄り添った。と、同時に妻エレノア・ルーズベルトが顔を見せた。

「お客様よ」

「まさか」ルーズベルトは顔を顰めた。「今日はクリスマスだぞ？」

エレノアは振り向いた。「そうは言っても、もうすぐ後ろに来てますよ」

その言葉通り、エレノアの背後には一人の男の姿があった。男の名は　コーデル・ハル。ルーズベルト政権時代、発足時の1933年から国務長官を歴任し続けている男だ。対日、対アジアの戦略においてその先頭に立った彼は、結果的に1941年大日本帝国を宣戦布告に追い込んだ交渉文書　ハル・ノートを作り、手渡した。

「素晴らしい。ぜひ、我が家でクリスマスを過ごしていつてくれ」
ルーズベルトは言った。「と、言っても、わざわざクリスマスを祝いに来たんじゃないよな？」

ハルは頷いた。

「はあ やはりそうか」ルーズベルトは溜め息を吐いた。「まあいいさ。エレノア、この客人にカクテルを振る舞いたい。手を貸してくれ」

1933年、ルーズベルトが大統領に就任した後、最初に執り行った人民の為の偉業 と言えば、1919年から始まった米国憲法修正18条、巷で言う 『禁酒法』の改正だった。そもそも1932年の大統領選挙自体も『禁酒法を廃止するか否か』が争点の一つと位置付けられた選挙だった。救済・回復・改革と続き、『二ユーデール』 “新規巻き返し” を提唱するルーズベルトだが、その中には禁酒法の改正も含まれていた。

1920年に修正第18条『禁酒法』が施行されたその時代、アメリカには狂乱の20年代 『ローリング・トゥエンティーズ』が訪れた。アルコール類の製造、販売及び輸出入が禁じられたが、アメリカ国民は禁酒法下でも酒は飲みたかった。そこでアル・カポネ等のマフィアが台頭、組織犯罪は急激に増加し、治安は悪化する一方となった。

第21条に基き改正された後には、ビール及び軽いワイン類が製造、販売を許可された。

「クリスマスと言うのは家族で過ごすものだがね」と、ルーズベルトは言いながら、1杯のマティーニをハルに手渡した。「神の何より素晴らしい所だが、人間を1つに纏める象徴として、永久にその存在を示し続けている。ある意味、全知全能や天地創造より凄い事だね。人間では、神並に人々の精神を統一する事は、至難の業だ

ろう」

「ええ。しかし英雄や天使でも同じ事では？」ハルはマティーニの入ったグラスを持ち、琥珀色の液体を淵に沿ってゆっくりと回した。それから口を付けると、彼は苦々しい表情を浮かべた。「……しかし、このマティーニは……」

「君の問いに答えるならば、それはNo。だよ」ルーズベルトは笑みを浮かべた。「英雄は特定の勢力からすれば凶悪な殺人鬼にも取れる。そして、それを言えば天使と悪魔も同様だ。天使と悪魔は表裏一体。味方に付けば天使として崇められても、敵からすれば悪魔だ。それに墮天使もいるしな。一概に言っても、やはり各文化ごとに定められた神は人々を団結させ、統一させる」

ハルは息を吸い込み、マティーニを飲み込んだ。

「では、本題に入ろうか？」

ルーズベルトは言った。

ハルの一連の報告を聞き、ルーズベルトは右隣の書棚へ車椅子を進めた。「何たる事か。ヒトラーめ。今度は何をしてくす気か？」彼は書棚の真ん中の一列に目を配り、一冊の本を引っ張り出した。アドルフ・ヒトラー著『我が闘争』英訳版だ。「1月だなハル？1月なんだな？」

「そうです」ハルは頷いた。「何度も言う様に、ヒトラーは来年の1月にも秘密裏の旅行に立つ。との事だそうです。諜報部が太鼓判を推す情報ですから、信用度は高いです」

ルーズベルトは唸った。「あの男、チェンバレンに命を救われたというのに。大層な野心家か。はたまた大層な馬鹿か。前者ならば、来年はヨーロッパで一悶着も二悶着もありそうだ」ルーズベルトは表紙を手の平で撫でた。「して、何処にいくか。君は分かるかね？」

「何処……ですか。イタリア。いや、ソ連か」

「私なら、日本に行くがね」ルーズベルトは言った。「だが、誰も行きたいとは思わないだろう。私もそうだ。しかし、東方での基盤固めやソ連に対抗し得る為には、日本は必要不可欠だ」

ルーズベルトは書棚に本を戻した「最近、いや今年中か。妙に日本人が社交界や科学界に入り込んでいる気がする」ルーズベルトは顎を擦った。「奴らは何か企んでいる。とてつもない“何か”だが、現実になるやもしれんな。もしかしたら、今年が最後かもしれない」

「何がですか？」

「クリスマスだよ」ルーズベルトは言った。「心の底から笑えて祝えるクリスマスは今年限りかもしれない。来年、ヨーロッパで戦争が開始されれば、開戦・戦争・終結と続き、そして戦後処理で終わる。しかし、それは数年 いや、数十年は掛かるだろう。そうなれば、我々は世界が戦火によって被害を被る中を、笑顔を振りまいてクリスマスを祝える気になるだろうか？」

彼は首を振った。「国民の意識は変える必要があると私は思う。

孤立主義は世界からアメリカを忘れさせ、風化させる要因と成り得る。いずれは介入しなければならぬ」ルーズベルトは言った。「備蓄し、力を持つ我々が家に籠ってばかりでどうする という話だよ」

1938年12月25日

東京府/麻布区

世はクリスマス真っ只中 であつた。かの『盧溝橋事件』が無く、大日本帝国の1938年12月25日は史実よりも比較的平穏な日として、過ぎていこうとしていた。この頃には、既にクリスマスは日本中に定着しているが、やはり12月24日の『クリスマス・イブ』以上かと言えば、そうでもないのが実情だった。

それに、1938年12月24日には、もう1つのビッグ・イベント 第74回帝国議会の召集があった。史実では軍事色濃厚だった第74回帝国議会だが、新史においては軍事色は左程、見受けられなかった。とはいえ、伊藤らには帝国増強の為の軍資金 戦時下の予算増額が必要ではあった。

「しかし、我々は何かを成し得たのでしょうか？」

山本五十六中将は言った。「未だ、各分野での研究・開発は芽を出さず。陸軍にM4戦車を見せ、海軍に零戦とF6Fを見せ、陛下と辻に未来を見せたのは良いが、結果的には変わりませんな」

「機はいずれ訪れる」伊藤は言った。「待つ。時が全てを解決してくれるとは、必ずしも限りませんが、少なくともこれら事業に関しては別 考えた方が良いでしょう」

山本は頷いた。「話は変わりますが、何故貴方はこの時代に来る事になったのですかな？」

伊藤は呆気にとられた表情を浮かべた。「本当に話が変わりましたな」伊藤は言った。「我々、『大和会』が結成された経緯は話しましたな？」

「ああ」山本は頷いた。「戦艦『大和』が日本各地を曳航され、見世物とされた」

「そして我々はそれを阻止しようとした」

伊藤は言った。「しかし、GHQはそれを許さなかった。『大和』は予定通りビキニ環礁に送られる手筈になった。当時は『大和会』

のデモ運動も知られていたので、体裁を保つ為にも、日本人の乗員は採用されず、アメリカ海軍の兵員が『大和』を動かした……」

「では如何にして『大和』に？」

「それは『酒匂』ですよ」伊藤は言った。「当時、軽巡洋艦『酒匂』は横須賀に引き留められ、ビキニ環礁に送られる為、アメリカ人に帝国海軍の乗員達が操縦指導を行った。しかし『伊藤は首を振った。』意思疎通が出来なかったか、酒匂のタービンが1基潰れました。よって、米海軍は帝国海軍の乗員がビキニ環礁まで

移動させる為、添乗する事を望んだのです」

「それで？」

「当初、帝国海軍側の責任者は否定的でした。何しろ、広島と長崎を滅ぼした兵器の実験の為、愛着のある艦を自ら動かす等、誰が言うでしょう？しかし、私は昔の伝手やら何やらで彼の説得に成功し、我々『大和会』一同が秘密裏に乗員の中に紛れ込めたんです」

「しかし、確か貴方がたはノートや設計図、それに他多数の形見等も持ち合わせていましたよね？それらはどうやって持ち込んだのですか？」

「主に貨物に紛れ込ませたんですよ」伊藤は言った。「命を捨てる身故、無意味な工作でしたがね。ある程度、大和を動かせないものか？動かせた後、何とか独自の防衛戦力を持てないものかと酒匂でのビキニ環礁までの旅路の中で考える為にも、様々な資料を持ち寄ったのですが……。結局の所、我々が出来たのは 大和との心中でした」

その後、伊藤達は酒匂から大和へと忍び込み、核実験の最後辺りまで様々な策を講じた。しかし、結局伊藤は艦橋での死を決意。一筋の閃光の後意識が飛び 今に至った。

「無意味な死だった。私は家族を捨てさせ、大和との心中を彼等に強要した」伊藤は言った。「しかし死に切れなかった。気が付けば、目の前には9年前の私だ。カレンダーを見て、戦艦『榛名』と昔の私を見て 全てを悟りましたよ。これは“天罰”なのだ」と

「天罰……」山本は唸った。「私にはとてもそうとは思えませんが。これは神がお与え下さった2度目の人生だ。それを天罰などと言えば、神の怒りを買いかねませんぞ」山本は笑って言った。

【『天罰』と取るか『使命』と取るか。はたまた『運命』と取るか。当時の私では、その様な事を理解するには至らなかった。目の前に山積る問題に手一杯だったからだ。それをあえて『天罰』と取

るか、または神に与えられた仕事 『使命』と取るか。また全ては『運命』として認識するか。いずれにせよ、問題は残ったままだった。私が出来たのは、目の前の問題を排除する事そのみだった
」

（伊藤整一口述回顧録第6部第3章『天罰』より抜粋）

第18話 Last-Christmas（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第19話 空母は正義なり

第19話『空母は力なり』

1939年4月10日

神奈川県／横須賀

鹵獲兵器 『夢幻の艦隊』の片鱗を渡す任務は、1939年に入った所で概ね終了した。だが、伊藤と『大和会』の使命は完了したとは言えなかった。

藤伊一海軍中将 伊藤整一と山本五十六海軍中将は、試製小型貨物車の1両、帝国陸軍版『ジープ』の試作品車両に搭乗し、試走試験を手伝っていた。東京・横須賀間、距離にして凡そ70キロ程度の旅路だが、比較的軽快な走りを見せていた。後々、M4『シャーマン』中戦車を基とした新型主力中戦車、M3ハーフトラックを基とした兵員半装軌車とともに海軍陸戦隊に配備される事となるこのジープは、零式小型貨物車 という名称において、帝国軍の主力軍用車両として活躍していく。

軍用車両の通行が増え、活気に満ち始めた午前11時頃に、伊藤と山本を乗せたジープは横須賀海軍工廠に到着した。海軍航空廠、横須賀鎮守府等が隣接し、第110号艦用の第6船渠拡張工事が進められる横須賀海軍工廠だが、その様子は異常だった。まるで戒厳令でも出された様に、一般市民は工廠付近の地区には姿を見せていない。その要因は 周囲は蟻の子1匹入らせないという具合に目を血走らせた憲兵隊の兵達にあった。周辺は常に監視され、不審者は逮捕・拘束された。内部でも厳正な監視対策がなされていた。国家機密に等しい第110号艦、鹵獲艦用にと急造されるドック類は、各部門ごとに分けられ、同工廠に居ながらも持ち場以外に入る事は

許されない。

岸壁に係留された艦船や孤絶されたドックの間の舗装道路を、東に数km走った。途中、湾内に溢れ返る米海軍の鹵獲艦艇群の姿が見られた。海軍戦力拡張と、鹵獲艦配備の為、大分県では『大神海軍工廠』、山口県には『仮称S海軍工廠』と、史実では1942年から1943年の間に建造予算が確立される筈の工廠群が順次建造されていたが23年掛かる事は必至で、横須賀の現状の様に鹵獲艦が溢れ、艦艇収容能力に限界をきたした海軍根拠地は少なくなかった。

やがて工廠内の奥部に到達し、1隻の艦影が二人の視界に飛び込んできた。そこには、大日本帝国海軍初の航空母艦 空母『鳳翔』があった。片方は岸壁、反対側が一面の海という、見つかり難い格好の位置にある。帝国海軍初の試みを詰めた『実験艦』だからこそだろうと、伊藤は予想した。海軍の警備兵が4名、詰めている検問所が近くにあった。

海軍陸戦隊所属の運転手が速度を緩め、道路封鎖の前で停めた。エンジンは掛かったままだった。左程往來のない道路に二人の海軍中將を乗せた、見た事も無い軍用車両が現れたので、四人の警備兵は慌てた様子で運転手の元に駆け寄り、通行許可書の提示を促した。「ご苦労様です」警備兵の一人は言った。

警備兵は運転手より通行許可書を貰うと、すぐさま前方を立ち塞ぐバリケードをどかし、深く敬礼をして、ジープを通した。

運転手がゆっくりとジープを進め、再び順調に走り始めた。工廠内の施設群や資材の山の通りを進み、ほどなく鳳翔の元へ辿り着いた。この時期、史実では1937年に予備艦に指定された鳳翔ならば、横須賀でこのように隠れている訳は無かった。しかし、伊藤が前述した様に、鳳翔は重要な試みがなされている最中であり、この待遇は当然と言えた。

海軍の高濱機関大佐に鳳翔艦内に案内されたのは、それから10分ほど過ぎた後の事だった。帝国海軍初の本格的な航空母艦として設計、開発された空母『鳳翔』は1922年に就役した。純粋な航空母艦 『正規空母』として歴史上では世界で1番始めに実戦投入された鳳翔だが、1935年には台風によって損傷を被り、就役から既に17年近く経っている事もあり、1937年をもって予備艦となった。

老齡艦 とはいえ、経済的・技術的に貧困な大日本帝国としては、鳳翔は廃棄するには勿体なかった。予備艦になった鳳翔はそれから3年後の1940年、緊迫する対米事情から早くも現役艦に舞い戻る事となった。しかし老朽化が進み、常用艦載機数が15機と艦載量の乏しい鳳翔は、必ずしも太平洋戦争で輝かしい戦歴を掴むには至らなかった。それらの問題を解決すべく、多くの予備艦同様、近代改修を受けはしたが、その成果は外洋航海に支障をきたす、と散々なものだった。結局、1942年のミッドウェー海戦後、内地の練習空母として運用される事となった。

伊藤はそんな空母『鳳翔』に輝かしい戦歴を与えようと考えていた。他ならぬ鹵獲艦 正規空母『サラトガ』、軽空母『インディペンデンス』の未来の片鱗を授け、夢を現実にする為に無辜の空母『鳳翔』に反映させた。その未来の片鱗とは 油圧式カタパルトである。

大日本帝国海軍は航空母艦に積極的だったが、カタパルトが完成するには至らなかった。当時、帝国海軍は火薬式カタパルトを開発していた。火薬式はその名の通り火薬を爆発させ、その圧力によってピストンを動かし、瞬発的な引張力によってカタパルト上の滑車台を引っ張り、滑車台上の航空機を射出するものだった。火薬式は基本的には大砲の発射と同じ原理であり、射出時には強い圧力が掛かり、戦艦・巡洋艦に載せる様な水上機位頑強でなければならな

った。しかも構造自体が大きな爆発力を利用したものである故、常に航空機を飛ばし続ける空母での運用には危険過ぎた。

一方、米英海軍は火薬式ではなく、油圧式カタパルトを開発・運用した。油圧式は、引張力は火薬式より強く、しかもその力は最初漸進的に大きくなり、最大の引張力が持続するという、大型機に適した特性を持っていた。

米英海軍の運用するカタパルトには、実に精巧な技術が取り入れられていた。構造は、圧搾空気でオイルをシリンダーに高圧の作動油として送り込み、滑車やケーブルでその動きを拡大し、甲板の溝にはみ込まれたシャトルを引っ張る。そしてシャトルのフックにワイヤーを引っかけて、航空機の胴体・主翼付け根付近のフックにも引っかける。そして、シャトルが急停止するとワイヤーが外れる仕組みだった。この恩恵を受けた米英商船改造型護衛空母は、鳳翔では運用するのも不可能であろう大型艦載戦闘機や攻撃機の発艦をこなしていた。

無論、日本がカタパルトの開発を怠っていた訳ではない。伊・四〇〇型潜水艦に配備される筈だった特殊攻撃機『晴嵐』を射出べく開発された四式一号10型は、圧搾空気式カタパルトだった。これは魚雷発射管より発展、開発されたカタパルトで、当初の火薬式を考えると精巧な物だった。しかし、連続射出は不可能であり、1度射出すれば再射出に必要な空気の充填には、約4分の時間が掛かってしまった。出力不足は目に見えていた。

レキシントン級航空母艦第2番艦『サラトガ』搭載のH-4型。インディペンデンス級航空母艦第1番艦『インディペンデンス』搭載のH-4C型。この2種類の油圧式カタパルトを基に、海軍航空廠は大規模な計画を組み、油圧式カタパルトの早期開発に取り組んだ。予算は大幅に増額され、伊藤らの工業力増強により、カタパルト用の部品類の開発も順調に進んだ。

空母『鳳翔』艦内にて目に付く特徴を、高濱機関大佐は指し示した。艦内は博物館並の老齡振りを見せた。艦壁には錆が多く、冷涼で湿潤な環境が広がっていた。飛行甲板上に出ると、そこには1機の零式艦上戦闘機が駐機されていた。

伊藤は6日前　4月4日にもその機体を見ていた。その時は横須賀にはおらず、岐阜県各務原の陸軍飛行場で、『十二試艦上戦闘機』という名称の試作戦闘機として、試験飛行に着手としていた。いわゆる零戦の試作品に当る十二試艦上戦闘機は、伊藤ら『大和会』からもたらされた20機以上の二一型零戦、五二型零戦、そして1機の金星エンジン搭載型零戦　五四型零戦を基に設計自体が見直された機となり、生存性の向上等が図られている。史実では4月1日に飛ぶ事となる十二試艦戦だが、それより3日ほど遅れた4月4日、無事に岐阜の空に舞い上がった。

時はそれから6日後、十二試艦戦は鳳翔に運び込まれた。当初はダミー機が飛ぶ事になっていたが、パイロットの一人が志願したのと、海軍上層部のお達しがあつての今日だった。

故に、伊藤・山本の他、別の海軍將軍らも乗艦していた。

二人はそれら関係者達と軽い挨拶を交わした後、試験の観覧に移った。目的が達成されれば、帝国海軍は海上護衛用にと、商船改造した護衛空母を“戦力化”出来る。また、これまで搭載されなかった正規空母にも搭載され、航空戦力に対する評価・関心も激変するだろう。疑念を抱き、空母不要を唱える大艦巨砲主義者達の口も塞がるだろう。

十二試艦戦は唸りを上げ、エンジンを噴かし始めた。心臓を担うのは、三菱製『瑞星』エンジンでもなければ、中島製『栄』エンジンでもなく、試製『金星』五〇型エンジンだった。史実では1940年に試作される五〇型は1200馬力を発揮する。金星は力強い咆哮を上げた。

「今回の零戦は一味違う。周到な計画に忖えてくれた設計師と技術陣の努力の賜物だ」伊藤はそう評し、山本に告げた。その刹那、

十二試艦戦は海軍航空技術廠の努力の結晶たる、試製カタパルトで鳳翔の短飛行甲板を勢い良く飛び出した。エセックス級初期型と軽空母インディペンデンス級に付けられたH-4C型油圧式カタパルトを基に造られたそれは、圧巻の性能を見せ付けた。

空を舞う十二試艦戦。その姿を見た者は呆気に取られ、言葉を発する事は無かった。拍手喝采が挙がったのは、それから数分ほど時が経ってからだった。伊藤は思わず敬礼をして、十二試艦戦を見送っていたと、当時そこに居た関係者達は語る。

空母『鳳翔』艦上、そこから見える第110号艦用の第6船渠だが、それは戦艦『信濃』のものでなければ、空母『信濃』のものでもなかった。それは新たな設計の下、開発が進められた『改大鳳型航空母艦』30,000t級空母用にと、改装されていたものだった。伊藤は鳳翔飛行甲板上からその第6船渠をみはるかす。自らに課せられた“使命”を更に進めようと勇み立ち、皇国日本に相対する仮想敵と対決する臍を固めながら、伊藤は山本にわざわざ同行して来てくれた礼を言った。「閣下、有難うございます。これまでの御協力、本当に心から感謝しております」

「何ですか、改まって」山本は驚きながら返答を返した。「その様な事、言わずとも結構ですよ」山本は言った。「しかしあれですな。これで新造空母や正規空母、改造空母と無限の可能性が見えてきましたな。これならば、数を減らす大艦巨砲主義者達も押し黙る事でしょう」

伊藤は頷いた。「ですが、これで全て　という訳ではありませんせん」

「しかし、『信濃』は空母として造るべきでは？」山本は第6船渠を見据え、言った。「戦艦としての建造を中断したにせよ、純粋な56万t級空母というのは凄いと思えますがね。艦載機数は元より、『大和』に変わる帝国海軍の象徴と成り得るでしょうに……」

伊藤はかぶりを振った。「閣下、『大和』の敗因もそれなのです」
伊藤は言った。「大き過ぎたが故、高価過ぎたが故に使い所を間違えた。我々の主戦場となる太平洋は、あまりにも広過ぎ、大和は同等の敵を見つけようにも、見つけるに至らなかった」

「機動戦力は各個分散し、太平洋をカバーせよ　というのですな？」山本は言った。「成程、確かにその方が効率的ではありません。しかし、アメリカの底力は侮っていませんか」

「無論、見定めてはいます」伊藤は言った。「彼等は主要海戦と海上護衛双方に十分対応し、太平洋上全てをカバー出来る力を持っています。しかし、単艦を重視した戦闘では艦隊連動に支障をきたし、効率的に戦力を配置、展開は出来ません。それでは連携に勝る米海軍には勝てない」

1941年、戦争に突入して以降、伊藤は前線での帝国海軍がどのような苦しみを味わったのかをこの目で見た事は無かった。最期の任務　沖縄特攻の『菊水作戦』も頓挫し、やはり戦闘を肌で感じ取るには至らなかった。しかし、敗因は薄々気付いていた。

「恐らく、空母を何隻造ろうとも米国には全面勝利は出来ずまい」伊藤は言った。「しかし、やはり閣下の申した“早期講和”においては、外洋打撃能力に特化した空母は必要でしょう。5万t空母1隻ならば100余機の艦載機を一戦場に置く事は出来る。しかし、2　3隻ならば、それ以上に航空機を配備出来るでしょう。我々は泥水を啜る気に事に当らなければならぬ。この際、体裁等という世迷言は捨て、合理的に進めるべきでしょう」

しかしそれで本当に勝てるのか、伊藤は疑問に思っていた。それよりも潜水艦を造り、徹底的なゲリラ戦によって敵の戦力を削ぐべきではないかと。少なくとも、それを行ったドイツは敗北を喫し、アメリカは勝利を勝ち取った。結局は国力の差なのだという結論になるのは、伊藤も承知の事だった。

だが、後に空母の大量建造は功を奏す。

油圧式カタパルト、新型航空機、レーダー機器、対空砲、徹底したダメージコントロール技術、VT信管。それらの技術と錬度の高い兵士達の活躍により、帝国海軍機動部隊は史実以上の戦果を上げる事となった。それは紛れも無い、新鋭空母の大量投入にあり、後方をカバーする海上護衛空母群の戦果の賜物だった。

後にある帝国海軍大將は語った。

【空母は正義なり】と。

第19話 空母は正義なり（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第20話 ノモンハン事件（前）

第20話『ノモンハン事件（前）』

1939年5月27日

満州国／ハイラル

朝食後、帝国陸軍の篠原弘道准尉は6年間に及ぶ飛行訓練経験の結果と可能性を問うべく、満蒙国境区域上空へと上がろうとしていた。この篠原准尉は、史実においては卓越した飛行技術と運を持つてしてソ連空軍に立ち向かった。ならば史実通り58機もの敵機を撃墜し、トップ・エースとなるに違いない。但し、8月27日には武運が尽きる所も付いてくるのだが。と考えた伊藤は、陸海軍上層部、関東軍上層部に根回しをし、彼を帝国海軍特別第零航空隊通称『特零空』に招き入れる事を画策、実行に移した。

この“特零空”は、9年後の鹵獲航空機『零戦』『F4F』『F6F』を基盤とする特別実験航空隊で、本来は海軍が数十機の零戦・米軍機を実用化すべく、パイロットを育成する為の仮設組織だった。後にこの組織は発展。最新鋭戦闘機、一式陸攻、超重戦略爆撃機を加えた陸海軍統合航空組織『統合戦略航空団』として、幾多もの戦績を残していく事となる。

やがて、篠原の戦友 第十一戦隊の名パイロットや、第一、第二十四戦隊に所属パイロット達が、そこに加わった。第一、十一、二十四戦隊には、後のエースパイロット14名程が集中して存在する。この頃には、九七式戦闘機にも防弾設備が施されていたので、その数は更に増えるだろうと伊藤は予測していた。陸軍がいつもの『精神論』調子に操縦者の生存性を機体の有無ではなく、操縦者の技量によって決まる。と言わずに、海軍の話に耳を傾けてくれた

事は、伊藤にとっては嬉しい兆候だった。聞く耳を持った人間がいるという事だし、ささやかな数かもしれないが、兵を1人でも多く救う一助になる。『夢幻の艦隊』や鹵獲兵器だけを供与していただけでは、帝国陸海軍の鋼鉄よりもダイヤモンドよりも堅い意志を収攬する事は出来なかっただろう。

ハイラル飛行場の管理棟前の奥まった静かな一角にて、辻少佐はパイロット一同を集めていた。先日、新京の関東軍参謀司令部本部を抜け出した辻は、帝国陸軍の試製半装甲兵車 帝国陸軍版『M3ハーフトラック』に乗り付けて、ハイラルに赴いた。これは帝国陸軍中央部が関東軍に配備させたもので、未だ生産数は微少だった。

辻は未熟な若造を相手にする様に、懇切丁寧に話をした。

「諸君！我々は帝国陸軍の勇士であり、帝国海軍の同志である」辻は特零空の隊員達に視線を向けながら言った。「日露戦争の折、死に逝き去った先人達の功績に報いよ！我々は、彼等と同等の位置、歴史上の境遇に今、そしてこれから立ち会う事になった。帝国の正義の鉄槌に改心を見せず、愚かにも不当な越境行為を侵した露助共を罰せよ！我等の前に跪き、許しを乞い、帝国の正当なる権利を認めさせるのだ」徐々に熱を帯び、拳を振り上げようとした一同を、辻は手を挙げて抑えた。「しかし、我々は『報復』という名の愚行は犯さぬ。それは陛下の大御心を否定する 人間として最悪の過ちであり、蛮行である！それを肝に銘じ、事に当って欲しい。話は以上だ」

「しかし、かの作戦参謀殿は噂に聞いた人物とは違うな」

飛行場を歩く中、篠原准尉は花田富男航空兵曹長に言った。この篠原が話す花田は、ノモンハン事件において最も際立った功績を挙げたパイロットの1人だった。去年9月、航空兵曹長に昇級したばかりである。それ以前から、花田はノモンハン事件時の最精鋭

飛行第十一戦隊に配属されていた。史実では、篠原に及ばずとも累計25機の敵機を撃墜したエース・パイロットとなる男だ。

「噂はあてにならない　という事ですよ」花田は言った。「私が見た所、辻少佐殿は優れた教養をお持ちの方だと思われます」

「まあな。大部隊を越境させた何だと言って浮き足立つ関東軍の将校共より、御上に忠実なだけ別格と見ていいだろう」篠原は言った。「しかし臭うな」

「私ですか？」

「いやいや、そういう意味じゃないんだ」篠原は自身の飛行服を嗅ぐ花田に言った。「辻という男にこの『特零隊』だよ。海軍の鹵獲機だか新型機だか分からん『F6F』　と言ったか？あれ程の性能の機を何故俺達なんかにやるんだ？海軍航空隊に属していても俺らは実戦経験も無い一介の『陸軍航空兵』何だぜ？なんで高尚な御海軍様が“馬糞”や“獣”如きにこんな最高の戦闘機をくれるんだ？」

その点は、花田も疑問に思っていた。陸海軍の不仲は今日1939年5月20日になっても変わってはいない。ただ、ある程度の協調性や合理的行動に価値を見出し始めた　という程度だ。親友でもなければ、辻の言う様な『同志』とも言い難い関係だった。

「深く考えなせずに、准尉」花田は言った。「目の前の敵に集中して下さい」と、花田は言い、ハイラルの空を指差した。

篠原は静かに頷き、F6F『ヘルキャット』に掛けられたラッタールを駆け上った。

話は1週間程前、5月20日に遡る。

満州国首都、新京に置かれた関東軍参謀本部内の会議室にて、事は始まった。関東軍参謀長、磯谷中将を始めとする数名の参謀部関係者が一堂に集まり、作戦参謀を務める辻が、一連の満蒙国境間紛争　『ノモンハン事件』の経緯を語った。

「小松原中将隷下、第二十三師団は不法越境を図った外蒙古兵700名の対処の為、1個師団搜索隊、2個歩兵中隊、及び満州国軍騎兵を送り込みましたが、敵勢力とは遭遇せず。これら部隊が撤退の折、外蒙古部隊はハルハ河を越え、陣地の構築と侵攻用意に入ったと見られます」

「では、一早く反撃の用意を整えねばならん！」

そう言ったのは、関東軍作戦主任参謀の服部卓四郎中佐だ。今年3月、中佐に昇級し、作戦主任参謀となったばかりの服部は、史実では辻とともに反撃作戦の積極拡大を主張した人物である。

「しかし閣下。今回の紛争は陸軍中央部では『不拡大』の方針で一貫して決まったと聞きます。それを反対し、行動を起こしたとならば、反旗を翻したに等しい事かと」

「内地は内地、外地は外地だ」

服部は高らかに言った。「既に100件を超える越境行為を我々関東軍は見過ごしてきている。去年の『張湖峰事件』もある。ここで露助に灸を据えやらねば更なる蛮行を許す事となるのだぞ」

1年前、約1000名の死傷者を出した『張鼓峰事件』はまだ記憶に新しかった。藤伊一中将監修、海軍側から提示されたシミュレーション報告書とは名ばかりの預言書。の正当性が証明されて以来、服部の様な人間達は歯痒い感覚を常に抱いていた。海軍が想定し、自分達が対処し得なかった事に腹を立てた。そこで、この敗北を塗り替える圧勝を欲していたのだ。

「これは陛下の望まれる事ですぞ。どうか冷静に」

「丸くなったな辻よ」服部は辻を見て言った。「此处で戦果を挙げれば、陛下とて我々の行った対応策の正当性に気付いてくれよう。露助共も満蒙国境に二度と立ち入らぬ事になろう。そうなれば、帝国と満州国を陥れようとする敵は根絶やしとなり、両国は永久の繁栄を約束される」

「では、閣下は陛下の大御心を否定なさるのですね？」辻は問うた。

「いや」

「ならば口を挟まずお聞き下さい。軍中央部も、内閣も、そして陛下も……事件の『不拡大』と『防衛』に徹する様、告げております。これを反対するものは、帝国への叛逆の意志を持つ者に他なりません。しかし閣下は、そんな御方ではない」

辻は服部の顔を見据え、話を続けた。「あくまでも交戦を望まれぬなら、それも潔し。しかし、その中において陛下に忠誠を誓い続けるのであれば 此处で潔く腹を切るか、裏切り者として退室なされるがいい」辻は高らかに告げた。「しかし本職は陛下の叡慮に賛同し、事件の收拾に励む覚悟です。閣下にもぜひ、御賛同頂きたい」

そんな辻の言葉は “魔法” を帯びていた。

ハイラルの一件もそうだが、誰もが辻に正当性と特別な権利があると錯覚するが、辻は『参謀』であり、実質的な指揮権は有していない。無論、この場 この会議においても、それは変わらない。しかし彼の言葉には不思議な魔力があった。よって多くの者は、実際には権利を有さずとも賛同し、従ったのである。

その点に関しては、伊藤も知っていた。

翌日21日

「遂に『ノモンハン事件』が始まりましたな」

場所は変わり東京府。伊藤に対し、山本は言った。

「しかし驚きました。かの辻を仲間に引き入れたとは……」

「まあ私も最初は躊躇しましたがね」伊藤は言った。「しかし結果は良好だった様です。辻は今回の事件に際し、海軍側の保有する鹵獲輸送艦を利用し、M4・M3戦車、M3ハーフトラック、M7自走砲を満州国に送り、尚且つ零戦部隊や鹵獲機部隊をハイラルに送る様にと要請してきたのです」

「それが良い事なのですか？」山本は首を傾げて言った。「辻めは今度こそ、ノモンハンで圧勝を狙っているのではありませんか？」伊藤はかぶりを振った。「辻は交渉の内に条件を付けてきました。『防衛』に徹し、事件の『不拡大化』を進めるから　とね」

「奴が？本当ですか？」

「信じていない様ですね？」

「無論、信じられますか」山本はキツパリと告げた。「あれは羊の皮を被った狼ですぞ。圧倒的な未来兵器の力を持って、侵略を画策しているに違いない！」

実際、当初も伊藤はそう考えていた。しかし、それは間違った考えだと結論付けていた。「ならば既に侵略を開始している頃合いかと」伊藤は言った。「だが、関東軍の筋から聞いた噂によると、辻は参謀達の前に『不拡大化』方針を熱弁し、戦線拡大派を押し黙らせたとか」

「所詮、噂に過ぎません。真偽は分からない」

「ならば辻の噂も該当する」伊藤は言った。「対米戦でも対ソ戦でも、対抗しうる国産の戦車を造るとならば、鹵獲戦車は重要な資料になる。だが、あえて辻はそれを温存しなかった」伊藤は更に続けた。「開発を進めるならば、より多くのサンプルが入る。後に失われるであろう数百万人の命を考えれば、サンプルは一つでも多く丁寧に取っておかなければならない。しかし、統計や憶測といった、無機質で冷徹な結果論よりも、眼前に生まれる1万以上の命の喪失を阻止するのを、辻は選んだのです」

「実績作りという事もあります。一概に奴を『英雄』とはいえない」山本は言った。「数百万の人命を救う事は、後の歴史では奉られる行為だろう。しかし、貴方の言う“後者”の説を選べば、今を生きる者達に支持され、奴はより高い地位に着く事が出来るのではないのでしょうか？」

伊藤は頷いた。「確かに。しかし奴は未来よりも今を見据えた、昔気質の男かもしれない　と、私は雰囲気で見ただけです」伊藤は

言った。「雰囲気など最悪の判断材料ですがね。やはり閣下の言う通り、実績作りの為の策かもしれない」

「ならば 貴方は相当に人を見る目が無いと見える」

山本は言った。「だが、そんな方があの盧溝橋の一件を防げた筈が無い」更に山本は言った。「奴から目を離さずに。しっかりと手綱は握ったままにしておいて下さい。奴は生きが良過ぎる。いかなるでさえ、何度でも生き返る不死身の男ですからな」

「ご忠告、感謝します」伊藤はそう言い、笑みを浮かべて頷いた。

第20話 ノモンハン事件（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第21話 ノモンハン事件（中）

第21話『ノモンハン事件（中）』

1939年5月27日

満蒙国境上空、高度4000mの高みを駆る戦闘機編隊の正体は、帝国海軍特別第零航空隊 通称『特零空』の面々だった。その日の朝、特零司令有馬正文海軍大佐と乱入した辻政信陸軍少佐の訓示を受け、篠原准尉を始めとする特零空の一同は空に上がった。

特零空はとにかく機種が多種多様。様々な鹵獲機から、帝国陸海軍の新型機。旧式機によって揃えられた寄せ集めの様な航空部隊だった。主力を担うのは 零式艦上戦闘機二一型。防弾設備乏しい危険且つ老朽化著しい機体だった為、これは新規育成の搭乗員達に配備された。次に五二型、そしてF4F。最後に、精鋭パイロット達には2000馬力の怪物、F6F『ヘルキャット』が進呈された。但し、F6Fは極端に数が少ない。『ノモンハン事件』当時の優良稼働機数は5機であり、これが篠原や坂井三郎二等航空兵曹といった、後のエース達に優先的に配備される事となった。更に後期には、特零空は『統合戦略航空団』と改名され、特別精鋭航空隊が編成されると、噴進戦闘機『橘花』等がエースパイロット達に優先的に配備される様になった。

Me262を基に開発された橘花だが、1939年5月の時点では既に中島飛行機の開発の元、機体自体は完成していた。エンジンとなる『ネ20』はまだだが、今年1月に行われた『ヒトラーとの会談』の中で、その複製設計図がヒトラーによってドイツに持ち帰られている。この会談は海軍主導の秘密会談で、『日独伊三国同盟』に代わる『日独伊三国科学・技術協定』が結ばれていた。これによ

り、最初にドイツ側に与えられたネ20の設計図を基に、BMW社は史実よりも格段に早く『BMW003』ターボジェットエンジンの開発・実用化に漕ぎ着けた。また、メッサーシュミット社はMe262の早期開発を総統命令として告げられ、史実より2 3年は速く生産を開始出来た。

ネ20設計図到来の余波はそれに終わらなかった。帝国海軍側はBMW003を基とした『革新的ジェット航空機』の構想を打ち立てる様、ヒトラーに進言し、彼はそれに従った。『新生ジェット機空軍構想』なる一大構想を空軍に下命したのである。

『新生ジェット機空軍構想』とは、ドイツ空軍の全航空機を1960年までにジェット航空機に代替し、新世代の先駆けになるという構想だった。これを実現する為、ヒトラーとゲーリング主導の下、主要航空機メーカー、一般設計技師達に『革新的ジェット航空機』の設計・開発案を出させ、採用されれば空軍によって全面的にバックアップする事を約束した。

構想において具体的に採用されたのは3機種 Me262・Ho229・Ta183だった。1番に選ばれたMe262は、メッサーシュミット社製の機体で、噴戦『橘花』の元となった戦闘機でもあった。ナチスと繋がり深いメッサーシュミット社が空軍に優遇された事もあるし、今回の採用に『橘花』設計技師であり『大和会』の一員たる山崎功治が関わっていた事もあった。『ネ20』設計図を与える際、帝国海軍側は『革新的ジェット航空機』誕生の際には、一つ残らず日本側に資料・技術者・多少の原材料を送る様、条件として付け加え、更にその中で『橘花』設計技師の助言を反映する様にも告げていた。『橘花』を息子の様に思う山崎にしてみれば、親に当たるMe262の採用助言は当然だったと言える。

2番目に選ばれたのは、Ho229だった。1943年、ドイツホルテン兄弟によって提案されたHo229は、ジェットエンジン

を動力とする全翼機であった。それまでに、ホルテン兄弟は1933年には全翼型グライダー、H-?を飛ばしていたし、その後も無尾翼機で先駆け的位置に居たアレクサンダー・M・リピツシュ博士ロケット迎撃戦闘機Me163やデルタ翼機の開発者でもあるの薫陶を受け、1936年 1938年の間にH-?、?、?、?を誕生させていた。

Ho229の特出すべき点は、高度なステルス性だった。また、アルミニウムといった戦略物資を多用しない様にと配慮されており、1tの爆弾搭載量を誇った。

最後に、採用が決まったのが Ta183である。フォッケウルフ社製のTa183は、同社の設計部門責任者クルト・タンク博士の設計の下、完成した。

同機開発のきっかけは1939年8月27日。ハインケル社が世界初のターボジェット推進機He178が初飛行に成功した所から始まる。その時点で、ヒトラーはジェット推進の『革命的航空機構想』を各航空機メーカーに伝えていた。ハインケル社はこれをもって1点リードしたと意気込み、これにフォッケウルフ社は危機感を抱いていた。実際の所、ナチスからのハインケル社への風当りは冷たく、戦闘機として一応は採用される事となった同機の発展機『He280』も、試作のみに留まった。フォッケウルフ社はタンクに新世代のジェット戦闘機の設計を促した。こうして完成したのがTa183である。

Ta183は40度の後退翼を持ち、機首に空気取り入れ口があり、ジェットエンジンを胴体後部に収納する新世代の革新的ジェット機であった。同機の機体設計図に感銘を受けた山崎技師は、帝国海軍初の『艦載ジェット戦闘機』の主力候補に挙げ、後に開発が開始される事となる。

話は戻り、満蒙国境上空高度4000m。帝国海軍特別第零航空

隊に所属する前任搭乗員の篠原准尉 後の『東洋のリヒトホーフエン』 と相棒を組む花田富男航空兵曹長は、残りの僚機2機とシュヴァルム編隊を組み、ソ連空軍に立ち向かうとしていた。篠原が駆るはF6F『ヘルキャット』で、花田に与えられた機体はF4F『ワイルドキャット』艦上戦闘機だった。

グラマン社の『猫一族』の嚆矢、太平洋戦争前期には零戦に屠られた苦い経験を持つF4Fだが、『グラマン鉄工所製』の渾名に由来するその頑丈な機体は、驚異的な防弾性を発揮した。零戦の主要兵装たる7.7mm機銃は何の意味も成さず、また強力な破壊力を誇る20mm機銃も命中精度の低さと装弾数の少なさが足を引っ張った。ジョン・S・サッチの『サッチウィープ』戦法や、F6Fの実戦配備が進むにつれ、その生存率は更に向上していった。

速度性能・上昇性能・機動性能では零戦に劣っていたF4Fだが、今は1939年である。鹵獲機たるF4Fに対し、宿敵の零戦は友軍機であり、ノモンハン上空を飛ぶ敵機はI-153、I-16であつた。I-153は最高速度366kmを誇る『究極の複葉戦闘機』である。一方のI-16は同じ土俵となる単葉戦闘機だが、ノモンハン事件時に投入された新型でも最高速度は464kmと、500kmを超え、その他多くの性能面でF4FはI-16に勝っていた。

特に大きかったのは、F4F標準搭載の50口径12.7mm機銃である。4門搭載型（各銃装弾数計450発）と6門型（各銃装弾数計240発）があるが、これは九七式戦闘機の7.7mm機銃2門の火力を遥かに上回る。一方のI-16は7.62mm機銃4門に加え、強靱な防弾板を積んでいた。これで7.7mm機銃を防げたかと言うとそうでもないが、九七式を駆るパイロットは火力の低さを嘆いていた。

これらF4Fの大火力と防御性能から、花田は『要塞花田』の渾名を冠する事となる。

戦闘開始は午前11時ちょうど、ソ連空軍第22戦闘機連隊が姿を見せ、特零空第一、第二中隊の戦闘機編隊は速度を上げた。敵機の数は一-16戦闘機32機、一-153戦闘機12機の計44機に対する特零空はF6F艦上戦闘機3機、F4F艦上戦闘機6機、F4U艦上戦闘機3機、零式艦上戦闘機10機、九七式戦闘機2機の計26機。数では半数以上も敵側に劣るかもしれないが、パイロットの技量と増強された防弾性能、そして機体の潜在能力を考慮すれば18機の差などハンデにもならなかった。空戦前、特零空第一中隊飛行長の淵田美津雄少佐『トラトラトラ』で知られる真珠湾攻撃の立役者は、実戦では初めての指示を出した。『撃ち尽くせ!!!』

篠原と花田は僚機とともにシュヴァルム編隊を組み、特零空2個中隊は唸りを上げて敵編隊に襲い掛かった。1941年6月に大本帝国陸軍に伝えられるロット戦法、そしてシュヴァルム戦法だが、既にこの時点で『大和会』協力の下、特零空は確立していた。

篠原も所属する第一中隊が先に応射を浴びた。だが、敵の弾はまばらに飛んで来るだけだった。篠原の搭乗するF6F『ヘルキャット』戦闘機には、命中精度の比較的高い照準器が備え付けられており、すぐに目標の中心を撃ち抜く事が出来た。一-153『究極の複葉戦闘機』はたちまち炎に包まれ、黒焦げになって満蒙国境地域の草原に墜落した。

その頃、ハルハ河を越えた第11戦車旅団所属の機械化狙撃大隊は、BA-6中装甲車を次々とあしらっていく敵の新型戦車の前に酷く苦戦していた。帝国陸軍新型戦車と勘違いするそれが、M4『シャーマン』中戦車である事はソ連軍は知る由も無かった。BA-6は装甲車ながら、46口径45mm対戦車砲という強力な砲を搭載した車両だった。しかし、7576.2mm戦車砲を搭載するM4に遠く及ぶ筈も無い。M3『スチュワート』軽戦車にしても同じ事だった。背後には強力な75mm、105mm榴弾砲陣地が築

かれ、進撃を望むソ連・モンゴル軍部隊を阻んだ。

また、前線の歩兵には火炎瓶の他、試製の携行式対戦車砲が与えられた。

無名のI-153パイロットが頭を仰け反らせ、血の様に真っ赤な炎に焼き尽くされながら堕ちて行く時、篠原准尉は実戦初の戦果に大いに喜んでいた。続いてやってきたI-153も12・7mm機銃6門の前に沈黙し、撃墜された。

しかし特零空の一員に、敵機撃墜を喜ぶ暇は与えられなかった。I-16戦闘機2機が急降下攻撃で同隊の九七式戦闘機1機を撃墜、飛び去ろうとしていた。

篠原は僚機を連れ、敵機の追撃・殲滅に打って出た。同部隊にはF4Fを駆る花田航空兵曹長。零式艦上戦闘機二一型を駆る無名のパイロット。そして、もう1機のF6Fと、それを駆る坂井三郎が居た。

『天空のサムライ』 後の帝国海軍のエース・パイロットになる男、坂井三郎はこの時、二等航空兵曹だった。編隊長にして准尉の篠原が上位に当たる。篠原は坂井を連れ、I-16の追撃を行った。I-16戦闘機2機に到達した後、篠原と坂井はドッグファイトに移った。当然ながら、F6FはI-16よりも旋回性・速度性に勝る。また、12・7mm機銃は直進性に優れていた。I-16は12・7mm弾の鋼鉄の洗礼を浴びせ掛けられ、成す術も無く撃墜されるしかなかった。

5月27日付の当空戦における両陣営の最終的な戦闘機喪失数は、日本側4機に対し、ソ連側32機という圧倒的な数値だった。（ただ、ノモンハンの地形の問題や、ガン・カメラの普及も進んでいなかったという結果を踏まえれば、その数値は定かではなかった）実

にソ連空軍の戦闘機喪失数は、日本側の8倍に達する。当空戦の結果、第22戦闘機連隊は事実上壊滅した。

相手がI-153、I-16だったから　　というのは言うまでも無かったが、特零空側も零戦二一型2機と九七式戦闘機2機を失った。パイロットの技量も左右されるかもしれないが、やはり防弾性の問題は否めなかった。事実、零戦や九七式戦闘機に搭載されていた7.7mm機銃が、I-16には中々効き難いという報告が、空戦終了後に帰還したパイロット達から告げられた。

こうして初戦を勝利で飾った帝国海軍特別第零航空隊だが、その前には40名を超えるソ連本国の精鋭パイロット達が迫っていた。

それは実に3日後、5月30日の事であった。

第21話 ノモンハン事件（中）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第22話 ノモンハン事件（後）

第22話『ノモンハン事件（後）』

1939年5月30日

5分ある。パニックを起こしてもいいし、この時間を有効に使ってもいい。

満蒙国境上空、ソ連空軍は3日前の航空撃滅戦において、壊滅を喫した第22戦闘機連隊と国境を巡る陸戦の経過を受け、大規模な戦闘機編隊を満蒙国境上空に送り込んだ。午前8時頃に哨戒を行っていた九七式司令部偵察機が1機撃墜され、ハイラル飛行場に連絡が届けられた。そして急遽、飛行場に配備されていた帝国海軍特別第零航空隊 通称『特零空』が迎撃に向かった。

前任搭乗員、篠原准尉が迎撃の任に着いたのは、いつも通りに当直の国境防空任務を遂行しようとした直後の事だった。F6F『ヘルキャット』に滑り込む様に乗り込んだちょうどその時、飛行場の向かい側で慌しい動きがあった。管制塔や本部舎から警報が鳴り響き、数人の男達が姿を見せたのだ。特零空副長の斉藤正久海軍中佐が先頭に立ち、フライトスーツの男達が後に続いてくる。

「篠原准尉、一仕事頼む」斉藤は告げ、F6Fの重厚な機体を叩いた。

プラット・アンド・ホイットニー社製R-2800『ダブルワスプ』エンジンが息を吹き返し、唸りを上げ始めた。一瞬、前方で離陸作業を進めていた零戦がF6Fに迫るが、急なUターンをして加速し、1本の滑走路を駆けて飛び去った。この滑走路を目指して、四方八方からエンジンの咆哮が集まった。

篠原はF6Fの操縦席に対する若干の不満を、胸の中で愚痴てい

た。F6Fは操縦性に優れ、防弾性にも長けた優秀機だが、機体自体は典型的なアメリカ人向けに造つてある。アメリカ人にとって零戦の操縦席が狭かつたのに対し、日本人にとってF6Fの操縦席は広かつたのだ。ただ、何と言おうが生存性・高速性・攻撃性において九七式戦闘機に圧勝するF6Fは捨て難い。

F6Fが浮き上がり、篠原は深く座席に身を沈めた。これで逃げ道は無くなった。

篠原のF6Fがハイル飛行場を飛び立ち、花田航空兵曹長とF4F『ワイルドキャット』が後に続いた。両者は空中にて集結し、ロット編隊を組んだ。ロット戦法では2機1組で1分隊だ。

両者が並べば、その差がよく分かつた。1回りほど大きな機影がF6F。その隣の、F6Fと並べば子供のように見える機影がF4Fである。双方は800馬力の差、時速100km近い最高速度の差、追加油槽や増槽から来る1000km以上の航続距離の差等、性能に圧倒的な差があつた。その全ての面が太平洋戦争中期でF6Fを優位に立たせる要因となつた。

篠原は防弾フロントガラス越しに向かう先を見ていた。満蒙国境上の空を戦闘機が取り囲み、蟻の様に点々と群っている。ソ連空軍のI-153戦闘機とI-16戦闘機だ。数は総勢48機。3日前の国境上空の戦いでは、相手の数は44機だったので、左程驚きはしなかつた。急遽迎撃に向かつた特零空も、2個中隊　計25機を上げていたし、篠原は以前の初戦で計9機の敵戦闘機を撃墜した経歴を持っていた。その内訳はI-153が4機、I-16が5機と、同等の全金属製戦闘機I-16の方が多い。

しかし篠原は知らなかつただろうが、相手は3日前の様な低練度のパイロットではなかつた。ソ連本国より送り込まれた精鋭　スペイン内戦時、ドイツ空軍を相手にスペイン上空を駆っていたベテランパイロット達だったので。その精鋭48名が篠原や花田達ル―

キーに迫り来ていた。

空域に着くと、篠原とF6F。花田とF4Fのロツテ編隊は同中隊の機とともに、満蒙国境上を通過しようと群っている敵編隊の中に飛び込んだ。

1メートルも行かない内に、篠原の人差し指は空いた操縦桿の機銃発射ボタンを強く押し込んでいた。操縦桿に備え付けられた機銃発射ボタンはトリガー式で、零戦や一式戦闘機『隼』の様にスロットルレバーには付いていない。鹵獲機の与えられた有望株は、操縦時の細かな弊害を気にせず、安易な機銃発射操作を可能としているのである。また、装弾量豊富且つ強力なブローニング50口径12・7mm機銃も、防弾板に守られたI-16を狩るには、やはり7・7mm機銃よりは良かった。

12・7mm機銃6門が火を噴き、I-16戦闘機1機が撃墜された。無論、賞賛は上がらない。辺りを見回してみたが、誰も1機撃墜の事など気にかけていない様だった。今は眼前に迫る敵機47機の排除に全身全霊を尽くさなければならぬ。ただ、F4Fを駆る花田が風防越しに笑みを投げてよこし、お返しとばかりにI-153戦闘機1機に12・7mm機銃弾を叩き込んだ。

I-153戦闘機が錐揉みしながら堕ちて行く中、戦闘は激化の一途を辿っていた。制空権奪取戦が繰り広げられる中、ハルハ河を敵の装甲車両群が渡河し始めていたのだ。ソ連軍のBA-6、BA-10中装甲車は装甲車両ながらも46口径45mm対戦車砲を1門装備している。河を防御するM4中戦車は敵戦の存在に後退命令がなされ、今は貧弱な九五式軽戦車が防御の要という状況だった。

事態が憂慮される中、SBD『ドントレス』艦上爆撃機と九六式陸上攻撃機、帝国陸軍の九八式軽爆撃機が飛び立った。陸軍の九八式は、本来1937年に初飛行する筈であった『九七式軽爆撃機』

であつた。九七式は海軍筋の情報で機体改良がなされ、後の九九式軽爆撃機と同等の性能を有するまでになっていた。

渡河に入る中、篠原は眼前に群るI-153、I-16を睨み付けながら、下を見下ろした。本来の任務では敵の侵攻に備え50kg爆弾を備え付けていたが、突然の敵機襲来によつて廃棄処分とせざるを得なくなった。戦闘空域に向かうまでの間に、篠原は重荷となつていた50kg爆弾を満州の荒野に投棄して、この戦場に赴いていた。

『爆撃機到着までに何としても制空権を回復せよ！』

特零空第一中隊飛行長淵田美津雄少佐は無線越しに告げた。篠原は未だ残る数十もの敵影を見て反論しようと思つたが、首を振り、ちらつと花田の方に目を向けた。F4Fの重厚な機体が空を優雅に舞い、12.7mm機銃から形成された鋼鉄のシャワーが“究極の複葉機”I-153の脆弱な翼を撃ち抜いた。およそ1939年の空戦には似つかわしくないI-153は翼を碎かれ、螺旋を描きながら徐々に地上へと落ちていった。これを見て、篠原は完全に口を閉じた。

篠原が駆るF6Fは敵味方入り乱れる空域を突っ切っていくと、階段を駆け上る様に螺旋を描きながら、I-16の後ろに張り付いた。銃口からはまだ12.7mm機銃弾が飛び出していない。トリガーを握り押し込むと、それは音叉の様に振動した。銃弾がI-16の機体に降り注ぐ。

しかしI-16と不屈のパイロットは左へ急旋回し、逃げた。

篠原は口笛を立て、攻撃を脱したソ連空軍のパイロットに敬意を払つた。前方に躍り出てきたI-153に向かつて12.7mm機銃弾を撃ち放つと、体勢を立て直すあのI-16に向き直つて頷いた。相手は好戦的に挑発の意を見せてきている。

篠原は挑戦を受けて立つた。相手のソ連空軍パイロットの方も、篠原准尉 『東洋のリヒトホーフェン』とF6Fに尻込みせず、

本気でぶつかろうと意気込んでいた。

篠原はI-16の方を見た。頭の中で鐘が鳴り始めた。警告なのか、チャンスなのか、意味は分からない。さつと風が流れ、I-16の重い機体が見えてきた。旋回性はF6Fの方が優勢だ。篠原はゆつくりと顔を振り向け、I-16の機体目掛けて12.7mm機銃弾を浴びせ掛けた。

するとまた、突然にI-16が急降下した。重武装と急降下性があるI-16の売りだ。コックピット目掛けてM2重機関銃が咆哮するが、I-16コックピットには、座席後方に更なる防弾板を取り付けるという応急改造が施されていた。当初の高い防弾性に加え、それが補助的役割を担った。しかし、次善策だった事は否めず、12.7mm機銃弾の前には貫通するのも時間の問題だった。

すると、I-16の機体にパツと閃光が煌めいた。やがて機体は火を噴き、不気味で濃密な黒い尾を曳き始めた。I-16を押し返す風の音は、まるで苦悶に呻くパイロットの魂の声の様に聞こえた。これで終わった。

篠原は振り返ってそこを離れようとしたが、I-16が突然急上昇を始めた。機体は引き起こされ、V字状に戦闘へと立ち戻った。血に紅く染まった風防と執念の表情を見せる血塗れのパイロットを見て、篠原は悪寒を覚えずにはいられなかった。

「終わらせてやる！」篠原は鼻を鳴らして言った。F6Fは急旋回して、I-16の前に進み出た。トリガー式機銃発射ボタンにぴたりと指が添えられ、6門の砲が発射の準備を待つ。

篠原はI-16を掃射した。ソ連空軍パイロットの肩部を12.7mm機銃弾が貫き、鋼鉄の防弾板に当たった。鋼と鋼が擦れ合っで悲鳴を上げる。パイロットは素早く操縦桿を操り、I-16はF6Fを離れて飛んで行った。きりきりと旋回し、陽光に煌めきながら。いよいよ火の手は機体全体を飲み込み、錐揉みを始めた。下方

に居た日ソ両軍機は驚いた小鳥か何かの様にさつと二手に分かれ、飛び去った。

I-16と突風はなおも、苦悶に呻くパイロットの魂の音が如き音を発していた。

戦闘終結はそれから10分も経たない内の事だった。ソ連空軍側は40機以上の損失を出し、辛くも撤退を開始した。一方、日本側は5機と少ない被害であった。制空権は日本側に委ねられ、爆撃機の到着とともに渡河を目論む部隊は駆逐された。

1939年8月3日。外交努力と戦果の甲斐もあって、『ノモンハン事件』は早期に終結した。この日までにソ連軍は数百両の装甲車、数百門の砲、そして1000名以上の死傷者を記録した。特に甚大なのは航空機で、少なくとも200機近くは失われたとされる。事件の早期終結は、このソ連空軍側の多大な航空機の損害が関わっている事は、言うまでもない事実であった。

同戦役において、篠原准尉が挙げた戦果は史実の撃墜数58機を上回る。71機であった。花田航空兵曹長は53機である。外交・事件における最終局面となった7月のソ連空軍の起こした制空権奪回作戦では、篠原は1日に計13機の敵戦闘機を撃墜し、史実でのエーリヒ・A・ハルトマンの記録12機を上回る、驚異的戦果を打ち立てた。この戦果が日本と世界に与える衝撃は強かった。日本国民にとっての英雄となり、同時にソ連人民にとっての悪党となった。

第22話 ノモンハン事件（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第23話 第七・第八艦隊計画

第23話『第七・第八艦隊計画』

1939年8月10日

東京府

『ノモンハン事件』終結から1週間、日ソ両国は戦争など起きなかったかのように振る舞っていた。しかし日本国民は新聞記事に踊る『圧勝』の2文字に湧いていたし、ソ連最高指導者のヨシフ・スターリンはその抑え切れない憤りを、極東方面の指揮官達に『肅清』という2文字でぶつけていた。当の歴史改変者たる伊藤ら『大和会』と大日本帝国海軍の関係者達は、その勝利にもっと長く酔い痴れていても良かったのだが、年が1940年に突入するまでに片付けなければならぬ仕事如山積していた。帝国陸軍側の意識改革に新兵器開発、そして対独問題。更に本腰を入れなければならない1つの問題が今日、話し合われようとしていた。

場所は海軍大臣官邸。伊藤と山本は8月10日という今日の日を早朝に起き、朝食を食べ、この建物を目指して出発した。1時間後、二人は海軍大臣官邸の会議室に入室。米内光政海軍大臣、連合艦隊司令長官にして第一艦隊司令長官を兼務する吉田善吾中将、軍務局長の井上少将らが顔を連れ、二人は厳かに席へと着いた。

「して伊藤君、君と会って2年と経つが」米内は言った。「歴史は変わったかね？」

「ええ。変わりはしました」伊藤は言った。「しかしまだ完全とは言い難い」

2年間という長くもあつという間に過ぎた期間は、確かに変革を起こした。ドイツ台頭の阻止、兵站面での新ドクトリン成立、対中

戦争の頓挫、辻政信の仲間入り、新型兵器の開発……。だが、伊藤は肝心な1つの点について、変化を求めている。

「山本閣下には次官を留任し、後に海軍大臣の職に就いて頂きたい」

変化に富む物語の最後を締めくくるその言葉に、米内は冷徹な表情を浮かべた。事実は小説より奇なりと言うが、これは1つの事実であった。1939年8月30日、山本五十六中將は連合艦隊司令長官の職に就くが、当初彼はそれを望んでいなかった。同期の吉田中將の将来を危惧し、海軍次官留任を申し出ていたのだ。これに米内は反対し、山本は結局長官の職に就いてしまった。

「当の山本閣下は軍政畑を歩いて来られた御方、その才は海の上では役に立ちません」

後の伊藤はこれを“迷った挙句打ち立てた窮余の秘策” 実際は計算し、将来を憂うが為に起こした1つの大きな賭けだったと語っている。前述した通り、山本は決して実戦に富んだ武将ではなく、軍政に長けた智将だった。渡米経験を誇り、三国同盟に反対し、日米開戦の阻止を図った等、軍政面における活躍は露知れず。逆に、真珠湾攻撃での燃料・工廠群や空母2隻の撃ち漏らし、MO作戦の頓挫、ミッドウェー海戦の大敗等、実戦での敗北も数多くあった。

「将来的な現実性は理解出来る……。だからといって良いとは言えない」米内は言った。「して、そうなれば吉田中將に一手を担わせる事になるが、彼は史実以上の活躍を見込めるのかな？」吉田の方を見ながら、米内は告げた。「しかるに説得の一文もあるのだらうね？」

「吉田閣下は海の上での経験は山本閣下より富んでおられる」伊藤は言った。「過去の私 今に言う所の……伊藤整一少將を連合艦隊参謀長の職に就かせ、補佐役とさせて頂ければ宜しいかと。彼

は吉田閣下に数多の勝機を見出させる事でしょう……」

1937年7月1日。最初に未来の片鱗を体験した若かりし日の伊藤整一は少将となり、その後の人事では軍令部次長に至る事になっている。彼は渡米経験の上、未来を知る数少ない人間の1人であり、同時に歴史改変を決意に固めた1人でもあった。現在は海軍省人事局長を勤めており、対米戦に向けた人事の基盤を固めている最中であつた。

「年功序列制の廃止を唱える伊藤整一少将か」米内は言った。「しかし事は命に関わる問題だ。そう易々と決める訳にはいかんぞ」

山本が連合艦隊司令長官に任命される所以には、米内の山本に対する憂慮があつた。この頃、日独伊三国同盟に反旗を翻す山本の下には、複数の脅迫文が届いていた。山本が三国同盟賛成派や右翼派の手にかかる事を危惧した米内は、命の保証の為、海上職となる司令長官の職にやった訳である。

「私は伊藤閣下の人事に異存はありません」山本は言った。

「しかし」

「連合艦隊司令長官の職は、帝国海軍における最高の誉れでしょう」山本はかぶりを振った。「しかし、帝国海軍が無くなれば、その様な肩書きは意味の無い事。私は海軍と日本国の永久の繁栄の為、我が身を犠牲とする覚悟は重々出来ておる次第です」

そう山本は言い、1枚の便箋を出した。

「それは何だ？」

「遺書です」

山本は決然と告げた。史実でも、1939年5月31日に山本は遺書『述志』を作成している。『誰が至誠一貫俗論に排し斃れて後已むの難きを知らむ』 訳せば“誰が至誠一貫（真心を持つて始めから終わりまで貫き通す）、俗論（三国同盟や対米英戦）に反対して倒れるまで続けることは容易なことではない”。『此身滅すへし此志奪ふ可からず』 “自分は死んでもいいが、この志は誰も奪えない”と記されている。動乱の世に至る道の半ばで、三国

同盟賛成派や右翼勢力にいつかは殺されると考えていた山本はこの一文の中で、自身の一貫して守る志を記していた。

そしてこの一文は、山本が今示す遺書にも書かれていた。

「次官官舎にて書きました」山本は言った。「私は4年後、ブーゲンビル島上空で散る身です。戦場で死に至れない事には悔いは残りますが、私が残してきた成果は、その様な事を言うに値しない。何の結果も残さぬまま、米国に永久の禍根を残してしまった事は、恥に他ならない」

短期決戦構想上において、早期講和を目論んでいた山本の敗因はそこだった。戦後、1945年8月に旧友レイモンド・A・スプルーアンス米海軍大将と再会した伊藤は、その時に米国が抱いていた日本への憎悪を耳にし、思わず顔を顰めていた。

「何を考えてアドミラル・ヤマモトはハワイを襲ったんだ？」とレイモンドは言った。伊藤が山本の短期決戦構想を話すと、1941年12月の蛮行は個人主義国家アメリカを団結させる一因となり、早期講和のチャンスを完全に失う結果に他ならないとレイモンドは告げた。

その事を伊藤から聞く所となった山本は、現実を知った。

「ですから、是非海軍次官の職を続けさせて下さい」

そんな山本の言葉を受けた後、米内は静かに頷いた。

その日、帝国海軍の命運を決する事案はもう1つ存在した。『夢幻の艦隊』 多数の米海軍鹵獲艦艇の有効な運用法の確立であった。

伊藤整一から藤伊一として、海軍中将の身となったこの男は、1つの突拍子も無い、前代未聞の艦隊の創設を提案した。

それが 『第七・第八艦隊計画』である。

「して、第七・第八艦隊計画とは具体的にどの様なものなのだね？」米内が訊いた。

「第七・第八艦隊は、余剰の鹵獲艦艇から編成される1個艦隊で

す」伊藤は言った。

「待て」米内は手を挙げた。「“1個艦隊”と言ったな。ならば何故『第七艦隊』と『第八艦隊』が存在する。言い間違いかね？」伊藤はかぶりを振った。「いえ、その名の通り“2つの艦隊”です。しかし『第八艦隊』は存在しない　言わば『影の艦隊』と言うべきものでしょうか」

「やはりよく分からんな」米内は唸った。

「では分かり易く言えば、『第七艦隊』は主力海戦にも参戦する“正式な”艦隊。『第八艦隊』は連合艦隊には登録されもしない、“非公式な”艦隊です」伊藤は言った。「言わば『欺瞞艦隊』ですね。第七・第八艦隊は1個艦隊ですが、2名の司令長官によって運用します。時にこの艦隊は1名の司令長官によって『第七艦隊』という名の下、戦線に投入されますが　『第七艦隊』は冠する名を変え、『第八艦隊』としてまた別の司令長官の指揮の下、奇襲戦法をもつて米海軍を攪乱する作戦を展開します」

いわば第七・第八艦隊は『表裏の艦隊』である。第七艦隊は旭日旗。第八艦隊は星条旗を掲げる。人員、所属艦艇は変わらず、独自の兵站をもつて活動する。

「後に米海軍は『第3艦隊』と『第5艦隊』を有しますが、それは2名の指揮官　スプルーアンスとハルゼーのどちらかが指揮するかによって名を変える艦隊です。実際には1個艦隊です」伊藤は言った。「第七艦隊と第八艦隊はまた違います。表立った海戦で日本側に堂々と参入する第七艦隊。そして米国本土近海や敵艦隊に深く潜入し、攪乱・奇襲戦を仕掛けるのが第八艦隊なのです」

これは旧友レイモンドより、『第3・第5艦隊』の力ラクリを聞かされた経験を基に築かれた案だった。第3・第5艦隊は、ウィリアム・F・ハルゼー大将が指揮する際は第3。スプルーアンス大将が指揮する際は第5とただ名を変えただけの艦隊だった。具体的には司令部が変わるだけで、本質は変わらない。

第八艦隊に必要なものは多く揃っていた。偽装用の星条旗、古め

かしい米海軍乗組員服は余剰品として一部の鹵獲輸送艦に詰められていたし、そもそも鹵獲艦は米海軍のものだ。帝国海軍の艦載機は将来的にF6F『ヘルキャット』等、米海軍の機を基とした、よく似たものが多く登場するので、空の面でも欺瞞が効く。既に諜報面でも新組織が開設され、多く起用された民間人の活躍の下、暗号解読も進んでいた。一見、大胆且つ無謀とも思える『第七・第八艦隊計画』は、基盤が整っていたのである。

「必要なものは少ないです。エセックス級に似せて造った空母を2隻。軽巡3 4隻。駆逐艦数隻」伊藤は言った。「後は艦隊運用に必要な物資があれば大丈夫でしょう」

「人員はどうする？」米内は言った。「鹵獲艦を軽快に動かすのは流石に無理ではないか？」

「2年前から鹵獲艦を公試させてきた人員が居ます」伊藤は言った。「彼らをそのまま艦隊人員に流用するか、指導員として育成を担当せればいかと」

「では具体的に言った『エセックス級に似た空母』というのは如何にするおつもりで？」井上は心配そうに言った。

「予算偽装をすればいける筈です」伊藤は言った。「我々は少数ながらもエセックス級の情報も掴んでいますので、それを基に改大鳳級を改装すればいいでしょう」

かつて『大和会』はエセックス級航空母艦の情報を多く探していた。戦艦『大和』を奪還し、反乱勢力となった後、このエセックス級が『大和』最大の敵になると想定していたからだ。白黒の航空写真といったエセックス級の情報が、『大和』乗艦までに『大和会』の一員の手によって運ばれていた。

「して2名の司令長官は如何に決める？」

米内は肝心な点を言及した。「戦艦に空母、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦を操り、尚且つ独自の兵站も確保しなければならぬ。更に諜報面や米国にも精通していなければならない」米内は言った。「そして口の堅さも一級品でなければな。それ相応の人物が2名も要求

されようぞ」

一同は唸った。あまりにも荒唐無稽な第七・第八艦隊には有能な指揮官が必要だった。豊富な経験、口の堅さ。そして度胸もなければいけなかった。柔軟な対応力も必要だ。

「誰が良い？」米内は訊いた。「とりあえず、南雲は却下だな」歴史改変後、南雲中将は史実ほどの栄光を浴びる舞台には立てなくなっていた。日中戦争が消え、塚原二四三少将（後11月中将に昇格）が健康体で対米戦に挑めたからだ。史実では1939年10月3日、中国軍の奇襲爆撃を受けた塚原は左腕切断の重傷を負い、第一線から退く事となった。航空を知り尽くした塚原は、何とか基地航空隊によつて組織された第一航空艦隊司令長官の職に就いた。この経緯を受け、新設された第一航空艦隊には航空畑を歩んできた塚原ではなく、水雷畑を歩んできた南雲が司令長官に着き、真珠湾攻撃やミッドウェー海戦を指揮したのである。

「ならば誰にするか。伊藤君、君は誰か適任者を知っているかね？」

「ええ……。しかし言つていいものでしょうか？」

「時間を無駄に浪費するぐらいならな」米内は言った。「時は待つてくれん。1秒でも早く言つてくれれば、それだけ早く第七・第八艦隊は編成されようぞ」

伊藤はやはり躊躇していた。

「君には腹案があるのだろうか？」

「腹案とは言えませんが」伊藤は言った。「決め兼ねるのであれば 私が着きましょう」

一同がざわめき、顔を見合わせる。予想通りの反応だった。

「うむ……それは……」

「信用に至らないと」伊藤は言った。「その様ですね」

伊藤がこの時、自身を推薦した理由には諸説ある。1つは栄光を

求め、同時に死に場所を求めていた事。戦艦『大和』による『菊水作戦』が史実とは違い頓挫し、死に至らなかった事に1つの不満を抱いていた。そこで敵味方から誤射の対象になりかねず、危険が付き纏う第七・第八艦隊司令長官の職に志願したという訳だ。また他にも、偽装艦隊でもあるので身分を偽る自分には適任だと思ったから。誰も良い案を出さなかったから仕方無くといった説もある。

「米内閣下」そう切り出したのは山本だった。「私も彼以上に適任の人物を知りません。彼は我々以上に経験がある」

「しかし実戦経験は無いと聞いたが？」

「ですが、彼は戦争後期の辛い時期、第二艦隊司令長官に着いた身です」山本は言った。「米国にも精通し、艦隊指揮にも長けている。何より我々に鹵獲艦を与えたのは彼の功績です」

米内は渋っていた。

「閣下！」

「分かった」米内は言った。「尽力する。艦隊設立もな。だが約束は出来んぞ」

「御尽力感謝します」山本は言い、伊藤とともに礼をした。

それから1年後の1940年、艦隊設立に関する予算が確保され、第七・第八艦隊は産声を上げた。

第八艦隊司令長官の任に着く藤伊一中将　伊藤には、1つの夢が出来た。苦しみや後悔に縛られない、未来ある大日本帝国　という壮大な夢。若者に重荷ではなく栄光ある将来を託せるような未来を築く夢。そんな夢のある未来を掴む為なら、伊藤は如何なる事でもやり抜く所存だった。

第23話 第七・第八艦隊計画（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第24話 帝機関（前）

第24話『帝機関（前）』

1939年9月1日

東京府／下谷区

雲一つない空の下、濃い青色の不忍池の水を湛える池面を、伊藤は見つめていた。その間も車は走り、上野恩賜公園の景色が後ろへ後ろへと飛んでいく。やがてついに上野恩賜公園の丘の上に、知識人が集う瀟洒な煉瓦の建物が見えてきた。『上野公園』で親しまれ、戦時にも予定通り開館を続けた唯一無二の国立図書館『帝国図書館』である。道はほどなく孤を描き、穢れ無き蒼空が右手を覆い尽くす中、車は帝国図書館の敷地内へと入って行った。

9月とはいえ1日過ぎたのみならず、夏はまだ健在だった。日差しがじりじり照り付け、日傘を差した貴婦人や帽を被った紳士達が冷所を求めて館内に急ぐ。

しかし、東京市内の都市化が進む中心地に比べれば、ここの方が涼しい。舗装道路ではなく広大な緑の海に囲まれ、コンクリート建築物群に代わって手入れの行き届いた、それでもって風通しの良い森に守られている。樹木はどれも幹が太くて逞しい。木々が連なり築かれた影の道を辿り、角を曲がると、目の前に玄関が現れた。伊藤はそこに入った。

館内入口ホール。受付口に伊藤は歩み寄り、専用のカードを提示して見せた。すると受付に座る職員の顔が険しくなった。

「硬くならんでいい」と伊藤は言い、図書館の奥へと足を踏み入れた。帝国図書館は鉄骨補強の煉瓦造り、地下1階地上4階建ての規模を誇る。それでもアメリカ力議会図書館や大英図書館に比べれば

小さいものだった。当初計画では東洋一の大図書館　となる筈であつたものの、現実には日露戦争・関東大震災と災難の捌け口となり、予算削減はもとより施設破損に至り、蔵書や資料の収集より建物の復興・増築に金を充てる方が先決であつた。

伊藤はそんな面の問題を強く感じつつ、地下1階へと降り立つていた。開放的な館内入口ホールや閲覧室の明るいイメージとは裏腹に、地下は本当に味気がない。辺りには古びたカビ臭いにおいが漂い、微かな刺激臭も混じってくる。通路には所狭しと蔵書の山が積みまれている。

地下1階、牢獄と書斎を足して2で割つた様な比較的大きな規模の書庫室の一角に『帝機関』本部は存在した。帝機関は天皇直属の諜報機関であり、陸海軍共同の組織だった。しかし、世界でも類を見ない程に仲の悪かつた両者が手と手を取り合つて仲良く出来る筈もなく、設立当初から「1年も持たない」と陰口が囁かれ、挙句の果てには“いつ潰れるか”　という賭けの対象にさえなる始末だった。しかし事態は上手く行つていた。

陸海軍はやはり別れていた。共同組織である筈なのに、当本部室内では陸海ごとに部署の場所が分けられ、暗黙の了解の様に両者は『協力』　という言葉を発表すとも実行はしなかった。しかし双方には『大和会』色の強い関係者達が有力者として入っており、海軍側は実質『大和会』の手駒　といえるほどに恭順していた。

一方、陸軍側は　辻政信の指揮下にあつた。この頃、『ノモンハン事件』で侵攻を図つてきたソ連軍を撃退した辻は、戦線の拡大化を望んだ関東軍内に見れば嫌われ者だったが、不拡大化・早期解決を望んでいた陸軍中央部では強く支持されていた。その結果、辻は関東軍から急遽中枢となる同機関へと異動となつた。

これを左遷　とみるか否かは重要ではなかった。要は『帝機関』が比較的スムーズに『大和会』の意志によって動き易くなつたとい

う事実が存在する事にあつた。『大和会』には歴史改変　　という一大事業もあつたし、その中に含まれる『大いなる陰謀』という目論みもあつた。

伊藤の前には、1人のドイツ人が座っていた。

名をエヴァルト・オイゲン・ルートヴィヒ・シュミットというそのドイツ人は、常に肩を怒らせた男だった。階級は少佐。しかしながら、特務機関に属している事、第三帝国総統ヒトラーの手によって直々に特派された事が影響しているのか、1階級は上の筈の陸海中佐でさえ、一端の兵の様に上目使いで接していた。

「何故図書館に諜報機関の本部を置いたのです？」シュミットは肩を怒らせ、疑念に満ちた表情を浮かべながら流暢な日本語で言った。「貴方は余程の本好きか　　」

「馬鹿……か？」

伊藤は言った。「元々、一般客は地下への立ち入りを禁じられてる」伊藤は更に続けた。「この施設には予算が足りない。隠密下でこの組織を成立させる為には、正規の予算編成として『帝国図書館用の増築・補強・蔵書購入予算』で計上しておけば良い隠れ蓑になる」

「しかし、突然の予算増額は目立つと思いますが？」

「それはない」伊藤は言った。「東京各地が同じ事だからな。体裁を保つ為、インフラ整備の為、老朽化の進む建物は軒並み改築され、道という道は舗装されている。まあ、戦時に使用される恐れがあるとして鉄道や空港の建設事業は見張られるかもしれない」伊藤はかぶりを振った。「だが、図書館を米英の諜報機関が監視の対象にすると思ふかね？ 答えは勿論　Noだ」

これには合理的面と同時に、帝国から1人でも多くの文豪や秀才を誕生させたい　と願う伊藤の願いも込められていた。当初計画の3分の1のみが完成したのみの帝国図書館は、そのままでも瀟洒で豪華な建築物と言える。しかし老朽化著しく、増築を館長は望ん

でいた。伊藤は戦時中も空襲の被害を受けず、尚且つ金欠だったこの図書館を『帝機関』本部として使う事を提案し、合意させた。諜報機関用の予算の一部を増築費用として回す代わりに、地下1階を丸ごと『帝機関』本部として使用する権利を館長に要請した。館長はそれに同意し、機密漏洩禁止の書類にサインをした。

「成程」シュミットは唸りつつ頷いた。

「それよりもだ少佐」伊藤は言った。「何故君が階級上の人間を従えられるのが聞きたいものだ。上司をこき使えるのは男の夢の1つだからね」

シュミットは鼻で笑った。「私がここにいる権利がある様に振る舞えば、彼等は対して深くも考えずにそれを当然のように受け入れるんですよ。自信と多少の意志疎通、そしてある程度の肩書きがあれば誰でもやれる事だと思いますがね」

血と鉄によつて築かれていく第三帝国は9月1日の今日、ポーランドに対して戦争を仕掛ける筈だった。しかし歴史は改変され、運命の歯車は既に大きく変わっていた。

時に1939年1月、『帝機関』はまだ産声を上げたばかりの頃だった。第三帝国総統、アドルフ・ヒトラーは帝国海軍によつて隠密下の秘密会談に招かれた。彼はその場に居合わせたもう1人の男ベニート・ムッソリーニとともに、未来の旅人 伊藤整一と対面する事になった。

第24話 帝機関（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第25話 帝機関（中）

第25話『帝機関（中）』

1939年1月25日

東京府

伊藤整一が描写する未来の尖端は、羅針盤が常に北を指し示す様に、扮うことなき “敗戦” を指していた。1945年のその春、眼前に座る2人の男 アドルフ・ヒトラーとベニート・ムッソリーニは最高指導者を失脚して破滅の道を歩む事となっていた。ムッソリーニは新たな国家勢力、イタリア社会共和国（RSI）の首相として、愛人クララ・ペタッチと銃殺刑。それから2日後の4月28日、ヒトラーも後を追う様に愛人エヴァ・ブラウン 29日の時点で結婚したとともに、自殺して生涯を終えた。

ヒトラーの後任者として就任したのはカール・デーニッツ海軍元帥だった。デーニッツは、ヒトラーの後継者としてではなく、ナチス政権の後継者として大統領になった。第2代総統 即ちヒトラーの後継者 として名が挙がっていたのはヘルマン・ゲーリング国家元帥だった。だが、マルティン・ボルマンの一報によって反逆罪に問われる事となったという。ヒトラーは『大和会』の一員、原の通訳を介し伝えられた伊藤のその話に対し、にわかに興味をそそられた。

この2人、ゲーリングとボルマンは常にいがみ合い、正反対の立場を取っていた。結局、最終的に軍配を上げ、ゲーリングを蹴落としたボルマンだったが、デーニッツには歯が立たなかった事だろう。ヒトラーの遺書の第1号電文のみを受諾し、ボルマン自身を『ナチ

党担当大臣』に任命する第3号電文は、第1号電文によって無制限の権限を得たとして、デーニッツの手によって握り潰されていたからだ。ただ実際の所、ボルマンは5月にはその姿を消している。1972年には遺体が発見されたが別人であるという可能性もあり、海外に脱出したとも言われている。

伊藤は更に話を続けた。国防軍最高司令部作戦部長、アルフレート・ヨードル陸軍上級大将の助けを借りて、デーニッツ率いるフレンスブルク政府はこの絶体絶命の危機を迂回する手段。即ち『無条件降伏』を講じた。1941年6月以来の借りを返そうと報復を実行するソ連赤軍に。ではなく、米英軍に対してだった。少なくとも、ドワイト・D・アイゼンハワー大将には思慮分別があった。そんなアイゼンハワーを相手とし、全権を委譲されたヨードルは、ソ連を除く連合軍に対し無条件降伏する事に署名すると通告する。ところがアイゼンハワーは。5月7日までにソ連軍を含めて無条件降伏を行わなければ、既に降伏している北部地区も爆撃すると通告した。

降伏し、生命の保障を約束されたドイツ国民を守る為、ソ連赤軍との直接戦闘に入りたくなかったからだろう……と、ヒトラーは呟いた。米国は極東・ヨーロッパの2方面での戦争遂行に多額の資金を注ぎ込んでいたし、軍自体が疲弊していた。米軍上層部は極東での戦況も憂慮し、第2の戦闘開始。と何が何でもなりたくなかったのだろう。

結局、米英仏連合軍に対する降伏は5月7日、フランスのランスで執り行われた。一方、ソ連赤軍とは翌日5月8日に陥落したかつての首都ベルリン。後に連合軍主要4国によって分割統治されるにて、執り行われる運びとなった。そして5月23日、カール・デーニッツら政府要員達は逮捕され、ここにフレンスブルク政府は終焉を迎えた。

「して貴様は如何にしてタイムスリップしたのだ？」

ヒトラーは、1945年5月に崩壊したドイツから、伊藤の身の上話に話題を切り替えた。ドイツ・イタリアの降伏を認めてはいる様だが、やはりショックが大きいのだろう。

その点もあったが、伊藤はタイムスリップの理由をあまり話したくなかった。まず口頭で答えたとなると、やはり 原子爆弾の存在を伝えなくてはいけないからだ。

史実、ドイツも核開発にはある程度興味を示していた。1940年のノルウェー作戦時には、ヴェモルクにある、世界最大の重水製造工場であるノルスク・ヒドロ社のアンモニア生産工場を掌握した。同社は合成アンモニアを生産する為に水素電気分解を行い、その副産物として重水を手出来ていたのだ。

また、この頃には帝国陸軍も本格的な原爆開発を推進する様になっていた。理化学研究所にその開発を委託した陸軍は2万円の予算を出したが これは九五式軽戦車の価値に比較して約4分の1程度であり、たかが知れていた。（マンハッタン計画は全体予算20億ドルで実に国家予算20%に相当。一方の日本は全体を含めても2000万円程度の予算だった）

そして日本同様、ドイツでの原爆開発チームに充てられた予算も少なかった。教育科学省からの資金援助も無く、ナチス指導者達からも信用されていなかった。唯一、アルベルト・シュペーア軍需大臣は必要性に気付き、理解を示したが 「ユダヤ的物理学」として、ヒトラーは興味を示さなかった。1943年2月には、6名のノルウェー人レジスタンスが空挺降下し、ヴェモルクにあるノルスク・ヒドロ社の重水工場は破壊されてしまった。その頃には戦争は激化の一途にあり、ヨーロッパ侵攻も目前だった。結果として原爆開発はそこで中断、それまでに費やした時間と100名に満たない研究者達の労力、そして1000万ドル程度の予算は無駄に終わってしまう。

また、3月頃には帝国海軍も原爆開発を中断、レーダー開発に力

を注ぐ様になっていた。実際、その僅か1ヶ月後にアメリカで、2年後には広島と長崎に落とす原爆を造る事となる『ロスアラモス研究所』が発足するとは、夢にも思わなかっただろう。

結局、それらの成果は「ナチスの科学力は世界一」という幻想とも妄想とも言える過信を結論として出して終わっただけであつた。

伊藤の語る、壮大なる叙事詩的物語には、最後を彩る衝撃的な描写が必要だつた。B-29が日本の空を覆い尽くし、東京や大阪で10万人越えの死者を出すという佳境以上にだ。伊藤自身は、心臓を止めかねないどころか？ぎ取ってしまう様な描写 原爆投下というクライマックスは必要とは思っていなかった。時に真実は小説より奇なりという。

「御上が過ちに気付き、1日でも早く無条件降伏する なら良いんですがね」伊藤は言った。「しかし現実には甘くはありませんでした」

1945年8月6日午前8時15分、B-29『エノラ・ゲイ』はMk-1原子爆弾 通称『リトルボーイ』を投下、夏の広島を煉獄に変えてしまった。これにより、最終的に約14万人が死亡。後に複数の後遺症を煩わせ、敗戦後にも猛威を振るつた。それから3日後には、長崎にも落とされる。

「酷いものだ」

ヒトラーの言葉は原の手で日本語に変換された。

「ええ……」伊藤の言葉は重かつた。ヒトラーの言葉への疑いからだろう。600万人近いユダヤ人を世界から抹消した男がそのような言葉を口にすれば、誰でも疑うのは当然だ。

「我々は『大和』と呼ばれる戦艦を救うべく、米国が行つた核実験場に潜り込んだのです。原爆が閃光と衝撃を放つた後 我々と『大和』は1937年の世に舞い戻っていたのです」

「うーむ。にわかには信じられん話だな」ヒトラーは言った。

「全く同感だ」ムツソリーニも続いて言った。「証拠はあるのか？」

2人のドイツ語は訳され伝わると、伊藤は静かに頷いた。「無論」そう言った後、彼は1枚の写真を見せた。

「見覚えがある」ヒトラーは言った。「我が海軍の重巡洋艦、『プリンツ・オイゲン』だな」

伊藤は頷いた。ドイツ海軍の重巡洋艦『プリンツ・オイゲン』は、1945年のドイツ無条件降伏後、米軍に接收され、『大和』とともにビキニ環礁の核標的艦として配置されていた。

「これは去年の8月に進水したばかりの代物だが……」

「『大和』同様、過去へと戻った1隻です」

「何!？」ヒトラーは瞠目した。

「今は呉の海軍根拠地にて、預かっております」伊藤は言った。

「帰国の折には、総統閣下には是非お持ち帰り頂ければ宜しいかと」

「良い土産だ」ヒトラーは嬉々として言った。「我が国は戦力が不足しているからな。重巡クラスが1隻でも加われればより確固たる軍隊を築ける」

「……して、何故予と総統閣下を呼んだのか。そろそろ話してくれまいか？」

そう言ったのはムツソリーニだ。

「では本題に戻りましょう」伊藤は言った。「『対米作戦』に」

伊藤の説明を聞く内、嬉々としていたヒトラーの機嫌は徐々に損なわれ、最終的にはふてくされた表情を浮かべるに至っていた。何しろ、それはこれからドイツ再興を図るヒトラーが描いていた『絵』を、根底から否定するものだったからだ。

「ポーランド侵攻を止め、アメリカ本土に攻め入る……と？」

「そうです」伊藤は頷いた。「しかし1939年の段階ではありません。更に先です」

「馬鹿を言うな！」ヒトラーは激怒する。

そんな中、横で沈黙を保っていたムッソリーニは口を開いた。

「そのわけは？」ムッソリーニは訊いた。

伊藤はそれに答えた。まず、米国の介入は避けられない事実であり、何らかの手段を講じて米国はヨーロッパ圏でのナチス・ファシスト台頭を阻止すると推測される。そこで英国と同盟を組み、同時にヨーロッパ諸国とも同盟を組む。そして先手を打って攻撃する。アメリカはポーランド以上の富が期待出来る。独伊陸軍の戦略が『大陸戦』にしても、上陸作戦では英国の海軍戦力を期待出来るし、英国を介してカナダが軍事同盟参加に乗ってくれば、カナダを拠点として陸上侵攻も可能となる。ヨーロッパ連合軍が東から侵攻、大日本帝国や英豪軍が西から攻め、米本土を制圧する。というのが最終目標だ。また、同盟締結はそれ。米国介入自体の牽制的役割を担ってくれるかもしれないからだとするのが、そのわけだった。

「しかし英国が同盟を組むだろうか？」ムッソリーニは疑問に思った。

「大丈夫です」伊藤は言った。「策はあります」

「策……とは？」

「後に英国首相となる男　を暗殺するのです」

「それが“策”　か？」

ムッソリーニは言った。「冗談を言うな。英国首相を殺害すれば、どうやっても敵対関係になるだろう。同盟締結など、一生掛かっても無理な話になるぞ」

「ええ……我々なら」

伊藤のその言葉にムッソリーニは引つ掛かる所があった。

「成程 アメリカ人を使うのか」

伊藤は静かに頷いた。「それならば反米意識を植え付ける事も出来ましようし、対米戦への大義名分にもなりましよう」

「しかしその策、稚拙なものじゃないだろうか？」ムツソリーニは言った。「確かにアメリカ人に罪を擦り付けるも良いかもしれないが、それだけで対米戦になるだろうか？」

「折は見計らっています。罪を負わせるに適任のアメリカ人も1人目星を付けています」

「だが……」ここでヒトラーが話に入った。「アメリカは広い。それに国民も多い。強大な相手だ 一筋縄ではいかんぞ」

「Divide et impera」ムツソリーニは流暢なラテン語で言った。「『分割して統治せよ』 だ。内輪で揉める種を撒いてやれば、個人主義国家アメリカも崩壊するに違いない」

時に1936年、史実ではムツソリーニ率いるイタリア軍がエチオピア戦線で奮闘していた頃だった。今史においては1935年10月3日にイタリアは侵攻せず、ただエチオピア内部で起こる内戦を眺めるばかりであった。その内戦を創った張本人が ムツソリーニだった。

1935年からムツソリーニは着々とエチオピア侵攻の準備を進めるとともに、エチオピア国内に争いの種を撒いていた。エチオピアは多民族国家であり、80以上の民族から構成される。ムツソリーニはそれぞれの部族に旧式の銃器や爆弾、そして他部族によって行われた蛮行 という名の偽りの争いの種をせっせと送り込んでいた。各部族はそれぞれ報復行動に移り、7月の時点でエチオピア国内は内戦状態に突入した。

史実、50万人のイタリア軍を相手取り、善戦したのはこれらエチオピアの現地部族達だった。最初に集まった新兵50万の多くはこの部族から構成された。だが、彼等の多くは槍や弓矢といった原

始的な武器しか持たず、新たに持たされたのも旧式ライフルだった。そんな相手に7ヶ月も掛け、500名の死者を出しながらもイタリア軍は勝利した。

そして今、部族の矛先は 部族に向けられた。複数の部族間の戦闘は約7ヶ月間続けられた。

遂に1936年2月、イタリア軍が動き始めた。ムッソリーニはあくまでも侵攻行為ではなく、国際連盟 ヨーロッパの先進国の一員として、この凄惨な内戦に“終止符”を着けるという名目の下、エチオピアへ侵攻した。

この頃、エチオピア正規軍は内戦の終結の為、多くの兵員を投入して失っていた。原因はどこからともなく現れた 旧式のライフル・大砲である。更に何者かによって統率され、近代的な集団戦法を用いる様になった部族もあり、それら部族のゲリラ・近代的集団戦法によって脆弱な正規軍は壊滅、既に2万人以上の戦力を誇るイタリア軍に勝つ術もなく エチオピアは降伏した。

ここで国際紛争化を恐れた英仏ヨロツパ諸国は何も言わず、逆にその判断に賞賛した。史実と違い、高度な医療水準によってヨロツパ諸国の医療難民を助けていたからだ。また、その点からイタリア軍は内戦に巻き込まれた一般民に医療を提供し、エチオピア内での信用を高めていった。ムッソリーニはエチオピア国内の内戦状態は収まる気配も無い と告げ、『保護領』に制定する事を世界に宣言した。これにより、エチオピアは事実上のイタリア領となった。

その後、イタリア軍が取った行動は2つだった。1つは各所防衛 各地の主な町々に常駐軍を置き、治安維持に務める事。そしてもう1つが 最も弱い部族から1つ1つ、確実に潰していく事だった。

史実とは違い、イタリア軍はそれなりに強かった。ムッソリーニ

が考案する新たな軍隊育成指針 古代ローマを基本としたもの

を基盤としたからだ。それでも、実戦経験乏しいイタリア軍に対し、戦い慣れた数十の部族に個々に分けて兵を送るのは危険過ぎた。ムッソリーニは、確実に、そして大人数をもって1つ1つ弱い部族から消していき、全体の脅威を取り払った。地道なものだったが、最終的にはイタリア軍全体の士気や経験を上げるのに大いに役立った。

第25話 帝機関（中）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第26話 帝機関（後）

第26話『帝機関（後）』

1939年1月26日

広島県／呉

翌日、伊藤の話の是非を問うべく、ヒトラーとムツソリー二兩人は呉軍港に向かった。内密の為、現地の海軍関係者の多くも2人の存在は知らなかった。そこで当然だが、呉視察の折に帝国海軍主催の秘密会談が露呈する恐れが重々あった。その為、ヒトラーとムツソリー二は成金の日本人資産家が着そうな雰囲気のスーツに身を包み、帽子を手に呉へと足を運んだ。だが、それでも情報流出は懸念された。

伊藤は呉湾内に聳え立つ超弩級戦艦『大和』を指差して、基準排水量や全長全幅といった性能諸元や、天空を仰ぐ45口径46cm主砲についてを教えた。それは大日本帝国の国家機密である、と伝え、1945年4月直前に燃料を失い、戦後まで生き残ったと説明した。

「こんな戦艦を……」ヒトラーは呆気に取られて呟いた。付近には、私服のSS隊員が1人付いている。見る者に恐怖と絶望 ユダヤ人には死 を覚えさせる髑髏^{トールコップ}の徽章が付いた軍帽と、漆黒の制服は着ていない。そんな事をすれば「ここにナチが居るぞ」と大声で叫んでいる様なものだからだ。一方のムツソリー二も、護衛は1人付けていた。

『大和』の紹介を済ませた後、一行はドイツ海軍重巡洋艦『プリ

ンツ・オイゲン』に向かう。艦影が見えて興奮気味のヒトラーが歩くのを急ぐ中、ムツソリーニは伊藤を呼び止めた。

「先に行って頂きたい。私はこの男と話がある」

ムツソリーニは言い、ヒトラーは承諾した。

「英語は話せるな？」

伊藤は頷いた。米国では2年間の駐在経験を持ち、レイモンド・A・スプルーアンスとも親交があった。その経験上から英語は達者で、終戦後には旧友との再会の為にと猛勉強をし、『大和』奪還計画の為にとその後も勉学を怠る事はなかった。

「なら良い」ムツソリーニは流暢な英語で言った。彼自身も史実では母国語を始め、英独仏3カ国語をマスターしていた。今史でもそれは健在だった。

2人は積み置かれた資材の上に腰を下ろした。「コーヒーは？」ムツソリーニは訊ね、伊藤は呆気に取られた様に口を開けた。伊藤は慌てて頷く。彼は立ち上がると、10mほど離れた位置で待っていた従兵の元まで歩いていき、持っていたピクニックバスケットを受け取ると戻ってきた。

「イタリアをどう思う？」そう言いながらピクニックバスケットの中を探り、魔法瓶と果物とビスコッティを見つけ出した。ビスコッティは『2度焼いた』という意味のイタリア語で、イタリアの代表的な焼き菓子で、固焼きビスケットを指す。厳密にはイタリアのトスカーナ地方の郷土菓子で、地方では『カントツチョ』と呼び親しまれている。「かつてイタリアは偉大で強大無比の大帝国だった。腐敗し、助長し、膨大化した共和制ローマは元老院の暴走と、身の程を弁えない愚かな国民の手によって衰退の一途を辿っていた。それを救う唯一の道が カエサルが提唱した『帝政ローマ』だった」彼はそう言い、テルモス社製の『サーモス(熱)』魔法瓶からマグカップにコーヒーを注いだ。「その後、カエサルは道半ばにして生涯を終え、最終的に帝国は破滅した……」

「しかし今や時代は変わった」伊藤はマグカップを持ち、コーヒ

ーを口に含んだ。

「果たしてそうだろうか？」ムッソリーニは言い、ビスコッティをコーヒーに浸した。アーモンドの香ばしい匂いと、ほのかに残っていたコーヒーの湯気が立ち昇る。「貴様の言う未来、そして今の事を考えれば、今やこの時代は『独裁者対民主主義』の全面戦争と言えるではないか。ドイツもイタリアも日本も、細かい所は違えど1人の人間が国家を支配する『帝政』に他ならん」

彼は頷いてビスコッティを口にした。「イギリスとの同盟を組めば、真の戦いとなるな。何しろイギリスも『立憲君主制』に他ならんから、その点で言えば今回の戦争は『君主制対民主主義』の戦いとても言うべきだろうか？」コーヒーを飲み、彼は自分の質問に自分で答えた。「まあ、フランスが恭順すれば共和政が加わってしまうからな。惜しい所だ」

「閣下はイタリアを帝政ローマ帝国にでも還すおつもりで？」

「それが当然の帰結ではないだろうか？」ムッソリーニは言った。「知つての通り、イタリアの男というのは 弱い。戦争を祭り事か何かと勘違いし、命を繋ぐ銃弾や武器よりも、女や酒を要求する連中だ。その遠因にあるのは、やはり共和制ローマ時代の腐敗した元老院のせいだろう」

「そうとも限らない」伊藤は言った。

「いや」ムッソリーニはかぶりを振った。「『パンと見世物』の様に、古代共和制ローマの元老院は贅を与え、国民に媚を振っていた。汚職、内部紛争の末に財政は圧迫、膨張したローマ帝国は最早限界点に達しようとしていた。奴らはそんな風船の様なローマ帝国に『贅沢』という空気を送り込んだ張本人だ」

ムッソリーニは桃を握り締め、伊藤を見据えた。「だからこそ、予は帝政ローマを基本に全てを変えようと決心した。そしてイタリアの男に3つの“約束”をし、軍隊を強固なものとした」

「3つの“約束”？」

ムッソリーニは桃をバスケットに戻した。「簡単な事だ。『女』

『飲食』そして『命』だ」ムツソリーニは言った。「1つめの『女』は、かつてのローマ帝国同様、女から主権を剥奪し、生産の道具のみにその位置を定める。そうすることで均一的に女は供給され、約束は保障される」

「横暴だ」

「同様に男もだ。そもそも独裁国家に1人1人主権が約束された国などあるか？」ムツソリーニは訊いた。「答えは言うまでもなくNoだ。それは最早、独裁国家ではない」

国民に主権など無意味なものと、ムツソリーニは言った。民主主義国家は多数の国民の顔色を見て、いちいち媚を売る様な選択を行っていかなければならない。その点、独裁国家は独裁者1人の決定によって万事全てが迅速に運ばれ、政治はより効率的に進む。

「2つ目は分かるな」ムツソリーニは言った。「3つ目の『命』は、これまでやってきた事だ。医療水準の向上と最終的な永遠の命の約束だ。どれだけ勇猛な兵士も、病や寿命には勝てない。かつてのローマ帝国の軍団もそうであつたし、かのアレクサンドロス3世も同様だ。最も人が欲しがるもの即ち命の保障とあらば、誰もが納得するだろう　こんな太古の文明を復活させようとする戯けた指導者にもな」

「何故、話したんです？」伊藤は訊いた。「私の様な一介の人間に」

「どう思つか知りたかつたんだ」ムツソリーニは言った。「答えてくれまいか」

「……完全におかしいと、人は言うでしょう」
ムツソリーニは顔を顰めた。「世間に訊いてるんじゃない。貴様にだ」

「時代遅れの妄想　暴走したマキャベリズム……とでも言いましょうか？」伊藤は考え込みながら言った。「貴方ほどの御人だ。」

他にイタリアを再起させられる術はいくらでもあったでしょう。しかし、何故このような案を？」

「まず1つ訂正だが、マキャベリが説いたのは君主に対する絶対的な権限ではない。自己制御の下、高邁な思想の下、君主は国家の危機に際し、手段を選んではいけない　という事だ」ムツソリーニは尖った口調で言った。「ヒトラーは民族主義的観点から、ユダヤ人を絶滅させようと目論んでいる様だが、予は違う。予が望むのは統一化された民族体　1つの帝国だ」

更にムツソリーニは続けた。「即ち　民族主義的、帝国主義的、全体主義的な単一のアイデンティティから形成された1つの帝国だ。野蛮な民族と高度に発展した民族、この2つを混ぜ合わせ、単一の民族として再構築する」ムツソリーニは肩を怒らせた。「そうする事で双方の欠陥を廃した、新たな共通要素や思想が生まれていく。そうして帝国は頑強となり、統合された精神の下　皆が1つとなるのだ」ムツソリーニは小さな笑みを漏らした。「それが当然の帰結というものだ」

伊藤はため息を吐いた。ムツソリーニは完全に変貌してしまっていたからだ。

「貴方には驚かされるばかりだ」伊藤は呻いた。「その崇高？なる思想を理解に及ばない私の頭をお許し下さい」伊藤は反撃した。

「しかし気付くべきだ。そんな利己的な思想と政策では、イタリア千年の繁栄は訪れる事は無いでしょうし、国民からも疎んじられる」

「マキャベリ曰く『君主は愛されるよりも恐れられよ』」ムツソリーニは言った。「忠言には感謝する。しかし信念を曲げる気もないし、祖国を衰退させる気もさらさらない」

ムツソリーニは立ち上がってバスケットを掲げた。「今は敵に集中しよう。謀略によって成し遂げようとする大事業にもだ。その為に欲しいものがある」

「何です？」

「あの『大和』と空母」

「それは……フェアじゃない」

「そうかな？」ムッソリーニは言った。「敵愾心を持つのはヒトラー総統閣下であろう？ヒトラーも薄々は感じていた様だが、通訳の男が敵意を剥き出しにしていたぞ」ムッソリーニは更に続けた。「最も、予は小物だった様だから対象にもなっていないかったらしい。だったら、秘蔵の物を寄こして頂いてもいいのではないかな？」

「しかし……」

「我が海軍は機動艦隊の創設に心血を注いでいる」ムッソリーニは言った。「元々は地中海やドーバー海峡を制するべく、洋上移動基地としての側面の強い5万t級装甲空母の建造を予定していたのだが、貴様の提案の為に白紙に戻さねばならなくなった。そこで空母建造経験の豊富な貴軍に是非、技術者や設計図を送って頂きたい」

ムッソリーニは笑みを漏らした。「さすれば、貴様の志に一貫して協力しよう」

1939年9月1日

東京府/下谷区

それは厳寒の日から始まった事であった。その日、日独伊三国科学・技術同盟が締結されるとともに、三国間の謀略同盟も締結された。三国は対米英諜報活動を共同で行い、それぞれが情報を出し合って最高の成果を導き出す。

「総統閣下はポーランド侵攻を取り止めになった」

帝国図書館地下1階、陸海軍統合諜報機関『帝機関』本部にて、ヒトラーより送られた特使 エヴァルト・オイゲン・ルートヴィヒ・シュミットは言う。彼は腕を組み、眼前の伊藤を見据えた。

「今度は貴国の番だ。総統閣下は“結果”を望んでおられる」シュミットは言った。「して、貴国はその結果をお出し頂けるのでし

ようか？」

伊藤は唸る。「無論です」

「どうしてそういえる？」

「既に期は来つつある」伊藤は言った。「種は芽を生やし、時は水を与え続ける。イギリスが反米意識を持ち、軍事同盟を持ちかけてくるのは時間の問題だ。」

1939年9月1日、ドイツ軍によるポーランド侵攻という歴史は改変された。結果としてヨーロッパを波瀾の世に引き摺り込む第二次世界大戦は頓挫したが、英国首相アーサー・ネヴィル・チェンバレンが首相の座を降りる事は変わらなかった。

しかし、それが如何なる形で降りる事となったかは また別の話である。

第26話 帝機関（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第27話 産めよ殖やせよ国の為

第27話『産めよ殖やせよ国の為』

1939年9月30日

東京府

その題名に充てられた言葉はまさしく史実の9月30日、厚生省（後の厚生労働省）が発表したスローガン『結婚十訓』に違いなかった。この厚生省のスローガンは、豊かになり文明化が進む代償として生じた大日本帝国内での少子化の改善や対米英戦争に備える為のものだが ナチスドイツの『配偶者選択10ヶ条』を基とし、軍部の男尊女卑の賜物 殆ど、役には立たなかった。

海軍大臣官邸の奥まった部屋の一角で、伊藤や山本や米内は話をした。中にはあの辻政信陸軍少佐も加わっていた。1度は伊藤に比べもなく同行を断られた彼だが、執念と口先は一級品で、米内海軍大臣とのお目通りが叶った という次第である。一方の米内は、後に起こすとされる辻の蛮行やら何やらを山本から聞かされていたので終始冷たく接した。

「しかし未来の総理大臣たる東條のみならず、米内閣下にも媚を売りにくるとは……」山本は侮蔑した視線を米内と語る辻に向けながら言った。「どれ程の野心の塊なのだろうか？権力の亡者とでも言うべきでありましょうか？」

「奴の望み通りをさせておいた方が都合が良い」伊藤は言った。「毒をもつて毒を制す」とはよく言ったもの。陸軍の東條一派との架け橋にもなってくれているからして、『帝機関』は大きな成果を上げているのだ。一重に奴のお蔭だ」

と、伊藤は陸軍少佐辻政信の忠義に対する感謝の意を述べた。実

の所、それによって辻をこの場に連れてくる事になった。伊藤が言う様に、辻は海軍と陸軍間の重要な『架け橋』となっており、同時に秘密を知る男でもある。時々それを仄めかし、伊藤に牽制の意を示してくる辻だが、当の伊藤の背後に帝国海軍、内閣、そしてかの神聖不可侵の御方　が付いている事は重々承知していた。自分は小物であり、その気になれば伊藤に跡形も無く消される事でもある。関東軍を離れた辻は、人が変わった。対米英開戦派や対支那開戦派には形のみで、2度と仕えなかった。それら派閥を離れた辻は、伊藤の協力者の群れに加わった。『大和会』の一員でありながら、最大の敵である東條派の一員でもあり、帝機関　昭和天皇の直属諜報機関　の重鎮でもある辻は、あらゆる勢力へ自由に介入することが出来た。

「今回の『結婚十訓』は、陸軍による所の働きかけが強いと見たが……」米内は辻を睨み付けながら言った。「如何なる事であろうか？未だ陸助共はドイツの盟友の座を狙っておるのか？」

この極めてナチス的な解釈が濃密に盛り込まれた『結婚十訓』は、ナチスの歪んだ優生思想を強く反映したものである。以降、大日本帝国軍部はナチスの政策に惹きつけられた。1940年には『国民優生法』公布、1941年には『人口政策確立要綱』が決定される。ナチスは1939年　1941年の間、『T4計画』という優生学思想にとつて都合の良い政策を取っている。これは『役に立たない人間』　即ち、身体障害者や精神障害者を『灰色のバス』に乗せて『処分場』まで運搬、ガス室に入れて『安楽死』させるという政策である。T4計画は1941年8月には総統命令で中止されるのだが、殺害はその後も続けられた。

また、それ以前からナチスは『優生断種法』という法律を施行している。1933年に制定されたこの法律は、T4計画にも該当された身体障害者や精神障害者に断種（手術で生殖器官を切り取って

生殖機能を排除する）を義務付けた。この法律が前述した『国民優生法』 遺伝性精神病や遺伝性精神疾患の人間に対して不妊手術を施す の基となった事は言うまでもない。

しかしながら、この断種法はナチスや日本のみの法律ではなかった。むしろ、ナチス・日本のそれは断種先進国ともいえるアメリカ・カナダ・メキシコの二番煎じといえる。特にアメリカは1907年のインディアナ州で世界最初の断種法が定められて以来、最終的には1937年までに32州がインディアナ州に追随した。

特にカリフォルニア州では、精神患者は断種を行った者だけが施設に出られるとを定め、精神患者以外に梅毒患者や性犯罪者にも断種手術を行っていた。1921年の全米での断種件数3233件の内、カリフォルニア州の断種手術は2558件にものぼっていた。このカリフォルニア州の断種法はドイツにも伝えられ、後にナチス政権をそれを基に断種法を制定していく。

このように、断種法は決してナチスや日本のみの非人道的法律という訳ではなく、世界において先進した法律であった。逆に日本国内では、断種法に対する是非を巡って、法案が内閣に提出される前から賛否両論があった。マスコミ等は断種法を時局に適った政策として歓迎する一方で、各界の有識者には反対論者も多かった。ナチス断種法を模倣した政府案は不評だったのだ。今史では更に断種法への世論の風当たりは強く、1940年に『国民優生法』が成立する可能性は薄かった。

ただ、実際の所『国民優生法』が本格的に力を見せるのは戦後1948年の事、『優生保護法』が施行された頃からであった。

「かもしれませんが」辻は言った。「しかし早い内に、その一派は影響力を失っていくでしょう。東條閣下は本件には『陛下の大御心に従う』との見解を示しています」

「では東條が陸軍を抑えるとして……」米内は唸った。「勝負はやはり来年か」

1940年1月、その月には『米内内閣』組閣が控えていた。これは『大和会』主導の歴史改変への下準備が済み、いよいよ本格的な改変事業に乗り出す訳である。しかし開戦反対派筆頭の米内が予備役軍人となった形で総理となり、内閣には山本五十六を海軍大臣に任命する　という大きなビックサプライズが数多く世間に公表されてしまう為、動乱の20年代の再来は否めなかった。

「言うまでもない事だが、厚生省や軍部の馬鹿共は今回の『結婚十訓』をナチスのものだとしたただ模倣しただけで、支援策をろくに出していない」米内は言った。

当時のドイツには『結婚資金貸付法』という法律があった。これはお金の無い者が結婚する時に資金を貸し付ける　という制度で、1000マルク（現在の価値にして200万円）が無利子で借りられた。そして、この貸付金は子供が1人生まれることに返済金の4分の1が免除され、4人の子供を生めば全額返済免除となった。その結果、たった2年で出生率は20%上がったという。

しかも、この結婚貸付金は現金ではなく、特定の商店での買い物に使える『需要喚起券』という証券で支払われた。これはその名の通り、需要を喚起させる為の策で、案の上、消費増加と産業の活性化を引き起こした。この点は現代の『子ども手当』が見習うべき所だろう。

加速する少子化に歯止めをかけつつ、経済発展を狙ったこの1933年制定の法律の他、ヒトラーは母子援護センター設立、育児用具（食料品、ミルク、衣類、寝具）の無料提供、母親の為の保養施設設立・温泉や景勝地といった観光地への保養旅行の推奨等保養制度、健康・育児・教育相談、家事援助など、手厚過ぎる少子対策を作り、取り組んだ。それらが驚異的数値である『2年で出生率20%増』という結果を生み出したのは疑いも無い事実であった。

「しかし何故、多額の賠償金や不景気に悩まされるドイツにそれほど余裕が……」と、辻は考え込む。確かにどん底のドイツがこれほどの事が出来るのだろうか？

「そこだな」米内は言った。「次に総理となった時、私が目指すのはそれらを可能とした 国民総背番号制の制定だ」

ドイツの高度な社会保障を確立していたのは、国民総背番号制によつて強固なものとなった源泉徴収だった。国民総背番号制は脱税・節税の防止となり、源泉徴収制度が効率的な税収集を確立した。それによつて膨大な量の税収を手に入れることとなった。

同制度に倣い、史実の1940年4月 時に米内内閣時代に日本でも源泉徴収を開始していた。ドイツの場合 つまりは大規模な公共事業や社会保障の為ではなく、対米英戦や継続する日中間戦争の戦費の為である。元は戦時中の時限立法であつた筈の源泉徴収制度だが、アメリカやイギリスが追隨する様に効率的な税金徴収法であつた為、戦後日本にも残る事となる。

また、他にもヒトラーは『配当制限法』や大規模な減税も行つてゐる。配当制限法は、企業は6%以上の配当が許されなくなり、6%以上の利益が出た場合には、公債を購入することが義務付けられていた。しかし、当時のドイツで6%以上の利益を得る企業は殆ど軍需企業に限定されていた。ヒトラーはそのような形で利潤に笑いを隠せない軍需企業に強烈な一撃を加えたのだ。ヒトラー率いるナチス政権は、暴利を貪る企業を許さなかつたのだ。

「ドイツから学ぶべき点が多い」米内は言った。「インフレ整備を続ける我が国としては、あのちよび髭男のやつた事は役に立つ。奴はユダヤ人を皆殺しにし、世界に喧嘩を売つた男だが……当初は不況に喘ぐ労働者達には優しい男だった」

ヒトラーは公共事業をかつてない規模で行つてゐた。ヒトラー以前は3億2000万マルクに過ぎなかつた公共事業費は、たった1年で20億マルクに膨れ上がった。そしてヒトラーは、それら公共事業の支出の多くを労働者達に振り分けてゐた。最大規模の公共事業である『アウトバーン』建設事業 高速道路 では、建設費の内46%を労働者に振り分けた事で知られる。アウトバーンはその後、ドイツ陸軍の物資輸送網 お得意の電撃作戦等に多用され

た や、ドイツ空軍の代替滑走路等、軍事的な面で広く使われる事となる。

「戦争を後回しに出来たとして、国力増強に何年費やせるでしょうか？」辻は訊いた。

「5年か6年……といった所か」伊藤は言った。「しかし来年には国際的な事件が起こってしまう。それが戦争に火を着けば、猶予は残されない」

来年1940年は『大和会』にとって勝負の年である。冬季・夏季両五輪が開幕し、経済面での活性化は期待出来るが、大日本帝国には工業力増強、少子化問題解決、法整備、工業化に伴う国内食糧自給率低下の解決等、依然多くの問題が残されている。

それら多くの難題に対し、伊藤は全ての責任を取る覚悟を決めていた。

第27話 産めよ殖やせよ国の為（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第28話 腹が減っては戦は出来ぬ

第28話『腹が減っては戦は出来ぬ』

1939年10月2日

長野県／西筑摩群

戦前、大日本帝国で海外向けの製品として大きな人気があったのは、シロバナムシヨケギクというキク科の多年草だった。原産は南東ヨーロッパのセルビアで、胚珠の部分にピレスロイド（ピレトリン）を含む為、殺虫剤の原料として使用されていた。この除虫菊は、1886年に種子が渡来し、1889年から対米輸出を開始した。シロバナムシヨケギクは、1914年に開戦した第一次世界大戦以降、大日本帝国が世界的地位を確立し、経済成長の基盤となった。先進国の一国へと押し上げる上で、重要な役割を担ったのである。そして第二次世界大戦以降、真珠湾への奇襲後には対米輸出が停止され、日本は大事な収入源を失う事となる。ただし、アメリカはそれで除草剤を失った訳ではない。代替となる除虫剤 DDTを実用化したのである。

太平洋戦争以降、米国ではシロバナムシヨケギクの供給が途絶えた。その代替品として白羽の矢が立ったのが、DDTという有機塩素系の殺虫剤だった。

DDTの歴史は古い。1873年、つまりは日本で除虫菊の生産が始まる前には、DDTはドイツの学者によって合成されていた。発見以来長きに渡って放置されていたDDTだが、1939年にスイスの製薬会社『ガイキー社』所属のパウル・ヘルマン・ミュラー博士によって除虫効果が発見された。DDTの高い殺虫性、非常に安価で量産出来る面、また誤った安全性への認識から、1943年

以降、瞬く間に米英で生産された。工業化されたDDTは爆発的に生産され、除虫菊の代替品となった。

米軍は1944年、ペリリューの戦いにおいて初投入され、少なからず多くの命を救う事となった。戦死体や排泄物に沸くハエや蚊を殺菌し、疫病の蔓延を防いだのだ。終戦後には、衛生状態の惨状を知った米軍の手により、大量のDDTが日本に持ち込まれて、日本人の身体を真っ白にするほどにDDTをかけて回った。これはチフスやシラミなどの防疫対策で、実際にその成果を挙げた。

壊滅し、崩壊した街の通りを実際に歩いていたら、米兵にDDTをかけられそうになった事を伊藤は覚えている。筋骨隆々のその米兵は、野生動物を見る様な目で伊藤を見据え、バケツ1杯分はDDTをかけようとしていた。その前には彼等の大上司に当たるレイモンド・A・スプルーアンス海軍大將とも面談した伊藤は、流暢な英語でその丁重な行為を断り、再び未舗装道路を歩いていった。

やがてチフスが撲滅され、シラミもあり出ない様になると、余剰のDDTは農業用の除虫剤として出回るようになった。戦時や、終戦日本においてその成果の程を知ったアメリカでは、これでもかというほどにDDTが生産され、使用され続けた。

「で、それを新たな農薬に？」

山本は言い、伊藤は頷いた。伊藤はDDTを大量生産し、戦場での殺虫剤や農薬として使いたいと考えていたのだ。

ただ、伊藤は知らないのも無理はないが、DDTは危険だった。1950年代、アメリカはDDTを大量に用い、それによって環境破壊を引き起こした前例がある。伊藤もそうだが帝国海軍人は科学方面に疎い面がある。それに1946年から舞い戻ってきている為、そんな事とは露もしらないだろう。

2人は今、試製輸送機のD1号輸送機に搭乗している。ダグラスDC-3の国産機である『零式輸送機』の試作機であるD1号輸送機は史実の二二型に相当する機体で、金星エンジンの搭載や機体強化といった数多くの改良が加えられている。

「我が国は農業生産において米英に立ち遅れている」伊藤は言った。「全面での機械化が無理な以上、量産化には強力な農薬が必要と考えるのが当然でしょう」

当時の農業は各地域による少量生産であり、化学肥料などではなく堆肥を用いていた。作物の品種もそれにあった、地域に元々あった伝統品種を使用しており、病気や虫に強かった。その為、農薬は必要なかったのである。しかし大量生産となれば話は違ってくる。

大量生産の弊害の1つに『連作』がある。稲作の場合、水が栄養を運び、病気の元となるカビが自然と死ぬので連作してもいいが、畑の場合はそうはいかない。畑は連続して使用すれば連作障害が発生してしまう。その為にも、農薬は必須だった。

「そのDDTというものを如何に入手するかだな」山本は言った。「ドイツ経由で手に入ればいいかと」伊藤は言った。「同時に、機械化を進められれば、帝国の食糧自給率は飛躍的に上昇することでしょう」

先進国の近代農業の基礎は、機械化や大量生産に合った品種の開発である。しかし、未だ自動車が普及せず、重機類の国内生産もままならない日本としては、機械化は夢のまた夢であった。だが、大量生産に向けた品種開発という面では、まだ少しでも可能性はあった。

戦争の発端となるのは、銃声や国家間のいがみ合いばかりではない。日々の糧など、食物にも由来する。山形県出身の石原莞爾、岩手県出身の板垣征四郎は、東北軍人としての責務として、かの満州事変を起こしたことで知られる。1930年代、東北地方は凶作に見舞われ、飢饉が相次いでいた。しかし世界恐慌を受け、政府が東北を気に掛ける暇も義理も無かった。こうして東北救済の為、立ち上がった石原ら東北軍人達は、満州事変を引き起こす。

伊藤ら『大和会』が纏めた戦後日本の食料事情報告書を読んだ山

本は、農業の近代化と通商路防衛の重大さに、少しは分かったような気になっていた。だが、報告書を読んだだけでは、徹底的に破壊され、『食料』が無くなった戦後日本の全貌を見たときの打ちひしがれること必至　　というような衝撃への感情移入は出来なかった。東京、大阪、名古屋と、戦争末期、日本各地は爆弾や焼夷弾により、クレーターと焼け崩れた家々や灰に染まった大地に変わり果てていた。満州、朝鮮、台湾といった地域を失い、内地のみでの食糧生産を余儀無くされた日本だが、既にその頃には食糧は尽き掛けている。

「食糧の不足の一因には、今我々が乗っている『コイツ』が関係します」

と、伊藤は言った。戦争以前から、窒素・リン酸・カリウム等、日本は農作物を育てる為の化学肥料の殆どを輸入に頼っていた。現在にしてみても、リン酸等を中国に頼っている。戦争末期には当然ながら、これら化学肥料は底を尽き、農業生産量は低下した。そこへ更においいうちをかけたのが軍部である。本土決戦に備え、内地軍備が拡張される中、飛行場の増設の為には化学肥料が欠かせなかった。軍部は残り少ない化学肥料を徴発し、それによって農家へと肥料は行き渡らなくなってしまった。

ただ実際の所、その頃にすればまだ化学肥料は高価なもので、一般農家は専ら人糞尿、魚粉、菜種油粕といった類の肥料を使っていた。

「ふむ」山本は頷いた。「食糧生産の安定と増産は急務だな。だが、相手は物凄い国土と世界を相手に出来るアメリカ合衆国だ。やはり軍事方面に金と労力を掛けるべきではないか？」

伊藤は落胆した。やはり理屈より現実を見せるしかないのだろうか？タイムスリップでもして、また1946年の東京に戻ればいいのだが。

「『腹が減っては戦は出来ぬ』とはよく言ったもの」伊藤は言った。「あの広大なアメリカ力を攻めるには膨大な量の食糧がなければ

なりません。せめて西海岸を抑えるだけでも……」

西海岸を落とせば、大量の物資　車両・食糧・飲料水・燃料・医療品　が手に入る。イギリスとの同盟を結び、カナダを橋頭堡と出来ればまた話も変わってくるかもしれないが、可能性の乏しい今は現実的な手段を講じなければならない。

「それにまだイギリスと同盟を組めるかも決まっています。決裂した状況下の中、戦争に突入するやもしれません」伊藤は言った。「東南アジア全土を抑え、その上でアメリカの攻め入るとならば、それなりの蓄えが必要となるでしょう。数十万の胃袋を支える為、後の未来の事を考えても、今時期からの農業改革は急務と言える。そう私は確信しています」

そう伊藤が強く言う理由は、敗戦後の日本の惨状からだった。物が不足し、各地に『闇市』が出来るのは当たり前だった。配給食料もあるにはあったが、足りなかった。そんな惨状を目の当たりとしつつも、元海軍中將として幾らかの蓄えがあった伊藤は、然程不自由はしなかった。しかし、食料を望み、餓死者が当たり前の際の光景は、鮮明な記憶として残されていた。

D1号輸送機は旋回し、縦横無尽に空を駆る。伊藤らの眼下に映り込むのは、食料の大量生産の確立には欠かせない　ダムだ。長野県に新たに建造される常盤ダムは、日本初の多目的ダムである。1939年に着工、1941年に常盤ダムは完成する。

そんなダムでは若い日本人男子や朝鮮人が働く。後に彼等は戦争へと徴兵されていくのだが、それこそが農業の衰退に関係していた事を伊藤は知っていた。1941年以降、急速に進む徴兵は農業を担っていた若い男手を奪い、従事者の基盤は老年人・婦女子・子供によって支えられる事となる。機械化も進まず、荷役馬や農耕牛馬といった、唯一の労働力も徴発されていた。工業面でも熟年職人を徴兵するのが問題であったが、農業面では若者の徴兵が深刻な問題

だったのだ。

これら問題を解決する為にも、機械化は欠かせない。また、少子化対策もだった。しかしそれ以上に、敵の食糧や人手を奪う事もある。史実とは違い、米内内閣組閣後も東條英機はあの『生きて虜囚の辱めを受けず』の一節を出さなかった。逆に相手側の捕虜となった場合には、お国の為にと1日1日を確実に生きて暮らし、また皇国の土を踏み締める　　というような趣旨の一節が交えられる所となっている。降伏は極力抑え、万が一の場合は生存を重視せよという帝国軍人に許されない行為を奨励する様な内容を東條は記したのである。これには昭和天皇の大御心と、後に待ち受ける『敗戦』という辱めを防ぐ為にも、泥水を啜つても勝とうという、決死の覚悟を決めた東條の意志が深く関わっている。

後世の歴史家達はこの点から、辻同様に史実以上の評価を付けている。もっとも、彼は後々壮大な舞台の上で、英雄の1人として果てていく事となるのだが　それはまた別の話である。

第28話 腹が減っては戦は出来ぬ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第29話 戦艦戦線異状なし

第29話『戦艦戦線異状なし』

1940年1月27日

アメリカ合衆国／ワシントンD・C．

それは米内内閣成立から1週間後の事である。大日本帝国海軍は世界に向けて、新型超弩級戦艦『Y』の存在を高らかに表明した。これは米内新総理大臣や山本一派、そして伊藤ら『大和会』によるものである。その公表された内容の中には、かつての最高国家機密であった筈の戦艦『大和』のおおまかな性能諸元も含まれていた。最大排水量7万t超や46cmの主砲が生み出す結果は、目に見えていた。まるで真珠湾に奇襲でも受けたかの様に米海軍上層部は慌て、キングジョージ5世級戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』が撃沈された時の如く、英海軍やウィンストン・チャーチルは失意のどん底に叩き落とされた。

無論、これは大きな痛手であったが、それとは裏腹に、各国海軍内は沈黙に包まれるばかりだった。いわゆる『暗黙の了解』という奴なのだろう。上層部が落ち込んでいれば、下は何も言う事は出来ない。それに日本が本当にこの様な戦艦を創り出したかも疑問で、一種の欺瞞工作ではないか。といういつも通りの過小評価風潮が蔓延するのも無理はなかった。と、いうより信じたくなかったのだろう。海軍の領域に蔓延する重苦しい悲愴観とひきかえ、上層部の結論付ける『過小評価』という明るい樂觀は、積極的に下層部にも伝わっていた。技術者や対日軽視の提督達が部下の不安の芽を、『過小評価』という鉋で刈り取った後には、下層部の面々は彼等とともに快哉を感じられずにはいらなかった。戦艦『Y』は野蛮な

黄色猿達の造り出した『妄想の戦艦』だと……。

それに同調しない人間も居た。米政府首脳陣である。国家の安全保障上の問題に対し、憶測だけですぐに片付ける事など出来る筈もない。彼等にとつて見れば、最高指導者は大統領ではなく、『世論』なのだ。確たる証拠と裏付けの下、全てを整理して結論付けなければ世論は怪しむ。笑う暇も無く、海軍首脳部の面々はワシントンDCに召集された。

ワシントンDCペンシルベニア通り1600番地。史実では1945年以降、世界で最も有名且つ権力の中枢として知られる事となるこの地には、1軒の『白い家』。『ホワイトハウス』が建っている。アメリカ合衆国の中枢、ワシントンDCの中枢に当たるこの一軒家には、世界で最も大きな権力を有する人間、アメリカ合衆国大統領が代々居住、執務にあたっている。

ホワイトハウス西棟、権力の中枢であるウエストウイングには、大統領執務室『オバルオフィス』が存在する。ここに集まったのは太平洋艦隊司令長官兼合衆国艦隊司令長官のジームズ・O・リチャードソン大将、合衆国海軍長官代行のチャールズ・エジソン、米海軍作戦部長のハロルド・R・スターク大将、そして前任の米海軍作戦部長であり、現在は退役軍人であるウィリアム・D・リーヒ大将だった。そしてそんな彼等と呼ば出したのは、フランクリン・D・ルーズベルト大統領である。

「戦艦『Y』の情報が事実だとすれば、大日本帝国海軍は18インチ砲を備えた超弩級戦艦を既に建造していることになる」ルーズベルトは言った。「我が方に対抗しうる戦力はあるかね？」

「該当する戦力で有力なのは、ノースカロライナ級とサウスダコタ級、アイオワ級です」

そう言ったのは、エジソン合衆国海軍長官代行だ。1934年にワシントン軍縮条約を脱退し、軍備拡張を進める帝国海軍に対抗すべく、アイオワ級戦艦は計画された。1936年の第二次ロンドン

軍縮会議の日本の脱退から建造計画は具体性を示す様になり、1938年には高速戦艦として形が決まる。

稀代の発明家トーマス・エジソンの息子であり、合衆国海軍長官代行であるチャールズ・エジソンは史実でも、このアイオワ級戦艦の建造を推進していた。1940年には長官職を辞し、ニュージャージー知事選に勝利。知事となった後には、アイオワ級建造を推進したその功績から、妻キャロリン・エジソンによってアイオワ級戦艦第2番艦が『ニュージャージー』と名付けられる。

「しかしノースカロライナ級やサウスダコタ級は条約に縛られた艦だ。アイオワ級に至っては建造もまだではないか」ルーズベルトは顔を顰めた。「それに相手は18インチの巨砲だ。こちらはせいぜいが16インチだぞ。いざ砲撃戦となれば、我が方に不利だ」

ルーズベルトは、戦艦『Y』の絶対性に疑いを抱かなかった。性能面でみれば明らかに『Y』型戦艦が勝っている。

「しかし、不思議でなりません」リーヒは言った。「何故、帝国海軍は戦艦『Y』を公表したのでしょうか？あれだけの戦艦をみすみす世間にばらすとは……」

「うむ、それは私も不思議に思った」ルーズベルトは頷いた。「新たに誕生した日本の内閣は、かのアドミラル・ヨナイが総理を務める」

「あの男は親米英派でしたね」リチャードソンは言った。「今回の公表は、確執のある帝国陸軍の仕業ではありませんかな？若しくは海軍の好戦派か」

「それでは反抗勢力にとって何の利益にもならないではないか」ルーズベルトは言った。「本件で米内内閣の支持率は急増、帝国海軍への志願者の数はうなぎ昇りという話だ。後者の説でいえば、海軍内の好戦派は喜ぶかもしれないが、同時に隠し玉を失ってしまう。陸軍にしてみれば、相手の肩を持ってしまう事になる。それに双方とも米内の株を上げる事は本望ではあるまい」

「ではアドミラル・ヨナイが？」スタークは訊いた。

ルーズベルトは頷いた。「そう考えるのが妥当だし、そう考えれば今回の一件が株を上げる為のプロパガンダと片付けられる」

この考えは海軍にしても政府にしても、もっとも望むべき答えだった。実際にこれが政治的なプロパガンダの下、築かれた情報公開で、戦艦『Y』が欺瞞の戦艦だとすれば後味も悪くない。しかし、逆に戦艦『Y』が実在して、これが事実だとすれば、『Y』への対策論議と公表の謎の解明、という2つの後味の悪い作業が残ってしまう。ルーズベルトや各国首脳が考えるのは、これを『黙殺』してしまう、という案である。

「しかしそうもいかないだろ？」ルーズベルトは言った。「私は世界最強の国、アメリカ合衆国の大統領だし、君らは誇り高き合衆国海軍の首脳陣だ。猿真似しか出来ん東洋の黄色猿が18インチ砲を備えた戦艦『Y』を造れて我が合衆国は造れない。その事実誰が喜び、誰が憤りを感じると思う？」

一同は沈黙するしかなかった。答えは既に分かっていたが、その事実は苦い。

「答えは 前者が日本、後者が合衆国国民だ」ルーズベルトは言った。「この問題を解決する為にも、戦艦『Y』に負けない戦艦を我が国で造り出すしかない」

アメリカ海軍内にも、戦艦『Y』に対抗しうる力は存在した。史実では1942年に完成した47口径18インチ砲やアイオワ級戦艦、モンタナ級戦艦がそれに該当する。伊藤ら『大和会』が望むのは、米海軍に機動艦隊の編成を怠らせ、戦艦に大枚を叩かせる事であった。

「アイオワ級は4隻、モンタナ級は7隻ほど造れば対抗出来る筈です」

と、高らかに告げるのはスターク大将であった。第8代海軍作戦部長であるスタークは、史実では1940年7月、『スタークス・

プラン』という合衆国海軍第4次拡張計画を打ち出す。同計画ではアイオワ級戦艦2隻、モンタナ級戦艦5隻、エセックス級航空母艦7隻の建造を軸とし、駆逐艦115隻、潜水艦43隻など合計13万tの艦艇建造が決定、航空機に至っては15,000機の製造が決定した。この13万tは当時の帝国海軍連合艦隊の総戦力147万tに匹敵するものであり、帝国海軍に短期決戦を促した一因でもある。

しかし今回の一件を受け、新たに刷新された『スタークス・プラン』は軸が変わった。史実では2隻の建造が予定されていたアイオワ級は4隻、モンタナ級に至っては7隻の建造が定められる事となった。

一方、史実では7隻のエセックス級航空母艦は4隻に減った。第2次、第3次海軍拡張計画『ヴィンソン・プラン』で既に建造が決まっていたエセックス級と加えても、総数は8隻。史実に比べれば大きな損失といえる。それに戦艦『Y』が公表されたとはいえ、第二次世界大戦が不成立した今の現状では、スタークス・プランを成立させる『両洋艦隊法』が制定するのは史実よりも遅くなってしまうのは目に見えていた。更に、戦艦『Y』に早く対抗させたいとアイオワ級・モンタナ級の早期建造を願う海軍側の妥協により、駆逐艦・潜水艦等の艦艇の建造数も大幅に削られてしまっている。更に時間が長引いたその分、艦艇建造は遅れてしまった。

「予算を捻り出すのは厳しいぞ」ルーズベルトは言った。「ただでさえ不戦風潮が蔓延しているのだ。国民は戦争の道具より、経済面での保障を望んでいる」

「ではジャップが造った戦艦『Y』が、我々の裏庭である太平洋上を縦横無尽に駆るのを指を咥えてみているというのですか？」スタークは反論した。「それでは合衆国海軍の尊厳と、合衆国国民の安全保障は完全に瓦解してしまいます。太平洋は荒れ、ジャップの天下となる」

「そうではない。そうではないが……」

「大統領閣下」リーヒは言った。「スターク作戦部長の話ももっともですが、戦争だけが交渉方法ではありません。恐らく日本は外交カードの1枚として、戦艦『Y』を出したのです。ならば彼等は極東での恒久的平和と、米国との確固たる関係を求めているのでしよう」

「相手はジャップだ。我々が開国し、国として認めなければ今頃植民地だった国だ」スタークは言った。「戦艦『Y』は外交カードではない、脅迫の手段だ。奴らは戦争を望んでいる」

「ならば何故、我々も戦力を持つとする？」リーヒは訊問した。
「先手を打たれたからです。これは安全保障上の最善策だ」スタークは言った。「逆に問いたい、何故戦争を望まない相手が戦争の道具たる戦艦　それも超弩級戦艦を保有しているのでしょうか？」

「……『Si vis pacem, para bellum』」
リーヒは言った。「汝平和を欲さば、戦への備えをせよ」という古代ローマの格言だ。どう解釈して貰っても構わないが、今の場でいうならば、「平和を望むにはまず戦力を」という所だろうか？日本はアジアでは最強かもしれないが、世界からみればまだ弱小国だ。そんな国が、大国に対抗すべく戦力を保有する前例は、今立っているこの国だよ」

「確かにな」ルーズベルトは言った。「だが相手は黄色人種だ。我々白人とは根本が違ふ。剣の切っ先を向けられたならば、我々もまた剣を抜かなければならん」

アメリカの実情からも分かる様に、世界はこの事態を危惧した。特に先進国は、自称先進国の大日本帝国が超弩級戦艦『Y』を造ったという事実に対し、沈黙と否定を続けた。しかしそんな中において、イギリスはライオン級戦艦、ソ連はソビエツキー・ソユーズ級戦艦、フランスはガスコニユ級戦艦の開発・建造を目指し急ぐ。

そんな中、大日本帝国は51cm砲搭載型戦艦『超大和型』の建造に手を付け始めていた。時に1940年1月、『1940年代戦艦建造競争時代』黎明期の事である。

第29話 戦艦戦線異状なし（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第30話 老兵は空に行く

第30話『老兵は空に行く』

1940年1月29日

茨城県／土浦町

ワシントンDCで米海軍首脳陣が呼び出しを食らった翌々日、当の一件を起こした張本人の伊藤は、茨城県霞ヶ浦に居た。霞ヶ浦は茨城県南東部から千葉県北東部に広がる巨大な湖で、土浦周辺の湖畔一帯には帝国海軍の航空基地『霞ヶ浦飛行場』が存在する。伊藤は霞ヶ浦航空隊の飛行練習生の一員として、飛行帽を手に滑走路に足を運んだ。だが、ここに至るまでは、そう容易ではなかった。

霞ヶ浦飛行場の歴史は1916年に遡る。この年、帝国海軍は霞ヶ浦の湖畔一帯に1つの広大な航空拠点『霞ヶ浦飛行場』を建設する。陸地面積80万ha、水上面積290万haというその広大な飛行場の歴史は華々しく、そして闇に包まれていた。1929年には当時世界最大だったドイツの大型飛行船 LZ-127 『グラーフ・ツェッペリン』の愛称で知られる が寄港し、1931年には大西洋単独無着陸飛行を成し遂げたチャールズ・O・リンドバーグ夫妻が来日し、ここを訪れている。しかし、その華々しい歴史の裏で、霞ヶ浦飛行場は日本最大の航空戦力保有地であり、東日本随一の航空訓練拠点でもあった。予科練の訓練学校が設置され、数千の志願者が生まれた。

伊藤もそんな志願者の1人である。同飛行場の霞ヶ浦航空隊の訓練学校に入学、2年に及ぶ履修期間を過ごす事を決意する。しかし御年60歳、それに海軍中將の彼が遙か下の階級の訓練生達と混じって空の事を学ぶのには、誰もが合意しかなかった。

「何故です？」

誰もが発する第一声に対し、伊藤はある思い出を抱いていた。1945年8月、日本降伏時に再会した親友、レイモンド・A・スプルーアンスとの対話である。

1934年、交換留学生として入学した陸軍大学校の卒業間近、ウィリアム・F・ハルゼー大佐は航空局長アーネスト・J・キング少将から次のキャリアに空母『サラトガ』艦長の職を提示された。サラトガはレキシントン級巡洋戦艦の改装艦で、当時としては主力の大型空母だ。しかしながら、米海軍では空母・水上機母艦、航空基地司令官といずれも空に直結する職に対しては、『ウイングマーク』を取得しなければならぬ。当時、高級士官がウイングマークを獲得する常套手段としては、航空オブザーバー過程という上級士官中途教育コースがあった。

しかし、ハルゼーは納得していなかった。そこで、正規パイロットの道　パイロットコースを選んだ。これは、実際に飛ぶ経験を得ておかないとパイロットの心理は理解出来ず、航空畑を歩んだ参謀達に頼らねばなくなってしまうからである。当初は航空オブザーバー過程を選択していたハルゼーは途中、このパイロットコースに変更し、正規パイロット同様の過酷な訓練を受ける事となった。20代の若手パイロット候補生に混じり、ハルゼーは奮闘した。

彼はその時、52歳という老齢で、体重はゆうに100キロを超えていた。それ以前に視力の問題もあり、パイロットへの道は前途多難であった。ハルゼーは、最初の難関である視力検査を合格　何らかの不正を働いたかと思われる　し、ペンサコラ飛行学校に入学、1年間に及ぶ過酷な訓練を受けた。前述したように、訓練の中には同年代の人間は存在せず、20年代の次の世代を担う若手に囲まれる所となった。訓練は本当に過酷で、100キロ以上あった体重は1年で70キロに落ち込んでしまった。

その訓練の結果は、絶大であった。臨機応変な対応を可能とし、
第三者 航空参謀 の意見具申を通さず、即座に行動を起こせるに至った。その経験に驕らず、それでもなおハルゼーは自身を磨き続けた。1936年にはペンサコラ航空基地司令官、1938年には新鋭空母『エンタープライズ』『ヨークタウン』を基幹とする第2空母戦隊に就任し、1940年には米海軍の全空母の指揮権を事実上、握る事となる。

ハルゼーの話聞かされた伊藤は、その事をまだ覚えていた。米海軍が飛行経験を持つ人間のみに空母・水上機母艦・航空基地司令官の職を認めるのに対し、帝国海軍はそういった規定は存在しない。妥協人事で第一航空艦隊 世界初の機動艦隊 の司令長官に水雷畑一筋の南雲中将を抜擢したように、畑違いの南雲には航空参謀が付けば何とかなる、と考えていた訳である。実際、参謀長には草鹿少将が就いたが、草鹿は元来砲術畑で育ち、航空面でも時代遅れの飛行船が専攻であった。この点は、正規パイロットとしての訓練を受け、成長したハルゼーとは似ても似つかない。

そんなハルゼーの例を受けて、伊藤もその道 航空パイロットとしての道を歩もうと決意していた。これは『第七・第八艦隊計画』が米内に受理され、第八艦隊司令長官の職に就任するのを受けての決断であった。第八艦隊は空母『サラトガ』を始め、数隻の空母を含めた機動艦隊である。これまで軍政畑を歩み、空母指揮の経験が無かった伊藤は不安だった。そこで今回、霞ヶ浦航空隊の訓練学校に入学し、パイロットとしての知識と経験を積もうという訳である。だが、伊藤は既に齡60を迎え、肉体的・精神的にも心配された。『大和会』、山本派、航空主兵主義派の面々は皆一同に年に見合ったことではないと否定し、事故等も考慮して説得を試みた。しかし、伊藤はそんな声に反発し、一貫してパイロットの道を突き進む。この時期に訓練に参加する理由には、歴史改変の下準備を既に終えた事もあり、彼は自身が死んでも既に計画の行く末は然程変わらない事を知っていた。そんな態度を見てか、徐々に反発の声は止み、次

第に応援の声へと変わっていった。

伊藤の決意の裏には、1つの忌むべき過去が存在する。

1945年4月、伊藤は戦艦『大和』を基幹とする水上特攻部隊を指揮する任に着いていたが、当作戦には空母といった機動戦力は無かったが、少数の護衛戦闘機部隊が就くことになっていた。その1人の中に、伊藤叡中尉という兵士が存在した。その名前から分かるように、伊藤整一中将の息子である。

史実、伊藤叡は零戦に搭乗、上空より戦艦『大和』と艦隊を護衛する。彼は父親の最期を見送った後、神風特攻隊隊員としながらもF4U『コルセア』艦上戦闘機約16機との激戦の後、沖縄海域にてその生涯に幕を閉じた。時に4月28日、父伊藤整一戦死から3週間ほど経った頃のことである。それまでに彼は、B-29『スーパーフォートレス』迎撃に尽力し、幾度かの戦果を挙げていた。

それが史実の最期だったが、今物語では全く異なる。戦艦『大和』が坊ノ岬沖で最期を迎えず、父の最期を見送ることは無かった。しかし24日、沖縄海域上空にて、彼は史実通りにF4Uと戦火を交え、壮絶な最期を迎えるに至った。

息子を先に逝かせてしまった為に伊藤は悔い、泣き続けた。自身の不甲斐なさを常に痛感し、戦後も何度か自殺を考えていた。10歳下の妻や、3人の娘達との確執が生まれたのも、それが原因であった。彼が『大和』を護り、米軍による核実験を阻止しようとしたその経緯の中には、いつかこの戦艦に再び乗艦し、息子の後に続くという、儚い願望も少なからず絡んでいた。しかし家族の支え、『大和会』関係者との談話、親友レイモンドとの再会を経て、彼は自身を取り戻した。

そして今、彼は忌わしき存在 戦闘機パイロットの道に足を踏み入れようとしていた。過去の確執を解消し、背中に背負い込む全てを支えるだけの鋼の身体と精神を獲得することを心に刻み、霞ヶ浦飛行場に足を踏み入れる事を決意した。

パイロットの育成は手間と時間を要する。そこで制定された制度が『海軍飛行予科訓練生』であった。これは志願制の制度で、将来の航空人材の養成の為、1929年に設けられた。その中でも最大規模の養成拠点がこの霞ヶ浦航空隊であった。

伊藤は15歳 20歳までの青少年練習生達と混じり、訓練に参加する。履修期間が2年間であることや、体力面では年齢や階級から考慮される部分はあったが、待遇は殆ど変わらない。基礎的な座学を終えた後、彼は教官とともに三式陸上初歩練習機に乗り込む。60歳とはいえ、伊藤のその堂々たる風貌は老いを感じさせない。タイムスリップの影響も関係しているのかもしれない。

プロペラの風圧を避けながら、後席に乗り込む。座席バンドを締め、前席と後席を繋ぐ伝声管が連結する。前後席双方の意思疎通の為、伝声管は使用される。エンジンは唸りを上げ、出発の時を待つ。「よし、準備出来たな。出発するぞ！」

と、訓練教官は言う。階級にしてみれば伊藤は大上司に当たるが、あくまでも練習生である。その点は割り切り、全力で当たって欲しいと伊藤は訓練開始前に伝えていた。そうでなければ今回の訓練の意味が無い。1942年には第八艦隊が完全成立するので、履修期間は2年と予科練に比べれば少ない。常人以上に努力しなければならない訳である。

教官の声とともに、整備員が三式初歩練に駆け寄り、チョークを取り払う。機体は動き始め、所定の離陸位置へと向かっていく。心臓部たる『神風』二型エンジンが徐々にその唸りを上げていき、離陸位置に辿り着く。

一拍置いて、エンジンから轟く爆音がその音量を上げたかと思うと、強烈な風圧が機体を包み込む。速度が増していき、大地を滑走する。やがて機体は宙に浮き、気付けば空に上がっていた。

それは普段、旅客機に搭乗するのとはまた違う感覚であった。四

肢を進る物凄いG、肌を伝う爆風、360度全方位に広がる空中のその光景は、戦闘機に乗った証拠である。猛烈に吹き付ける風の風圧に顔を顰めつつ、伊藤は目を見開いて今を見据え続けた。

「よし、感覚を掴んでおけよ！」教官は言った。「手を離すから、一人で水平飛行をやってみろ！」

教官の指示を受け、伊藤は緊張と興奮を覚えつつ右手を操縦桿、足をフットバーに置く。慣れない手付きで舵を取るが、三式初步練は安定性の高いので、多少のミスも機体がカバーしてくれる。三式陸上初步練習機は1930年に制式採用された機で、その理想的な性能から太平洋戦争時も使われ続けられた。

「よし、離せ！」

無意識の内に、操縦桿とフットバーから手足が離される。操縦を再び担う教官は、急旋回して霞ヶ浦飛行場へと針路を向けた。

「筋は良いぞ」教官は大声で伝声管から言った。「なに、2ヶ月もあれば十分だ」

伊藤は笑みを浮かべ、伝声管越しに感謝の意を伝えた。そうこうしている内に機体は霞ヶ浦飛行場に到着し、伊藤の初飛行は幕を閉じた。

訓練開始から2ヶ月半、基礎的な技術を習得した後、三式初步練を伊藤は完全に乗りこなすに至っていた。60歳とは思えない体力と気力により、伊藤の駆る三式初步練は優雅に舞い、宙返りを繰り返す。そんな光景に、教官一同も驚きを隠せなかった。

そして1940年1月29日、いよいよ九三式中間練習機での訓練が始まる。飛行帽を手に滑走路上に現れた伊藤には、三式初步練による曲芸飛行や長時間の滞空経験から培われた気迫がみなぎっていた。

彼は飛行帽を被り、曙光に煌めく銀色の滑走路を歩み始めた。

第30話 老兵は空に行く（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第31話 針鼠の針

第31話『針鼠の針』

1940年2月11日

福岡県／小倉市

『大和会』の主は、居なくなっていた。

伊藤整一が霞ヶ浦航空隊のパイロット養成学校にて、2年間の履修を受ける為、『大和会』指揮する後任の人物が必要であった。その後任は、戦艦『大和』元艦長、森下信衛少将 現在は木下攻呉海軍大佐 が務め、元陸軍士官の原茂也が補佐を成す。森下は後々、復活した新生『大和』初代艦長となっているが、対空火器増強の為、『大和』は改装中である。そこに『大和会』への忠誠を誓った辻政信も姿を見せ、原同様に木下の補佐を担うことを伊藤に懇願、見事にその願いは受理された。

そして今、『大和会』の護り手達は小倉陸軍造兵廠に来ていた。

西日本最大規模のこの造兵廠は、東西に735m、南北に1325m、総面積は176,000坪を誇る。最盛期には4万人の従事者があり、太平洋戦争期には帝国陸軍には欠かせなかった補給拠点であった。この為、当初は原子爆弾『ファットマン』の第1投下目標に定められたが、自然は小倉市と陸軍に味方し、結果として長崎市がその戦慄の攻撃を受ける所となった。どちらにせよ、地球を揺さぶるほどのとてもない力を秘める大量殺戮兵器により、日本が2度の攻撃され、2都市が壊滅したのは事実である。

小倉陸軍造兵廠では、ボフォース40mm機関砲とM1カービン銃の国産化計画が進行していた。両方とも、坊ノ岬沖に現れた『夢幻の艦隊』から鹵獲した兵器で、ボフォース40mm機関砲は米海

軍の旧式戦艦から。M1カービンは輸送艦の1隻から回収された。小倉陸軍造兵廠はこれら鹵獲品を基に設計・開発を続けた。

零式小型貨物車 帝国陸軍版『ジープ』 は停まり、第3製作所の前で森下達を降ろした。頑強な石材と構造によって築かれた建物で、主に小銃・機関銃・機関砲の製造に使用されている。因みに第1製作所が軍用車両・軽戦車。第2製作所が化学兵器の製造を担っている。これらによって構成される小倉造兵廠は、約300棟の兵器製造屋舎とそれらを護る憲兵を有している。

現在、小倉を始め、国内の軍用車両製造を担う陸軍造兵廠では、零式小型貨物車と、零式半装甲兵車 帝国陸軍版M3ハーフトラック の大規模な製造ラインが確立されようとしていた。これは帝国陸軍の機械化を推進する方針で、東條英機中將による所が大きい。彼は陸軍航空總監の職に就いており、P-51『ムスタング』や帝国海軍噴進戦闘機『橘花』を基にした次期戦闘機開発計画を推進。またボフォース40mm機関砲の国産化による、国内防空体制の確立の為、現在開発が進む試製四十耗高射機関砲の開発にも尽力している。そして逆に、化学・生物兵器の開発・製造が大幅に削減され、その予算がこれら帝国陸軍の機械化に充てられるようになっていた。

これには昭和天皇による力添えが強かった。史実、風船爆弾に生物兵器を搭載し、米本土に差し向ける計画があったが、昭和天皇はこれを認めなかった。化学・生物兵器は元々維持費や人的被害を考えれば利益の少ない兵器で、第一次大戦の苦い経験から各国は使用を渋っていた。実際かどうかは分からない所だが、少なくとも第二次世界大戦では大規模使用は控えられ、逆に持ち主やその庇護を受ける人間が被害を被る方が多かったのである。

第3製作所の一角。試製四十耗高射機関砲はその鋭い砲身を空に向け、今にも敵航空機を撃ち落としそうな雰囲気醸し出していた。

「閣下、お待ちしております」

と、1人の陸軍将校が告げた。「『ボ式四十耗高射機関砲国産計画』総責任者、村岡航技中佐であります」そう言い、敬礼する。軍服の襟部に刻まれた、鳥の翼を象った記章がその所属を知らしていた。陸軍兵科の一科に当たる技術部は、兵技と航技に分かれている。『大和会』の3名も、折り目正しく進み出て敬礼し、名乗ってから、『帝機関』において受け取った計画視察許可書を村岡に渡した。村岡は許可書を受け取ったが、口から出たのは歓迎とは裏腹の言葉であった。「要求諸元通りに試作第1号は完成させましたが、若干の問題は存在します」村岡は申し訳無さそうに言った。「国内技術のみでの生産は不可能だという事です」

「つまり……外国の工作機械類が必要だと？」森下は訊いた。

「そうです。アメリカ製の工作機械等を用い、製作しました」村岡は言った。「現在、我が国の工業力は順調に進んでおりますが、要求通りの性能を全砲に持たせるとならば……」

「何を言うかと思えば戯けた事を」これまで黙っていた辻は言った。「それは貴公の弛みきった精神故の言い訳に過ぎん。我が帝国の工業力の推移は見るまでも無くアメリカ力を凌駕しつつある。それだけでなく、帝国軍人としての魂を見せればこんな問題、容易く解決できるだろうが！」

いつも通りの辻節が製作所内を充滿する。そんな事態に森下は顔を顰め、辻を睨み付けた。原も同様である。

「……失言でした」

と、辻は呆気なく言った。理屈はこれまでも『大和会』や伊藤から散々聞かされてはいたが、やはり『精神論』は条件反射並みに出てしまうのだろう。

帝国海軍でもそうだが、先行投資と言える新兵器開発はこの1940年を境に、徐々に実を結び始めていた。噴進戦闘機『橘花』、

長距離戦略爆撃機『富嶽』、一式中戦車、レーダー、ソナー、そして四十耗高射機関砲……。その他、様々な兵器が実用化第1歩を踏み出してはいたが、やはり『量産』という最大の難敵には敵わなかった。

「四十耗は陸海ともに必要だ。何とかならんか？」

と、森下は村岡に訊ねた。当時、帝国海軍においてももつとも費用が掛かり、尚且つ荷物となりつつあったのは、6年後の技術の確立ではなく、『夢幻の艦隊』だった。元々が核実験に使用される老齡艦や損傷艦ばかりの鹵獲艦群は、各地海軍根拠地の収容スペースを占拠し、多額の維持費を貪る存在であった。特に不必要とされたのが 旧式戦艦群である。

1910年代に就役した4隻の旧式戦艦『ニューヨーク』『ネバダ』『ペンシルベニア』『アーカンソー』は僅か21ノット程度しか出せず、空母の護衛が出来ない。機動戦力を基幹としていく連合艦隊としては、手に余る存在だった。

「ならば船団攻撃や護衛に使用するのは、どうだろうか？」

そう言ったのは、伊藤であった。この案は4隻の戦艦を大幅に対空火器、対潜火器等の設備を増強し、航空戦力や潜水艦といった脅威に対抗しつつ、敵輸送船団を叩くというものである。艦形や星条旗などから友軍の戦艦だと誤解する船団や軍艦に奇襲を仕掛け、敵補給線を断つ。それが当計画の目標である。これに際し、以前から開設が進められてきた海上護衛隊 『第八艦隊』艦艇を特別戦隊に含んだ艦隊で、伊藤が司令長官を兼任 に編入された。

その為にも、航空戦力に対抗する有力兵器、四十耗高射機関砲の量産化は欠かせない。史実において、第二次大戦中、『傑作対空火器』として君臨したボフォース40mm機関砲は、当時は日本も国産化を進めていた。しかし1945年、陸軍ではこの小倉造兵廠で数基。海軍では約35基程度しか製造されず、戦局を変えるには至らなかった。

「やはり時期を待ちませんと」村岡は言った。「軍でも高性能の

工作機械の国産化が進んでおります。工業力が増強され、我が国のレベルが上がれば、他国同様に国産化となるでしょう」

帝国陸海軍とも、新兵器開発とともに、基礎戦力の充実が求められている。旧式化する現行兵器の更新の為、数年・数十先を見越した計画よりも、実用性・信用性に富んだ新兵器の開発・製造が急務であつた。その為には、開発・導入用の大規模な予算は欠かせない。

今年、1940年は皇紀2600年である。国内では盛大な祝い事が度重なつて行われる。今月は冬季五輪、3月からは紀元2600年記念日本万国博覧会、そして8月は夏季五輪へと続く。国際的な協調・平和を望む日本の意識を世界に伝えるとともに、大規模な経済効果を狙うこれら行事は、日中戦争が成立していれば行われなかつた事業である。戦後日本、中国は五輪・万博という2大イベントを連続して開催させた為、異常な経済発展を遂げた前例が存在する。伊藤や帝国陸海軍は、ここから日本の工業・経済は軒並み発展していき、強固な軍の完成に繋がると確信していた。海路・空路を整備し、やがては輸送機・輸送艦に利用する兵器類の製造を急ピッチで進めていた。

10月には、そんな両軍が天皇と国民に向けた晴れ舞台である『観艦式』『観兵式』が予定されている。史実以上に成長した両軍がその成果を発揮し、11月で皇紀2600年は最高潮を迎える。

大日本帝国は確実に、栄光の道を邁進しようとしていた。

第31話 針鼠の針（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第32話 ワンショットライター

第32話『ワンショットライター』

1940年2月4日

神奈川県／横須賀

その運命の日、1940年2月4日は、第5回冬季オリンピックの開催日であった。『アジア初の冬季五輪』ということもあり、国内外の関心は高い。日本国内では、国を挙げての一大行事ということもあり、祝日のような盛り上がり。2月4日は日曜日であるを見せていた。札幌は観光客の到来による経済効果のみならず、インフラ整備による近代化が進められ、都市基盤が10年は早く整備された。

この日、伊藤は久しぶりの休暇を得た。札幌五輪の影響だろう。一旦帝都麻布に位置する私邸へと戻った後、彼は海軍大臣となった山本五十六と再会した。一回りも二回りも成長した伊藤を見て、山本は大層驚いた。筋骨隆々たるその体躯は、10月末に別れを告げた時とはえらい違いだった。予科練生や艦隊から移動してきた、若輩の練習生達と日々を共にし、過酷な訓練を受けてきた証拠だ。そうやって知識と肉体を潤沢にした伊藤は、必ずや第八艦隊を円滑に運用していくだろう。そう山本は確信した。

2月4日の午後には、横須賀の海軍航空技術廠に到着した。前年度までは海軍航空廠。通称『航空廠』という呼称だったこの機関は、『空技廠』と改称・改組がなされた。名称は変わったが、『航空廠』も『空技廠』も、原則は同じだ。横須賀鎮守府管轄下にあり、航空機関連の計画を統括する。

伊藤と山本の乗る車は空技廠の前に停まった。山本は身分を出入り口の警備兵に示して、施設内の会議室に案内された。

会議室の中に居た人間は2人のように軍服姿だったが、中には私服の人間がぼつりと存在した。よく整えられた軍人の体躯とは対称的な痩身で、技術者や科学者を思わせる趣があった。それもその筈で、彼等は三菱重工の社員だった。海軍航空技術廠長、和田操少将が2人を礼儀正しく敬礼して出迎えた。2人が席に座ると、自身も腰を下ろした。

伊藤は、会議室の一同が送る山本への視線に気付いた。次期航空機の三菱重工・海軍間で行われる第1回目の打ち合わせの場に、米内内閣閣僚　それも、海軍大臣の男が現れれば当然の反応だろう。「山本海相閣下」そう言ったのは三菱重工側の設計主務者、本庄季郎技師だった。「この度はわざわざこのような所まで足をお運び頂き、有難うございます」

本庄技師は三菱重工屈指の設計技師であり、九六式陸攻や一式陸攻の生みの親である。東大航空学科の出身で、流体力学に深く精通し、気骨のある人物でもあった。後に『ワンショットライター』の渾名で後世に伝えられる一式陸上攻撃機の設計に関し、海軍と行われる第1回目の打ち合わせの時、彼は海軍側が提示した双発機を否定し、四発機案を提唱した。これは海軍が望む四発機並の性能を誇る双発陸攻を製造するとなれば、必ず防弾面や防御火器面が疎かになり、生存性が保障されなくなる為だった。しかし海軍側としては、四発機は中島飛行機に担当させることで割り切っていた為、これを真っ向から否定した。

山本は頷いた。「君の才能の程、期待しておるよ」

本庄が次期陸上攻撃機案を話す間、伊藤と山本は居ずまいを正して、聞き入った。本庄の提唱するのは、一式陸攻の時にも提唱していた『四発機案』であった。

「九六式陸攻の後継機としての同機は、当初も話しました四発機として設計させて頂きました」本庄は言った。「配布した予想性能

諸元書をご覧下さい」

十五試大型陸上攻撃機

全長：23.5 m
全幅：32.54 m
全高：7.20 m
主翼面積：127.00 ?
自重：16,500 kg
全備重量：26,000 kg
発動機：火星一一型空冷複列星型14気筒×4
最高速度：470 km
実用上昇限界：10,100 m
航続距離：3950 km（正規）
：6200 km（攻撃過荷）
：7400 km（偵察過荷）
武装：爆弾・魚雷搭載量4000 kg
魚雷：838 kg 九一式魚雷改二×2
爆弾：60 kg 爆弾×18、250 kg 爆弾×8
：500 kg 爆弾×5、800 kg 爆弾×3
武装：胴体上方、尾部各1門 20 mm 機関砲×2
：機首1門、胴体両側各2門、胴体下方1門 7.7 mm 機
関銃×4
乗員：7名

現時点において、帝国海軍の航空打撃の主力を担うのは九六式陸攻だった。その名から分かる通り、九六式陸攻は皇紀2596年1936年に制式採用された。史実と違い、伊藤ら『大和会』の活躍により、日中間全面戦争が頓挫し、『渡洋爆撃』時に生じた九

六式陸攻の脆弱性も知る機会は無くなってしまった。平時故に予算は限られ、大和型戦艦の建造に多大な費用が掛かっていた為、1937年度には十二試陸上攻撃機 後の一式陸攻 は発注されはしなかった。結果1939年の『ノモンハン事件』まで、九六式陸攻は不動の存在であった。

事態が変わったのは、前述した『ノモンハン事件』に由来する。1939年5月から8月までの間、ソ連赤軍の猛攻に対処すべく出撃した九六式陸攻は、陸海航空部隊が撃ち漏らしたソ連空軍I-153、I-16戦闘機や対空砲火の前に甚大な被害を出してしまった。この戦訓から、九六式陸攻の脆弱性に気付いた海軍上層部は、新型陸攻の開発に取り組むこととなる。

この十五試大型陸上攻撃機は、その後継機としての位置にあった。

「同機主翼はジュラルミン製二本桁応力外皮構造で、燃料タンクはゴムによつて被膜します」本庄は言った。「更に炭酸ガス注入装置を加えます。消火設備としては自動消火装置を配備し、火災時には早期鎮火を行います」

自動消火装置は史実、1943年春頃から配備された。この装置は火災を電氣的に感知、自動で二酸化炭素を噴出して消火する。防弾設備が無理だった一式陸攻にとっては、唯一の対応策といえた。

「それで生存性は確立されるのか？」と、山本は訊いた。

「理論上は……」三菱の社員は言った。「しかし被膜するゴムは粗製だと聞いています。国内で開発中のクロロプレンゴムやFRPが完成すれば、ある程度の防弾性は確立される筈です」

FRPとは、ガラス繊維の中にプラスチックを入れて強度を向上させた複合素材である。主にガラス強化プラスチックを指す。実用化し、本格的に普及し始めたのは1944年、米陸軍航空軍の主力戦略爆撃機B-29『スーパーフォートレス』の登場以降である。

B-29では、燃料タンクと翼外板の間に防弾材として、FRPを挟んでいた。日本人が初めてその存在に気付いたのも、撃墜したB

- 29の燃料タンクに使われていたものからであった。

1940年の日本人がその存在を知っているのは、何を隠そう『大和会』の影響が大きい。化学業界は1931年からアメリカ・デュポン社が製造を始めたネオプレン クロロプレンゴムの商名とともに、このFRPの開発を始めてはいるが、やはり難航していた。史実でも日本は、B-17から回収出来たネオプレン開発に努めたが、結局は挫折している。

「だが、それだけすれば費用が掛かる」和田は言った。「生きるか死ぬかなどは、兵の技量でなんともなるものだ。実力と才能、そして不屈の精神があれば幾らでも生き残る」

「しかし和田君、そうとも言えんよ」伊藤は言った。「前年の『ノモンハン事件』が顕著な例ではないか。九六式陸攻には熟練の兵が乗っていた だが、戦死者は出た。これは機体の脆弱性から生まれた問題であり、十五試陸攻が発注された最大の要因だ。結論が確立しているのに今更、『精神論』など語るものではないよ」

1940年、こうして伊藤や山本らの合意もあり、十五試陸攻は四発機として誕生する。脆弱な一式陸攻の代わりに生まれた十五試陸攻は防弾・運動性ともに優れた機体であり、攻撃能力も非常に高かった。後の戦争において『五式陸上攻撃機』と命名された同機は、B-17にも肉薄する性能を見せ付け、米軍の度胆を抜くこととなる。

第32話 ワンショットライター（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第33話 海防は成りて

第33話『海防は成りて』

1940年3月18日

神奈川県／横浜市

1940年3月15日、北海道は札幌にて開催された第5回冬季五輪 アジア初の冬季五輪 に日本中が興奮冷め切らぬ所で、皇紀2600年記念万国博覧会が開催された。いわゆる1940年『東京万博』では、月島区は第4埋立地 現在の晴海 が開催地に選ばれた。公募から『晴海町』と命名されたその地で開催されることとなった万博のテーマは、『世界産業ノ発展、東西文化ノ融合、国際平和ノ増進』と、平和や発展を願う趣旨である。

しかしながら、史実ではこの崇高なテーマも泥沼化の表層を見せる対中戦争や国際社会の風当たりの前には、意味を成さなかった。1938年には、冬季・夏季五輪同様、その開催権を返上。中国との戦争や、対米英戦始まる1940年に向け、全ての力を注ぐ所となった。

今史の東京万博は、予定通り1940年3月15日に開催された。それから半年間 8月31日までの170日間 、万博は開催される。

予想統計では4500万人の入場が見込まれる今回の万博だが、まさに異例の万博であった。閉会が8月31日とならば、1ヶ月も満たない内に夏季五輪がとり行われる。これは皇紀2600年という、神武天皇 初代天皇 が紀元前660年に即位してから2600周年の節目となる神聖な年を祝うとともに、夏季五輪による国内外観光客の相乗効果を狙う。夏は湿気が多くて蒸し暑く、冬は

厳寒　という過酷で辺鄙な貧乏国日本は、今回の2大イベントにより、大きな躍進を狙っていた。

それから3日後の1940年3月18日に、森下信衛少将　木下攻呉海軍大佐　は鶴見を訪れていた。史実、横浜県鶴見区には、日本銅管株式会社の『鶴見造船所』が存在していた。これは、日本銅管が鶴見製鉄造船株式会社を合併させ、誕生したものだった。戦時中は、小型の海防艦を大量に建造した。当時、帝国海軍予備機関少尉だった石井利雄が海軍省の命により、造船技師として鶴見造船所に移籍した後には、帝国海軍では初となる本格的なブロック工法採用の海防艦を建造。鶴見造船所は海防艦量産に尽力したが、結局日本は敗戦に追い込まれてしまった。

その成功ゆえに、『大和会』は石井予備機関少尉に目を付けた。森下が今日来たのは、その石井予備機関少尉と面会する為だった。

森下は以前にも石井と会っていた。その時は伊藤がおり、山本の人脈の賜物によって築かれた面会だった。今回も山本によるお膳立て　という所は同じだが、伊藤は居ない。代わりに暗躍する参謀辻政信と、そのブレーキ役を務める原が同行する。

3人は鶴見造船所の敷地内を通って、事業所がある建物へ向かった。大量の人員が刷新され、日本銅管の社員や予備役将校の姿がよく目に付いた。その中には石井もあり、日々海防艦の量産に尽力し続けている。

到来した3人を見て、石井は折り目正しく敬礼する。そんな姿を見て、3人とも敬礼を返したが、森下は笑みを浮かべながら温かな握手を交わした。かつて、伊藤とともに面会したことを憶えていて、海防艦の建造具合はどうかね？と、新型海防艦の進捗のほどを訊ねた。

「藤伊閣下から提案なされた、『新型海防艦』の設計案をようや

く纏め上げました」石井は言った。「今年度には、ブロック工法・電気溶接式の新型艦量産に着手できそうです」

ブロック工法、電気溶接。量産に対応したこれらの方法は、まさに画期的なものだった。ブロック工法は、前もって船体を適切な大きさに区分したブロックを工場で組み立て、それを船台まで運び、船体を組み立てる工法である。この建造法は、船台で一から建造するよりも効率が良く、品質や作業性が高い為、第二次世界大戦時には急速に普及した。一方、電気溶接は1800年頃より認識されるようになった溶接法で、1930年代には帝国海軍も駆逐艦等に使用している。

これら2種類の技術は、戦艦『大和』にも一部使用されていた。ブロック工法は、46cm砲3基を搭載する戦艦には似合わない程にコンパクトな船体を実現し、しかも短期間に建造出来た。この工法を良く反映したのが『大和』で、同型戦艦『武蔵』とはコスト面や建造期間といった面において、大きな差をつける所となった。

一方、電気溶接もまた、『大和』に使用されていたが、その大部分を支えたのは専らリベット接合だった。これは1935年に発生した『第四艦隊事件』に由来し、台風等の自然災害に脆弱と判断された溶接は、リベット接合という元来の建造に立ち戻ることになった。しかし、リベット接合は衝撃に弱く、被弾被爆時には、被害が拡大してしまう。しかしそもそも溶接技術は未熟で、元々、純度の高い鋼鉄を要することもあって、日本では中々採用されなかった。

実際、溶接不備は米国の『リバティ船』にも起こっている。溶接はリベット接合と違い、作業が簡易で量産向けの技術だった。リバティ船はそんな溶接を全面に用いた、全溶接構造船であり、ブロック工法も同時に行ったことにより、1941年から短期間で2600隻という驚異的な数を建造した。しかし、その代償として疎かになった溶接手法の不備、不適合品質の鋼鉄の使用、構造上の問題が露見。これにより、沈没事件が多発した。一方のドイツは溶接

技術に精通しており、ビスマルク級戦艦やUボートにも、高度な技術や溶接性鋼を使用していた。

しかしながら、アメリカの建造数は目を見張るものだった。フレッチャー級の『日刊駆逐艦』や、カサブランカ級の『週刊護衛空母』しかり、リバティ船は戦時中に大きく貢献した。

戦争を『数』で戦う米国に対し、東條英機曰く『精神力』で戦っていた大日本帝国は、大量生産された潜水艦ガトー級により、護衛駆逐艦、タンカー、輸送艦を壊滅させられた。補給線を失い、敗戦に追い込まれていた帝国海軍は最後の手段ともいえる艦艇『コンクリート船』を建造した。これは1945年8月までに4隻造られたが、結局敗戦に至った。元々、上手く行く筈もなかったが、敗戦間近や危機的な状況下ということもあり、25隻も建造するという計画も存在する。

コンクリートを使用した船は以前から存在するし、実際に活躍している水上コンクリート建造物もあった。ただ、船ではなく、浮きドックである。『夢幻の艦隊』の中に含まれていたARD C-13も、コンクリート製の修理浮きドックだった。

「藤伊閣下より戴いた海防艦案を基に、設計を行ってみました」

石井は言った。「対潜・対空設備を充実させる為、四十五口径十二糎高角砲2基及び25mm三連装機銃で対空面をカバーし、対潜面では新型爆雷投射機を18基、最高120個の爆雷を搭載させます」

「建造期間は？」森下は言った。

「9 10ヶ月を見越しております」石井は言った。「経験と機械類の充実が進めば、更に早い建造・量産が行えるかと」

その石井の答えに森下は頷いた。

「ところで……藤伊閣下は？」石井は言った。

「軍務に就いておられる」森下は言った。「じき、閣下も視察なさるだろう。それよりも、君には多数の海防艦を造って、来年には

創設される海上護衛隊に送って貰いたい」

「了解しました」石井は言った。

戦争に際し、政治・経済的な現実を理解出来る。だからといっていいとも言えない。うわべの戦果　主要海戦や大規模作戦時を繕う為だけに兵站面の注意を欠き、用兵を疎かにするのがいいとは、誰もが思わないだろう。しかし時に、戦艦や空母といった大捕物を成す為には、多少の犠牲は厭わない。補給線の防衛が不備となり、数多の輸送船・タンカーが太平洋上に沈んだのも、見過ごされた。伊藤はその結果も知っていたし、それに対処する『海上護衛隊』の長として、補給を絶やさぬことを固く心に決めていた。

そして1940年3月18日、その決意の第一歩となる海防艦が、産声を上げた。

第33話 海防は成りて（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第34話 血の掟

第34話『血の掟』

1940年4月16日

ドイツ／ベルリン

首都ベルリンの黄昏の空は、ブランデンブルク門を茫と浮かび上がらせた。この『平和の門』の輪郭を付けた夕陽は、桃と金色と杏の光の帯を引きながら、西の空に沈む。アプヴェーア本部の一室に立ち、そんな窓外の光景を見据えていた品川健海軍中尉は、再び室内に目を向けた。何の変哲も無いオーク材のテーブルと、椅子が3つ。その1つには『大和会』所属の原茂也。そしてもう1つには、眼鏡を掛けた老齡の男が座っていた。

勿論、この男は『大和会』でもなければ、無知な一般人でもなかった。彼に尊敬と敬意をもって接する者は『指導者』と呼び、憎悪と敵意をもって接する者には『反逆者』と蔑んだ。ある者は、好ましくない人間に対し、彼の名を冠して、『トロツキスト』と呼んだ。

そう、彼とは レフ・トロツキーである。

1879年にウクライナで生を受け、1929年に『鋼鉄の人』、ヨシフ・スターリンによって祖国を追放されたトロツキーは、史実では1940年8月20日に死を迎える。破滅の階段に突き落とし、てくれた男、スターリンその人の暗躍により送られた刺客ラモン・メルカデルによってピッケルで頭部を負傷、死亡する。逃亡先のメキシコのことであり、メルカデル自身は僅か20年という懲役期間を刑務所で過ごしただけであった。

しかし今物語では、その悲惨な歴史も変えられようとしていた。

不変的に会う事は無かつたであろう品川健中尉と面会したからである。彼は御年24歳の青年将校だが、生まれは大正14年 西暦にして1925年生まれであるが、今年は1940年。だとすれば、彼は本来15歳である筈だろう。だが、その常識は『時間旅行』という概念を通せば、不変的なものではなかった。

トロツキーは2人が黙っているのを不満に思い、鋭い視線を差し向けた。

「貴様らは何者だ……という顔だな」『大和会』の一員、元帝国陸軍の原は流暢なドイツ語で言った。それをアプヴェーア？課

外国情報収集担当 のロシア語翻訳士が、訳してトロツキーの耳に伝える。相も変わらず怪訝なトロツキーは、「フン！」と鼻息を荒げ、原の顔を睨み付けた。「せいぜいあの屑野郎に伝えてくれ

“地獄で会おう。皆、お前の為に用意して待つてる”……とな」

一時の沈黙の後、目を半眼にして、再び原を睨み付けた。「……どうした。何故早く俺を殺さない？」

「……いや」原は言った。「手荒い召集をして、勘違いをしたかもしれないが……」

「手荒い だと？」トロツキーは唸った。「頭に麻袋を被せられ、メキシコから潜水艦で数週間の旅をしたことがか？」

今から3 4週間前、メキシコに居たトロツキーは拉致され、ここまで連れてこられていた。何が何だか分からず、潜水艦に乗艦していた時にも、乗員には一切事の説明が無かつた為、トロツキーは怒り心頭であつた。

「貴方も少しはあの時の状況が理解出来ていた筈だ」原は言った。「ピッケルを持った1人の男。それを振りかざす1人の男。そしてそれを止めた数人の男……」原はトロツキーの前に跪いた。「危機的状況下に置いたことは詫びましょう。しかし、貴方を助けたのは我々であり、SD（SS情報部）に身柄を引き渡さなかつただけでも感謝して頂きたい。まるで中世の騎士団の隊長気取りな妄想癖のヒムラーか、良識的なナリス海軍中将であれば、どちら側にその

身を置いたらいいか　貴方なら分かる筈だ」

その問いに関しては、無論カナリス中将のアプヴェーアに付くとトロツキーも考えた。非人道的で極端な優生人種思想を唱えるSS。その内部組織であるSDもまた、親組織と性質が同じことは明白である。共産主義やユダヤ人を酷く嫌うヒムラーに付けば、1週間と身が持たなくなることだろう。

「分かった。その点については感謝しよう」トロツキーは言った。「だが、その前に全てを説明して貰いたい。そうでないと、私としてもどうしようもない……」

「では貴官がご説明致します」そう言ったのは、品川中尉だった。

タイムスリップ前、品川は海軍兵学校第73期生の海軍中尉であった。第73期は戦時突入後初の卒業生であったが、その就学期間は通常より2年4ヶ月ほど短縮されてしまった。結果、800名以上の経験不足な生徒達は戦争に放り込まれ、多数の死傷者が出た。

一方、戦艦『大和』へと乗り込み、通信士となった品川は、激闘に巻き込まれることとなる。かのレイテ沖海戦では、若干19歳の少尉　にきび面の垢抜けない青年将校　として戦闘に参加。通信戦において大きな貢献を果たすのだが、栗田中将の行動により、意味を成さなくなった。

その後、4月の『沖縄特攻』が決定する。彼はそれ以前から物書きとして有名な存在で、帝国海軍が勝利するという内容の架空戦記を幾つか書いていた。それは彼自身、戦争前は物書きとなるのを夢としていた為で、家柄や皇国の存亡のために、それを捨てたに過ぎなかった。余暇時間は執筆に充て、幾つかの作品を仕上げては、誰かに読んで貰っていた。

人前では帝国が米英連合軍に勝利するという内容の小説を書き、『大和』艦内の士気を高めた彼だが、裏では戦争批判の小説も幾つか書いていた。それを上官に見つかり、艦長有賀幸作大佐に告げ口

されたことが、伊藤整一と『大和会』との出会いであった。有賀と偶然、談話をしていた伊藤はこの小説の話聞き、それと同時に上官に引きずられる形で出頭した品川は、伊藤との直接面談に至る所となる。

「何故これを書いたのかね？」と、伊藤は言った。品川が書いたものは、それまで知られていた『大日本帝国大勝利』といった内容のものではなく、戦艦『大和』が米機動艦隊に沈められ、やがて日本本土に米英軍が侵攻される。そして、日本は米国領の1つとなる結末を迎えて幕を閉じる。

「それは……全ては潮時だと思ったからです」

「潮時とは？」

「多くの者が噂しておりますが、この『大和』は沖縄に困難な戦闘をしに行くと」品川は言った。「あそこには、米機動艦隊が常駐しております。戦艦の時代が終わった今、数百の戦闘機に『大和』が万全の対応を出来るとも思えません。『武蔵』もシブヤン海に沈んだ」と聞きますし」

「成程。先を続ける」

「貴官は海軍兵学校に入学して1週間が経ち、他の同級生が沸く4年前の12月8日のあのから、帝国はこの戦争に必ず負けるだろうと確信しておりました。そしてその考えは憶測の域を出て、現実となってしまうた」品川は言った。「貴官はレイテ沖の惨劇以前から書いていたこの『現実』の小説を仕上げ、閣下や有賀閣下に拝見して頂くと思っておりました。最早、猶予あらずのこの戦争を終える為に……」

「これをどういうか……反戦運動といおうか……」伊藤は言った。「いや、何もなかった方がよからう。君の考えは分かるが、御上から最下層まで、認めたくない人間は多い。それらを認めさせるには、架空の『現実』より、眼前に広がる『現実』の方がよからう」

「しかし閣下！それでは多くの命が……」

「それが承知だからこそ、『大和』はかの地に赴くのだ」伊藤は

言った。「御上も、大枚を叩いたこれを失えば、その愚かさに気付くだろう。だが、そんな都合で付き合せては、君らには酷かもせん」伊藤は顎を擦った。「どうかね？私の伝手で、君を『大和』から別の艦艇に異動させてやってもいいが」

「大変有り難い申し出ですが お断りさせて頂きます」品川は言った。「全てを無とし、軍務に一層励んでいく次第であります」

結局、戦艦『大和』が沈まず、品川以下乗員は、淡々とした生活を送る。そして戦後、彼は『大和会』に加入した。彼は『大和』の経緯の記録を付けるとともに、戦後日本が進み行く1日1日の記録者でもあった。かの1946年7月1日に時を渡って行き着いた1937年当時、呉鎮守府司令長官を就任していた加藤隆義中將を説得したあの『スクラップノート』も、彼の記録の一部であった。あれによって多くの過去の人間を説得し、事を円滑に進められてきたのである。

1937年、藤伊一 という新たな名を伊藤が手に入れると、品川は藤伊の従兵となった。そして森下信衛や原とも関係を深め、経験を積む。

1938年には、川島賢治 という伊藤同様に新たな名を得ていた品川は、海軍中尉として駐米経験を積んだ。1年間の駐在期間中、必要として英語を学ぶこととなったが、それまでに英語が達者な伊藤整一や、海外経験上から英語も話せる原の薫陶を受け、困ることはなかった。そして1939年には駐独武官となるが、彼は『帝機関』とドイツ諜報機関 主に『SD』や『アップヴェーア』を繋ぐ、架け橋的役割を担っていた。この時の経験や、原の薫陶によってドイツ語も上達した品川は、豊富な経験を得る所となった。

「事は、我が大日本帝国の諜報機関が、被疑者ラモン・メルカデルの動きを察知した所から始まります」品川は言った。「貴方の秘

書であるシルヴィア・アゲロフと接触。今年の4月には、メルカデルが貴方の別荘に出入りしたことから、行動を起こしたのです」

「何故、メルカデルが奴の手先だと分かった？」

「ある筋の情報です。それではどうやら、8月頃に行動を起こすようでしたが……」品川は原の方に目を向けた。「アプヴェーアと我が方の監視員により、貴方の暗殺を謀ろうとしたメルカデルを始末する許可が要請され、こちらが要請を許可して奴が行動を起こす前に鎮圧しました。そして貴方を拘束、Uボートによって大西洋を横断し、現在に至る訳です」

「奴に指示されたNKVDの仕業か……」トロツキーは呟き、腕を組んだ。「奴め。今頃、分厚い肅清者リストと睨みっこしながらペンを持ち、鬼の形相を浮かべていることだろうな。その横で立つしかないNKVDの屑野郎が、行き場の無い怒りをぶちまけられるんだ。いい気味だよ」

「ですが危険はまだ去っていません」品川は言った。「当面、アプヴェーアの監視下の中で、厳重な防衛線を敷かせて貴方を護ります」

「その見返りは？」

「……ばれていましたか」

「当然だ」トロツキーは言った。「世の中、敵対する人一人を簡単に殺してくれるようなお人よしはいない。逆に見返りを求めない方が、かえって不安になる」

「では言いましょう」品川は言った。「現在、ヨーロッパは平和を謳歌しておりますが、近く大規模な戦争が予定されています。そして、その敵対国には、貴方の祖国ソビエトも含まれることでしょう」品川は更に続けた。「そこで貴方には、ソ連国内を攪乱する役割を担って頂きたい。貴方は英雄で、虐げられた人間なら、誰もが貴方に付き従うことでしょう」

「奴が奴なだけにな」トロツキーは言った。「私が奴の後継者を選ぶなら、目と鼻と口が付いて、足と少しの脳みそがあれば、誰でも

もいい。それだけ、奴はおぞましい存在なんだ」

「では貴方は？」

「それは皮肉か」トロツキーは言った。「それとも大真面目か？」

「失礼しました。勿論、大真面目ですよ」品川は言った。「スターリンを失脚させるのが我々の狙いですが、その後のことも考えなければなりません。その点、良識があり、政治の才がある貴方は適任だ」

そして品川は窓に目を向けた。黄昏色に染まっていたベルリンの街は薄黒く染まり、ブランデンブルク門は、少しずつその輪郭が薄れていっていた。夜の帳が降りたのだ。

「本件は内密なことです。SDにも通しておりませんし、ヒトラー総統にも話しておりません」品川は言った。「つまり、全権はカナリス中将閣下に委ねられております。その点も考慮に入れ、早いに返事をお願い致します。では……」

「いや、その必要は無い」

そう言ったのは、トロツキーだった。「この場で決める。私は本件に対し 賛同する」

トロツキーのこの決断は、帝国軍人である品川・原の人柄や、最後に品川が言った言葉があつてのことだった。帝国海軍は本件やその他、ドイツ転覆の為の策を独自に色々と練っていた。最終的に裏切ったりする可能性が、十分に否定できないからだ。その点で、反ナチ体制の強いアプヴェーア その中でも随一の反ナチ派 により、本件や別件が独自に遂行された。成功すれば巨大国家ソビエトを味方とすることができ、失敗すればスターリン・ヒトラー兩人による激しい粛清の嵐が吹き荒れることとなる。その嵐が向かう行き先は、ことごとく深紅に染まった“血の道”となることだろう。

しかし、トロツキーは決断した。祖国への帰還を……。

第34話 血の掟（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第35話 鷲は舞い立った

第35話『鷲は舞い立った』

1940年10月14日

アメリカ合衆国

その日、ウィリアム・J・ドノヴァンはホワイトハウスの2階、大統領のプライベート・ルームで、フランクリン・D・ルーズベルト大統領とその特別外交顧問ハリー・L・ホプキンスとともに居た。ポトマック川を渡り、吹き付けてくる秋風が窓ガラスを鳴らしていた。炎を滾らせる暖炉の前でドノヴァンはソファに腰掛け、2人と向かい合っていた。

ドノヴァンとルーズベルトは過去にも面識があった。2人はコロンビア大学ロースクール時代からの友人であり、現在でも親交は深い。また、『ワイルド・ビル』の愛称を持つ彼はニューヨーク・ウォール街の敏腕弁護士 という訳だけではなく、第一次世界大戦時の英雄でもあった。

「ミスター・プレジデント……」

ドノヴァンは心配そうに言った。「私を第一線に出すということは、随分と参られているようですね。例の『チェンバレン・シヨック』ですか？」

「うむ、そうだ」ルーズベルトは頷き、部屋の窓に一瞥をくれた。横なぐりの風の他に、別の雑音が響き、窓ガラスを震わせていた。その原因は、ホワイトハウス周囲を取り囲み、プラカードを掲げて街路を行進し続ける英国人デモ集団だ。

「先週のことだ。イギリス人も執念深い」ルーズベルトは言った。1940年10月10日、イギリスはハンプシャーの自宅にて、

英国首相ネヴィル・チェンバレンは人生の幕を閉じた。史実では1月9日にその人生を終える筈だった71歳の老人は、ドイツによるヨーロッパ蹂躞 第二次世界大戦が勃発しなかったが為に英国首相を務めていたが、やはり死に至ってしまった。

その死因は 暗殺である。9 m 銃弾を受け、心臓を損傷したチェンバレンだが、その犯人のほどは分かっていない。しかし、国内の親独派や世界中のドイツ人諜報員の暗躍により、その犯人は『アメリカ人』と、位置付けられた。米英両政府はこの不明確な噂を掻き消そうとしたが、英国政府内の親独派の耕作により、英国側はこれを『狂気のアメリカ人』 精神的疾患を患った、“ジョン・W・ブース”に憧れを抱く誇大妄想癖のアメリカ人男性 の犯行とした声明を発表。結果的に世界各地の英国人は反米意識を持ち、不買・デモ運動を開始したのである。

「しかし10月10日、確かに英国首相ネヴィル・チェンバレンは暗殺されました。犯人は『狂気のアメリカ人』 という噂で持ちきりですよ」ドノヴァンは言った。「どこぞの輩の仕業とはいえ、とにかくイギリスに誠意と真実を示さねば、我々は孤立します」

「だから君を呼んだんだ。それにハリーもな」眼鏡を外し、ルーズベルトは目頭を抑える。「元々我が国は第一次大戦の反省から、諸外国に介入しないという“孤立主義”を貫く構えだ。私も合衆国の青年を戦地に送ることはしないと約束してしまった。だからこそアメリカという国は今回の一件に関し、力に訴えた行動や浅はかな言動は実施出来ない」

「では、女性を戦地にでも送りますか？」ホプキンスは言った。「そういう言動が、浅はかだというんだよハリー」ルーズベルトは言った。「我が政権の支持率は1日に1%の割合で落ち込んでいく。これ以上の不信任を与えてはいかんぞ。例え冗談でもな」

全てを見抜かれ、ホプキンスは瞠目した。喉元まで出かかってい

た「一世・二世の黄色猿や、黒い連中、古来よりアメリカに住みつく野生動物も」という言葉は、胸の中に押し込めてしまった。

「チェンバレンが死んだ今、次の首相には誰がなるのでしょうか？」ドノヴァンは首を傾げ、訊いた。

現在、というよりそれまでも英国内には首相の正統後継者のポストはなかった。それは憲法上の問題で、そのポストとなる『副首相』が成立したのは、1942年2月のチャーチル戦時連立内閣である。チェンバレン亡き後、次の首相が誰になるかは確実に決まっていたのだ。

「例の『戦艦Y』は知っているかね？」ルーズベルトの問いに、ドノヴァンは頷いた。世界中　政府機関から一般新聞社まで、広域に公表された『戦艦Y』の存在は、多方面に恐怖と不安を招いていた。それは一般人から政府首脳陣まで、幅広く広まっていた。「チェンバレンはあの日本が建造を表明する戦艦に脅威を抱き、海相にチャーチルという男を擁立していた……」

「では、次の首相はチャーチルが？」

ルーズベルトは頷いた。「確定ではないがね。チャーチルは英海軍の戦備拡張計画を立案し、新型戦艦の建造に尽力していた。チェンバレンからは信頼されていたようだし、海軍拡張の為に停滞していた景気も良くなりつつあったようだから、国民にも深く支持されていたようだ」

「しかし、そのチャーチルという男、どちら側に付いているのですか？」

「現在は我が方に近い穏健派です」

ホプキンスは言った。「ですが、いつまでもそうとは言えません。新首相就任演説に先掛け、ヒトラーがイギリスに同盟の締結を呼び掛けていますので……」

「あのちよび髭男か……」ドノヴァンは呟いた。「奴はただか伍長ですが、口先だけは大將級と聞きます。みすみす手をこまねいていれば、同盟も結びかねませんでしょうね」

「だからこそ」ルーズベルトは卓上のウイスキー・グラスに手を伸ばした。「だからこそ、今日私は君とハリーを呼んだんだよ。君らには、イギリスとの関係改善の為、尽力して貰いたい」2つのグラスにウイスキーを注ぎ、ルーズベルトは更に話を続ける。「ハリー、君には国内に留まって私を補佐してくれ。そしてウィル。君には……」

ルーズベルトは一閃置き、ウイスキーの満たされたグラスをドノヴァンの顔の前に掲げ、手渡した。「私の“足” となってくれ」ルーズベルトは苦笑いを浮かべ、自身の足を示した。彼は半身不随で、足が不自由だった。「イギリスに赴いて、直接チャーチルと談判して貰いたい」

「米英両政府の関係修繕の“特使” ですか」ドノヴァンは言った。「失礼ながら、私は一介の弁護士ですよ？それにコロンビア大ロースクールでは落ちこぼれでした」

ドノヴァンはコロンビア大学ロースクール時代、成績は御世辞にも良いとはいえなかった。しかしその人柄や性格が親しまれ、教授達のお気に入りだった。

「学歴など然したる問題じゃないよ。肩書きに関しても、情報調整官というのを用意してある」ルーズベルトは言った。「要は結果と実績を残してくれればいいんだよ、ウィル。君は人に好かれる性質だから、この手の件には適任だと私は思うんだ」

ルーズベルトはウイスキーに満たされたグラスを持ち、一気に飲み干した。瞬時に喉仏がかつと熱くなり、胃へと続く。彼は顔を顰め、グラスを机上に置いた。

「2人には私の目となり、足となって欲しい。合衆国の危機の中で障害を持った大統領にはどうしても信頼出来る補佐役が必要なのだよ」ルーズベルトは言った。「分かったかね？」

「了解しました、ミスター・プレジデント」

2人はそう言い、渡されたウイスキーを飲み干した。

1940年10月16日

東京府/下谷区

9月21日から10月6日の間に行われた夏季五輪『東京オリンピック』は、盛況の内に幕を閉じた。東京五輪に向けた都市美観工事やインフラ整備、英語教育の推進によって世界に認められる国際都市となった東京は、史実より都市基盤が万全に構築され、10年は都市開発が進むこととなる。また、国際的地位の確立、産業活性、大規模な経済効果を得る所となり、国内経済は1920年以來の好景氣を迎えることとなった。

この日の午後、帝国図書館地下1階に設置された『帝機関』本部には、東京五輪で影の活躍者となった伊藤整一が訪れていた。彼は現在も霞ヶ浦航空隊の練習生として、実習に励んでいるのだが、9月21日の東京五輪開催初日、何故か東京の空を飛ぶという大役を任されていた。

「閣下でしたか。私にあのような晴れ舞台を用意して下さったのは」

伊藤が言う相手は、海相山本五十六である。9月21日の東京五輪開催式典時、伊藤は『式典特別航空隊』に抜擢、大日本帝国海軍の次期主力戦闘機たる『零式艦上戦闘機』に搭乗し、簡素な曲芸飛行をやって見せた。開催式典の目玉はこの曲芸飛行隊によって上空に描かれる『五輪』だったが、流石に1011ヶ月程度の練習量しか熟していない伊藤には回ってこなかった。伊藤自身は己の未熟さを確信していたので、逆に喜んではいたが、天皇陛下や世界の前で『メインイベント』という栄誉を成し得られなかったのは悔しい所だった。

「零戦はどうでした？」

「あれは速いですよ。老体に堪えましたね」伊藤は苦笑いを浮かべながら山本に言った。「三式初歩練や九三式中間練とは訳が違う。

あれの操縦桿を握っていた時、腕が？げて飛び墜ちないものかと不安でしたよ」

伊藤が搭乗することとなった零戦一二型は金星エンジン搭載の暴れ馬で、最高速度は500kmをゆうに超える。航空機という面は同じでも、最高速度が210kmの九三式中間練習機『赤とんぼ』や、それ以下の三式初步練習機では月とすっぽん程に、勝手が違い過ぎるのだ。

2人の談話はドイツ特務機関少佐、エヴァルト・オイゲン・ルートヴィヒ・シュミットの到着により、頓挫する。ヒトラーの特使であり、『帝機関』特別顧問であり、ドイツ特務機関少佐である彼は伊藤整一とヒトラーとムツソリーニが描いた『絵』を知る、数少ない人間の1人であった。

「アメリカが動きました」

開口一番、シュミットは言った。「今月末、米国政府より英政府に対し、ルーズベルト大統領の“代行”　つまりは特使が送られ、次期英首相ウィンストン・チャーチルの元に赴くという話です。チャーチル次期首相は『穏健派』であり、『現実派』に属します。つまり彼は、現政権や議会野党の血の氣が多い若手・中堅派議員達のように、親独・反米強硬思想を持たない……という訳です」

「それは……厄介だな」伊藤は唸った。チャーチルは第二次世界大戦時、英国民の心を1つにし、挙国一致内閣を築き上げた人物である。米国の経済・軍事力の程を知り、穏便な事態収拾を望んだ後に本件の日独伊3国の関与が露見すれば、戦争は必至であるばかりか、英国　英陸海空3軍は史実以上の力と憎しみをもって襲い掛かってくることとなる。そうなれば、戦局は分らない。

「その特使は誰だ？」山本は言った。

「諜報員の報告によれば、ウィリアム・J・ドノヴァンなる人物と」

「罠に掛かったな」そう呟いたのは、伊藤だった。「原の報告によれば、そのドノヴァンなる人物は、第二次大戦時代に設立される『OSS』局長という話だ。我々の計画には、絶好の人物だ」伊藤の言う『計画』とは、英首相暗殺計画であった。これは1回の暗殺のみならず、2回の暗殺が含まれた計画であった。

「筋書きはこうだ」伊藤は言った。「米国大統領代行のドノヴァンは、実は英首相暗殺の命を受けた諜報員で、2度目の暗殺計画を企んでいた。そして、新首相ウィンストン・チャーチルを暗殺。自宅は焼き払われ、家族ともども皆殺しにされ、証拠はことごとき消え去る。しかし、暗殺現場近くで何者か……ここはボディガードでいいと思うが、何者かによってドノヴァンは殺害され、遺体として横たわる。そして後日には、彼の宿泊したホテルの部屋からは暗殺を企てた証拠が次々と見つかり、イギリス警察は本件が、米政府による陰謀だと断定する……」

「手が込んでいるな」山本は唸った。

「当初から計画されていたものですよ」伊藤は言った。「作戦名は『三重殺作戦』」

三重殺　つまりは野球の『トリプルプレイ』に由来するこの作戦は、英首相暗殺を米国の陰謀と仕立てる為、米国人を暗殺者に立てて殺害。ドイツの諜報員が英首相を抹殺するというものだった。第1回目では憶測だけで、濡れ衣を着させる米国人は仕立てはしないが、2回目ではこれを仕立てる。そして2人を殺害してしまう。

「3人の死で、イギリスに反米意識を植え付けるのか」山本は言った。「戦時であれば、3人の死は許されるところか歓迎されようかし……」

「分かっています。無論、今は平時にあります」伊藤は渋面を浮かべた。「ですが、このドノヴァンという男、その男はOSSという米軍諜報機関の親玉。ブーゲンビル島上空にて、閣下を暗殺至らしめた一件に、少なからず関わっていたであろう男なのです」

「それに」シュミットは言った。「イギリスに決定的な反米意識

を植え付けるには、2人の首相の死と、ドノヴァンという暗殺者は欠かせません。1度の暗殺において甚大な反米意識を植え付けられたイギリスですが、それも憶測として風化しつつあります。大英帝国を崩壊せしめるというアメリカの陰謀　　という、確固たる既成事実を作ってしまうえば、今度こそイギリスは反米意識にドイツ・日本・イタリアの盟友となることを望む筈です」

そして大いなる陰謀は実行に移される。ドイツ諜報部員はイギリスに侵入し、アメリカ合衆国よりやってくる“友人”　　ルーズベルト大統領の『秘密の足』　　ウィリアム・J・ドノヴァンの到着を待つ。その歓迎の挨拶は拘束、感謝のプレゼントは　　濡れ衣。そして英国史上最悪の人殺しという称号だった。

第35話 鷲は舞い立った（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第36話 鷲は舞い降りた

第36話『鷲は舞い降りた』

1940年10月24日

イギリス／ロンドン

フランクリン・D・ルーズベルト大統領の“足” ウイリアム・J・ドノヴァンは新英首相サー・ウィンストン・チャーチルとの談話、という合衆国と英国との国家間の命運が掛かった使命を持っているが、それはいとも容易く崩されようとしていた。ロンドン有数の高級ホテルである『リッツ・ロンドン』 王侯貴族や著名人御用達の5ツ星ホテル 5階に宿泊し、時差ボケを解消する為、仮眠を取っていた彼は、目を覚ました頃には 四肢を椅子に縛り付けられていた。

ドノヴァンは瞠目し、眼前に立つ男の顔を見上げた。「クソッ、これは何の真似だ！」ドノヴァンは返答しない男に怒り心頭だった。「答えるクソ野郎！！黙ってないで」

流れるような動作で右脇を引き締め、前へ突き出してドノヴァンの胸に拳をめり込ませた。鋭いパンチは風を切り、数万ボルトの電流が流れたかの如き衝撃が、ドノヴァンの身体を駆け抜けた。苦痛にドノヴァンは息を呑む。目を大きく見開かれ、身体は椅子の中で動きを失った。こんな状況に陥れた相手はなおもドノヴァンを見下ろし、卑屈でも哀しげでもない無機質な表情を浮かべ続けた。

「ハア……ハア……」

ドノヴァンは息苦しそうに喘いでいる。彼は老体に鞭を打ち、身を震わせながら、どうにか口を開いた。「な……何を……」 ようやく、言葉らしい言葉が漏れた。

「何だと思う？」男は問いかけた。

「イースト・エンドの物乞い……じゃないよな……」ドノヴァンは心底戸惑っているようだった。ここは天下の5ツ星ホテル、リッツ・ロンドンだ。ホテル関係者や大金を払える客でないと、中に入ることをさえ許されない。

「そうだ。それは正しい。これでお前は1点リードだな」男は言った。

「残念ながらこの状況下ではリード出来ているとは思えんね」ドノヴァンは睨みながら言った。「勿体振ってないで用件を言えはいだろ？望みは何だ」

「サー・ウィンストン・チャーチルの命」男は静かに告げた。「それが望みだよ。もつとも、貴方が払うとは思えんがね」

「当然だ！」ドノヴァンは怒鳴り、椅子の脚を動かして男の前に迫った。「冗談は無しだ。勿体振ってないで、このクソツたれな状況を脱する条件を早く述べろ！」

男はかぶりを振り、憤慨するドノヴァンの鼻先に顔を近付けた。

「冗談じゃない。このクソツたれな状況を脱したいのならそうしろ」男は身を屈め、相手の耳元に囁いた。「でないと、娘のパトリシアの命は保証出来ない」

ドノヴァンは瞠目した。「貴様……」

1940年4月、史実ではドノヴァンは娘パトリシアを交通事故で失っていた。しかし歴史改変によって世界が変革された今物語ではパトリシアは存命、ドノヴァン一家は平穏な日々を過ごしていた。「忠告する」男は言った。「お前は要求に呑まなければならぬ。さもなければ、娘は不幸な死を迎えることになると思え。要求を呑めば、その命は完全に保証してやる」

「クソツ！貴様、本当なら地獄に送って」

男は右腕を引き、強烈な一撃をドノヴァンの腹にくり出した。彼はぐったりと力を失った。

「いいか、ミスター・ドノヴァン。やれもしない事をいうんじゃ

ない……」男は洪面を浮かべながら言った。「負け犬の遠吠えを吐くような男は、チャーチルには気に入られないぞ。ガッツを見せる
“ワイルド・ビル”」

1940年10月25日
イギリスノケント州

一面が緑に覆われ、漆黒に染め上げられた農道を、黒塗りの高級車が駆け抜ける。フーターハムから西に2マイルほどのこの地には、かの新首相ウィンストン・チャーチルが壮年期を過ごす一軒のカントリーハウスがあった。

『チャートウエル』として知られるその家の歴史は、1922年にチャーチル夫妻によつてこの地の80エーカー近い土地が買収される所から始まる。この地の溪谷の風景に魅了されたチャーチルの提案であり、邸宅の周辺には池やバラ園が造られた。そして、1965年までの約40年間の間、チャーチル一家はここに住み続けることとなった。

「どうやってチャーチル首相との会談を嗅ぎ付けた？」
スーツに身を包み、洪面を浮かべたドノヴァンは言った。

「米英政府内には我々の内通者が居るし、両首脳は脆い通信手段を用いていた。盗聴は簡単で、両者の思惑は筒抜けだった……という訳だよ」

当時、米英両首脳は秘密会談などの重要な音声通信には、短波での無線通信を使用していた。しかしこれは盗聴の危険性があり、ベル研究所が開発した『A-3』というアナログ方式のスクランブラーが用いられていた。残念ながらこのA-3は意味を成さず、戦時となる1941年頃には、米英両首脳の音声通信による秘密会談は、ドイツ軍に筒抜けだったのである。

「貴様は何者だ？」ドノヴァンは言った。「イギリス人のようだ

が、ドイツ人の血も混じっているとみた。まあ、さしずめドイツ軍諜報部のヒトラーの犬か、親独派の　いや、これでもやはりヒトラーの犬に違いないか」

「そういうことだ、ミスター・ドノヴァン。結論に至ってくれて嬉しいよ」男は無表情で言った。「だが、今の私はカナダの富豪でM I 6 米国支部局長のサー・ウィリアム・ステイブソンだ」

と、ステイブソンの名を語る男は言った。ウィリアム・サミユエル・ステイブソンは史実、M I 6 によって設立されるイギリス安全保障調整局（B S C）の長官だった。第二次大戦の開戦後、ニューヨーク、ロックフェラー・センタービル36階の『3603号』室に設置されたB S C 米国支局長となったウィリアム・ステイブソンは、ドノヴァンとチャーチルとの会談を手引き、ヨーロッパ旅行と扮してドノヴァンをイギリスへと渡英させ、ルーズベルトの特使をチャーチルの元に送り届けた。この時があつたからこそ、米英を中心とする連合国軍は北アフリカから侵攻するというチャーチルの戦略を採用し、かの『トーチ作戦』を決行させた。

しかし、カナダ人のステイブソンは既に居なかった。

「殺したのか？」

「そうだ」ドイツ人とイギリス人ハーフのステイブソンは言った。「チャーチルや家族、ボディーガードは俺やステイブソンの顔など知るまい。だが、私がステイブソンだと言えば、私は彼らの世界の中では、M I 6 のウィリアム・ステイブソンになれるんだよ」

ドノヴァンは悪寒を覚えた。「ところで、私に何をしろと？」

「簡単なことだ。出発する前にも言ったが、“チャーチルの命”をよこせ」

「何を言っているのか分からない」

「分からないだと？今更、しらを切るな」ステイブソンは言った。「やることは1つだ。この銃で何も知らないウィンストン・チャーチルを殺害しろ。ただそれだけだ」

そう言い、ステイブンソンは1丁のデリンジャー拳銃を手渡した。「俺にジョン・ブースの真似事をしろというのか？あのチェンバレンを殺害した　“狂気のアメリカ人”みたいにか？」

「率直に言えば　そうだ」ステイブンソンは決然と告げた。

「デリンジャーは隠し易い。チャーチルは『狂気のアメリカ人』の噂は元より、周りには流されない男だが、政府が寄こしたボディガードはそうとは限らないからな。それに、使い勝手も良い。至近距離になるから、ブースがエイブラハム・リンカーンを殺したみたいに、お前もチャーチルを殺せるさ」

「黙れ！」ドノヴァンはデリンジャーの銃口をステイブンソンに向けた。「ブースがエイブラハム・リンカーンを殺したみたいに、お前の頭を吹っ飛ばすぞ！」

「前にも言つたる……」ステイブンソンはワルサーP-38を懷より取り出し、ドノヴァンの額に向けた。「『やれもしないことを言うな』　と。追い詰められた人間は考えられないことをするものだから、今回の一件は水に流してやる」

「お前は娘の頭に銃口を突きつけた！」

「違う」ステイブンソンはかぶりを振った。「俺じゃない。“運命”が突きつけているんだ。この不条理な“運命”がな」

「言つておくぞ」ドノヴァンは言った。「もし娘に何かあったら、お前を生き地獄に叩き込んでやる。死んでも死にきれない永遠の苦しみの中にな！」

「好きにしろ」ステイブンソンは素気なく言った。「さあ、仕事の時間だ」

ケント州ウォーターハム西2マイル地点。ウインストン・チャーチルの邸宅『チャート・ウエル』

ルーズベルト大統領の特使、ウィリアム・J・ドノヴァンは大統領により与えられた権限により、チャーチルの書斎へと入り、その

懷に隠し持っていたデリンジャー拳銃を抜いた。

「何だと!？」

チャーチルが愕然とし、後ずさりする。書斎前で待っていたボディーガードがその異変に気付き、書斎の扉をノックし始めた。

「黙れ」

ステイブソンは言った。サプレッサー付ワルサーP-38を掲げ、扉の右隣でボディーガードを迎え撃つ。P-38より飛び出した9mmパラベラム弾はボディーガードの男の眉間をいとも簡単に貫き、同時に心臓に大きな穴を作りだした。

ボディーガードの男は倒れる。苦悶の表情を浮かべ、血に紅く染まったその姿を見て、チャーチルは瞠目した。「まさか……アメリカが我が大英帝国を滅ぼす　という噂は本当だったのか!？」

ドノヴァンは歩み寄って銃を突きつけた。

そして　銃声。デリンジャーからは香ばしい臭いが漏れ、薬莖とチャーチルが床に落ちる音が、書斎に響き渡った。

数分間の静寂の後、ドノヴァンは告げた。「ステイブソン、私は　」

そして　銃声。

チャートウエル近郊を走る黒塗りの車の中で、今はウィリアム・ステイブソンと名乗るドイツ諜報部員の男は、凍結した“あの時間”について振り返った。米国人でルーズベルト大統領代行のウィリアム・J・ドノヴァンは1940年10月25日ウインストン・チャーチルを殺害。そしてそれから1分も満たず、ボディーガードによって射殺　死亡したボディーガードの銃により、死亡したボディーガードの位置から撃ち放たれたの銃弾の一撃によって　された。その後、アメリカ人共犯者　ステイブソンと名乗る男により、家族も惨殺された。

そう、全ては始めからこうなる運命だった。

第36話 鷲は舞い降りた（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第37話 大和、戻ル

第37話『大和、戻ル』

1940年10月29日

神奈川県／横浜港

『天皇陛下』であり、『大元帥陛下』で在らせられる昭和天皇の御料車が御発輦なされたというのに、東京湾上空は今にも雨露を降らしそうな、不気味で分厚い黒雲に覆われていた。然る1940年10月29日の早朝、宮城を御発輦、鹵簿を横浜港へと進めさせ給う。沿道にて幾重にも整列された地元民達は、老人から赤ん坊まで、背後や前方にて睨みを利かせる憲兵や警察官の視線に身体中を穴だらけにされた。そして彼等は数ヶ月前からそうしたように、陛下の御料車メルセデス・ベンツ770グロースーが眼前を駆け抜ける前に頭を垂れ、跪いて迎えた。これに従わなければ、憲兵や特高の手によって引き摺り出され、天誅を受ける。

「陛下の御着輦というのに、嫌な雲行きだな」

御召棧橋にて、颯爽たる御英姿で御召艇に僑居なされた昭和天皇の姿を見て、米内光政総理は呟いた。米内内閣始まって以来、自身が関与する海軍関連の中では最大規模となるこの一大行事を成功裏に収めることは、内閣と帝国海軍双方に益を成す。それが1日でも多くの期間を事が起こし易い海軍主導の中で進められることと直結する。

「天候もありますが、警察と憲兵隊との間の溝のこともあります」
山本海相は言った。「恐らく、6年前の『桐生鹵簿誤導事件』がまだ残っているものでありましょう。憲兵隊は、警察には任せられぬと言いつ張り、その管轄を全て憲兵隊に移譲するように要請したとか…

…」

1934年、群馬県桐生市にて起こった『桐生鹵簿誤導事件』は、観兵式の視察に訪れていた昭和天皇一行を先導していた警部が誤って誘導した事件である。同事件は前代未聞で、関係者一同が処分されただけに留まらず1名の自殺未遂者を出したことで知られる。

事件は警察の権威を失墜させ、軍国化に直走る日本において憲兵隊の権力を助長させるのにも繋がった。

「で、君はどうしたのかね？」米内は訊いた。

「無論、その要請は却下させ、警察には引き続き近辺警備の方を務めて頂きました。警察の動員なくして陛下の御身体を万全にお守り致しません故」

米内は静かに頷いた。「それがいい」2人は御召艇に随伴する為、國務大臣専用の内火艇 供奉艇に乗艇する。灰色の波を蹴立てて、御召艇とその供奉艇、更に後ろを行く列外艇は進む。

前方の先導艇が鋼鉄の巨軀を発見するのにそう時間は掛からなかった。御召艇である金剛型戦艦第2番艦『比叡』は、昭和天皇一行を乗せた御召艇が近付くや否や、奉礼砲を天空に撃ち放った。比叡の咆哮が東京湾にこだまし、御召艇艦首に掲げられた天皇旗がはためいた。

殷々たる砲声の中を駆け進む御召艇とその一群は、その奉礼砲の後に始まった“奇跡”に目を疑うしかなかった。奉礼砲の砲声が殷々と轟き渡る中、黒雲に覆われていた筈の空は見る間に晴れ渡ってしまったのである。それまでは雲に隠れていた太陽が顔を見せ、紺碧の空が広まっていた。米内と山本は顔を見合わせ、信じられないといった具合の表情を浮かべた。

「幸先が悪い……」と思っておりましたが」山本は呟いた。

「そうだな」米内は頷いた。「案外、この国も運に見捨てられた訳ではなさそうだ」

御召艇艦首にて、堂々とはためていた天皇旗は儀仗兵の手によって外された。戦艦『比叡』に臨御なされた天皇陛下が乗艦されると、その天皇旗は大櫓頂に掲揚された。

先導艦という重務を担う重巡洋艦『高雄』が荒波高し横浜沖を動き出した所から、紀元2600年特別監艦式は幕を開けた。

第1列、その先頭の位置を陣取ったのは、満艦飾を纏った空母『赤城』だった。次に同じく同型艦を持たない空母『飛龍』、その後ろを空母『蒼龍』が続いた。本来ならば空母『加賀』も参加する所だが、改装中ということで参加は見越された。

次に水上機母艦『瑞穂』、軽巡洋艦『五十鈴』が並び、その後ろからは9隻の潜水艦が続いた。これら空母3隻、水上機母艦1隻、軽巡1隻、潜水艦9隻によって構成された第1列は縦一列に並んだ。空母群からは艦載航空機の大編隊が飛び立ち、空を埋め尽くした。その中には、今年採用された新型艦戦『零式艦上戦闘機一型』も含まれている。軽快な機動と卓越したパイロットの技量によって空を駆る零戦に、御召艦『比叡』艦橋にてその帝国海軍機動戦力の英姿をみそなわせ給う昭和天皇は魅了されていた。

しかし次の第2列に比べれば、先程の第1列の行進は前菜のようなものだった。

「針路維持、巡航速力16ノット！」

世界最大規模の艦橋にて、腹の底から張り上げられた木下攻呉海軍大佐 森下信衛元海軍少将 の声は、活き活きとしていた。かつて、落日の大日本帝国海軍の象徴 戦艦『大和』4代目艦長を務めていた森下は、再びこの場に帰ってこられたことを心より嬉しく思っていた。しかも、ここは負け戦ばかりで苦々しく思っていた戦場ではなく、天皇の御前となる観艦式の式場である。これほどの名譽は他にはなかった。

『乗員一同に通告する。本日は誉れ高き紀元2600年度観艦式

である』森下の声は伝声管から艦内へと駆け巡る。『我々は世界最大、最強の戦艦『大和』の栄えある乗員であり、陛下の誇り高き皇軍である。そのことを肝に銘じ、本日の後世に伝えて貰いたい』

森下は一問置き、更に続けた。『しかしこれを最高の栄誉と捉え、驕って欲しくはない。我々にとつての最高の名誉は、陛下に仇をなす敵が来たる時、これを掃討・撃滅たらしめんことである。その為にも、本日の特別観艦式を期とし、己を高めて欲しい。話は以上である』

戦艦『大和』艦内で喝采が挙がる中、第2列は一系乱れぬ戦列で横浜の海を駆ける。第2列は殿を務める『大和』を始め、『長門』、『陸奥』、『伊勢』、『山城』計4隻の戦艦が続く。その後方から航行するのは河内型戦艦『摂津』。現在は標的艦と『涼風』以下12隻の駆逐艦である。10キロメートル間隔で距離を置くこの単縦陣は、空母『飛龍』を先頭とする第1列とともに横浜沖を駆った。

昭和天皇を始め、一同が注目したのは何といつても『大和』である。史実では第2列に参加するどころか、完成もしていなかった『大和』が紀元2600年度特別観艦式に加わったのは、それが1946年の『未来』より時を越えてきた戦艦だからだ。然る1940年1月、帝国海軍が『戦艦Y』の存在を明らかにしたことにより、『大和』観艦式参加が決定された。

「流石は森下君だ。あんな凶体の怪物を……」供奉艦『加古』より戦艦『大和』と第2列の勇姿を目の当たりにした山本は呟いた。

「25日にチャールズが殺害されたことで、今回の観艦式の意味は変わった」米内は言った。

1940年10月26日

イギリス/ケント州

ケント州フーターハム2マイルに位置するウインストン・チャーチルの私邸『チャートウエル』1階の書斎には、死後10時間ほど経過したと思われる男性の死体が3体、床上に横たわっていた。アーロン・ワイアット警部はその場に居るケント州警察捜査班のリーダーだった。50代後半の男で、くしゃくしゃに丸められた紙屑のような、皺だらけの顔には気難しげなと熱意が見え隠れする。長年を連れ添ってきた煙草のニコチン臭が染み付いたワイアットは心臓に1発の銃痕を残す男の死体の前に立ち、しかめっ面を浮かべて死体の顔を見張った。

「これが首相か？」驚鼻を擦りながらワイアットは訊いた。

「ええ……」ケント州警察のウィンターボトム刑事は哀しげな声色を漏らした。「死亡推定時刻は25日の午後10時30分。死因は――」

「これだろ？」ワイアットはチャーチルの右前方に倒れた男の死体を差して言った。男はデリンジャー拳銃を握り締め、チャーチルと同じく心臓に銃撃を受けていた。「“狂気のアメリカ人”ってのは居たもんだな。こいつは“ジョン・ブース”の1940年版だ。今回のターゲットは英国首相だがね」

「推測するに……」ウィンターボトムは言った。「このデリンジャーを握った男がチャーチル首相を殺害。銃声に気付いたと思われるボディーガードから銃撃を受け、死亡したと思われます」

ワイアットは頷いた。「それならボディーガードは生きてた筈だ。何故死んだか、理由は分かるかね？」

「はい。あ、いえ……分かりません」ウィンターボトムは息を吸い込んだ。「恐らく、ボディーガードは犯人の反撃を受け、死亡したかと思いますが……」

「ふむ……」ワイアットは3体の死体を見下ろして唸った。「だが、銃弾を受けた状態で眉間や心臓を1発で撃ち抜けるだろうか。全弾を撃ちまくったとしても、銃撃を受けたパニック状態ではその

確率は極めて低い」ワイアットは顔を上げ、ウィンターボトムと顔を見合わせた。「これは複数犯の犯行だ」

ワイアットの中で何かが目覚めたことを、ウィンターボトムは悟った。ワイアットは一見、ヨレヨレのコートを着た老人だが、その奥底には途方もない怪物が眠っている。裏に大きな『真相』が眠っている事件に際し、ワイアットは“洞察力”や“直感”が異常なほどに冴えるのだ。

「その点に関しては、ある報告があります」ウィンターボトムは言った。「どうやら、ロンドン首都警察が密告によりリッツ・ロンドンを搜索したところ　ルーズベルト大統領直筆の特別権限書と首相殺害の計画書が見つかったらしいんです。スコットランドヤードは今回の一件を“国家規模の陰謀”と断定し、捜査にあたっています」

「きな臭い話だな」ワイアットは言った。「それなら複数犯の可能性は高くなる。それに　アメリカが計画した殺人事件だともな」ワイアットはポケットから煙草を取り出し、書斎を後にした。

首相を2度もアメリカ人に殺されたことによる政治・軍事不信、『チェンバレン・シヨック』と『チャーチル・シヨック』を受け、イギリスは逆境に立たされていた。ウィリアム・J・ドノヴァンとIによってデリンジャーで殺害されたチャーチルは、最期に対米戦争の必要性を訴える一文『チャーチルの遺言』　ドイツによって造られた偽装文書　と、暗殺前にチャーチルが考案していた、『チェンバレン・シヨック』によって経済不況に陥った英国経済を救う経済復興計画『チャーチルの遺産』を残していた。これを元手に勢力を強める英国議会对米強硬派はドイツ・イタリア、そして『戦艦Y』を表明した大日本帝国との軍事同盟を望んでいた。

「議会の若手議員や親独派が議会の大半を占め、国民の対米意識の最高潮に達した今に『戦艦Y』を世界にアピールする行事が行わ

れるとは……」米内は言った。「運命とは時に都合が良過ぎる時もある。これがまさにそうだろう。今、『大和』の勇姿を見せ付けられ、英独伊三国との軍事同盟締結は簡単に至ってしまうだろうな」

「しかし、それは望まぬ所でした」

山本の呟きに米内は頷いた。「伊藤君には悪いがな。元々、我々は平和の世を望んでいた筈だ。だが……」米内は唸った。「我々には3つの道があつた。『平和』『継続』『戦争』だ」

「今や、我々に残されたのは『戦争』ですね？」

「そうだ。背後の道が閉ざされた今、残された道を全力で突っ走るしかない」

「伊藤中将の話によれば」山本は言った。「伊藤中将の話によれば、今回の一件はドイツとの攻勢に備えたこと　との話です。アリア人のみを唯一の存在とするドイツと帝国は相容れぬ関係であり、そんなドイツと帝国の間の友好関係を完全に断ち切るには帝国陸軍を解体するに等しいこと。だからこそ、共通の敵である『アメリカ』を英連邦及びヨーロッパ各国とともに叩いて講和を果たした後、最終的にはアメリカとドイツを除く同盟各国とともに　ドイツと戦火を交える」

「血の為に血を　という所か」米内は呟いた。

横浜沖に6つの艦列が刻まれ、水平線の彼方まで連なる。紺碧の空には500機余りの航空機が無数の編隊を築き上げ、銀翼を連ねて式場に進む。その光景は日本国内にてニュース映画として放映され、世界にも公表された。そして、この中でその存在を知らしめた『戦艦Y』とその大艦隊によって、2人の首相を殺害され反米意識を高める大英帝国は　その同盟締結を切に願うドイツ・イタリア、そして日本との同盟締結を決意した。『日独英伊軍事同盟密約』の締結である。これは加盟4国が共通の敵に対する侵略行為を受けた場合、若しくは4国総一致による宣戦布告時に発動される秘密同盟

であつた。

第37話 大和、戻ル（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第38話 未来への灯

第38話『未来への灯』

1940年11月26日

東京府/麻布区

この日の1週間ほど前、11月20日に『日独英伊軍事同盟』は締結された。指導者が直接接触せず、世界にも公表せず、国際通信網によって確約されたこの同盟は、複数の条件の下に築かれた密約同盟だった。しかしその“密約”という特異な同盟関係は、アメリカという強大な敵に表立って戦えないことを表す。同盟の大定義は共通の敵アメリカへの抵抗であるが、現実的にアメリカの驚異的国力と経済状況、そしてその軍事力を考えればすう考えるのも当然であった。その為、当同盟は『経済的支援』『技術交換協定』という2つの条項を大前提として加え、水面下で行われることが明記された。これにより、4国は経済面での相互支援。そして、海路・陸路を用いた軍事・科学技術の交換を開始する。

大日本帝国は酸素魚雷、46cm主砲。ドイツはジェット機、戦車、潜水艦、V1・V2ロケット等先端技術。イギリスはレーダー技術、精油技術、対潜兵器『ヘッジホッグ』。イタリアはペニシリオン等医療技術……。各国が世界最高水準の技術を出し合い、互いにその改良・量産体制の確立を進める。それによって対米戦争前の戦力向上・近代化を図るのが、技術交換協定の要だった。既に『日独伊三国科学・技術協定』が結ばれていて、その技術交換は着々と進んでいたが、工業国では大先輩に当たるイギリスの生産指導を受けるということで、3国は『優秀な兵器の量産化』という夢を抱くようになった。やがてその夢は現実のものとなる。

その日、主不在の藤伊邸 『大和会』拠点 に原茂也が姿を見せたのは、その1週間前に締結された軍事同盟が関係していた。いよいよ計画の中核を成す『日英同盟』の締結が決まり、『大和会』と大日本帝国は軌道に乗り始めていた。その為、今後の“指針”に含まれる技術開発について議論すべく、『大和会』関係者の一部が集結したのである。

原は霞ヶ浦で飛行訓練生を勤める伊藤の代理だった。過去でも今でもヨーロッパ駐在経験が長い彼は、先の10月にはイギリスへと赴いた。そして11月に帰国し、伊藤不在の『大和会』を支える存在として、今に至る。本格的な戦艦『大和』就役が迫り、訓練スケジュールの詰まった森下信衛の代わりでもあった。

藤伊邸の居間に集まった面々を見て、原は不気味に感じた。長方形のテーブルには6つの椅子があり、それぞれに来訪者が座っている。その来訪者は 海軍大臣山本五十六。陸軍航空總監で史実における首相東條英機。現首相の米内光政。闇の参謀辻政信。そして『帝機関』総参謀長石原莞爾である。山本と東條。山本と米内といった具合に、よく皇居や霞ヶ関各所で顔を合わすことの多い3人が一緒でもさして何とも思わない。

しかし問題は 辻と石原のペアである。

『暗躍』という代名詞が良く似合うこの2人が引き合わされれば、ろくなことにならないと、原は心の中で呟いた。事実、今回の『三重殺作戦』を立案 大部分は伊藤の考えだが、まとめたのは2人、実行したのもこの2人だった。

石原が『大和会』に参加したのは、辻による手引きの結果だった。先の1937年、『盧溝橋事件』回避工作の中で顔を合わすことになった辻と石原はそこで面識を持った。盧溝橋の一件の日本側調査団を指揮する石原に対し、抗議する形で辻は顔を合わせる。そして1938年12月に辻が『大和会』に加入。役に立つ人物として辻は石原を伊藤に紹介し、両人の了解によって石原の加入も決まった。

そして『ノモンハン事件』で陸軍中枢部からの信頼を得た石原は、そのコネによつて『帝機関』の総参謀長に拔擢される。

「近頃、時計の針の回りが早く感じますなあ」

石原は居間の壁に掛けられた時計を見て、呟いた。「これも9年後という時間の経験と技術の賜物ですか。帝都の街々はまるで、時間を早送りされたように急成長した」穏やかな声で石原は言った。「そして陸軍は機械化。海軍は航空主兵化が進んでいる。これもまた、『大和会』の力……。『時』というものは、私を知る以上に凄まじい力を持っているのですな」

石原は呟いた。「かつて私は『最終戦論』を書きましたが、そこに『時』こそが戦争の雌雄を決する　と書き変えねばなりませんまい」

石原は視線を堂々たる風格の原に向けた。

「その万物を見極める才。後世の歴史家達は貴方を“智将”と讃えることでしょうな」原は言った。「こういう世知辛い時代で会う成り行きになったのが残念だ」

「尤もですな」石原は言った。「生憎様、そのような時代に向かわせたのは私です。いまや戦争という“怪物”は私の手によつて楔を断ち切られ、世に解き放たれてしまった……。しかし、それは事のほんの一端にしか過ぎない」

和やかな空気はそこで断ち切れ、険悪な空気が垂れ込めていた。

「ちよつと待て」東條は言った。「貴様、今度は一体何を企んでいる？悪いことは言わぬ。これ以上、闇の中に足をつっ込むんじゃない」

「それは要らぬ心配というものですよ、東條さん」石原は言った。「闇に足をつっ込むのは慣れたものです。それどころか、最近では私自身が闇みたいなものですからな」

「私は貴様を諭そうとしているのだ。勿論、せつかいなどではないぞ」東條は言った。「帝国と陛下を憂い、言っておるのだ。既にイギリスと同盟関係を結び、ドイツ・イタリアも含めた4国軍事同

盟が締結された今、これ以上の関与は必要ない。現実を見るのだ」

石原はかぶりを振った。「東條さん、それは誤りですよ。例えばギリスを同盟下に加えたとしても、帝国の絶対的優位性が確立されたとは言い難い」石原は言った。「確かに大英帝国は18世紀以来、世界を蹂躪し、支配し、統治し続けてきた。しかし、ヨーロッパの大戦と世界恐慌を経て、大英帝国にも落日が見え始めてきた。事実、3年前にはアイルランドが英国の膝元を離れ、独立を果たしたではありませんか」

「そんなのはただの世迷言だ！」東條は怒鳴った。「米国を恐れる恐怖心から口にしたに過ぎない。大英帝国やドイツといったヨーロッパの盟主が集う今、米国は貴様が想像しているものに比べて遥かに劣る国家に成り下がったのだ。恐るるに足らずだ」

石原は思わず顔を顰めた。この人は何も分かつてはいない。

「とにかく、いまの現実を受け入れようが受け入れまいが、お前は指示通りに行動してもらおう。満州の時みたいに、口答えすることは許さんぞ！」

東條の口調は蔑むようなものだった。かつて4期下の部下である石原が満州国で、自身と関東軍を否定し、口答えした記憶が蘇ったのである。満州国生みの親で英雄でもあった石原に対するライバル心を誘発された東條は、その後石原を人事によって左遷することとなる。しかし、今物語では重要な役職に就いた石原は、『大和会』における自身のポストまでも奪うのではないかと思い、またもや激突したのだ。

「東條さん、“指示”とは何です？」その言葉を告げたのは、

山本だった。「貴方は『大和会』の長であるのですかな？その記憶は私にはとんと覚えが無いが……」山本は東條を睨み付けた。「貴方は『大和会』と伊藤閣下に忠誠を尽くした筈だと思つのですがね」

「それは間違いです」東條はきっぱりと答えた。「私が忠義を尽くすのは陛下と帝国のみであります。『大和会』には、その意志に賛同したのみ」

「なら、『大和会』を脱し、日本籍を破棄しろ」米内は凄みのあ
る声で言った。「今日中にな」

「日本籍を破棄？何故私がそんなことを？」

「貴方は忘れていているようだが、『大和会』は陛下によって承認さ
れ、存在する正統な組織だ。貴様はそんな組織を否定した。それは
陛下の大御心を否定したに等しい」米内は東條を睨み付けた。「つ
まり貴様は陛下に背いたことになる。そんな貴様は最早皇国の民で
はない……“非国民”だ」

「それはとんだ妄想だ。甚だしいにも程がある！」東條は声を荒
立てた。「私は純然たる皇民であり、帝国軍人なのだッ！私は」

「東條さん、この『大和会』には階級も身分も関係ないのですよ」
石原は言った。「何しろ、『大和会』の皆様は時を超えてきた方々
なのですからね」

1940年11月23日、イギリスから十隻程度で編成された輸
送船団 通称『パイオニア船団』が出発した。パイオニア船団は
イギリス陸海空3軍の開発した新鋭技術や工作機械を満載した輸送
艦から構成されている。輸送艦の中には、後に連合国軍勝利に起因
する『チエーン・ホーム』対空レーダーや射撃制御レーダー、爆撃
機用長距離無線航法装置、更にロールス・ロイス・マーリンエンジ
ンやそれを陸上用に改造したミーティア・エンジンなどが積み込ま
れていた。

「このP船団はP-51に使用されることとなる、『マーリンエ
ンジン』を積載しています」原は言った。「ご存知の通り、P-5
1は後に米陸軍航空軍の主力戦闘機となる優秀な機体です。航続距
離は零戦を遥かに超え、より優れた火器・防御性能を誇っています
が、米国はその開発に立ち遅れることとなるでしょう」

原はそう言った。その言葉の確信の中には、マーリンエンジンの
米国への供給停止があった。これにより、米陸軍内では凡機である

P-51は生まれるかもしれないが、それ以上の性能のP-51が空を飛ぶ歴史が訪れることは恐らくないだろう。

「英国の手引きによる、シムミュード技師の招聘を予定していますので、もしかすればP-51そのものを生み出させなく出来るかもしれません」原は言った。「技師の来日が実現すれば、東條閣下の提案する『次期戦闘機計画』も一歩前進するでしょう」

エドガー・シムミュード技師はP-51の生みの親である。ドイツ系ユダヤ人のシムミュードは米国に亡命後、ノースアメリカン社の設計技師となった。史実では1940年、ドイツに対抗出来る米製航空機を求めた英仏は、P-40を欲した。しかし、当の開発元のカーチス社は生産ラインも整っておらず、無理があった。そこで英仏はノースアメリカン社にP-40のライセンス生産権を取得させ、生産させることを思いつく。

しかしそれはノースアメリカン社にとって、屈辱だった。これに当時設計技師を務めていたシムミュードは更に優れた戦闘機を短期間に初飛行させられる」と断言。僅か4ヶ月で設計を済ませ、7ヶ月で初飛行を実現させてしまう。

「残念ながら、P-51にはマーリンエンジンが無いと本領は発揮出来ません」原は英空軍に初期配備されたP-51を思い出した。当時、ヨーロッパに居た彼は新型機の噂を聞いたが、それは年を重ねることに強まっていた。「世界最強のドイツ空軍も、P-51には震え上がっていましたよ。あれはメッサーシュミットの戦闘機よりも遥かに優れ、遥かに多くの数をヨーロッパに送り込んでいましたからね」

その他、P船団からもたらされる技術はどれも希望が持てるものだった。対空レーダーとしては世界最高峰のチェーン・ホーム・レーダーはこの日、43年末までに関東平野全域をカバーさせる数を配備し、45末までには日本本土全域をカバー出来る数のレーダー

を製造することが定められた。また、対艦・対空用射撃制御レーダーは日英独伊4国による共同開発で必要負担を4分割、その品質を統一するとともに、生産の安易性を実現させる。こうしてイギリスの先端技術と工業生産技術を培うこととなった大日本帝国は、着実にその工業力を邁進させていた。

第38話 未来への灯（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第39話 ヨーロッパ同盟

第39話『ヨーロッパ同盟』

1941年2月13日

ドイツ

『ナチスの精神』と謳われ、ヒトラーやナチ党に残虐非道な使命を悟らせたとするこのドイツ第2の都市“ミュンヘン”の歴史は長い。中世を思わせる建築様式の建物群が聳え立った、その古風な景観の街は何故か予想以上の感銘と神聖さをいつも感じさせる。常に驚きで心を奪われる場所だった。そして今日のアドルフ・ヒトラーにとって、その感覚はエクスタシーとも言える域に達していた。混沌と欺瞞に満ちたヒトラーの胸の内は、興奮にはち切れんばかりだった。

SS隊員達がミュンヘンの街路を封鎖しつつ、興奮した群衆を遠ざけようと威勢を張る。しかし興奮はやはり冷め切らないようだ。無数の閃光が煌めくや カメラのフラッシュを焚いた為 メモ帳を持った記者達が殺到する。群衆の中、ヒトラーは毅然として前へ進み、SS隊員によって構築された道を駆け抜けた。

「SSの警備員達には、決して人前で露骨な群衆対処するなど下命しておけ」ヒトラーはここに至るまでに、SS最高指導者にあたるハインリヒ・ヒムラーに対してその命令を出していた。これは目前に迫る『ヨーロッパ同盟』締結に向けて、無用な厄介事を増やしたくなかったからだ。

ヨーロッパ同盟

通称『EU』は、去年1940年10月の『

英国首相暗殺事件』を受けて誕生した国際組織である。ヨーロッパに迫る仮想脅威　アメリカ合衆国やソビエト社会主義共和国連邦を位置付け、その脅威に経済的、外交的、軍事的防衛を協同で実行し、これに対処する。それには『EU憲章』第1条項である『集団的自衛』の行使が定められ、ヨーロッパ諸国のはつきりとした『対米対ソ団結防衛』の意志が世界に示されることとなる。

EUはイギリスを理事国とし、ドイツ・イタリア・フランス・オランダ等を主要加盟国とする。そしてカナダを除く英連邦加盟国とヨーロッパ各国の植民地国、大日本帝国が準加盟国として同盟下に入り、フィンランド等北欧諸国が、オプザバー国として同盟加盟国に続く。

ヨーロッパと全く関係の無い日本が同盟の『準加盟国』という位置につけたのは、イギリス・ドイツ・イタリアの力あつてのことだった。既に日本と軍事密約を結ぶ3国はEU加盟国の中でも大きな発言力を持っている。

また、ヨーロッパ各国にとって国政の要ともいえるアジア植民地国のことを考慮し、成し得た加盟とも言えた。EUにおいて発言力を持つ主要加盟国はこのアジア植民地と世界最強の海軍力　18インチの巨砲を持つ『戦艦Y』　を誇る日本との対決姿勢は危険だと憂慮し、イギリス・ドイツ・イタリアの日本副加盟国入りの提案を受け入れたのである。それに追従し、ヨーロッパ小国、準加盟国、オプザバー国も同意した。

日本の加盟が成った訳だが、カナダ・中華民国の準加盟国・オプザバー国化はこの頃には成し得ていなかった。これは米国との地理的・外交的面から2国が加盟を渋った為である。英連邦に属するカナダは仮想敵国アメリカに面した国だけあり　去年10月の『英首相暗殺事件』でも、米側への批判は極力控えている　中華民国はルーズベルト大統領と親交深い蒋介石が国家元首である為、無理もない話だった。しかしそんな2国も、後には加盟することとなる。

今回、ドイツ第2の都市ミュンヘンにヒトラーが訪問したのは、そんなEUの締結条約を結ぶキーパーソンだったからだ。後に『ミюнヘン条約』として後世の歴史に刻まれる、ヨーロッパ・アジア間における防衛に関する合意事項を謳った条約の締結は EU、“ヨーロッパ同盟”の誕生を意味する。

「ヨーロッパならびにアジア、アフリカ、中東諸国の国賓方々」ヒトラーは壇上のマイクを強く握り締める。「忘れもしない去年10月25日、イギリスにおいてサー・ウィンストン・チャーチル首相がルーズベルトの刺客により、その命を絶たれたことを思い出してください……」ヒトラーは目を瞑った。「思い出しましたか？確か、我々が見た10月26日付けの新聞には、その一文が大々的に書かれていた筈です。そう、『英首相、米大統領ルーズベルトの魔手に堕ちる』です！」

ヒトラーは拳を掲げ、眉を顰めて憤りの顔を群衆に見せ付けた。「ここでルーズベルト大統領の人間性について考えてみましょう。彼は1933年から今日まで、『ニューディール政策』という国家計画を続けていますね？ニューディール政策といえば、大規模な公共事業を行い、農民を手厚く保護し、労働者に救済の手を差し伸べましたね」ヒトラーは首を振った。「よく考えてください、その政策を。我々の遙か東に位置する長大な社会主義国家の指導者が行った、五カ年計画に似てはいませんか？」

EU関係者や群衆は唸り、頷いた。即ちヒトラーが言いたかったのは、ルーズベルトが共産主義者である ということだった。

『ニューディール政策』は、1929年に突如として訪れた世界恐慌を克服すべく、ルーズベルト大統領が1933年から行った一連の経済政策である。テネシー川流域開発公社『TVA』を始めとする大規模公共事業、大規模雇用と全国産業復興法『NIRA』による労働者保護、農業調整法『AAA』による農民生産の制限による農家の保護等、複数の経済対策が定められた。

だがそもそも、ニューディール政策はアメリカ人にとっては受け入れ難い政策だった。資本主義や個人主義　つまりは自由奔放を不文律とするアメリカ人にとってみれば、共産主義以上に毛嫌い出来るものはなかった訳である。しかし時は世界恐慌の余波が残る困難な時代であり、そんなことを言っていられる余裕はなかった。

景気回復と雇用確保の為、定められた同政策は1930年中ごろには経済回復の兆しを見せ始めてはいるが、それは現在下降気味になっていた。10月の『英首相殺害事件』に端を発する米不信により、対外輸出は軒並み停滞を見せ始めていたからだ。イギリス人による米製品不買運動も重なり、アメリカは益々物が売れなくなっていた。それを種に米国内の保守政治家グループは、ルーズベルト退陣を迫る運動を加熱化させていた。

「我々の敵はアメリカ　そして共産主義を崇拝するルーズベルトのような者達なのです」ヒトラーは言った。「指導者は信念を常に上手く使わなければならない。そう、信念はまさに　“火”です。正しく使えば人と道を照らす為の明かりをもたらします。しかし……」ヒトラーは言った。「使い方を一歩間違えば、全てを奪う危険な存在になりかねないのです。我々は信念を上手く扱う為、この『E U』を組織し、運用し、統制し　勝利する！」ヒトラーは拳を振り上げた。「我々は東西から迫る共産主義に断固たる決意と信念を持って対面し、勝利するのです。ご清聴、ありがとうございます」

拍手喝采が挙がる中　ヨーロッパ同盟は誕生した。『ミュンヘン条約』締結の為、各EU加盟国の代表者達は円形の机の上に置かれた条約調印書に集まり、列を成す。最初に調印したのはドイツのアドルフ・ヒトラー。次にフランス首相のエドゥアール・ダラディエ。3番目は新英首相のアンソニー・イーデンが続いた。

調印代表者の1人、英首相のアンソニー・イーデンはこの条約調印式で国家の指導者としての実力を証明しようとしている。初代エ

イヴオン伯爵のイーデンはダラム・カウンティの貴族の息子で、オックスフォード大学等エリートコースを歩んだ気鋭政治家だ。若干26歳で下院議員に当選、それから10年後には外務次官に就任した。35年から38年の3年間を外務英連邦大臣という高名な役職に就いていたが、1938年2月20日にこの職を辞し、後任のハリファックス子爵エドワード・ウッドに職を明け渡した。そして史実では、1940年のチャーチル戦時内閣に再び外務英連邦大臣として就任する。

しかし今物語では違う。1940年、チェンバレン元英首相の死を受けて誕生したチャーチル新内閣において、イーデンはもつとも早く閣僚として指名されていた。これは当時外務英連邦大臣に就任していたウッドが病気で倒れ、後任が必要となったからである。その白羽の矢が立ったのが、イーデンだった。イーデンの人事は3年間の外務英連邦大臣歴に加え、チャーチルの姪と再婚していたことがあり、親族としての関係があつたことも大きい。

だが、やはり同人事に大きく影響しているのは対米外交だった。経験を持ち、外交での立ち回り方を知るイーデンはチャーチルにとって、貴重な人的資源だった。チャーチルが首相を就任する前から対米外交政策について2人は話し合い、それはチャーチル暗殺前夜にも続いていた。チャーチルの基本方針は穏便な解決であり、イーデンもそれに同調していたが、そんなチャーチルの考えを踏み躪ったのが今回の暗殺騒動だった。そんな『チャーチルの遺志』を歪曲した形で継ぐこととなったイーデンは、義叔父にあたるチャーチルを殺害したアメリカ　ルーズベルト大統領　に憎悪を抱き、『日独英伊軍事同盟』や『ヨーロッパ同盟』の締結を決意したのである。

1941年2月15日

東京府

『今条約の締結は、世界を変える契機となるでしょう！』

そんなアンソニー・イーデン新英首相の言葉を区切り、同調印式は幕を閉じた。条約に明記された『対外への集団的自衛』は即座に実行され、EU連合国軍の整備を協同で行っていくことが定められた。スウェーデンのボフォース社は40mm機関砲を始めとする主力兵器をEU加盟国下では安価販売、及び破格のライセンス生産権を各国に売却することを決定。また検討中のEU統一制式拳銃として、ベルギー国営企業のFN社が自社製品のブローニング・ハイパワーを推薦した。そして、ドイツに建造を依頼したオランダ海軍の次世代巡洋戦艦は 史実よりも対空戦に特化した防空艦 その建造が始まっていた。

そんな団結し、躍進するEUの準加盟国に登録された大日本帝国もまた、EUの誕生を国を挙げて盛大に祝っていた。英海軍のP船団が到着し、ヨーロッパの技術陣も続々と来日する。

「これでひとまず安泰ですか？」

山本五十六海相は嬉々として告げた。「アメリカは確かに“世界の中心”ですが、“世界”を形創るのはヨーロッパです。つまりアメリカは四方八方を敵に囲まれてしまった形となる」

「しかし……」伊藤整一中将は洪面を浮かべた。「しかし……これでまた、戦争に一步前進してしまった。アメリカは対外輸出で成り立っていた国ですからして、対米経済封鎖などといった政策を検討するEUがそれを実行してしまったら」

「アメリカは経済不振を打開すべく、戦争を起こす と？」

伊藤は頷いた。「そうなるのは時間の問題でしょう。いわば“世界規模のブロック経済政策”です。EUという1つの国家が持てる資本や資源を外の国に供給しなければ、その外の国は袋小路に陥ってしまふ。となれば、その外の国は状況打開の為、『やむを得ない戦争』をしなければならなくなる」

それはかつての大日本帝国 “持たざる国”に該当する。植民

地や資源を持たない枢軸国は、経済不況打開の為に戦争を起こした。しかし、その持たざる国は『EU』という“持つ組織”に加盟した以上、打開の為に戦争はEUが不振にならなければ永遠に失われるだろう。しかし、そんなEUから蚊帳の外に出されたアメリカやソ連が手を組み、打開の為に戦争を起こしてしまっただろうなるだろうか？

日本は再び、破滅の道を歩むことになる。

「それにしても、今回のEU結成は突然過ぎる」伊藤は言った。

「成程、確かに……」山本は唸った。「外交筋ではイーデン英首相とヒトラーがその発起人と言うが、何だが腑に落ちませんな。本当にこれは2人の描いた“絵”なのでしょうか？」

「実は今日閣下を呼びましたのは、そのことについてなのです」

伊藤は険しい表情を浮かべ、言った。「去年11月の折、帝国図書館の『帝機関』本部にて、総参謀長の石原莞爾中将が、駐日ドイツ士官であり特務機関所属のシュミット少佐を呼び出した……とか」「しかし石原は総参謀長、帝機関に属するシュミットと話をしてもおかしくはないのでは？」

伊藤は頷いた。「ですが不穏な噂もありましてな。その後も石原中将は接触し、私邸にまで招いたという話もあります」伊藤は言った。「これは過剰な考えですが私が思うに、EUの生みの親は石原莞爾ではないかと思うのですよ」

山本は愕然として瞠目した。「それは憶測ですな？」

「はい」伊藤は頷いた。「確かに根拠や証拠はありません。しかし、あの男は何でもやる男です。満州国を建国し、英首相暗殺を指揮し、私の歩んだ歴史では戦争末期には東條の暗殺に関わっていた。あれの力を侮ってはなりません」

山本は顎を擦った。「成程、確かにEUは共産主義に対しても対決姿勢を取っている。あれは対ソ戦を強く願う男でしたからな」山本は鋭い口調に変わる。「実は去年の11月、奴は『大和会』の懇

談会で何かを企んでいる節を見せていました。そして東條がそれに言及し、逆にあの男は石原と米内閣下にのされて発言力を失ってしまった……」

「そうですか」伊藤は言った。「やはり……」

2人は唸り、黙り込んでしまった。

第39話 ヨーロッパ同盟（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第40話 戦艦よければ全てよし

第40話『戦艦よければ全てよし』

1941年2月21日

ドイツ/ベルリン

ほぼひとりで、品川健海軍中尉の両手がポケットに潜り込んだ。吹き付ける風は冷たく、品川は険しい表情を浮かべる。黄昏時のシユプレー川に流れる、黒い硝子のように滑らかな水面を茜色に染まった一隻の荷船が抜けていった。更に数隻の舟や遊覧船が一つの船団となって、あとからあとから上流から下ってくる。

「……品川君」

品川の背後で、男の穏やかな声が響いた。はっとして後ろを振り返ると、1人の男が立っていた。その男は、帝国海軍大佐で在駐独武官の小島秀雄だった。そんな小島は静かに品川の右隣に着いた。そんな中、不意に水をかき分ける轟音が聞こえてきた。と同時に、シユプレー川の川上から荷船のずんぐりとした鼠色の船体がゆつくりと突き出てきた。2人が待っていた船だ。蒸気機関の騒がしい駆動音は徐々に静まっていき、船体は川岸に停まった。品川は帽を脱ぎ、片腕を上げて左右に振った。それから少しの間、荷船からは何の応答も無かったが、やがて顔を黒くした1人の船員が出てきて、2人に手を差し伸べた。

「カナリス長官が船倉にお待ちです」

船員は静かに告げた。荷船の船倉には貨物ではなく、ヴィルヘルム・カナリス海軍大佐が乗り込んでいたのだ。この荷船もまた交易目的の私用船などではなく、ドイツ国防軍諜報機関『アプヴェーア』の工作船だった。

「大丈夫なのですか？」小島はカナリスに訊いた。「ゲシュポタやSSが監視している可能性も否めない」

史実でもそうだが、小島はカナリスと親交があった。海軍兵学校のエリートにして第4期卒の小島秀雄は、帝国海軍人としては珍しく『ドイツ好き』だった。大戦前には2回、大戦後は1回の計3回に渡り、ドイツに駐在する。当時の海軍内の風潮からしてみれば小島のドイツびいきは良くはみられないものだったが、彼はあくまでも『親独派』であって『親ナチス派』ではなかった。事実、『ドイツ人以上にドイツ人的』『ナチス以上の国家社会主義者』と評価された親ナチス派の帝国陸軍中将、大島浩とは犬猿の仲であったし、反ナチス派のヴィルヘルム・カナリスと親交を持っていた。今物語でもそれは健在である。

しかし史実とは違い、1938年の人事によって駐独武官としてベルリンに駐在している。これは『大和会』に力による所が大きく、原や品川との接触によって彼も『大和会』の一員となっていた。彼はカナリスとの仲によって『大和会』とアプウエア　カナリス大将　との関係を築き上げた功労者でもあった。

「何故？」カナリスは言った。「心配は無用だ。総統はEU結成に浮かれ、監視の目を緩めている。独断で行動しているヒムラーの御伽^{ss}の騎士団共は危険だが、十分に対処出来る」

小島はかぶりを振った。「ヒトラーを失脚させれるのは貴方だけだ。貴方は歴史上の陰謀に吞まれてはならない」

カナリスは笑みを浮かべた。「そんなことより、良い物を用意してやったぞ」そう言い、カナリスはそれまで座っていた長方形の木箱をこじ開けた。中から飛び出たのは、おが屑に塗れた長筒だった。筒の蓋を開けると、1枚の青写真が出てきた。

「これは……戦艦の設計図!？」

小島が呆気にとられて呟いた。品川もまた、それに瞠目した。

「そうだ。H級戦艦 通称“H41型”」カナリスは頷いて言った。「初期の“H型”を改良し、再設計された超弩級戦艦だ。君らの46cm砲を搭載し、現在建造されているH型を遙かに凌駕する」

「凌駕……。具体的には？」

「基準排水量10万t、全長309m、機関出力は27万5000馬力で速力30ノット。そして搭載主砲は20インチ^{50.8cm}三連装砲3基9門だ。これは最新鋭の射撃制御レーダーと連動させ、精密砲撃を実現」

「ちよつと待て、20インチ砲だと！？」小島は愕然とした。

カナリスは眉を顰めた。「ヒトラーは派手好きだね。大和型を凌駕する為、これぐらいの主砲を付けた戦艦を所望したんだ」カナリスは言った。「設計陣は従来の旧式戦艦の技術から大きくシフトチェンジを図った。日英両国によってもたらされた最新の建造技術を学び取ったからだ。そして、現行のドイツ海軍の予算・技術・資材・運用を考慮し、可能だと判断されたのが20インチ砲だった」

20インチ砲 即ち51cm砲は帝国海軍の『超大和型戦艦』構想でも上がり、試作品も造られていた。決して実現不可能なものではなかったが、ドイツ海軍単独での建造は難しいものだった。しかし、11月の『日独英伊4国軍事同盟』締結によつて英海軍の戦艦造船技術が持ち込まれ、H41型にも実現性が生まれる所となった。

「帝国海軍もこの時期、試製51cm砲の開発に取り組んでいるが……」品川は言った。「ドイツ海軍内での進捗具合はどうなのでしょう？」

カナリスは顔を上げ、品川と目を合わせた。「まだ開発も始まっていない」カナリスは言った。「竣工が45年以降であることや国内財政を憂慮して、フリッツ・トート軍需相やヴァルター・フンク経済相はH41型の建造に反対しているが、レーダー総司令官はこれに大賛成だ。ヒトラーも乗り気である以上、建造の可能性は高い

だろう」

超大和型戦艦の建造も順調に進む中、今回のH41型の登場は大事件と言える。小島もカナリスも内心それに気付いていたが、品川はドイツ海軍がそれを造ることに驚きを抱いただけで、その存在に恐怖や不安を覚えた訳ではなかった。

それは1938年の1月に遡る。青山南町の山本五十六宅に訪れた品川は、ドイツ赴任間近であった。伊藤とともに訪問した彼は山本に将棋を誘われ、それに同調して席に着いた。

「して、君は戦艦こそ最強だと思っていると聞いたよ」

世界最強最大の戦艦『大和』に乗艦していた品川は、未だに『大和』こそ最強だと自負していた。『坊ノ岬沖海戦』も無く、レイテ沖海戦では通信士官だった為、航空機の力を知らなかったのだ。そのことを知っていた伊藤は山本に話をし、山本は面白がって「一任して頂きたい」と提案したのである。

「はい」品川は言った。「要は“運用”と“支援”の問題だと思うのです。『大和』を全面に推した戦略を組んでおければ、大東亜戦争も変わっていただろう……と」

山本は頷いた。「では、君はこのままの駒で将棋を挑むとする」山本は飛車の駒を掲げ、裏を示した。「もし私の全駒が『飛車』だったとしたら……君は勝てるかね？」

「それは……」

「無理だろう？」山本は言った。「それが『航空機』の力だ。想像してみたまえ、『歩兵』を駆逐艦とし、『銀将』を軽巡洋艦、『金将』を重巡洋艦、そして『王将』を『大和』とでもしてみよう。まあ例えはどうでもいいが、要はこの陣容では移動に制限があることを感じて貰いたいのだよ」

「しかしこれは将棋であって」

山本はかぶりを振った。「戦だよ、これは。チェスのようなデー

ブルゲームとは訳が違う」山本は言った。「チェスは駒を分捕ることは出来んが、将棋は捕縛して戦場に再配置出来る。ある意味、もっともな机上演習とも言える」山本は更に続けた。「海戦として想像してみれば分かるが、君の艦隊は機動戦力がたった1つで、盤という制限された海域をちまちまと進むしか出来ないだろう。それに引き替え、私の艦隊は機動戦力を十二分に推し出したものだ。制約は殆ど存在しないと言つていい。私は即座に駆逐艦の守りを突き崩し、君の『大和』をすぐに詰めるだろう」

「閣下の申したいことは理解出来ました……」品川は言った。

「いやいや、君はまだわかつたらんな」山本は言った。「1マスしか進めない歩でも、なければ辛いものだ。歩落ちで取った歩も出せなくては、駒不足となる。それに、相手の飛車を奪い取ることも出来る。つまりは機動戦力のみで布陣は防御には使えん。攻撃こそ最大の防御」というのなら、話は別だがね」「では、戦艦というものもあながち使えない訳ではないのですね」品川は言った。山本は頷いた。「戦の程はそう簡単には読めんよ」

シュプレー川下流、ベルリン市中心部を3人を乗せた荷船は進む。川岸には壮麗な建造物が聳え立っている。プロイセン王国時代の宮殿、シャルロットテンブルク宮殿だ。辺りは闇に包まれ、ちらちらと光る月光によってシャルロットテンブルク宮殿の輪郭がかろうじて見分けられた。船倉から外の空気を吸いに来ていた3人にとっては、それで十分だった。

「EU海軍は本格的な増強に突入した」カナリスは言った。「イギリス海軍は18インチ砲搭載の新型戦艦のライオン級やジブラルタル級空母の多数建造、巡洋戦艦『フッド』の主砲を16インチに換装し、船体補強を施す近代改装を決定・開始した。フランス海軍はガスコーニュ級戦艦、オランダ海軍は3隻の巡洋戦艦、イタリア海軍は5万t級空母と18インチ砲搭載の新型戦艦。そして我が国

は18インチ砲搭載のH級をEU海軍で早く就役させ、20インチ砲を備えたH43型やグラーフ・ツェッペリン級空母の建造を進めている」カナリスは頷いた。「断言しよう。アメリカの大西洋艦隊はEU海軍の巨砲にのされ、北大西洋に散る」

「それはどうでしょうか」

品川は告げた。「戦艦は前時代の遺物。アメリカが新型戦艦を建造しているとはいえ、艦隊決戦という状況は生まれないでしょう」品川は言った。「それよりも機動艦隊に特化した駆逐艦・高速戦艦の集中配備を行えばワンサイドゲームで完封出来ると、私はそう思いますね」

「それが“未来”の海戦なのかね？」カナリスは不思議そうに言った。彼は海軍に入ってこのかた、砲戦以外の戦闘を行った経験が無い。熾烈を極めたフォークランド海戦では防護巡洋艦『ドレストン』艦長を務めていたし、その後も巡洋艦やUボート、戦艦に乗っただけで機動戦力に触れた経験が無かった。

「むしろ、今日の海戦と言うべきでしょう」品川は言った。「戦艦の世はいずれ終わります。それは確証出来ることなのです。いずれ戦艦という艦種が消え、航空機に唯一対応出来る対空火器で全てを固めた『防空戦艦』という艦種が出現するかもしれませんね」

「俄かには信じられんね」カナリスは言った。「まあいいさ。私はどっちみち陸上勤務だからな。海とは縁を切った。海の事は海の奴らに一任するよ」

第40話 戦艦よければ全てよし(後書き)

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第41話 空母長門

第41話『空母長門』

1941年3月10日

広島県/呉

帝国海軍における一大根拠地である呉の海軍工廠は、戦艦『大和』の第3次改装に向けて資材搬入が始まっていた。第1次改装では老朽化した船体の補強、部品類の交換・点検。第2次改装では新型電探、主砲、高角砲・機関砲の増設が行われた。これは1945年の終戦前、海軍が主砲を除いた全兵装を排し、終戦後およそ1年間は放置状態にあったからである。老朽化、度重なる戦闘を経て老朽化した艦体も大きな足枷であり、更に外の目を気にする為に作業は『秘匿』として、細々と行われていた。その為、本格的な大改装には約4年の歳月を有してしまったのである。

「遂に『大和』復活も目前か！」山本海相は連合艦隊司令部でもある戦艦『大和』会議室で声高らかに告げた。部屋には連合艦隊司令長官の吉田善吾海軍大将、艦長であり『大和会』の一員である森下信衛大佐、参謀辻政信陸軍中佐、連合艦隊司令部参謀長 史実では軍令部次長 伊藤整一少将、そして『大和会』代表にして現海軍中将であり飛行訓練生でもある藤伊一 5年後の伊藤整一が居た。彼等は近い戦艦『大和』完全復活に向けた、最終会議を行う為この場に集まっていたのである。

「しかし、閣下」吉田連合艦隊司令長官は言った。「この改装はいささか『大和』の信頼性を欠けさせ兼ねないものです。何しろ、試作の機関を『大和』の動力源にするというのは……」

一同は艦政本部から提出された、第3次改装後の推定性能諸元書

を見ていた。

第3次改装後『大和』性能諸元

基準排水量：65,000 t

全長：263.0 m

全幅：39.9 m

水線長：256.0 m

機関

主缶：口式艦本式専焼缶×12缶

主機：艦本式高中低圧式ギヤードタービン×4基4軸

出力：187,000馬力(計画)

最高速力：29.5ノット(計画)

航続距離：16ノットにて7,300海浬以上(計画)

燃料搭載量：6400 t

兵装

45口径46cm三連装砲：3基9門

65口径九八式10cm高角砲：14基

60口径ボ式40mm四連装高角機関砲：20基

60口径九六式25mm高角三機関銃：10基

76口径九三式13mm高角三機関銃：2基

装甲

舷側：410 mm

甲板：200 230 mm

主砲防盾：650 mm

艦橋：500 mm

搭載機：7機

防御性能面は艦隊決戦を想定した対超弩級戦艦級だが、その兵装

は大きく変貌した。機動艦隊護衛を想定し、副砲4基を増設せずに九八式10cm高角砲 長10cm高角砲を搭載、独自開発を目指して海軍技術陣が開発していた国産ボフォース40mm機関砲及び輸入品によって、『大和』は針鼠と化した。

そして、何より今回の改装の売りは機動艦隊の随伴を可能とする“速力”の獲得にあつた。これは元々使用していたタービンを陽炎型駆逐艦『天津風』用の新型タービンに換装するのである。

「だがね、吉田君。未来では大丈夫だった」山本は言った。「試作品に疑念を抱くのも仕方無し……と、言いたい所だが、時代はそうは言ってくれんのだよ。世界情勢と空母は待ってくれん。機動艦隊への随伴を可能とするものを配備しておかねば、国防は成り立たん」

実験艦である『天津風』に搭載された艦本式高中低压ギヤードタービン は、その馬力において『大和型』搭載のタービンを凌駕する。大和型戦艦にも搭載される口式艦本式専焼缶が圧力40Kg、温度400 という高压高温により、高性能化。駆逐艦1隻で52000馬力の出力が実現した。このボイラーから生まれる優れた蒸気と新鋭ギヤードタービンの力により、天津風は高速性を実現したのである。

一方、大和型の口式艦本式専焼缶は使用缶圧25kg、使用温度250 という設定がなされていた。これが初春型駆逐艦に採用されていた、艦本式高低圧タービンを回していた。この使用実績の高いタービンを、長期信頼性向上のため約10%にデチューン 性能下げし、1軸宛2組の構成で、4軸合計で150,000馬力としていた。

しかし初風型駆逐艦の2基2軸タービンの総合馬力が42,000馬力なのに対し、天津風は52,000馬力を実現していた。これを4基搭載し、10%デチューンした上で、29ノット以上という快速が『大和』に実現されるであろうと、艦政本部の技術陣は考えていた。

「天津風は島風型の実験艦ですが、史実では優れた性能を発揮しています」沈黙を貫いていた藤伊は言った。「更にこの動力源は改造空母である飛鷹型にも採用され、戦果を残しています。『大和』もまた、それに並ぶ戦果を今度こそ、残すことが出来ましょう」

「しかし藤伊閣下」辻は首を振った。「わざわざ駆逐艦の動力機関など付けずに、空母の機関を付ければ良かったのではないでしょうか？聞いた所では、翔鶴型空母の機関は16万馬力を誇っているとか」

藤伊は頷いた。「私もそうだが君も素人らしい。艦政本部の技術屋に聞いた話では、そのようなことはかえって『大和』の速力低下に繋がるといつていたのだよ」

「それはその技術屋が謀ったのでは？」辻は言った。

「いや」藤伊はかぶりを振った。「空母や駆逐艦、巡洋艦の機関を戦艦に換装するにはデチューンを施さなければならぬ。つまり16万馬力の機関を10%性能落ちさせねばならないことだ。これでは160,000馬力の翔鶴型空母用機関はその出力が10%デチューンされ、144,000馬力に落ちてしまう。これで分かるだろ？」

辻は唇を噛み締めた。「成程、本来の馬力よりも落ちてしまいますな」

「それが分かれば結構」藤伊は笑みを浮かべて見せた。「私も最初はそれで技師を困惑させてしまった。まるで旧体制の人間と変わらんよな？いつの間にか苟立ってぐちぐち言ってたよ」藤伊は首を横に振った。「大和の本来の馬力は168,000馬力らしい。これを信頼性など切り捨ててデチューンを施さず、ボイラーの圧力をもう少し掛けてしまえば、28ノット以上の快速を楽に得られるという話だ」

大和型に使用される機関は、本来新型のものが製造される筈だった。しかし、予算圧縮や開発の難航により、初春型駆逐艦用機関の搭載が止むを得なくなってしまう。そして、史実において世界最大

基準排水量65,000tながらも『アイオワ級』戦艦に6万馬力も負けてしまうという残念なものとなってしまった。

「今回、『大和』が18万馬力を実現したとしても、依然米海軍の『アイオワ級』に負けているのは明白だ」山本は言った。「であるからして、今後機関の新規開発を続けるとともに、『島風型』駆逐艦用の機関を『改大和型』に搭載するという案を立てている」

島風型駆逐艦は帝国海軍としては異例の高性能機関を載せた駆逐艦である。高压高温缶を利用した機関の生み出す出力は75,000馬力にも相当し、その最高速度は40ノット以上であった。もし機関の生産体制が整い、『大和型戦艦』の改良型である『改大和型戦艦』にこれを載せるとした場合、10%デチューンしたとしてもその出力は27万馬力は下らない。更に信用性を考慮して20%デチューンしたとしても、24万馬力の出力を確保出来る。

「しかし問題は多いと聞く」山本は言った。「どうやら艦政本部の話では、島風型機関の製造は困難だという話だ。それに30万馬力の出力に耐え切れるギヤードタービンの開発の問題も露呈している」

日中戦争の予算や未来の技術、英独との技術交流によって冶金技術は史実以上に躍進しているとはいえ、それは付いて回る問題だった。陸軍は海軍から供与された1946年度の米軍重機『夢幻の艦隊』の輸送艦に載せられていたものや英独の重機を基に国産重機の開発を始めていたが、難航していた。また、特殊鋼の良質化を図る為に尽力していたが、冶金技術の低さから以前上手くいっていない。とはいえ、2月からは国内統一の規格が定められ、EUの結成によってもたらされた冶金技術により、着実に成果は上がっていた。

そして『改大和型』や『超大和型』もまた、その実現性が高まっていた。

連合艦隊司令部のある戦艦『大和』は、呉の泊地で旧式戦艦に取り囲まれていた。それは伊藤ら『大和会』とともにもたらされた米海軍の旧式戦艦であり、ある程度の整備が済んでいた。これが北方や南方に対して威圧を掛ける為、『第七艦隊』や『海上護衛隊』の結成を待っていた。全艦は例外なくこの2つの艦隊に配備され、戦列に入る。

しかしとある一隻の戦艦は、全く別の姿に生まれ変わっていた。

「あれが『長門』ですか？」藤伊は工廠のドックに収容されていた艦艇を指差して訊いた。

「今はもう『鳳凰』ですよ」吉田は答えた。「去年進水し、来月には就航予定です。今日はその性能諸元を取り寄せております」

『鳳凰型航空母艦』性能諸元

基準排水量：36,210 t

全長：228.0 m

全幅：36.0 m

飛行甲板長：215.9 m

吃水：9.4 m

機関

主缶：口式艦本式専焼缶×12基

主機：艦本式高中低圧ギヤードタービン×4基4軸

出力：160,000馬力

最高速力：30.6ノット

航続距離：16ノットで8,700海裡

燃料搭載量：5,600 t

兵装

40口径八九式12.7cm連装高角砲：8基16門

60口径九六式25mm三連装高角機銃：12基36門

航空機搭載量：60機（常用）

：10機（補用）

装甲

舷側：305mm

飛行甲板：70+127mm

戦艦『長門』を流用し、空母へと改造された『鳳凰型』は強固な防御装甲を張り巡らせた重防御性と、優れた指揮通信機能を誇った。これは、長門がかつて世界最高峰の戦艦であったことによる。

「しかし残念ながら、艦の老朽化は否めません」藤伊は言った。

「何しろ、私の居た時代で既に26年、この時代で4年と計30年もの艦齢です。更に米軍による管理下に入ったこともあり、老朽化は加速していきましょう」

今時代に時空転移して以来、この長門は仮想敵国の戦艦よりも帝国海軍を悩ませる存在だった。老朽化した艦体補強工事、そして維持には膨大な予算が組まれたが、与えた成果は割に合わないものだった。元々、条約に則った長門型戦艦であることもあり、条約切れ後の戦艦『大和』のように公に出来る存在でもなかった。もし『大和』のように世界へ公表してしまったら、条約をはなから破っていた卑劣な国として、外交・経済面での不信は避けられない。

そんな長門に残された道は2つに1つだった。1つは同型戦艦『陸奥』のように海に沈めてしまいか、航空母艦として改造することである。

「長門は敵よりも前に、自身の老いと戦わねばならない………ということですね？」辻は言った。

藤伊は頷いた。「私が思うに、空母『鳳凰』は一航艦の旗艦として後方指揮艦にするべきかと」藤伊は山本や吉田の方に視線を向けた。「その重防御性能は言うまでもなく、過去には連合艦隊司令部も設置された艦です。その指揮通信能力は『天城型』巡洋戦艦を改造した空母『赤城』よりも優秀でしょう」

「失礼ながら、閣下」辻が感情を込めて言った。「指揮官たる人間は常に最前線に居るべきかと存じます。それこそ、戦の真理。兵の士気を高め、敵側には圧倒的な畏怖を覚えさせるに違いありません」

「なんだって？」吉田は渋面を浮かべて言った。「貴様は陸軍にその所属を置く身だ。それにただか中佐の分際の貴様に、帝国海軍の何たるかを語られる言われはないわ」

山本は咳払いをし、口を開いた。「吉田君の言った通りだよ、辻中佐。最前線に指揮官が身を置くというのは正しいかもしれんが、時に間違いでもある」山本は言った。「指揮官を失った際の士気の低下を考えてみたまえ。もし軍の最高司令官たる大元帥陛下が一海戦ごとに戦地に赴くことになったら。そこで万一にも崩御なされることがあれば、帝国は落日の国と化してしまう」

山本は更に続けた。「陛下は国を背負い込む御人。指揮官もまた、何万人の将兵の生命を預かる身だ。もっとも敵に攻撃を受ける位置に居続ければ、その立場に居るべき人間は次々と死ぬだろう……」

後に最前線で戦死することを知っていた山本は、そのことを深く考えていた。彼にとって恐れは無かったが、死ぬ気もさらさら無かった。

「君は最前線に赴くのだろう。しかし海と地　真逆の事象も考えてくれ。有能な現地地下士官達は無能な司令官に我が物面して欲しくないものだよ」

室内は静まりかえった。

戦艦『長門』から改造された空母『鳳凰』は、未だ呉のドックに鎮座していた。かつて世界最強だった主砲、41cm砲は撤去され、副砲もまた綺麗に無くなっていた。代わりに巨大な艦橋と、一面に広がる巨大飛行甲板が構築されている。そんな生まれ変わった姿は、近代的な洗練さと古風な荘厳さを併せ備えて醸し出していた。

1941年は『大和会』 帝国海軍にとっての『運命の年』である。EUの結成、戦艦『大和』の公開、オリンピックに向けた国内インフラの整備といまだに続いている『五輪景気』からきた好景気による生活水準の向上……。史実以上に存続する米内内閣の支持率は天井知らずとなり、権力は自ずと『大和会』に集積されていた。そして4月には、新生『長門』 空母『鳳凰』が就役する。これにより、帝国海軍は計4隻の新たな空母 『鳳凰』、『天城』、『サラトガ』、『インディペンデンス』 を保有したことになる。これは帝国海軍が数だけではミッドウェー1回分の敗戦を補填出来る戦力を得たことになる。更に、『大和会』の尽力により、戦車揚陸艦等の交換を条件に陸軍版空母『あきつ丸』『神州丸』等の海軍導入が実現されようとしていた。この艦艇交換は42年までに成立し、実施されると帝国海軍は新たな改装を加えて哨戒空母に変わらせた。

そして空母天城を基とした、『雲龍型航空母艦』就役も間近であった。

第41話 空母長門（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第42話 雨垂れ米を穿つ

第42話『雨垂れ米を穿つ』

1941年4月13日

千葉県／裾野

夜の帳はじれたいほどゆつくりと下りてきた。雨脚は徐々に弱まり、細かい霧雨に変わっている。辻の首元に掛けられた懐中時計が戌の刻を差した頃には紺碧の空は暗くなって、インクを垂れ流したような黒一色に塗り潰された。湿った夜気を切り裂く一筋の爆炎が漆黒の闇から抜き出たかと思うと、伊藤が持つ双眼鏡は閃光に紅く染め上げられた。

「だんちやーく、今！」

頭上では雲が月をのみこんでいた。こぬか雨が降り注ぎ、標的に向けられた戦車の砲身に滴った。熱せられた砲身からは、俄かに冷却音が漏れていた。砲撃を放った戦車はその重厚な車体を軋ませ、ジャラジャラと音を立てながら砂利道を進む。

「一式砲、斉射用意……、射ッ！！」

伊藤ら観覧の目の前を一式砲戦車の砲口から放たれた75mm九四式榴弾が駆け抜けていった。鋭い風切り音が砲弾の後に続いた。そしてその後、雷鳴が如き爆音を響いたかと思うと、架空の敵防衛陣地の位置する山麓部に土煙が舞い上った。まるでミニチュアサイズの火山が噴火したように見える。畏怖と興奮に目を潤ませて、辻は激しく手足を引き攣らせていた。

明りが付き、サーチライトの光線が山麓に注がれる。敷石道を踏む靴音、笛の甲高い音、そして双眼鏡を手にした着弾見張員の口元からの息遣い。それから少しの間は、編上靴が大地を踏み締める音

と自分達の静かな息遣いしか聞こえなかった。

「初弾、だんちゃーく、今！」着弾見張員が報告した。

サーチライトの光源が遮断され、再び観覧席の向こう側は漆黒の闇に包まれた。山麓の敵防御陣地は見えない。熱風と低気圧からくる突風が渦を巻いて観覧席に吹き込んだ。双眼鏡を下ろしていた辻の眼鏡は薄汚れてしまっている。一方、一式砲戦車の車内の砲手は射撃照準器の十字の輝点を次目標　お役御免となった九七式中戦車　に合わせ、射撃用意を完了させた。

「次弾装填急げ！」

車長は装填手に下命する。装填手はトランク型の弾薬ケースから一式破甲榴弾を取り出し、急いで装填した。その作業を終えると、車長は砲塔から防弾ガラス越しに外を覗いた。九七式中戦車の子ぶりな車体がぼんやり見える。

「一式砲、斉射用意……、射ッ！」

微かな物音がしたかと思うと突然、眩しい光が正面から伊藤達の顔を照らした。一式砲戦車の咆哮だ。榴弾は闇を衝いて、一筋の火柱を生み出した。

「だんちゃーく、今！」

「うむ……」辻は唸った。双眼鏡の先には、炎上する車体があった。

伊藤は夜の闇に包まれて立っていた。山麓に設置された九七式中戦車は一式破甲榴弾の直撃を受けて空を突き破るかのような轟音を響き渡らせた後、残り火を燦ぶらせる灰まみれの屑鉄の山と化していた。雨脚の強まったこぬか雨は霧雨へと再びその姿を変え、熱せられた鋼鉄を冷やした。

「これだ、これ！」辻は勝ち誇ったように声を上げた。「轟音、爆発、粉碎　そして、炎上！これこそ陸戦の醍醐味という奴ですよ！」

目を大きく見開いて興奮の色を隠せない辻とは裏腹に、伊藤は無表情で一式砲戦車の巨軀を見張っていた。「戦争の醍醐味？」伊藤

は呟いた。「これが？」

辻は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。「敵を討ち、戦果と成す。それ以外、戦争の醍醐味と呼べるものがありますか？」

伊藤は首を振った。

「あれは標的であって敵ではない。敵を討ち、戦果と成すのが戦争とあらばこれは間違いではないか」

それから伊藤は前に歩み寄った。「だが、とりあえずはその第一歩を踏み締めたことに変わりはない　ということだろう」伊藤は言った。「帝国陸軍はアメリカと対等に渡り合える戦車と砲戦車を得たのだ」

4年前の失態　俗に『シャーマンショック』といわれる陸軍中枢部の逆鱗に触れた技術部の刷新未遂事件以来、帝国陸軍は新型戦車、砲戦車の開発に尽力していた。『精神論』と海軍への対抗心に燃える中枢部は少なからず『大和会』の介入を受けながらも、M4『シャーマン』を基としたM4中戦車に勝る次世代新戦車を推進した。

「一式中戦車。全長7m、全幅2.63m、全高2.67m……。主砲は九〇式野砲を基とした一式七糎半戦車砲で、史実において開発、採用された三式七糎半戦車砲とは違い、独伊の技術協力によって“真の戦車砲”となっております」

「真の戦車砲？」

伊藤は辻に尋ねた。

「即ち、野砲ほぼそのままではないということです」辻は言った。「もたらされました三式中戦車のカタログスペックから分かるように、三式に使用していた戦車砲は急時ということもあり、戦車用に改良する時間的余裕が無かったのです」

1944年、米陸軍の晩成はまさに成し得られようとしていた。太平洋戦線の主役戦車はこれまでのM3からM4へと更新されたの

である。一方で、劣勢の帝国陸軍はこの比類無き新型戦車に対抗し得る戦車を保有していなかった。これまで太平洋戦線で奮戦した九七式中戦車の後継車となる一式中戦車『チヘ』は未だ量産体制も整っておらず、配備されても米軍を相手にすれば期待外れの性能であった。1944年には四式中戦車や五式中戦車の開発も進んではいたが、実用化はまだまだ先のことだった。そこで同年5月に、一式中戦車を火力強化させた新戦車が、三式中戦車である。

M4中戦車に対抗し得る75mm戦車砲を搭載し、性能面の向上を目指す三式中戦車だが、時間的余裕が無い為に中途半端なできとなった。現在生産中の一式中戦車に既存の75mm砲をそのまま搭載する等、最小限に抑えられた改造戦車 即ち、一式中戦車に九〇式野砲を取って付けたという戦車である。

まさに死に物狂い、血眼、といった言葉が該当する過酷な突貫作業により、僅か5ヶ月で量産体制に移行した同車だが、駐退器の砲塔外露出や、砲塔が車体に比べて過大になるなどの不利な点が複数生じることとなり、決して良いとは言える代物ではなかった。

今物語における一式中戦車は、そんな問題点を改善し、M4中戦車と対等に渡り合える戦車であった。M4中戦車を基とした車体の実現による車内の空間的余裕と装甲強化、エンジン面や車体面の改修による機動性の大幅な向上。そして戦車砲としての3年に渡る改修を受けた九〇式野砲の主砲化により、帝国陸軍初の75mm砲搭載中戦車となった。

「米陸軍において、M4中戦車は九七式中戦車同様に歩兵支援を主とする戦術ドクトリン上で成立した戦車だと聞く。ならば帝国陸軍の九七式は何故敗北に次ぐ敗北を成し得たのか？」伊藤は言った。「質の問題では無いでしょうか？」辻は言った。

伊藤は頷いた。「私もそう思った。経済的・技術的・工業的に発展途上の我が国は、あれ程の戦車を造ることはおるか、それを一般歩兵支援に使えるほどの数の戦車を造れるだけの余裕は無い。一方、

米国の圧倒的な国力は数万台のM4を製造し、輸送し、運用出来るだけの余力がある」

歩兵支援を運用上の主任務とする両車だが、その大きな違いは装甲車両の柔らかな箇所を『戦車』として突き、粉碎出来るかどうかである。米陸軍は対戦車戦には駆逐戦車を使用するという戦術ドクトリンの下、M4はそれの補助的役割を担う存在であった。工業的に完成度が高く、呆気無い日本陸軍の戦車を敵にしたM4は、太平洋戦線でその歩兵支援という域を逸し、個車でも十分に戦える戦力となった。一方、同ドクトリンの下に成立した筈の九七式中戦車は工業的にM4中戦車には遠く及ばず、戦車にあるまじき肉薄攻撃という戦法によって装甲車両の柔らかな箇所を突くという、戦車とは言えない戦車であった。

「だが、その質はこれで大きく変わった」伊藤は言った。「後は発展した工業力と忍耐の問題だ」

辻は頷いた。「現在開発中の三式砲戦車が制式採用されれば、我が帝国陸軍も米英に肉薄する駆逐戦車を保有する所となります。この一式戦車も運用の幅が広がるでしょう」辻は言った。「そうならば、帝国陸軍は強大な機械化軍と成り得る筈です」

「『雨垂れ石を穿つ』というからな」霧雨の雫が伊藤の頬を伝う。「時は我々にとって。そしてアメリカにとって、もつとも大切な財産だ。我々のちっぽけな試みが持続において功を奏したとしても、その雨垂れが穿とうとするアメリカという敷石が時を重ねて強固なものになれば、どうしようもない」

「今、我々が願うべきなのは、アメリカの国力が我々の想像の域を達する程に発達してしまわないことだ」伊藤は言った。

第42話 雨垂れ米を穿つ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第43話 叡智は一日にしてならず

第43話『叡智は一日にしてならず』

1941年5月15日

山口県／三田尻沖

全高40mにも及ぶ艦橋を昇りきって、対空戦闘の要たる防空指揮所の入り口の前に到達するとエレベーターは止まり、鋼鉄の扉が解き開かれた。中を覗くと、外側に高さ1mほどの防弾板が張り巡らされた多数の双眼鏡と、それに張り付く海軍士官・下士官達の姿があった。頭上は紺碧の空が広がり、燦々と輝いている太陽が、光の洪水を湛えている。そんな眩い光に負けず、戦闘時を想定した兵員達はなおも双眼鏡の前に張り付き、背後の人物のことなど知らずに、熱心に目を凝らしていた。

その人物の到来を最初に気付いたのは、戦艦『大和』砲術長砲術士官の頂点に位置する、まさに“神様”のような存在 西宮勲海軍中佐だった。海軍砲術学校高等科を優秀な成績で卒業し、放縦学校教官を歴任するなどの経歴を持つ。ただ、かの山本五十六や加来止男のように教官から、偵察・観測・爆撃の効果を買って航空畑に転出した訳ではなく、砲術畑一貫の道を歩む。そして今年、第1代目艦装砲術長が退任すると、晴れて『大和』2代目砲術長の任に就くこととなった。

西宮が双眼鏡に取り付く兵員達に合図を掛けると、一同は来客に敬礼した。

第2種軍装に身を包んだ伊藤整一中将・森下信衛大佐・吉田善吾大将、そして海相山本五十六はそれを見て、遊ばせていた右手を頭に寄せ、熱心な『大和』乗員達に敬礼を返した。「諸君、硬くなら

んでくれ」山本は言った。「戦争はまだまだ先の話だ。君らには、この平静の世を1日でも有意義に過ごして貰い、同時に有事に備えた有意義な経験と技能をつけて貰いたい」

「はッ！」一同は声を発した。

「では始めてくれ。諸君の奮励努力に期待する」

数ヶ月前のこと、帝国海軍技術研究所と海軍航空本部の合同計画チームは、画期的な信管である『近接信管』の開発に成功した。その近接信管の発端は1937年9月、坊ノ岬沖より特殊近接信管が回収された所から始まる。を見た同機関の技術者達は面喰らい、しばらく何も言えずにいた。彼らはそんな特殊近接信管の前を行ったり来たりしながら自らの経験と知識を総動員しつつ、その信管を持ち込んだ一人の海軍中將にその正体の程を教えて貰いたいと頼み込んだ。大抵は当局即妙するその中將だが、ただ『米英の開発した次世代の信管』として説明し、それ以上のことは教えられなかった。と、いうよりもその説明が彼らに与えられた仕事だった。

技術研究所や航空本部の面々が知らないのも当然だが、それは『VT信管』と称される米国製近接信管だった。正式には『無線近接信管』と呼ばれるこの信管だが、大戦時は『マンハッタン計画』と並ぶ秘匿計画であった為、VT信管 バリアブル・タイム・ヒューズ（時限信管）という名称が用いられていた。名前から時差を利用した時限式信管であると枢軸国側に信じさせようとしていたのだ。

それまでの時限式信管は、砲弾が目標に到達する未来接触時間を計算、割り出した時間を信管タイマーにセットして発射し、発射後、一定時間に爆発する仕組みだった。しかし近接信管は小型レーダーを内蔵していた。レーダーは電波発振による探知を行い、15m以内で一定の金属物体が通過すると探知して自ら炸裂する。近接信管搭載の砲弾は、その砲弾の破片によって敵機を落とすのである。

一見、破片というから航空機を落とせないのではないかと思うが
そうでもない。鋼鉄で築かれた艦船ならともかく、軽量面からジュ
ラルミンのようなアルミ合金で造られた航空機ならば、破片だけで
致命傷を負わせられるのだ。

これまでの時限式信管に対し、VT信管のような近接信管は画期
的な信管だった。タイマーという信用性に欠ける目安はもはや不必
要となり、砲弾自体が目標を自動検出し、炸裂するという新世代の
攻撃手段が確立されたのである。これによって米海軍の対空射撃命
中率は、0.015%から3倍近く跳ね上がった。かつて、航空機
1機撃墜に砲弾一万発を要する程に低い射撃命中率を考えれば、大
いなる前進といえる。

また、砲弾が勝手に探知・炸裂する為に信管のタイマー調整作業
も不要となり、時間的余裕を得る所となった。これによって米海軍
は対空射撃時の環境が向上し、より多くの砲弾を敵機に向けて撃つ
ことが可能となったのである。対空射撃レーダー、射撃管制装置、
そして薬莖式弾薬・自動装填・目標自動追尾の5段構えという対空
射撃の鬼のような米海軍の5インチ砲は、敵機に向けて撃ちっ放し
の攻撃を仕掛けることが出来た。伊藤は終戦後、かつての旧友たる
レイモンド・A・スプルーアンス大将からこの“魔法の信管”の話
をマリアナ沖海戦の話題の時に聞かされ、その存在を知る所となっ
た。

伊藤や『大和会』がそのVT信管の開発に躍起になるのも無理は
ない。しかし現実には過酷だった。帝国陸海軍、そして各大学からの
民間人起用等、分野の境を越えたVT信管国産化計画は、研究チー
ム発足の37年から40年までの3年間、中々に進展しなかった。
その原理が解明され、試作品が造られ始めたのは1940年夏頃

時に、『日独伊三国科学・技術協定』でドイツの技術流入がピー
クに差し掛かった時期であった。この頃にはドイツのレーダー技術、
そして近接信管やレーダーの分野における科学者達が日本に全面的
に渡り、3年に及ぶ技術基礎の増強で工業水準が史実を抜いていた。

こうした経緯を経て1941年3月に12・7cm高角砲弾用の近接信管が完成した。

信管の要たるレーダーには真空管が用いられていたが、発射時に加わる推定2万Gの衝撃に耐えるよう樹脂や金属外皮によって頑強に固められ、砲弾の回転による遠心力を避ける為に、弾頭内部に縦に配置されていた。2万Gの衝撃に耐えられる真空管を造るのではなく、2万Gの衝撃を真空管に伝えない構造を作った訳である。この為に真空管自体は元々が補聴器用の民生品であった。また、暴発防止の安全装置も水銀が発射時の遠心力で流れ、回路を切断して解除するという簡易なものであった。まさに量産を考慮した、アメリカ人らしい発想の詰まった製品。それがVT信管だったのだ。その点で言えば、帝国陸海軍の研究チームの完成させたそれは“試作品”であり、“工業製品”としてのVT信管の完成には至っていなかった。

それが数ヶ月前のことだ。

こうしてVT信管の試作品は完成し、40口径八九式12cm高角砲用砲弾に使用されることが決まった。現在、戦艦『大和』は副砲として12・7cm高角砲を搭載しており、第1次改装時に積まれた、1941年に就役する筈であった『大和』用の12・7cm高角砲。今度の第3次改装で九八式10cm高角砲に改装する予定である。更に44年までに『新型12・7cm高角砲』。米海軍のMk12・5インチ砲を基とした高角砲の搭載を予定している。

「砲術長、1万メートルで高射砲発射用意！」

防空指揮所にて、『大和』艦長の森下は言った。

鈍重そうな印象を与える無人標的機が3機、防空指揮所から右30度の方角に見えた。編隊飛行から分散した3機は、各方面へと向かう。雷撃機を模したラジコン航空機で、それぞれ胴体下部に疑似

魚雷を搭載していた。

「距離1万！」双眼鏡に張り付く兵員の1人が叫ぶ。

「撃ち方始めッ！」

西宮砲術長が下命すると同時に、甲高い発射音に続いて空を突き破るような轟音が響き渡った。眩しい閃光が右舷から突入していた雷撃機の1機を引き裂き、両翼が甲高い悲鳴を上げて碎け散った。雷撃機はまがましい橙色の火の玉に変貌したかと思うと、黒煙となって潮風に吹き消された。

「ほう……これは……すごいな」

吉田は関心したように頷いた。本来なら直撃せずに通り過ぎてしまふであろう12.7cmの砲弾はすべて、雷撃機を前に炸裂して機体に襲い掛かる。『意志』を持つ砲弾、それが近接信管であった。ただ、八九式は人力ですから伊藤は言った。「これを有効に利用するとあらば、全自動化にすべきでしょう。しかし、これが実用化されれば、時限信管の調停器の問題は必要がなくなるという利点も生まれます」

「さらに正確を期すべきだろう」

吉田は言った。「やはり射撃管制装置、電探、対空射撃の新ドクトリンの確立は必要だな。信管の量産が進めば鬼に金棒。ヤンキー共に一泡吹かせてやれるというものだ」

「実は長官、それなのですが……」伊藤は言った。「そのヤンキー共がこの技術を鹵獲して実用化してしまわないか」という問題が発生するのであります」

当時、米海軍は信管の機密保持に細心の注意を払っていた。近接信管という所を『VT信管』と名称付け、軍艦へ搭載された他にはイギリス本土の防空V1ロケット等の迎撃にのみ使用され、海上では不発弾を回収されないよう、陸地方向への射撃は禁止とされていた。

これは、ただ単に信管の作動率の観点からの結果とも言われているが、不発の信管を枢軸国側にコピーされるのを恐れていたからである。日本はともかく、ドイツのような技術先進国なら、この信管の構造をすぐに解明し、量産化される危険性は捨て切れない。また、信管のリーダー周波数がばれ、チャフや妨害電波（ECM）でジャミングされてしまうことも警戒していた。その為、敵が『イエローモンキー』で、主戦場が太平洋上であった為、VT信管は対日戦に多用された。

VT信管の初登場は1943年1月、ガダルカナル島を巡る『レンネル島沖海戦』の中のことだった。米海軍の軽巡洋艦『ヘレナ』が4機の九九式艦爆に対して5インチ砲を咆哮させ、内1機を撃墜した。VT信管を全面に押し出したのは1944年6月のマリアナ沖海戦のことだが、その頃にはF6F『ヘルキャット』の台頭や日本側パイロットの錬度低下により、その活躍は若干薄かった。結果的にその真価を発揮するのは、神風特攻の確立後であった。

「何？」吉田は首を傾げた。「ふむ、鹵獲か」

「長官もお聞き入れでしょう。私が歩んだ歴史では『甲事件』や『乙事件』等、海軍が犯した防諜面での失態は数え切れません。しかも相手はアメリカです。原爆やこの信管もまた、彼らの優れた防諜戦略によって守られていた。いわば『叡智』なのです」

OSSやONI、MI6・MI5等から分かるように、米英の諜報・防諜能力は世界最高水準だった。帝国海軍の単純な暗号解読を始め、『解読不可能』とされていたエニグマ暗号機の解読、コーストウォッチャー等情報網の確立、VT信管・ノルデン爆撃照準器等鹵獲に対応した機密保持の徹底……。その多岐に渡る諜報戦の結果は、ことごとく米英の勝利に繋がった。

「それは危惧すべき問題だな」吉田が険しい声で言った。

伊藤は頷いた。「ですが、対策も講じております。信管に対抗する妨害電波を発生させる装置を現在開発しているのです」伊藤は言った。「10月上旬にも試作品が披露され、十五試陸攻に搭載され

で試験を行う予定です。将来的には、『Z指揮機』に取り付けようかと計画している次第であります」

V T信管は目標からの反射周波数が弾頭との相対速度によってシフトする現象を利用し、発振波と反射波を合成して得られる低周波によって弾頭を爆発させる。その結果から、信管が使用する周波数を用いて早期起爆させる。というのが、V T信管への対抗策だった。V T信管は180 220MHzに発振周波数が制限されており、この周波数帯に対応した妨害電波装置を使用するのだ。

「装置の進捗具合は？」

「周波数が解明され、装置の開発に取り組んでいる……という話です」伊藤は言った。「十五試陸攻で妨害が成功し、“Z”の開発が進めば、アメリカが信管を持っても米本土を」

吉田は首を振った。「皆まで言うな。未来に希望が持てただけで十分だ」

近接信管付12.7cm砲弾の使用実験は、無人標的機3機の内3機を撃墜するという結果に終わった。これで一定の近接信管の信頼性が確立され、実用化への機運が高まることとなった。この実験結果を基に、帝国陸海軍の研究チームは量産化に向けた信管の開発を急ぐ。

また、独英伊との共同開発を進める『Z飛行機』計画もまた、大きく躍進した。レーダーや通信機器を搭載した戦略指揮航空機『Z指揮機』現代の“電子戦機”に相当するに、対V T信管用のジャミングシステムを搭載することになったのだ。通信・レーダー探知・電波妨害と、電子機器を主軸とするこの先進的な戦略航空機の実現性が高まると同時、当初案であった『Z掃射機』『Z雷撃機』構想はこれをもって早期に潰えた。

第43話 叡智は一日にしてならず（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第44話 昭和16年帝国国防方針

第44話『昭和16年帝国国防方針』

1941年6月16日

東京府

手にしていた万年筆が机からフローリングの床に転がり落ちた。伊藤はしゃがみ、前に座る山本と石原、そして辻の足元を見張った。彼は顔を上げ、目を細めて3人を見た。その3人の前の机上には1冊の書物があり、万年筆によってその1ページに大きく丸で囲まれた目印が記されていた。

「つまり…… EU海軍の東洋艦隊はアテに出来ないと？」

辻の問いに対し、伊藤は物憂げに頷いてみせた。「主導国であるイギリスの考えた極東防衛戦略を見れば一目瞭然だ。彼らは太平洋方面の戦争を楽観視し、脅威が本国に行くのを恐れて大西洋や北海に新鋭戦力を補充、駐留させている」

事実、EU海軍の総戦力 主に英・独・仏・伊 は西大西洋方面最高司令部のイギリス・ポーツマス基地と、北海方面最高司令部のノルウエー・オスロ基地に集中配備されていた。しかし、極東方面はイギリス海軍のこれまでの極東防衛戦略に従い、旧式艦艇で固められていた。

既存の極東防衛戦略は2つの仮定に基づいていた。仮定の第一は、米海軍が西太平洋における有力な連合国軍側勢力として、シンガポールの英国東洋艦隊とともに存在し続けるということであり、フィリピンが東洋艦隊の前進基地として使用出来る ということだった。仮定の第二は、帝国海軍の技術的能力と打撃力が過大評価されることだった。これら2つの仮定から、日本艦隊と戦うのは米太平

洋艦隊だと前提し、東洋艦隊の戦力は補助的なものであった。ドイツやイタリア海軍の脅威に対抗する為に新鋭艦の多くは本国に置かれ、残った旧式艦艇が東洋艦隊に配備された。

そしてEU極東方面艦隊は、そのイギリスの2つの仮定を若干変更した防衛戦略の下に組織されていた。即ち 米太平洋艦隊やフリピンを、連合艦隊や日本列島に変更したものである。

「大変だったんだろうな、海軍の気鋭の戦略家達は」伊藤の目のまわりに皺が寄り、そこに気遣いと後悔が滲んだ。「EUとの経済関係を考慮した外交屋や、イギリスを過大評価する海軍上層部の横槍がこの結果を招いたかどうかは分かんが、これで全ては変わってしまった。連合艦隊はシンガポールや極東方面の防衛 という重責にその戦力を割かねばならんことになった……。イギリス東洋艦隊やオーストラリア海軍はともかく、他国海軍は雑魚も同然の戦力しか極東に置けんからな。もし戦争が44年以降となれば、数十と空母を保有する太平洋艦隊が相手となってしまふ。それでは、さしもの英国東洋艦隊も圧倒されてしまふだろう」

この会談はほんの2 3時間前に表明された『改定第4次帝国国防方針』に端を発する。帝国国防方針とは、戦略と政略上における基本的な国防方針の国家機密文章である。帝国軍の用兵要領の3部より構成される。第1部は国家戦略、第2部は所要兵力と軍艦数などの数値目標、そして第3部には大日本帝国の軍事ドクトリンと仮想敵国に対する個々の作戦計画大綱が述べられている。EUの発足により、改定の必要が迫られた為に出された今回の方針はEUの戦力や地理的優位点、そして外交政策を配慮し、刷新されたものだった。

『改定第4次帝国国防方針』

“一、帝国国防ノ本義ハ建国以来ノ皇謨ニ基キ常ニ大義ヲ本トシ、倍々国威ヲ顕彰シ国利民福ノ増進ニ在リ 帝国ノ国防ハ帝国国防ノ本義ニ鑑ミ、我ト衝突ノ可能性大ニシテ、且強大殊ニ武備ヲ有スル米國、露國ヲ目標トシ、歐羅巴同盟ト戮力シテ之ヲ備フ。又歐羅巴同盟ニ中立ヲ示ス支那ニ備フ之ガ為帝國ノ国防ニ要スル兵力ハ、支那大陸並東太平洋ヲ制シ、帝国国防ノ方針ニ基ク要求ヲ充足シ得ルモノナルヲ要ス。”

帝國軍ノ戰時ニ於ケル国防所要兵力左ノ如シ。

陸軍兵力

七十師團及飛行五十戰隊

海軍兵力

艦艇 主力艦十八隻 航空母艦二十四隻 巡洋艦三十六隻

水雷戰隊九隊

潜水戰隊八隊

航空兵力 三十四戰隊

帝國軍ノ用兵綱領

“一、帝國軍ノ作戰ハ国防方針ニ基キ陸海軍協同シテ先制ノ利ヲ占メ、攻勢ヲ取り速戰即決ヲ図ルヲ以テ本領トス。”

二、米國ヲ敵トスル場合ニ於ケル作戰ハ左ノ要領ニ從フ。

東洋並東太平洋ニ在ル敵ヲ歐羅巴同盟軍ト挾擊シテ之ヲ擊破シ、其ノ活動ノ根拠ヲ覆滅シ、且本國方面ニ停泊スル敵艦隊ノ主力ヲ擊滅スルヲ以テ初期ノ目的トス。

之ガ為海軍ハ作戰初頭速ニ歐羅巴東洋方面海軍ト協同シ、東洋並東太平洋ニ在ル敵艦隊ヲ擊滅シテ両洋海面ヲ制圧スルト共ニ、陸軍ト協同シテ呂宋島及其ノ附近ノ要地並瓦無島、布哇諸島ニ在ル敵ノ海軍根拠地ヲ攻略シ、敵艦隊ノ主力東洋及東太平洋方面ニ來航スルニ及場合、機ヲ見テ之ヲ擊滅ス。

陸軍ハ海軍及歐羅巴東洋方面陸軍ト協同シテ速ニ呂宋島及其ノ附近ノ要地ヲ攻略シ、又海軍ト協力シテ瓦無島並布哇諸島ヲ占領ス。

敵艦隊ノ主力ヲ擊滅シタル以後ニ於ケル陸海軍ノ作戰ハ臨機之ヲ策定ス。

三、露国ヲ敵トスル場合ニ於ケル作戰ハ左ノ要領ニ從フ。
極東ニ在ル敵ヲ速ニ擊破シ、併セテ所要ノ疆域ヲ占領スルヲ以テ目的トス。

之ガ為陸軍ハ先ツ烏蘇里方面（概ネ興凱湖及ウオロシロフ附近一帯ノ地域ヲ指ス以下之ヲ以テ做フ）敵就中其ノ航空戦力ヲ迅速ニ擊破シ且海軍ト協同シテ所要ノ兵力ヲ以テ浦潮欺德等諸要地ノ攻略ニ任ス。次テ黑竜方面（概ネ「ブレーヤ」河及「ゼーヤ」河各下流域ヲ指ス）、及大興安嶺方面ニ於ケル敵ヲ擊滅ス。爾後、作戰ノ推移ニ応ジ采攻スル敵ヲ擊滅ス。

又狀況ニ応ジ海軍及歐羅巴同盟軍ト協力シテ必要ニ応ジ北樺太、樺太対岸及勘察加方面ノ諸要地ヲ占領ス。
カムチャツカ

海軍ハ作戰初頭速ニ極東ニ在ル敵艦隊ヲ擊滅シテ極東露領沿海ヲ制圧スルト共ニ、陸軍ト協同シテ烏蘇里方面ニ於ケル敵航空戦力ヲ擊滅ス。又陸軍ト協同シテ浦潮欺德等ノ他ノ要地ヲ攻略シ、且黑竜江流域ヲ制圧ス。

欧州ニ在ル敵艦隊来航スル場合ニ於テハ歐羅巴東洋方面海軍並地中海方面海軍ト協同シ、之ヲ擊滅ス。

四、支那ヲ敵トスル場合ニ於ケル作戰ハ左ノ要領ニ從フ。
北支那ノ要地及上海附近ヲ占領シテ帝国ノ權益及在留邦人ヲ保護スルヲ以テ初期ノ目的トス。

之ガ為陸軍ハ北支那方面ノ敵ヲ擊滅シテ京津地区ヲ占領スルト共ニ、海軍ト協同シテ常州ヲ攻略シ、又海軍ト協同シテ上海附近ヲ占領ス。

海軍ハ陸軍ト協同シテ青島ヲ占領シ、又揚子江流域ヲ制圧ス。
五、米国、露国、支那ノ内二国以上ヲ敵トスル場合ニ於テハ、概ネ二乃至「四」ヲ準用及歐羅巴同盟トノ連携ヲ緊密ニシ、此等數回ニ對シ為シ得ル限り逐次ニ作戰ヲ行フ。

六、參謀總長、軍令部總長ハ本綱領ニ基キ各作戰計畫ヲ立案シ、

相互二商量協議ヲ重ネタル後、裁可ヲ奏請スルモノトス。 ”

EUの存在を全面に推し出した今回の第4次改定国防方針は、仮想国家が大きく修正されていた。まず、前回に初登場したイギリスは再び軍事同盟を締結したことにより、除外された。また、外交部門が大きく考慮されており、帝国軍の軍事行動にEUが関わっていることも真新しいものだった。

そして、新たにハワイを占領するという『東進政策』が加わっていた。

「東進政策 即ち『ハワイ』を前進基地とし、西海岸に上陸。そこからどんどん東上し、米中西部若しくは東海岸まで侵攻、制圧してしまうという、大胆且つ貧乏国には壮大過ぎる夢のような戦略……」石原は言った。「あの一式戦車を凌駕するものを数万台も造れてしまう国に、果たして我々帝国陸軍の貧弱な機械化軍団が通用するでしょうか？ 私は正直、中西部辺りで補給網を切られ、貴方がたが歩んだ歴史で牟田口君が行おうとしたという、『インパール作戦』の二の舞になると思いますね。アメリカも馬鹿じゃない。陸軍が西海岸の補給物資を頼ろうとすることなど、分かりきったこととして廃棄するでしょう」

米軍の補給品は工業力、国力ともに未だ未熟な日本にとっては生命線といえる存在だった。南進政策でも日本軍は米軍の補給物資を掌握し、物資不足を解消した。あの時は四方八方を海に囲まれたフイリピンを奇襲侵攻したからこそ米軍は呆気に取られて退却に次ぐ退却を行ったが、本土が戦場とする今戦略上では、それも通用しないかもしれない。

「アメリカ人は仲間と民間人は見捨てない」伊藤は言った。「それは国民こそが合衆国の主導を握る存在だからだ。黒人や日系人ならともかく、大枚注ぎ込んで造った筋肉質の殺戮兵器や清き一票を持つ白人とならば、政府や軍は補給品など無視して彼らの安全を保

障する行動を優先するだろう」

「確かに、窮地に立たされた状況下であればその可能性もありましよう」

伊藤は頷いた。「だからこそ、我々はアメリカを窮地に追い込まねばならんだ」伊藤は言った。「たつてのEUであり、東洋艦隊だが……貧弱過ぎて話にならない。EU軍が米国への攻撃に協同する

という本要綱の文句は無理な話だろう。いざ米国との戦争になれば、本国の財政や軍事の生命線たる植民地を守るのに精一杯になる筈だ」

「しかし、とりあえずは補給には困らんでしょう」山本は言った。「それに戦後のこともある。太平洋で他の同盟国よりも殊勲を立てておいた方が、何かと後に役立つものですからな」

伊藤は頷いた。「ですが、私が懸念しておりますのはEUという関係を盾に、我が軍の兵力を植民地の防衛に割かれてしまわないか……ということなのです」伊藤は言った。「オリンピック、そして『大和』の公表以降、日本という国の世界の印象は大きく変わりつつあります。しかしその根幹に生える侮蔑の意識は決して変わらんでしょう。我々の戦力を逆に利用し、權益を守る為や増やす為の都合の良い存在。そう、まるで使いつ走りみたく扱われれば、迅速に遂行される短期決戦上で必要不可欠な大戦力は期待出来ますまい」

この時期、『東進政策』に基いた陸海軍の方針が着々と構築されていき、それまでの戦略が刷新されることとなった。特に海軍はこれまでの艦隊決戦主義から大きく方向転換した、重雷装の長距離潜水艦から大きくシフトチェンジした、通商路破壊作戦用の中距離潜水艦の開発を決定。更に対空対潜駆逐艦の増加、そして空母の大建造による機動艦隊の増設を進めていた。潜水艦はUボートやガトー級を参考とするものであり、ハワイを占領した前提の下で実行される、西海岸近海域の通商路破壊作戦を基に計画されたものであった。

第44話 昭和16年帝国国防方針（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第45話 空飛ぶ喬木機

第45話『空飛ぶ喬木機』

1941年9月28日

東京府／西多摩群

伊藤整一の一行は車がひっきりなしに行き交う帝都を離れ、西部の郊外町、福生町に向かった。去年の『五輪特需』の例に漏れずインフラ整備と雇用拡大、そして産業発展を東京府に属するこの町もまた遂げていた。一方で、急激な機械化と航空戦力の増強を邁進する帝国陸軍のお膝元ということもあり、『軍事特需』の恩恵まで受け取っていた。

その軍事特需は『多摩陸軍飛行場』に起因する。1940年に開設された多摩飛行場は、陸軍航空の研究・開発・製造の一大拠点である『立川陸軍飛行場』1930年代までは帝都防衛の中核拠点だった。の付属として誕生した。1940年には立川飛行場に設置されていた陸軍飛行実験部が移転し、陸軍の航空機試験場として利用されることとなる。1942年4月にはその試験中に帝都にて勃発した『ドーリットル空襲』時、試作機『キ-61』

後の三式戦闘機『飛燕』が2機急遽出撃、機体を操っていた梅川准尉の力戦奮闘もあり、B-25『ミッチェル』1機を見事撃墜している。

伊藤はそんな飛行場の大地を踏み締め、航空機の轟音が反響する多摩飛行場の真ん中に鎮座する一機の大爆撃機を見据えていた。背後から晩刻の薄青い光が差している。従来の中型爆撃機と同じように、鈍重な機首を上方に仰ぎ向け、その力強さを誇示している。だがこの爆撃機は従来のものとは機体に用いている素材や構造も全

く異なっている。木製で、搭乗員2名の並列複座式機なのだ。

歩く3人の影は　その中型爆撃機に迫る。

「これがイギリスの木製爆撃機か？」伊藤は訊いた。

「ええ、そうです」随伴していた原茂也は答えた。彼はかつての世界では戦争中は駐独武官であり、ドイツを散々悩ませたこの爆撃機の機影とその戦果を何度か見た事があった。「1940年に作られた最新鋭の木製戦闘爆撃機です。名は　“モスキート”」

モスキート　言わずもがな英語で『蚊』を意味するこの戦闘爆撃機は、まさに蚊のようにしぶとく、正体を掴み辛いという鬱陶しい存在だった。そこに圧倒的な速力と破壊力を備えたのが　『デ・ハビランド・モスキート』である。

この爆撃機が優秀な性能を誇っているのは、日進月歩する航空機発達時代に逆行した『木製機』であつたからである。木製機と言えば、その活躍の場は20　30年ほど前に主力機であつた第一次世界大戦の複葉機が印象的であり、30年代のイギリス航空省上層部はこのデ・ハビランド社製の時代遅れで防御火器乏しい木製爆撃機に不快感を示し、これを却下した。史実ではこの後に第二次世界大戦が勃発、自社で独自開発を行うことにしていたデ・ハビランド社は50機のモスキート製造を予定していたが、『ダンケルクの戦い』の後、英空軍の戦闘機不足により、この革新的爆撃機の製造は一時頓挫した。だが、今物語ではEUの結成はあつたが戦争は無く、逆にこの戦闘爆撃機のライセンス生産権を早期に帝国陸軍が購入するという新たな歴史に発展している。今、多摩飛行場に置かれたこのモスキートもまた、その過程で輸入されたものだった。

伊藤はため息を吐いた。この戦闘爆撃機『モスキート』の採用は、その裏で進行した大きな企みが成功していなければ成立しなかつただろう。また、気候や運用面での問題と、未だ問題は山積している。多くの陸軍幹部が、木製は言語道断として英国のモスキートよりも

ドイツのJ u 8 8を採用すべきだったと、陸軍航空上層部を批判の目で見ている。もしこれが仕組まれた陰謀の結果であり、未来からもたらされた戦略の下で判断し、決定したという真実を伝えれば弾圧出来るかもしれないが、それも出来ぬ相談である。漠然としたP-51型次世代戦闘機と、具体性と現実性が見えない陸軍航空総監東條英機は今期その批判を強く受けていた。

「英語で『蚊』　だな」伊藤は言った。「配布された性能諸元によれば、何でも600kmを超えるというが、それは本当なのか？」

先に伊藤らを出迎え、モスキート爆撃機の実験担当主任である大久保航技少佐は頷いた。「先日の試験飛行においても、同機は630km前後の速力を記録しています。我々としても、樺の木で作られたこの機体にこれだけの力があるとは思いませんでした」モスキートは樺の木を両側にバルサ材をサンドしたベニヤ板のモノコック構造で、軽くて丈夫な機体構造を実現していた。そこに2基のロールスロイス・マーリンエンジンを搭載、その大馬力と軽量性を活用した速度こそ、600km超の速力を確立しているのだ。その為、着いていける敵がおらず一人勝ちなので、重量過多を招く防御火器は最小限に削減された。

また、機体は生産性に優れ、修理も簡単だった。バトル・オブ・ブリテンや他方の空戦で航空機喪失の激しい英空軍はその機体の有用性に感銘を受け大量生産、更には同盟関係にあったカナダやオーストラリア空軍がライセンス生産を始めた。

「生産も容易に思われますし、デ・ハビランド社の技術者第2陣も、数日後に船で来日する予定です」大久保は言った。「しかし問題は　エンジンに尽きます。ライセンス生産権を取得したとはいえ、マーリンエンジンを性能を安定させた状態で統一させて量産するのは至難の業でありますし、何しろ液冷エンジンの整備経験は現場には皆無です。根本から変えていかないと、今回の東條閣下の肝入りの計画は、かえって現場に負担を掛けるだけの悲惨な結果にな

るやもしれません」

伊藤は唸った。「やはりそこか……」

ロールスロイス社製のマーリンエンジンは『日独英伊4国軍事同盟密約』が締結されて以降、イギリスより運び込まれた。しかし帝国陸軍の技術陣はその技術水準の高さに驚かされた。P-51を躍進させ、スピットファイアやモスキートを英空軍の誇りに祭り上げたのも、このエンジンあつてのことである。しかし、いざ米国と戦争となれば100オクタン価ガソリンが不足してしまい、マーリンエンジンはその真価を発揮出来なくなるのだろう。

「液冷エンジンといえば、DB601と比べたらどうだ？」伊藤は訊いた。

「ダイムラー・ベンツ社製のですか？」大久保は言った。「あれを将官は試験運転し、整備した経験がありますが、今にしてみればマーリンの方が良いですね」

モスキートのライセンス生産権取得は、帝国陸軍の航空戦力を大きく飛躍させるものになった。マーリンエンジンの国内生産ラインの確立と、高性能の軽攻双発爆撃機の獲得である。モスキートは木製である故に製造は楽、修理も楽とくれば操縦も楽であった。デ・ハビランド社の木材に精通したノウハウを受け取った帝国陸軍技術陣の努力もあり、生産は上手くいきそうだった。

しかし、問題はマーリンエンジンの整備である。これに陸軍上層部は整備員の抜本的教育の改善という解決策を立て、41年夏頃から本格的に始動している。前途多難ではあるが、後の次世代制空戦闘機の普及の為、そして噴進戦闘機の普及の為、二者を扱う上においての教育は重要であった。上手く行けば、帝国陸軍は空の覇者として合衆国の制空権を掌握して米陸軍航空軍を凌ぎ、その敵陣深くに戦略爆撃機『富嶽』を送り込める筈である。

第45話 空飛ぶ喬木機（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第46話 弾丸列車構想

第46話『弾丸列車構想』

1941年10月6日

神奈川／横浜

一閃、闇が深淵の面にあり、光帯が水の面を動いていた。

猛スピードの列車は横浜に向かって下りていく。そのあまりの速さに試験運転を見学していた伊藤整一は、瞠目するばかりだった。

場合によっては最高時速200km超の車体が放つ、甲高い鳴き声が聞こえてくる。200kmというのは、通常の国産蒸気機関車では成し得ない速度だ。その速度の壁の向こう側を超えるその列車は『ETR200』 イタリア製の高速電車である。

イタリア国鉄のETR200型電車は文字通り最高時速200kmを誇る世界最初の本格的な長距離高速特急型電車だ。1936年に導入されたこの電車は、ステールと航空力学の新技術を取り込んだ流線型車で、3つの車体を4つのボギー台車で支えるという連接台車方式を採用している。一等36席、二等42席の豪華仕様で、台車装荷の電動機 いわゆるカルダン駆動方式 を持ち、営業最高速度は160kmに達する。1937年には新しい201km/hという世界最高速度の記録を打ち立て、それから2年後には高速試験運転で203km/hを記録した。

そんなイタリア製のETR200だが、史実では多くの問題が生じた。イタリア国鉄の路盤の老朽化によってその最高速度が低下してしまったり、第二次世界大戦のイタリア参戦により運行停止されて空襲による被害を被った。

しかしETR200は現時点において、ヨーロッパで最も快適で

速い列車と考えられ、高い評価を得ていた。イタリアのベニート・ムッソリーニは史実、ニューヨークで開催された国際万博に1編成を送り込んでいる。そして今物語では、EU結成後にはヨーロッパ各国に積極的に輸出することを検討しており、鉄道先進国であるイギリス、フランス、ドイツとこれを基とした新型モデルを協同開発することが提案されていた。

伊藤は瞠目して島安次郎を見た。

「速いな」伊藤は言った。「これが電車という奴なのだろう？」

「ETR200型を造ったイタリアは山林に囲まれた山岳国ですから、我が国同様に路線は勾配や急カーブがちになります。そこでヨーロッパの他の鉄道先進国、例えばフランスやドイツのように、平地がどこまでも続くという訳にはいかず、機関車や起動車を長距離列車とすることは出来ないのです」島は言った。「その点を鑑みても、同車は『弾丸列車計画』の最有力候補と言えましょう」

イタリアは山岳国という国土的条件からフランスやドイツとは異なる技術過程を歩んできた『鉄道先進国』と言える。山岳に囲まれた長靴のような国土は通常蒸気機関車では、勾配の登り下り等に限界が生じる為、電化が進められた。また山岳国であることは、必然的にカーブが多い線形となる。その為、電車や起動車のような『分散動力車』の技術、あるいは遠心力で車体を傾斜させる『振り子式車両』の技術が古くから発展している。これらは同様に山岳国である日本にも必要となる技術といえよう。

「しかし陸軍は電車の採用には乗り気では無い様で……」島は言った。「それに湿気の問題もあります。イタリアとは気候が違いますから」

『弾丸列車計画』 史実では『盧溝橋事件』に端を発する同計画は、激化する日中戦争に際し、国内の輸送網たる鉄道がその輸送量の増加に対処しきれなくなることを危惧して生まれたものだった。

そこで1938年12月に『鉄道幹線調査文科部』が設立され、朝鮮・中国方面と東京・大阪を繋ぐ輸送ルートの根幹を成している東海道本線・山陽本線の両幹線の輸送力強化に関する調査研究が開始された。更に翌年の1939年7月には『鉄道幹線調査会』が勅令をもって設立され、輸送力拡大の為の方策が具体的に検討されるようになり、同年11月に結論として早期に同区間に別線の高規格鉄道を敷くことが必要であるということになった。これが『弾丸列車計画』の始まりであった。

翌年1940年に帝国議会で正式に承認され、1954年までに開通させることを目的とした『十五ヶ年計画』に基いて総予算5億5600万円をかけて建設されることとなった新鉄道だが、その最終目標は壮大なものであった。将来的に対馬海峡に海底トンネルを掘削し、満州国の首都新京や中華民国の北京までの直通列車を走らせるというものだった。無論、それは机上案に終わらざるを得なかった。

太平洋戦争中にシンガポールを占領すると、次にそこまでの延長線案も浮上した。これはいわゆる『大東亜縦貫鉄道』の第1縦貫鉄道群で、インド・チッタゴンまで続く第2縦貫鉄道群、はてはドイツ・ベルリンまで続いた第3縦貫鉄道群も存在した。シベリア鉄道に替わる超大な鉄道として構想された大東亜縦貫鉄道はやはり、日の目をみることはなかった。

また、そんな日本同様にドイツでも『ブライトスプールバーン』という、壮大なる鉄道計画があった。このナチス・ドイツが計画した鉄道計画は、1942年から1945年終戦まで計画されていた超高速巨大鉄道網のことで、計画を立案したのはかつて画家として近代的な都市開発の構想を練っていたヒトラーだった。起点はミュンヘンに置かれ、奴隷化したスラブ人の輸送や東ヨーロッパをドイツ民族の移住地、資源の供給源として確保するのが大きな目的であった。

注目すべきは鉄道を走る列車である。時速250kmで走る全長

70 m、幅6 m、2万4000馬力の機関車を8両連結し、その後
に全長50 m、幅6 mの2階建ての客車を15両連結した列車を走
らせる計画であった。ヒトラーはミュンヘンを起点として、これを
全ヨーロッパ中に張り巡らせた鉄道網によって運行させる予定だっ
た。

無論、これもまた実現しなかった。

今物語における『弾丸列車計画』もまた、そんな壮大な夢物語に
行き着くこととなった。EUの誕生、ノモンハン事件、拡大化する
ソ連軍との小規模戦闘がこれに起因し、ヨーロッパ各国の協力もあ
るということもあり、鉄道省や陸軍の野心家達にはわかに騒ぎ出し
ていた。計画は1940年の東京五輪の国内インフラ整備の中核を
成し、史実以上に進んでいた。

しかし問題は山積している。

「陸軍は有事の際に起こる、変電所等への攻撃を懸念しているの
だろう？」伊藤は言った。

「そうです」島は答えた。「全面電化となれば、送電施設が破壊
された場合に運行が停止する。だから基本的には非電化にすべきだ
と」

「その点に関しては心配しなくていい。私が黙らせる」伊藤は言
った。「君らには頑張つて貰いたい。我々としても、戦争を回避

若しくは本土を主戦場とさせないよう、全身全霊を尽くす次第だ。
そうなれば、送電所が攻撃を受ける　という前提を覆せるからな」

第46話 弾丸列車構想（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第47話 新高山登ラズ（前）

第47話『新高山登ラズ（前）』

【1941年11月、私は厳寒なる海の上に居た。それはかつて南雲司令長官が6隻の空母を率いて日本を発った地であり、帝国の未来の瓦解が確定した歴史的な月であった。『新高山登レ』。そんな電文から始まった5年間に及ぶ戦争は、私にとっても周囲の人々にとっても、大切な『何か』を多く失う結果となるのだが、それは終わり頃に気付いたことである。我々が介入した新たな歴史においては、身の程を弁える人間は若干ながらも増えたかに思えた】

（伊藤整一口述回顧録第12部第1章『新高山登レ』より抜粋）

1941年11月26日

北海道／択捉島

グレイ・ゴースト
灰色の幽霊。

太平洋戦争期、東京ローズからそう呼ばれていた重巡洋艦『ペンサコーラ』は、鉛色の厚い雲に覆われた単冠湾の下、70隻近くに及ぶ別の“幽霊”とともに鎮座していた。択捉島は単冠湾と言えば、史実、6隻の正規空母を基幹とする帝国海軍の南雲機動艦隊が集結し、ハワイ諸島に向けて出発した地であるが、その華々しい艦隊とは裏腹に寂しい土地柄であった。岸壁が岩肌を惜しげも無く晒し、鼠色の海面は 荒れていた。

そんなまるで世界のはてのような単冠湾だが、大小様々な艦艇が犇めき合っていた。しかもその大半は米海軍の艦艇だった訳で、被

弾、風雨、潮と、長年に蓄積してきた疲労は大きい。老朽化避けられず、船体は時折、悲鳴が如き物音を響かせていた。

『第八艦隊』と、称されるこの艦隊の特徴はそれだった。即ち、米海軍の旧式艦艇が中核を担い、世間には知られる事を許されない艦隊である。単冠湾が集結地点に選ばれたのも、他の国籍の艦船が来ることが無いであらう、厳寒で人里離れた僻地であったからだ。南雲機動艦隊が此処を集結地点に選んだ理由も 且つハワイから最短距離であった それだった。

水平線上から僅かに漏れる曙光が第八艦隊の旗艦『ペンサコーラ』の前部甲板を照らしめる。艦橋の司令長官席に座っていた藤伊一中将は立ち上がり、窓辺に立ってそれを見張った。出発の時である。

第八艦隊の旗艦『ペンサコーラ』は、かつての米海軍籍重巡洋艦であり、太平洋戦争期には数多の戦闘に参加した歴戦の軍艦であった。1941年は11月29日、マニラへの輸送船団護衛の任務で帝国海軍機動艦隊の魔手 真珠湾奇襲 を逃れた所からその輝かしい戦歴は始まり、ミッドウェー海戦、ソロモン諸島の戦い、南太平洋海戦、ルンガ沖夜戦、レイテ沖海戦と続いた後、硫黄島・沖縄の上陸支援作戦に従軍した。結局、最期を戦闘中に迎えるに至らなかったペンサコーラは、同級の姉妹艦『ソルトレイクシティ』とともに、ビキニ環礁にて行われる原爆実験の標的艦に指定された。しかしそれでもペンサコーラは沈まなかった。2度の核実験を耐え抜いた不屈の巡洋艦は、それから2年後にワシントン州の沖合 祖国の海底で永久の眠りにつくこととなる。だが、その運命は時空転移によって覆されることとなった。

現在、ペンサコーラはこのねじくれた歴史の中で、第八艦隊の旗艦としての第2の人生を歩んでいた。ペンサコーラ級重巡の2隻は『第七艦隊』『第八艦隊』それぞれの旗艦に白羽の矢を立てられ、第七艦隊にはソルトレイクシティ、第八艦隊にはご存知の様にペン

サコーラがあてがえられた。以後この2つの艦隊は、司令部と司令長官がこの重巡とともに交代することで、艦隊の名は変わった。同艦艇・同人員によって編成されたこの第七・第八艦隊は一方の司令部と一部の戦闘艦が英気を養うことで、艦隊の指揮統制網を常に万全に保てる　という訳だ。

「閣下、第十一水雷戦隊は全艦抜錨完了、湾外への航行を開始しました」参謀長の原忠一少将は折り目正しく言った。原は海軍兵学校39期生で、伊藤とは同期にあたる。その日本人離れた体格から『キングコング』と渾名され、珊瑚海海戦で奮闘した彼のことを伊藤は良く知っていた。しかし、逆行して中将階級を戴いた藤伊一中将として原を相手にしてみれば、そういう訳にもいかないのだ。あくまでも部下として、後輩として接しなければならぬ。

「十一水雷戦は発つか……」藤伊は言った。「では、我々も素早く湾外へと出ようか。君も見ての通り、寒気が強まってきている。時化が強くなり、海面がより一層荒れれば燃料やら物資が予定以上に消費され、帰還するどころか目的地に到達することさえ出来なくなるだろう」

「そのことなのですが、閣下」原は言った。「将官を始め、艦隊に所属する人間全てが目的地や本作戦の意図を未だ伝えられていません。既にその不安が高まり、士気にも影響し始めております」

「その軍服のことは聞かないのか？」藤伊は訊いた。

「米海軍の軍服です」原は言った。「それ以上には聞きませぬ。連合艦隊司令部の意図を探る気も御座いませぬし、閣下が何をお考えなのかも……」

原のその言葉は、藤伊に対してその真実を告げて欲しいことを暗示していた。彼等は『第八艦隊』に属してはいるが、徹底的な防諜によってその艦隊のことを殆ど知らなかった。米海軍の軍服に星条旗、帝国海軍とは異なった艦艇と、奇妙さや不安を覚える点は多々ある。しかし、上層部が説明してくれないので、その感情は積もるばかりだった。

「原参謀長」藤伊は言った。「我々は本日0900をもって単冠湾を発ち、一路　ハワイへ向かう」藤伊は踵を返し、背後に一列で整列していた幕僚達の顔を見た。皆、動揺の色を隠せないようだ。「その目的は同艦隊の演習並びに米海軍への威圧にあり。ワシントンより報届いたる後、とある一文が東京通信隊より発せられる」

「とある一文とは？」

藤伊は再び窓辺に立ち、外を見据えた。

「『新高山登レ』」藤伊は言った。「それがゴーサインだ」

その時期、EU　『ヨーロッパ同盟』と米ソとの対立は激しさを増していた。双方は限定的な経済制裁、軍事衝突を繰り返し、文化の崩壊が続けられた。それはEU準加盟国の大日本帝国にとっても例外的ではなく、米国による経済制裁は目前にまで迫っていたのである。

「石油はともかく、屑鉄は現在でも米国に依存している」藤伊は言った。「ワシントンに向かった野村大使と来栖特使に頑張って貰わんと、再来年頃からは軍艦の建造が遅れてしまうだろう。海軍はそれを重くみている」

「となると、今回の作戦もそれが本筋ですな」

藤伊は頷いた。「実行されるとは思えんがな。何しろ、我が方の艦隊は旧式艦ばかりの老齢艦隊だ。船が年寄りで、司令長官たる私も60を過ぎた老いぼれだからな」藤伊は言った。「基幹となる空母は『サラトガ』、『インディペンデンス』、そして『天城』のたった3隻だ。どう頑張っても一航艦には勝てんよ」

と、藤伊は言うものの、第八艦隊は強力な艦隊だった。各艦は米国製の最新鋭レーダー、射撃管制装置、通信機器、そして5インチ砲やボフォース40mm機関砲を備える。更に2隻の空母はその搭載数では史実の南雲機動艦隊に及ばないかもしれないが、零戦を軽く屠ってしまうF6F『ヘルキャット』を始め、新鋭の航空機が配

備されていた。また、空母に乗艦するのは2年前の『ノモンハン事件』でも活躍した帝国海軍特別第零航空隊 通称『特零空』である。元陸軍航空兵でトータル71機の撃墜数を誇るトップエース篠原 、『東洋のリヒトホーフェン』 を始め、実戦や過酷な訓練を耐え抜いた歴戦の猛者達が揃う精鋭航空隊だ。一般機動部隊の2倍は良い働きをしてくれることだろう。

第47話 新高山登ラズ（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第48話 新高山登ラズ（後）

第48話『新高山登ラズ（後）』

1941年12月1日

アメリカ合衆国／ワシントンD・C・

首都ワシントンD・C、ナショナルモール北側に位置する政治の中枢地　ホワイトハウス。その午後、大統領のプライベート・ルームに通された特別外交顧問ハリー・L・ホプキンスは、啜り泣きとも笑いともつかない呼気を漏らす第32代合衆国大統領フランクリン・D・ルーズベルトの姿を見た。ダイニングチェアに深く座り込むその老人は、それまでに強気の姿しか見せていなかった為、ホプキンスは驚いたのだった。

「覚えているか？」

そうルーズベルトは訊いた。彼がホプキンスに問うのは1年前の“あの”対談、ニューヨークの敏腕弁護士ウィリアム・J・ドノヴァンとの密談であった。

「ウィルは……死んだ」

何年もの間ホプキンスの心の中では、ルーズベルトは世界でも類を見ない強大な存在だった。それは嫉妬心でもあり尊敬心でもあって、常にホプキンスの前に立ちはだかっていた。しかし今や、過去の彼は綺麗さっぱり消え去ってしまったように見える。消沈した彼はまるで子供のように小さく見えた。

「覚えていますと」ホプキンスはそう言い、ウイスキーに満たされたグラスをルーズベルトに手渡した。「私と彼は貴方に渡されたこれを飲んでいた。そして、了承した。しかしそれは自らの意志であって、貴方が無理強いした訳ではないのです。だから自分を責

めるのはよして下さい」

ルーズベルトは手渡されたグラスを持ち、ぐっとウイスキーを喉に注ぎ込む。ウイスキーが喉を焼き、徐々に視界が晴れてきた。テーブルを挟んだ向こう側に、ソファに座ったホプキンスの笑みが映り込む。そして彼の顔には熱意が感じられた。

「申し訳が立たんのだよ」ルーズベルトは言った。「ウイルとはコロンビア大のロースクール以来の間柄だ。それに娘も居る。パトリシアだ。せめてもの救いとしてパトリシアを養子に迎え入れたが、あの子にしてみれば父が死んだ真実を知りたい所だろう。本当に私が彼に命令して、チャーチルを暗殺したのかどうか……」

「その答えは明確ではありませんか！」

「そうだな。しかし、その最期は伝えてやれん」ルーズベルトは言った。「私としては、父親の汚名を何としても返上し、この事態に陥らせた者に生きる事を躊躇わせるほどの苦痛を与えてやりたい」ホプキンスは頷いた。

「私は今日、それを提案しようと、ここに来たんです。我が合衆国がソ連を支援してやるんですよ」

ルーズベルトは顔を上げ、ホプキンスを見て、一瞬大きく目を見開いた。それからまた俯いて床を見た。「分からんな。それがパトリシアと合衆国を救う手段だと言い張る君が」

「EU誕生以降、ソ連のスターリンはヨーロッパの軍勢がソ連領内に侵攻してこないかと戦々恐々しております。既にフィンランド、ポーランド等、ソ連に面する諸国では小規模なソ連赤軍の越境行為が頻発し、EU軍と赤軍は一触即発の状態。戦争となるのも時間の問題でしょう」ホプキンスは言った。「ある筋からの情報では、ソ連赤軍は100万を超える兵力を集結させ、数千の戦車と戦闘機をもってフィンランドへの侵攻を画策としている……とか。しかし赤軍はスターリンによる粛清と、貧困によって質はEU軍に遠く及びますまい。そこで我々は経済的・技術的支援を行い、赤軍を強固なものとするのです」

またルーズベルトは顔を上げ、ホプキンスと顔を見合わせた。

「それでは本当に私は共産主義者になってしまうではないか。まさにあのヒトラーの思うツボというものだぞ！」ルーズベルトは声を張り上げて言った。「それに……ソ連は本当にフィンランドを侵攻するのかね？その確証が掴めぬのでは、どんな提案も机上のものと捉えねばならん」

「まさに大統領閣下が申される通り、我々の敵はヒトラー、そしてイタリアのファシスト共です」ホプキンスは前に身を乗り出した。「閣下も薄々承知でしょう。1年前のあの事件でもっとも得をする人間が誰か？真の敵はドイツ・イタリア・日本といった国であり、全ての発端は奴らの暴挙と止まらぬ野心にあります。しかし世界はその事実を知る由もなく、逆に認めてしまっている」

「だからといってヨーロッパの国々も巻き込む気か？」

「いえ、事件の主犯であるドイツさえのしてしまえば、全ては好転しましょう」ホプキンスは言った。「ソ連赤軍が真つ先に侵攻するであろう第1の目的地はベルリンです。これは我々に分があります。独裁者ヒトラーが処刑され、ナチが崩壊したとしても、ヨーロッパが共産主義に蹂躪される前には我々の嫌疑も解かれるでしょう。陰謀の真相が解き明かされたその時、世界の嫌われ者であった我々は、英雄として迎え入れられ、信用は回復します。例えばソ連がドイツを侵略した後、陰謀の真相が明らかになってもなお侵攻を続けたとしても、我々は事態にケジメを付けるという名目をもってヨーロッパの戦争に介入すれば良い話です」

「成程、悪くはない筋書きだな」ルーズベルトは言った。「だが、肝心のフィンランド侵攻は本当に起こるのかね。これ以上時間が掛かれば、ドイツに扇動されたE.U軍が東西海岸から侵攻してくる方が先になってしまいかねからな」

ホプキンスは頷いた。「米海軍の報告によれば、クロンシュタットのバルチック艦隊母港には極東方面や黒海から多数の艦艇が集結しているのが確認されていますし、国境線上では断続的なソ連軍に

よる砲撃が続けられています。スターリンは日に日にEUへの批判を強めているのを見る以上、戦争開始は当然の帰結として、来年辺りにも起こり得ると私は確信しております」

しばらく間があり、ルーズベルトは立ち上がって窓辺の方へと進んだ。「私に共産主義者を支援しろというのか。まあ、国家社会主義者や帝国主義者共よりは幾分か……本当にごく僅かだが、今の所は思慮分別がある。それも良かろう」ルーズベルトが小さな声で絞り出すように言った。

「で、思うのですが。日本との国交は保っておくべきでしょう」ルーズベルトの瞳の中で一瞬、何かが燃え上がったが、すぐに収まった。「何故だ？」

「残念ながら、現在我が国は貧困に喘いでいます」ホプキンスは言った。「それはEU主要国であるヨーロッパ諸国がその体裁から貿易を停止した状況下であり、輸出収益は日ごとに減少しているからです。EU加盟国の中でも経済力に富み、且つ現在に至っては最大の顧客である日本との今回のイザコザは、貿易を途絶しかねません。そうなれば、全てが終わる頃には経済はガタガタになり、戦争さえ起こせない状態になっているかもしれません」

ルーズベルトの喉奥から掠れた声が出てきた。「そうか。では、当面は赤子をあやすように対処することにしよう。日本など何時でもどうとでも出来るからな。それはヨーロッパでの問題に一定の決着が着いた時でいい」

ホプキンスは頷いた。「それが宜しいでしょう」

「ありがとう。活路を開いてくれたな」ルーズベルトは笑みを浮かべた。「流石は特別外交顧問、“特別”を付けただけのことはある。では、近い内にスターリンとの密談の機会を作り、史上類を見ない支援工作を行うこととしよう。来たる日には、君は英雄として讃えられるだろうな」

その日の午後、駐米大使の野村吉三郎と特命大使の来栖三郎はD地区の心臓部、ナショナル・モール地区近域に聳える国務省へと招待されていた。リンカーン・リムジンの後部席から並木通りが見えてくると、いよいよ2人も緊張の色を隠せなくなり、互いに顔を見合わせた。丁重に、且つ緊急に招待される　という前例は存在しないからだ。

「何が起るんでしょうか？」

野村は呟いた。「こんな事初めてですからな。良い結果だといいが……」

国務省に着くと、2人は職員達の丁重な出迎えを受けて国務長官の執務室へと通された。その扱いがあまりにも大げさ過ぎて、馬鹿にされているのではないかと2人は感じるしかなかった。それか恐らく、何かを企んでいるのか。

「大使、よくいらつしました」

デスクに腰掛けていた男、コーデル・ハル国務長官は堂々とした姿勢を崩さず、革椅子から立ち上がって笑顔で握手を交わした。職員のように媚び諂うものではない。2人はそれまでの緊張感から脱し、気持ちよくハルと握手を交わし、促されて席に着いた。スーツ姿の女性職員が純白のティーカップに入れた紅茶を持ってきた。野村と来栖は琥珀色の温かなその液体を、何回かに分けて飲んだ。

「本日、我々を読んだ理由を教えてくださいませんか？」野村は言った。

ハルは頷いた。「大統領からのメッセージを伝えたく、本日はこうして御足労頂いた訳ですよ。ミスター・ノムラ」

「そのメッセージとは？」

「どこから始めましょうか」ハルは言った。「要点から言えば、今回の経済制裁は中止されました。我が国は貴国との国交を維持し、EUとの蟠りを改善する為の協力を乞いたいのです」

「それは陛下もお喜びになるでしょう。提案に関しては私や来栖特使個人では決め兼ねる問題ですので、帰国次第奏上し、御聖断を

問いたく存じます」

「助かります。頼みましたぞ」ハルは言い、3人は再び握手を交わした。

1941年12月2日

千葉県／船橋市

【『大和』発緊急、機密第676号電令第10号、発令日時12月2日1730】

それが届けられたのは帝国海軍の無線電信所船橋送信所であつた。史実で『新高山登レ1208』の一文を南雲機動艦隊に送信した施設である。呉に停泊する連合艦隊司令部 旗艦『大和』から発令された電令は呉通信隊経由で、東京通信隊に送られた後、ここにその電令が送られてきた。

「電文送れ！内容は」通信隊の通信主任は片手を上げて言った。「だ。繰り返す、だ」

同時刻、北方の太平洋上を駆る第八艦隊の元に1つの電文が届けられた。第八艦隊旗艦『ペンサコーラ』に乗艦する藤伊一中将

伊藤整一 は通信兵からその報告を受けた。

「緊急電です、閣下！」

「そうか」藤伊は言った。「内容は？」

「『ニイタカヤマノボラズ1202』」繰り返します、『ニイ

タカヤマノボラズ1202』」

藤伊は顎を擦り、艦橋に集う幕僚達を見張った。「さて、これで本作戦は終了だな」

「撤退しますか？」参謀長原忠一は言った。

「そうだな。本土へ」藤伊は言った。「いや待て、伊・四〇四より報告が入っていた筈だな」

通信兵は頷いた。「はッ、『ワレ、RT二到達ス。1720』」

リースベルト・セオドア

「名残惜しいものだな。敵に気付かれず、その喉元に刃の切っ先を当てているというのに」藤伊は呟いた。「原参謀長、君はどうすべきだと思う？」

「閣下同様、私もこの状況は非常に惜しいと思います。しかし、連合艦隊司令部の命令と陛下の御聖断は絶対です。我々は早期に本土へと帰還し、次なる作戦に向けて休養を取るべきかと」

藤伊は頷いた。「では、切り上げるとしよう」

1941年12月2日、ここに『第八艦隊』はその成果を上げ、敵味方気付かれることなく、ハワイまでの航路の半分に到達することが出来た。これは重要な参考となり、後の連合艦隊司令部の作戦立案に大きく貢献した。

本国へと向かう帰路の中、自らが挙げた成果にある程度の自身を持っていた野村・来栖・伊藤 1941年末のキーマン達だったが、その時、その成果が来年には呆気無く崩れ落ちてしまう程の出来事が起きてしまうなどと、思いもしていなかった。そして1942年、彼らは誰よりもその出来事に驚嘆するのだった……。

第48話 新高山登ラズ（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

断章 クズネツォフ提督の憂鬱

断章『クズネツォフ提督の憂鬱』

1942年春

ソビエト社会主義共和国連邦

バルト艦隊の根拠地であるクロンシュタット・コトリン島は、大小多くの島が偏在する多島海^{アイキペラゴ}に属していた。そして同時に、その周囲をフィンランドやエトアニアといった仮想敵国に取り囲まれていた。無論、ソ連海軍やスターリンはその環境を快く思う筈が無かった訳だが、その苛立ちはEU ヨーロッパ同盟の誕生によって、恐怖に替わろうとしていた。モスクワで執務をこなしていたニコライ・クズネツォフ海軍人民委員（海軍大臣）がクロンシュタットへ急遽赴任したのも、日に日に膨張する恐怖に解決策を講じる為であった。

クズネツォフはクロンシュタットの赤旗勲章受章バルト艦隊司令部入りし、早速作戦室へと向かった。室内にはバルト艦隊司令官のフィリップ・オクチャーブリスキー中将、そしてイワン・イサコフ海軍参謀総長の姿があり、バルト艦隊の諸提督達が横一列に並んでいた。クズネツォフは険しい表情を浮かべ、敬礼する諸提督達を見据えた。

「楽にしろ」クズネツォフは片手を上げ、言った。

「ようこそ、バルト海へ」

オクチャーブリスキーは媚諂うような笑みを浮かべ、握手の為に右手を差し出した。クズネツォフは手早く握手を済ませると、部屋の中央に設置された円卓に一瞥をくれた。フィンランド湾を起点とした、バルト海^{バルチック}の海図が開かれて置いてあった。

「戦況は？」

クズネツォフは単刀直入に訊いた。

「EU海軍の第3潜水艦隊所属と思わしき潜水艦群の活動が活発化しております」バルト艦隊司令部の作戦幕僚の一人、ザイチエフ大佐は言った。「先日も、Uボート並びにアンダーソン級潜水艦の混成潜水艦部隊の存在が近海域で報告され、その数は凡そ18隻と推測されています。先月は日本のイ号潜の存在も確認されております」

「イ号などは基本、ブリキバケツとさして変わらんから無視しても構わんが、キャベツ野郎とライミーのU潜水艦共は危険だ」クズネツォフは言った。「対潜警戒を厳とし、EUの混成艦隊や潜水艦部隊が入れんよう、機雷封鎖の準備を着実に進めておけ。下手に艦隊決戦などとなれば、我々に勝機は見えん」

EUの誕生、それに伴うソ連海軍を襲った恐怖の影響と言えば、ニコライ・クズネツォフ海軍人民委員の到来とイワン・イサコフ海軍参謀総長の赤色勲章受章バルト艦隊司令部への駐在、そしてEU海軍混成潜水艦隊の台頭であった。とくにUボートの数と性能は圧倒的で、ブロック方式・電気溶接で建造されたそれは、バルト海を埋め尽くさんばかりに大量建造が進んでいた。また、未来のUボート・エース達が続々と配備されており、日英よりもたらされたソナー・レーダーを搭載する艦も少なくなかった。ソ連海軍最大の65隻という数の潜水艦を保有するバルト艦隊だがこの場合、質と数において圧倒的に敗北していたのである。

それに、主力艦においてもその戦力差は歴然であった。

これまで、ソ連海軍の上層部はドイツ海軍を仮想敵として定め、その準備を進めてきていた。しかしEUの誕生と同時にフランス・イタリア海軍、そして英国海軍を相手としなければならなくなった。それは『沿岸海軍』であって『大洋海軍』ではないソ連海軍には無理難題な話であり、クズネツォフが最も頭を悩ませる問題でもあつ

た。

「我がバルト艦隊は戦艦『ガングート』を旗艦とし、姉妹艦『ペトロパブロフスク』と最新鋭巡洋艦『マクシム・ゴリキー』を主要戦力として保有しております」オクチャーブリスキーは言った。

「更に『クラスヌイイ・クルイーム』以下3隻の巡洋艦、駆逐艦21隻、潜水艦65隻、そして外縁航空戦力を含めた航空機750機が補助戦力として存在しますが」

「機動戦力は？」

クズネツォフは訊いた。「今回の作戦に機動戦力は欠かせない。確か『ミハイル・フルンゼ』があつた筈だが」

航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』艦長のイワン・N・ホロストロフスキー大佐は頷いた。「ダー、^{はい}しかし主要戦力とは成り得ないと将官は考えております。何故なら、我々の空母と他国の空母ではその運用方法が全く異なり、重雷装を誇るミハイル・フルンゼは対潜任務に適しているからであります」

ホロストロフスキーが言うように、ソ連と別国との空母運用方法は異なっていた。大洋ではなく、制限された海域での戦闘、そして敵潜水艦の存在を考慮されたソ連の空母は雷装・砲装に富み、艦載する航空機も日米のような対地攻撃には使わず、敵潜に対する雷撃や制空権の確保のみに限定された。また、モンレー協定の足枷もあり、ソ連は空母を空母と言わず『航空巡洋艦』等の呼称で位置付けた。そして巡洋艦と言い張るからには重武装が求められ、結果的にソ連の空母は他国の空母よりも火力に富んでいたのである。

この航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』は、そんな条件の揃う重武装空母であつた。1920年代の初期型空母の表層を見せるミハイル・フルンゼはその名を聞けば薄々気付くかも知れないが、ガングート級戦艦の第3番艦『ポルタワ』である。史実、ミハイル・フルンゼは1922年にレニングラードはネヴァ河で火災事故を起こし、一次着底、そして浮上。引き揚げられたミハイル・フルンゼは損傷激しく、目も当てられない姿になっていた。そこで持ち上がったの

が、『空母』への改装案であつた。

史実、同計画は予算・資材不足によつて頓挫したのだが、今物語では違つていた。設計陣や航空主兵派による働き掛けと、同時期に建造が進んでいた英海軍空母『イーグル』、仏海軍空母『ベアルン』への対抗心から、ミハイル・フルンゼは戦艦から『航空戦艦』へと生まれ変わったのである。

「だが、敵は数十を超える空母を保有し、機動戦力基幹の艦隊で布陣してくることだろう」クズネツォフは言つた。「そうになると、それに対抗する手段が少しでも必要となる。我が海軍の機動戦力はこの航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』に加え、重航空巡洋艦へとシフトチェンジした『チャパエフ』級巡洋艦2隻　クズネツォフによる介入により、1番艦『チャパエフ』と2番艦『チカロフ』が空母化　軽航空巡洋艦の『イルクーツク』級（71A型軽空母）、そして70機の艦載を見込む『アストラハン』級重航空巡洋艦（71B型空母）だ。足掻きはしたが、これでも足りん」

史実でもそうだが、クズネツォフは空母の建造に並々ならぬ熱意を持っていた。1944年には『72型』軽空母案を支持したり、ドイツ海軍より鹵獲した空母『グラーフ・ツェッペリン』を完成させる計画や、同じく鹵獲した重巡洋艦『ザイドリッツ』を空母に改装する案を出していたのである。

しかし、これらはスターリンによつてことごとく却下されてしまつた。『沿岸海軍』のソ連海軍には不向きであつた事や財政面、そしてスターリン自身が戦艦や巡洋艦こそが『力』であると考えていたということもあつた。唯一、グラーフ・ツェッペリンは実験・練習空母として完成させることが認められたのだが、損傷の激しさから断念された。

「閣下、そのような戦力があらずとも、戦艦や巡洋艦、駆逐艦で十分に対処出来ましょう」そう言つたのは、オクチャープリスキー

だった。「数年後には『ソビエツキー・ソユーズ』級、チャパエフ級、そしてマクシム・ゴリキー級が就役します。今年 of 海戦は独英の戦艦を相手とすれば厳しい戦いになりましょうが、ソビエツキー・ソユーズを始めとする艦艇が順次就役すれば、何とでもなりましょう」

クズネツォフはオクチャープリスキーが典型的な大艦巨砲主義者であり、親スターリン派であることを確信した。つまり、自分とは相対する正反対の人間なのだ。

「これからは空母の時代だよ、オクチャープリスキー中将」クズネツォフは言い、かぶりを振った。「航空機こそが海戦の趨勢を決める鍵と言っても過言ではなからう。そう思えんのも無理な話じゃないが、空母の有用性は万国の海軍で認められ、世界は急速に空母の建造を進めている。我がソ連赤色海軍も、それに乗り遅れてはならんのだよ」

そう言い、クズネツォフは海図に目を向けた。

「ホロストロフスキー大佐」

「はッ！」

「貴官は、EU海軍の北方艦隊に対しては如何に対処すべきだと思う？」

ホロストロフスキーは声を張り上げて言った。「敵艦隊に対しては機雷封鎖による移動の制限を図り、同時に海軍航空隊の陸上航空戦力を有効に利用した攻撃を図るべきかと。I-16やYak-1戦闘機によって制空権を確保した後、I-16を始めとする攻撃機を投入します。新型機であるI-16は爆撃及び重雷撃に特化した機体と聞いておりますので、これを効率的に配置し、湾内にのこのこやって来た北方艦隊に止めを刺してやるのです」

フィンランドにとっての不利、ソ連にとっての有利は 主力艦隊の位置にあった。国軍の海軍戦力がたかが知れてるフィンランドだが、同国は『オブザーバー国』でEUの駐留兵力が存在しなかった。これはソ連との戦争への発展を危惧したことで、同国の軍隊を

国防のみに配置したかったからである。

EU憲章において、いわゆるオプザバー国はEUに属する他国軍の駐留が禁止されており、有事の際のみに『軍事支援』という名目で混成軍が派兵される。主要同盟国や準加盟国にはEUに関連する戦争に対し、それに対処する為に兵力を送る義務があるのだが、オプザバー国はEU全体で勃発する戦争に兵力を送る義務が無いのだ。ソ連に面するフィンランドはEUでの軍事的加盟によるソ連との戦争発展や、他国間で勃発する戦争に関与したくなく、EUが戦争への抑止力になると考えていた。

こうしてフィンランドはオプザバー国となったのだが、結局の所はEUという抑止力も功を奏さず、ソ連は戦争を起こそうとしている次第である。

結果として、敵からの侵略以外の平時には、フィンランドには一切の戦力の配備は禁止され、それは艦隊においても同様だった。エトアニアは中立的立場にある為、EU海軍はノルウェーやポーランドやドイツにその戦力を配するしかなかった。ただ、もっとも近いノルウェー・ストックホルムの駐留艦隊は、港湾設備の不足とEU主要加盟国がソ連との戦争発展を恐れている為、十分な戦力とは言えなかった。結果として、バルト艦隊はフィンランド湾においては一定の地の利を得ている訳である。

クズネツォフは頷いた。「では、貴官は護衛の駆逐艦とミハイル・フルンゼから編成される小艦隊を指揮し、対潜・対空哨戒に従事せよ。敵の潜水艦を一隻でも多く、バルト海の藻屑としてくれることを期待する」

「では本日はこれにて一次解散とする。今後の具体的な作戦方針の決定は、次の会議で実施する」クズネツォフは言い、諸提督達は一列に並んだ。「では、解散」

断章 クズネツオフ提督の憂鬱（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第49話 2つの大洋 2つの演習（前）

第49話『2つの大洋、2つの演習（前）』

1942年2月2日

アメリカ合衆国／ハワイ準州

オアフ島、真珠湾内に投錨していた第5巡洋艦戦隊はEU海軍東洋艦隊に対する抑止力の一つであった。史実における真珠湾ほどではないが、その湾内には6隻に及ぶ戦艦が鎮座しており、王者の余裕を見せている。その一方で、任務部隊の中核たる航空母艦は真珠湾内で形見狭そうに脇で投錨されている。

第5巡洋艦戦隊の旗艦である重巡洋艦『ノーザンプトン』は、ノーザンプトン級重巡の第1番艦であり、レイモンド・A・スプルーアン少将が将旗を上げる艦であった。当のスプルーアン少将は、先々月の8日に着任したばかりで、未だに戦艦部隊の司令官に就任出来なかったことを根に持っていた。何しろ、彼の指揮下にあるのは4隻の巡洋艦に過ぎず、満足にいくものとはお世辞にも言えなかった訳である。ただ、第5巡洋艦戦隊の他には、海軍省兵器部と大西洋艦隊参謀長という職しか無かった為、仕方が無いといえば仕方無かった。彼としては、ワシントンでデスクワークには着きたくなかったのだ。

「レイ、落ち込むもんじゃないぜ」

そう落胆するスプルーアンを諭すのは、第8任務部隊指揮官のウィリアム・F・ハルゼー中将だった。腫れぼったい目蓋と団子鼻が特徴的なこの御年59歳の提督は、怠け者で短気で鈍感という、まさに絵に描いたような気難しい老人と言えた。年を経て付けた贅肉はその白い制服を弛ませ、敏捷そうとは言えなかった。一方のス

ブルーアンスは品行方正、冷静沈着、謹厳実直の絵に描いたような真面目人間であつた。引き締まつた身体に整えられたその顔は、その性格同様にハルゼーとは正反対だつた。

一見、正反対で釣り合いそうに無い2人の提督だが、太平洋戦争期には『双璧』と謳われる程に優れた存在であつた。彼らがその所以を戴いた所には、『南太平洋部隊』の存在が大きい。この艦隊はハルゼー、スプルーアンス両提督によつてローテーションで運用され、ハルゼーが指揮する際には『第3艦隊』。スプルーアンスが指揮する際には『第5艦隊』と部隊名を変更させ、司令部とともに移乗する。この双璧が成るのは1943年3月のことだが、歴史の変貌した今物語ではそれが成立するかどうか怪しい所であり、万人も知る由は無い。

「今回の『フリート・プロブレム22』で成果を出せば、上層部も見る目が変わるかもしれないぜ」ハルゼーはアイスクリームを口に頬張りながら言つた。「まあ俺に任せな。侵略者として、存分にハワイで暴れ回つてやるぜ」

『フリート・プロブレム』とは、米海軍が開催する大規模な演習であつた。米海軍は1年間の内、大西洋・太平洋の各方面で訓練・演習を行つており、これは年間訓練・演習の集大成とも言える大演習だつた。1923年以来、今年度で22回目　去年は対英外交問題及びEUの結成に伴い、中止　となる。

今年度のフリート・プロブレム22は総投入艦艇数100隻以上、参加兵員55000名を誇る過去最大規模の演習と言えた。ハワイ近域、カリブ諸島、そして東海岸・ニューイングランド沖海域の3方面で進行される。ルーズベルト政権はハワイを太平洋方面の抑止力とすべく、この方面に大規模な海軍戦力を配備することを決定、本演習に際し、大西洋や西海岸域の戦力をハワイに派兵することが定められた。本演習後には太平洋艦隊は、史実よりは戦艦の数が少なく、機動戦力が集中　東海岸に対する英海軍への危機感　す　るという艦隊陣容が構築される。

「いま聞いた限りでは、自信満々のようですが」

「まだ半分も話しちゃいけないぜ」ハルゼーは言った。「今回はこの第8任務部隊、ブラウンの第11任務部隊、そしてフレッチャーの第17任務部隊を中核として、真珠湾に大攻勢を仕掛ける。憶えてるよな？」

スプルーアンスは少しの間、考えていた。「32年の『フリート・プロブレム13』！」スプルーアンスは言った。「ハリー・E・ヤーネル提督が成し得た、奇跡の大勝利ですね。確か敵艦隊に気付かれることなく、真珠湾の航空戦力を沈黙させたと……」

「いいや」ハルゼーはかぶりを振った。「“奇跡”じゃない。必然だよ。フットボールを考えてみる。空というフィールドなら、コインタクトもせずにエンド・ゾーンまで一直線だ。何しろ敵が居ないんだからな。同等に対峙出来る『航空戦力』が敵側に居なけりゃ、こつちの一人勝ちつてもんだろ？対空砲もたかが知れてるしな」

スプルーアンスは頷いた。「では、今回は32年の再現を？」

ハルゼーはかぶりを振った。「いや、違うな。再現というよりは踏襲、そして発展だな。今回は空母3隻と足の速い駆逐艦、巡洋艦で強襲するんだ。落伍するであろう戦艦はその大半を除外する」

スプルーアンスは瞠目した。「戦艦を、ですか？ヤーネル提督も後方戦力として布陣させていたというのに、始めから除外してしまうんですか？」スプルーアンスは言った。「ジャップの立場となるならば、戦艦は多いに越したことはありませんでしょう。何しろ、彼らはアドミラル・トーゴの意志を具現化させたような世界最大、最強の戦艦『Y』を就役させたと聞きます」

「そうかもな」ハルゼーはどうだろうと思いつながら返事した。「でも『Y』の存在は確認されたかもしれないが、他の戦艦の情報は一向に聞かない。『Y』に劣る戦艦の存在もだ。逆に空母の大量建造の報が日夜情報部から届いてるじゃないか」

「では、彼らは空母主体の艦隊を中核に？」

「間違いない。奴らは戦艦なんて造る気はさらさら無いんだ」ハ

ルゼーはそうは言ったが、渋い顔を浮かべた。「だが……よく考えれば筋の通らん話かもしれない。情報部が掴んだ情報も、帝国海軍が流したでまかせかもしれない。だが、奴らの国力や地理的特徴を考慮すれば、空母っていう機動性に富んだ兵器をジャップが主力にするという説は、何もかも筋が通ってくるんだ」

ハルゼーの顔は浮かなかった。

フランク・J・フレッチャー少将が将旗を掲げる空母『ヨークタウン』は、徐々に速度を上げながらその艦体を湾外へと滑らせていく。スプルーアンスは旗艦『ノーザンプトン』の司令官室からそれを眺めていたが、視線は再びハルゼーに向けられた。

「もうすぐだ」ハルゼーは言った。

スプルーアンスは腕時計を見る。針は1時を差している。「ええ、あと2日ですね。フリートプロブレム開始は」スプルーアンスは言った。「今回、太平洋方面で重視されているのは、日本機動艦隊による奇襲の可能性とEU東洋艦隊との戦闘、そして――」

「戦艦『Y』……だろ？」

スプルーアンスは頷いた。「『Y』と同級の戦艦は、我が合衆国海軍には存在しません。『アイオワ級』の就役は2、3年は先のことでしようし、それにしてもたかだか16インチと聞きます」スプルーアンスは言った。「最後の希望は『モンタナ級』でしょうが、これにしても建造はまだ始まったばかりだとか。既に現実となった悪夢に対処するには、役者不足と言えましょう」

「悪夢……ね」

ハルゼーは伸びをしてから腰を上げ、湾内に浮かぶ旧式戦艦群を見据えた。

「何も同じ土俵で戦ってやる必要は無いんじゃないか。戦艦が最強だという高邁な理想も、数十発の航空魚雷の前には何の役にも立たない筈だ」ハルゼーは言った。「レイ。もし戦争になって俺の身

に何か起きた場合には、戦艦じゃなくて機動部隊の指揮を執って欲しいんだ」

「そんなとんでもない！」スプルーアンスは慌てて言った。「貴方が負ける筈が無い。貴方は高齢だというのに『ウイング・マーク』を取得した不屈の人なのですから」

ハルゼーは浪面を浮かべた。「おい、レイ。俺はそんなに年じゃないぜ」ハルゼーは言った。「それに『Y』なんて気にするなよ。

『Y』なんてたかが大戦艦だよ。ビッグ・バトル・シップそれに比べて、モンタナ『M』は巨大戦艦だぜ」

たとえモンタナ級の全長が280mだとしても、全長263m、基準排水量64,000tの『大和』が“大戦艦”というのは、控えめな形容だろう。完全なパナマックス艦であるモンタナ級は、史実では結局建造中止となったが、その船体設計は『ミッドウェイ級』空母に活かされることとなる。

「ええ、そりゃ合衆国海軍が日本海軍に負けるとは思いませんが……」スプルーアンスは言った。「でも油断は禁物というものでしょう。奴らもこの時期、大規模な演習を行うと聞きましたし」

「油断も、し過ぎれば取り越し苦労だ」ハルゼーは言った。「EU東洋艦隊が何だ。たかが烏合の衆に過ぎんよ。頼みの綱の日本海軍も、プライドだけが一人前のロイヤル・ネイヴィーに足を引っ張られて、トーゴー・スタイルの戦闘もろくに出来んだろうさ」ハルゼーは浪面を浮かべた。「考えても見ろよ。“ジョンブル”と“イエロー・モンキー”が協力するんだ。その哀れな末路なんて、誰の目にも見えてる」

「『隷属』か……、『決裂』か……」スプルーアンスは言った。

「我々としては、後者の方に至って貰いたいものです」ハルゼーは頷いた。

「ああ、それが一番だろうさ」

1942年2月3日

東京府

時に2月、米海軍の『フリート・プロブレム22』が行われる裏で、EU海軍もまた大規模な軍事演習を企画していた。『第1回アジア合同海軍演習』である。マラッカ海峡を中心とする同演習は、大日本帝国・イギリス・ドイツ・オランダ・オーストラリアのEU加盟5ヶ国で開催される合同海軍演習である。無論、これは米海軍のフリート・プロブレム22に対抗する為のもので、同時期には西大西洋方面でも大規模な合同海軍演習が実施されることとなっていた。

「吐き気が込み上げてきた。ジョンブルめ、我々をペットの猿か何かと勘違いしてるんじゃないのか？」

そう憤懣ぶちまけるのは、森下信衛大佐だ。彼の憤りの真意はイギリス海軍側の要望書類　と、いうよりは半ば命令　で、その内容は戦艦『大和』を中核とする、戦艦部隊を演習に参加させて欲しいというものだった。

「ジョンブルは軽口叩きらしい。『大和』を演習に参加させるというが、こちらの苦勞も悟れというものですよ。ただ単に『大和』をマラッカ海峡に動かす、といった所でそれには『油』が要る。『飯』が要る。『人』が要る。それに米海軍のアジア艦隊が潜水艦を集中配備していて、迂闊に動けば撃沈される可能性も否めない」

「だな」伊藤整一中将は言った。「戦艦もそうだが、軍艦つていうのは造るよりも維持、運用するのがもっとも大変なんだ。戦争末期に燃料を失った『大和』は一步も動けず、ウドの大木となって困窮する海軍を苦しめた」伊藤は唸った。「それにアジア艦隊司令官のトーマス・C・ハート大將は潜水艦の分野にしてみれば中々の好敵手と聞いている。Uボートから学んだ彼は、配下の潜水艦に通常以上の重武装をさせ、我が海軍やEU籍の艦船を監視していると聞く。下手に動かせば『大和』も沈みかねん」

「ですが、イギリスとの関係は保ち続けなければ我々は孤立しましょう」陸軍人の原は言った。

伊藤は頷いた。「それに今回は英海軍に機動部隊運用の利を知らしめる良い機会だ。史実の『マレー沖海戦』が頓挫した今、我々の第一航空艦隊がその利を『完敗』の2文字をもって東洋艦隊に知らしめる」伊藤は言った。「そうしなければ、英海軍は戦争に負けるだろう……」

史実、英海軍が機動部隊の運用法を確立するのは、第二次世界大戦あつてのことだった。雷撃機によつて戦艦3隻を損傷たらしめた『タラント空襲』、海軍の顔である巡洋戦艦『フッド』を撃沈された憤りから成し得られた、戦艦『ビスマルク』に対する雷撃機運用そして『マレー沖海戦』で発生した、戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』と巡洋戦艦『レパルス』の損失。それらの経験は、かつては世界最強を謳つたロイヤル・ネイヴィーの鼻っ面をへし折るという屈辱も与えたが、同時に有益な戦訓を得るにも至つた。

しかし第二次世界大戦の頓挫した今物語においては、ロイヤル・ネイヴィーにその戦訓を与えるには、圧倒的な勝利か完敗を与えるしかなかった。

無論、伊藤には『完敗』の2文字を頂く気はさらさらなかった。

「我が連合艦隊と東洋艦隊」伊藤は言った。「どちらにしても首に縄を掛けられた存在だ。米海軍という宿敵が存在する以上、それは変わらない。問題はその縄が首吊り台に繋がれる前に、相手の縄に楔を打つて我々の言いなりにすることだ。ロイヤル・ネイヴィーにしても、同じことを考えているだろう」

「では、今回がその楔を打つ好機という訳ですね？」

森下の問いに、伊藤は頷いた。「楔を打つのはあくまでも我々だが、縄は長く緩めておく。我々の手の内に踊らさせていると、気付かせない為にもな」

第49話 2つの大洋、2つの演習（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第50話 2つの大洋 2つの演習（中）

第50話『2つの大洋、2つの演習（中）』

1942年2月5日

アメリカ合衆国／ハワイ準州

オアフ島はカネオヘ沖300マイル。パールハーバー泊地から島の反対側の端まで進出したところで、第8任務部隊司令官のウィリアム・F・ハルゼー中将は振り返った。星空は薄れつつあり、曙光がおぼろげに窓ガラスに反射していた。ガラス越しに映る光景もまた、闇夜に浮かぶ艦影の他、オアフ島の輪郭が徐々に浮かび上がってきていた。夜を越したか。ハルゼーは胸に呟き、拳を握り締めた。

「閣下、ブラウン提督から入電です」通信兵は言った。

「内容は？」

「はッ！『ワレ、当作戦海域二到達ス。貴官ノ指揮ヲ乞フ』」

ハルゼーは首を振った。ウィルソン・ブラウン中将率いる第11任務部隊だが、同機動部隊の到着は予定された作戦開始時刻を超えていた。怒気をあらわにして、水平線上に現れた第11任務部隊の艦影をじつと見つめている。『ブル・ハルゼー』の短気っぷりを認識していた参謀長マイルズ・ブローニング大佐は彼の感情を見抜き、慌てて対処した。

「第11任務部隊はサンディエゴからの出発です。それに今回は未曾有の作戦ですので、多少の遅れは当然といえましょう」

「そんな事は分かっている。俺が苛々するのは、奴が図々しくも電文を寄こしてきたことだ。戦時には無線封鎖でそんなことはご法度だ。それに詫びの一つもないのも気に食わん」ハルゼーは震える

声で言った。「それに奴が遅れた理由も……だ。恐らく、増援戦力の戦艦『コロラド』のせいだろうよ。あんな病み上がりの鉄屑を連れてくるぐらいなら、補給艦の1隻でも連れて来いってんだ」

コロラド級戦艦第1番艦『コロラド』は最高速力21ノットの旧式戦艦である。史実では1942年3月までオーバーホールに入っていたが、今物語では戦艦『Y』や今回の『フリート・プロブレム22』を受けて、期間が短縮された。

「まあいい……」ハルゼーは不満そうに言った。「戦力は揃った。これでパーティーが始められる」

1942年2月5日午前4時、ここに『フリート・プロブレム22』は開幕した。ハワイ海域としては第1回目となる今回の演習内容は、第8、第11、第17任務部隊を基幹とするブラック・チーム（侵略側）とオアフ島のホワイト・チーム（防衛側）である。ブラック・チームの総指揮官は第8任務部隊司令官のハルゼーで、ホワイト・チームの総指揮官は太平洋艦隊司令官のハズバンド・E・キンメル大将である。2つのチームはこの指揮官を中心とし、攻防戦を繰り広げる。

その内、ハルゼー機動艦隊の概要は 。

【ブラック・チーム・TF】

（総司令官：ウィリアム・F・ハルゼー中将）

・第8任務部隊

（司令官：ウィリアム・F・ハルゼー中将）

（参謀長：マイルズ・ブローニング大佐）

空母『エンタープライズ』

（艦長：ジョージ・D・マレー大佐）

重巡洋艦『チェスター』

『シカゴ』

駆逐艦：6隻

・第11任務部隊

（司令官：ウィルソン・ブラウン中将）

空母『レキシントン』

（艦長：エリオット・C・ギャロウェイ大佐）

重巡洋艦『ニューオリンズ』

『アストリア』

駆逐艦：6隻

・第17任務部隊

（司令官：フランク・J・フレッチャー少将）

空母『ヨークタウン』

（艦長：ロドニー・A・ランプキン大佐）

重巡洋艦『ルイビル』

『サンフランシスコ』

駆逐艦：6隻

・第3巡洋艦戦隊

（司令官：チャールズ・T・ジョイ少将）

旗艦『インディアナポリス』

重巡洋艦『ポートランド』

『クインシー』

軽巡洋艦『ナッシュビル』

『ヘレナ』

駆逐艦：8隻

・第5巡洋艦戦隊

（司令官：レイモンド・A・スプルーアンス少将）

（参謀長：カール・ムーア大佐）

旗艦『ノーザンプトン』

重巡洋艦『ソルトレイクシティ』

『ペンサコーラ』

軽巡洋艦『アトランタ』

『セントルイス』

駆逐艦：8隻

・特別混成戦艦戦隊

（司令官：ウィリス・A・リー少将）

旗艦『メリーランド』

戦艦『コロラド』

駆逐艦：4隻

・補給部隊

油槽艦：9隻

駆逐艦：8隻

米海軍としては過去最大級の陣容であろうハルゼー機動艦隊は、空母を主体とする機動戦術でオアフ島を圧倒するつもりであった。ハルゼー自身がパイロット経験を持つ実力者であり、参謀長のブローニングも優れた航空参謀だった。

「我が艦隊の第1攻撃目標はオアフ島の海軍航空戦力の撃滅にあります」ブローニングは言った。「まず、第1次攻撃隊は艦載爆撃機を中心とした布陣で挑みます。同隊は島北側から侵攻し、先鋒はカネオへ飛行場を攻撃。その後、パールハーバー泊地に侵入して、停泊する空母『サラトガ』と戦艦群、そして飛行場を叩きます。最後には海兵隊のエヴァ飛行場と海軍のバーバースポイント飛行場を攻撃して、第1次攻撃隊の仕事は終わりです」

「となると、やはり問題の焦点となるのは『奇襲』の成功と、第1次攻撃隊が如何に海軍の航空戦力を叩き潰すか だな？」

ハルゼーの問いに、ブローニングは頷いた。

「第1次攻撃で全体の8割方を地上で撃破すれば、後は恐るるに足らんでしょう。しかし、万一にも奇襲が失敗し、迎撃の隙を与えてしまえば」

「目も当てられん結果になる……か」

「オアフ島の海軍リーダー設備は、10年前のそれとは訳が違います」ブローニングは指摘した。「ハリー・E・ヤーネル提督の偉

業を成し得る為にはレーダーへの対応と、迅速な機動戦術を発揮するのが最重要です」

ハルゼーは頷いた。「もう一つ、“数”もある。空母を3隻も呼んだのは、その問題を“数”で解決する為だ。もつとも、私としては最低でも4隻は欲しかったところだがな」ハルゼーは首を振った。「しかし演習のせいで大西洋の空を手薄にする訳にもいかんからな空母1隻分のハンデは、うちのボーイズ達に力量に補って貰うことしよう」

1942年2月5日

オアフ島／カネオヘ海軍飛行場

ドスツという低い音がカネオヘ飛行場の海兵達の眠りを妨げた。と同時に、滑走路周辺に無数の模擬爆弾が降り注ぎ、粉塵が舞い飛ばされた。陸地が無数の爆弾に覆い隠されているなら、空は無数の艦載航空機によって覆い隠されている。SBD『ドントレス』艦上爆撃機と護衛のF4F『ワイルドキャット』艦上戦闘機が、次から次へと北東の空から来襲しては南の方へと去っていく。そして、それを迎撃しようと模擬弾を搭載した陸上戦闘機が飛び立とうとしたら、SBDの模擬爆弾やF4Fの模擬弾が上から覆い被さってきた。眩しい閃光が薄明の闇を切り裂き、模擬兵器が鈍い音を立てて砕け散った。

その音は徐々に止んでいった。しかし飛行場に映るのは敗北である。攻撃を見ていた判定員は、2月のオアフの風が頬に妙にひんやりと感じられた。飛行場の防衛を担う海兵達も同様であり、得も言われぬ風の冷たさを感じ取った。

判定員は顔を上げた。40 50mほど向こうの滑走路近域に無数の模擬爆弾が落ちている。電やフットボールのように、模擬爆弾の多数が地面に突き刺さっていた。そしてその大半が、駐機されて

いた戦闘機や爆撃機の近くに着弾しているのだ。

「『第1波攻撃成功。同隊ノ損害軽微ナリ。ワレ、パールハーバー方面二侵攻中』」通信兵が電文を読み上げた。

「第1波成功、おめでとうございます」

ブローニング参謀長は笑みを浮かべ、ハルゼーに言った。

「これで1つ目の問題はクリアした訳だ。だが、これからが本番だぞ」ハルゼーは言った。「カネオへ飛行場を落とすとしても、それは小規模の航空拠点を叩いたに過ぎん。我々 いや、ジャップにとつての真の相手は太平洋艦隊だ。油断大敵といこう」

カネオへ飛行場に爆弾と砲弾の雨が降り注いでいた同時刻、第8、第11、第17任務部隊から成る一大航空編隊は轟音を立て、オアフの空を襲進中だった。これはカネオへ飛行場を迂回せず、オアフ島最北端のカフク岬から侵攻した編隊である。カフク岬といえば史実、米陸軍が防空用に配備していたSCR-270が奇襲を図った南雲機動艦隊の第1次攻撃隊を130マイルの距離で捉えた場所だ。しかしこの時、陸軍の監視

員がもたらした発見は、「米本土よりやって来るB-17」とする当直将校の身勝手な判断 数、接近コースが常時よりも大きく異なるにも関わらず により、黙殺されてしまった。

今回は海軍の演習ということも知っていた為、陸軍は何も口答えもせず、カフク岬のレーダー情報は再び沈黙してしまっていた。島内に見事侵攻出来たこの本隊は南に真つ直ぐ進み、パールハーバーへと直走った。

「全機、パールハーバーに浮かぶ鋼鉄の海獣共に攻撃しろ！」

F4Fの機上から、空母『エンタープライズ』飛行隊指揮官のクラレンス・W・マクラスキー大尉は叫んだ。「速く……速くしろよ！」急ぎ立てる気は無かったが、見事と言って良い程に敵の不意を突けたので、マクラスキーは無線に向かって早口になっていた。

「同時に正確を期さなくてはならんだろうに……」

SBD爆撃編隊の1機に搭乗していたルイス・レイクウッド中尉は呟いた。同隊は先手を取った訳で、そこに迅速な行動が加われば敵側に甚大な損害を与えられるだろう。しかしこちらは雷撃機を保有しておらず、そうなるかと精密な急降下爆撃によってしか装甲の厚い戦艦等は沈められない。

だがここに私を送り込んだのはハルゼー中将だ。猪突猛進の武将『ブル・ハルゼー』に送り込まれてきたのだ。彼は荒削りながらも幾多の演習で甚大な損害を敵側に与え、戦果を挙げてきたことはハルゼーのボーイズなら誰でも知っていることだった。「つまるところ、やはり力押し……か」レイクウッドは呟き、SBDのパイロットに2000mまで降下するように下命した。

前下方には太平洋艦隊司令部施設があるが、部隊は誰も攻撃しようとはしない。理由はいくつかあるが、眼前に広がるパールハーバーに視線が釘付けになってしまっただろう。フォード島近岸には多数の戦艦が停泊しており、その周辺には海軍の工廠施設群、巡洋艦群、潜水艦基地、そして重油タンク群が密集して配置されていた。レイクウッド率いるエンタープライズ艦爆隊は戦艦群の両翼に回り込み、そこから急降下爆撃を敢行した。

パールハーバーは戦慄に包まれた。紅い閃光が迸り、それが空一点に向けて放たれる。

「一体、何事だ！」

「ハルゼーの攻撃らしい」

「応戦しろ！ありったけの模擬弾を奴らに向けて撃ってやれ！」

そんな声がエンタープライズ艦爆隊の猛攻撃を最初に受けた戦艦『アリゾナ』内に広がる。最初は誰もがぽかんと口を開けてエンタープライズ・ヨークタウンの両艦爆隊を見上げていたが、第1戦艦部隊司令官にして戦艦戦闘部隊司令官補佐のアイザック・C・キッド少将の指揮統制処置が入ってから、対空砲手以外、誰も空を見

なくなった。血も凍るような警報の嵐と怒号、そして対空火器の咆哮に水兵達の足音は掻き消されていた。

「キンメル司令官からの連絡は？」

「はッ！閣下は太平洋艦隊司令部から電文を打電してきました」

水兵はキッドの問いに答えた。「内容読み上げます……。『逐次攻撃に対応し、反撃の準備を整えよ』　との事！」

キッドは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。「既に攻撃は受けている。私が聞きたいのは、パールハーバーやエヴァやバーバースポイントの飛行場からどれだけの航空戦力を送ってくれるかということなのだ」

「右舷よりドントレス接近中！数は12」

「弾幕を形成しろ。艦爆隊の接近を許すんじゃない！」艦長のフランクリン・V・ヴァルケンバーグ大佐が騒音に負けじと声を張り上げる。

「もう遅い」双眼鏡を掲げ、キッドは荒っぽい口調で言った。「間合いに入られた……模擬爆弾の雨が降り注ぐぞ」

そうこうしている内、キッドの読み通りSBD編隊は多数の545kg模擬爆弾を投下し始めた。模擬爆弾の雨だ。本来なら炎に彩られた深紅の煙柱が噴き上がるところだが、模擬攻撃なので実感は出来なかった。しかし、誰もが敗北感を感じ取ることが出来た。

「見たところ……爆弾3、4発命中か」キッドは呟いた。「それも1番、2番砲塔に攻撃が集中している。弾薬庫への誘爆は必至だろう」

更に言えば、模擬爆弾の多数が風の影響を受けて横に流されていた。これは重量等の問題で、本来の爆弾ならもっと多くの被弾が確認されたであろう。その点も含めて、キッドの判断は妥当と言えた。爆撃を終えたエンタープライズ、ヨークタウン爆撃隊の多くは、戦闘機群に守られながら戦線を離脱していく。本来なら沈んでいたであろう戦艦アリゾナの艦橋からキッドとヴァルケンバーグはそれを見据え、何かしらの得も言われぬ感触を抱いていた。

「各艦観測員、及び第1次攻撃隊より送られてきた報告によりまずと、投弾前撃墜判定数8、投弾後撃墜判定数15、大破・中破判定数は23で、再出撃可能と思われる機体数は40機前後のことです」

ハルゼーは唸った。「半数近くの損失……か。演習ということでは過大やら過小やらの報告は多いが……」

「航空機の軽視ぶりを見れば、これは妥当な数ではないでしょうか？」ブローニングは言った。「我が方の損失も甚大ですが、ホワイト・チームの損失も相当なものと報告が入っています」

ハルゼーは顔を上げた。「具体的には？」

「カネオヘ飛行場の航空機損失率8割強、パールハーバー飛行場損失率は7割で、エヴァ飛行場も同様の7割。更にバーバースポイント飛行場は半数の損失が確認されました」ブローニングは報告を読み上げた。「更にパールハーバーでは、空母『サラトガ』が飛行甲板使用不能判定で中破、戦艦『アリゾナ』が撃沈判定、『テネシー』が大破判定、『オクラホマ』が中破、『カリフォルニア』、『ウエストバージニア』、『ペンシルベニア』が小破判定となり、更に駆逐艦1隻が中破判定されました。これは少なく見積もった戦果とは言えないでしょう」

「いや……当初の目的を達した訳ではない。現に『サラトガ』を仕留め損なった」ハルゼーは言った。「次は予備のTBD『デバスター』も飛ばすぞ。パールハーバーは水深が浅くて魚雷は使い物にならないが、デバスターは爆弾も積めるからな」

「では、第2次攻撃の決定を？」

「それが当然の帰結つてもんだらう。手負いの獲物を全力で駆るのが、獅子の醍醐味だ」ハルゼーは言った。「第2次攻撃では飛行場の壊滅、損傷した戦艦、空母群の撃沈、そしてパールハーバーの工廠や重油タンク群を撃滅する。これで太平洋艦隊は半年近く活動

が出来なくなるだろうな」

パールハーバーを一望する丘の上に立地する太平洋艦隊司令部は、第1次攻撃でエンタープライズ・ヨークタウン両爆撃隊の攻撃を受けなかった施設である。司令部に籠って陣頭指揮をしていた太平洋艦隊司令官のハズバンド・E・キンメル大將は、ホワイト・チームの最高司令官として全く防衛に徹せられず、チームの戦力に多大な損失を及ぼしていた。

「くそッ、何たる失態だ」キンメルは呻いた。「敵の存在は掴んでいた。演習という前提や、レーダースクリーン上に映る輝点としてだ。何故、対応出来なかった!？」

「遅すぎたのです、我々が」太平洋艦隊作戦参謀であるチャールズ・H・マクモリス大佐は言った。「この際、それにはこだわらず、各飛行場に残存する破壊判定のされなかった哨戒機を片っ端から集め、ハルゼー機動艦隊の位置を掴むことが賢明といえましょう」

キンメルは唸った。「PB Yはその大半が叩き潰されんだ。そう上手くいくものか」

「ならば他に手段がおりで？」マクモリスは鋭い口調で言った。そんなマクモリスの言葉に、キンメルは沈黙してしまった。「無いのなら口答えしないで頂きたい。こうしている内にも、敵機は再び我が軍の戦略目標に迫っているのです」

「分かった。一刻も早く本隊の位置を掴み、その間は敵機を各個撃破して」

「第2次攻撃隊の来襲です!」

キンメルの言葉はそこで掻き消されてしまった。

TBD『デバスター』を加えた第2次攻撃隊は損傷艦艇と航空戦力、そして各種施設群の攻撃に更なる打撃を与えようと目論ん

でいた。エンタープライズ攻撃隊は第1次攻撃で各飛行場を攻撃したレキシントン攻撃隊とタッグを組み、再びパールハーバーへと侵攻する。

「『レディ・レックス』の航空隊か」レイクウッドは呟いた。「その伝統に負けないような古参のパイロット達が集まっていると聞くが…… 実力はどれほどのものかな？」

そんな中、レキシントンの艦爆隊は攻撃を開始した。R-1820『サイクロン』星型エンジンが雷鳴の如く唸り、その雷鳴とともにSBD急降下爆撃機が雲の下へと下ってくる。彼らの標的は手負いの戦艦『オクラホマ』で、対空砲火のボールを引き裂いて545kg模擬爆弾を投下した。

「判定、戦艦『オクラホマ』撃沈！」

偵察機に搭乗していた観測員が判定する。オクラホマは活動を停止し、仮死した。

しかしレキシントン攻撃隊の猛攻は止まらない。F4Fは完璧な防空態勢を築き、それに味をしめたSBDは急降下爆撃で大破、漂流判定の戦艦『テネシー』を攻撃した。テネシーは左翼からの猛攻を受けて転覆、事実上の撃沈判定を受けることとなる。

それを傍観していたエンタープライズ艦爆隊指揮官のレイクウッドは関節をポキポキ鳴らしながら、パイロットに下命した。「『カリフォルニア』を狙うぞ」彼の前で操縦するパイロットは頷き、艦爆隊はレイクウッド機に率いられて戦艦『カリフォルニア』爆撃を開始した。

バーバースポイント飛行場より迎撃機が離陸したとの報告がエンタープライズ飛行隊指揮官であるマクラスキー大尉の下に入ったのは、ちょうどレイクウッド達がカリフォルニアに攻撃を仕掛けた時であった。ホワイト・チームの印が描かれたF4F『ワイルドキャット』が現れると、恐怖も現実のものとなった。

「迎撃するぞ！」

マクラスキーはF4Fを駆り、ホワイ特・チーの迎撃部隊に立ち向かう。パールハーバー直上で対峙した双方は12・7mm機関砲を咆哮させ、ここに空戦が始まった。

「模擬弾を使うぞ！奴らを蜂の巣にしてやれ」

マクラスキー以下エンタープライズ戦闘機隊は卓越した戦闘技術により、迎撃隊を不利な状況に追い込んだ。マクラスキーは2機の僚機と協同し、12・7mm機関砲によって敵のF4Fを撃墜した。今回の空戦によってホワイ特・チーの航空戦力は撃滅され、ブラツク・チーの優勢は決した。

「報告が届きました」

ブローニング大佐は言った。「まず、カネオへ飛行場は損失率9割、パールハーバー飛行場は8割、エヴァ飛行場は8割、バーバースポイント飛行場は7割の損失となりました。ホワイ特・チーの航空戦力は最早、役立たずといえましょう」

「戦艦は？」

「新たに戦艦『オクラホマ』『テネシー』が撃沈判定。『カリフォルニア』が大破で、『ウェストバージニア』が中破、『ペンシルベニア』は小破です。空母『サラトガ』は大破しました。また、数隻の巡洋艦と駆逐艦が大破判定となりました」

「よし、いいぞ」ハルゼーは言った。「施設はどうだ？」

「工廠群に多大な損失を与え、重油タンク群はその7割が撃滅されました」

この施設攻撃には、予備戦力として温存されていたTBD『デバスター』雷撃機の活躍があった。SBD艦爆隊と協同した攻撃は、太平洋艦隊の施設に甚大な損傷を与えた。

「こちらの損失数は投弾前撃墜判定数25機、投弾後撃墜判定数20機、大破・中破判定数23機です。再出撃可能と思われる機体

数は30機前後とのこと」ブローニングは言った。「やはり第1次攻撃に比べれば損失率は高いですが、戦艦3隻の撃沈と航空戦力・施設群の壊滅は十分に見合った戦果といえましょう」

ハルゼーは頷いた。「作戦は成功した。これで艦隊決戦　　といきたいところだが……」ハルゼーは言った。「敵に残された戦艦は『ウエストバージニア』と『ペンシルベニア』だけだ。勝負を見えている。キンメル提督が良識的な人間なら、これが無謀な戦いになると判断し、降伏を選ぶだろう。それに、ジャップならこれ以上の長居は拒むだろう」

「他愛ありませんでしたな」ブローニングは言った。

ハルゼーは首を振った。「血塗れのパイロットや、穴だらけの機体を見ればその考えも変わるだろうさ。現実には人を恐怖させる」ハルゼーは言った。「もっとも、ジャップに恐怖心があるかどうかは分からんが……」

「では、撤退といこうか」

ハルゼーは言い、紅色に染まった払暁の空と、そこに漂う航空機の機影を見据えた。

第50話 2つの大洋、2つの演習（中）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第51話 2つの大洋 2つの演習（後）

第51話『2つの大洋、2つの演習（後）』

1942年2月12日

英領マレーシア/シンガポール島

碧海と蒼穹の間、燦々と日が照り付ける夕刻のシンガポール湾にはイギリス・日本・オランダ・オーストラリアと、4つの国籍の軍艦が乱雑していた。空には北東から風に乗って運ばれてきた羊の毛のような、ふわふわとした雲が増えてきた。時計の針が5を刻む頃には、それが固まって厚い灰色の毛布となり、地を衝くような豪雨が降り注ぎ始めた。

車内はしんとしていて、タイヤが雨に濡れた路面を走る音と、ワイパーが静かにフロントガラスを擦る音の他には、拳のような雨粒が車体を殴り付ける轟音しか聞こえなかった。やがて椰子に囲まれた緑の道の間から『ラッフルズ・ホテル』が忽然と姿を現した。くねりくねった通りを走り抜け、伊藤らに乗せた車はビーチ・ロードに入った。

この街 シンガポールは長大な植民地を持つ英国にとって重要な位置付けにあった。東南アジアと東アジア、ヨーロッパや中東、オーストラリアを結ぶ交通の要衝である為、東西貿易の拠点となつて古くから繁栄し、海運産業と石油化学産業においては東南アジア域最大規模の発展を見せていた。そしてEUの誕生後はアジアの準加盟国の軍事力を統率する司令部となり、益々価値を持つようになる。

そんな司令部にとって今一番必要としていたのは軍艦や航空機などではなく、『兵舎』や『港湾設備』だった。十分な海軍戦力を持

つEU加盟国はその兵員・艦艇をシンガポール方面に駐屯させるべく、せつせと送り込んでいた。が、同時にそれは許容範囲外の兵員・艦艇を継続的に置くこととなるので、それらを迎え入れる施設を用意しなければならなくなったのである。その困窮的な問題は今月、『第1回アジア合同軍事演習』が開催されることになってから急速に具現化した。一般の兵士達はバラックや民家に詰め込まれ、軍艦はシンガポール港から溢れ出ていた。それら人間や軍艦の腹を満たす食糧や燃料を積んだトラックが街を走り、各道は常に渋滞状態となった。

将兵や下士官達が汚らしいバラックや民家で寝泊まりする中、高級将校達は市内各地に点在する高級ホテルに宿泊していた。その1つにあったのが『ラッフルズ・ホテル』だった。パラディアン様式の3階建ファサードで、周りに奥行き深い回廊とベランダを巡らし、コーナー部分にエントランスホールを設けた建築様式となっている。横に長い形、白い漆喰壁、フローリング張りの床、広いベランダと庇を備えた独特のコロニアル様式の建物だ。元はバンガローから始まり、『ビーチ・ハウス』と呼ばれていたラッフルズ・ホテルだが、粗末な過去を思い起こさせない優雅な建物だった。全盛期の20年代には、ゴム景気に浮かれ、羽振りの良い成金や英本国の紳士達が每晚出入りしていた。

そして1942年、シンガポールはEU特需に再燃され、このラッフルズ・ホテルも最近までは20年代の再来となっていた。しかし今ではイギリス海軍やオーストラリア海軍の高級将校達の住居となり、そういった人達は来れなくなっていた。

車はラッフルズ・ホテル前の通り、ビーチ・ロードの前で停まった。横殴りの豪雨の中に飛び出した伊藤整一と山本五十六は身を屈め、必死でラッフルズ・ホテルへと走った。マレー人の純白のボーイ　白い制服と帽、そして手袋に身を包んだ　が駆け寄り、傘

を頭上に掲げてくれたので、2人は何とか難を逃れた。

「いやいや、酷い目に遭いましたな」

扉が開き、2人が濡れた体で入ってきた。エントランスホールに立っていたイギリス海軍の警備兵がこれを見て折り目正しく敬礼し、持っていたハンカチを渡してくれる。「thank you」やや日本訛りの英語を2人は警備兵に返した。

「そうだ、アドミラル・フィリップスはいらっしゃるか？」伊藤は訊いた。

「はッ、フィリップス閣下は『ティフィン・ルーム』にて、ハイ・ティ軽食を摂られているかと……」警備兵は言った。「ご案内致しましょうか？」

2人は頷いた。

純白の眩い内装、コロニアル様式独特のフローリング張りの床、天井が高くファンが回り、背筋を伸ばした白い制服のウェイター達が、軍服を着た男達の間を歩き回る。ホテルロビーの左手奥にあるこのレストラン 『ティフィン・ルーム』は現在、イギリス海軍とオーストラリア海軍の提督達の憩いの場となっていた。プライドの高い彼らは、一般士官達のように昼間から2階の『ロング・バー』で酒を飲んで酔い、暴れ回る訳にいかないからだ。それでは誇り高きロイヤル・ネイヴィーの名が廃る。とりわけ、東洋艦隊司令官のトーマス・フィリップス大將はティフィン・ルームがお気に入りだった。

外は雨脚が弱まってきていた。2人が店内に入った頃には細かい霧雨に変わって、途切れ途切れになった雲間から紺碧の空が覗いている。

フィリップスは真っ白にテーブルクロスが掛けられた4人用テーブルに1人で座り、書類の山に囲まれながら執務にあたっていた。ウェイターがサンドイッチやスコーンを載せたケーキ・スタンドを運んできて、フィリップスは胃袋へ送り込む作業に取り掛かった。

伊藤と山本はその席に歩み寄り、折り目正しく彼に敬礼した。

「アドミラル・フィリップス」山本は言った。「私は帝国海軍海相のヤマモトです。隣はバイス・アドミラル・フジイ」伊藤は会釈した。

「お会い出来て光栄です、山本海相」フィリップスは立ち上がり、2人と握手を交わした。「さあ、どうぞ、お掛け下さい」フィリップスは書類の山を掴むと、手を挙げて従兵に退けさせた。そして彼は山本と伊藤に、席を勧めた。

数分後、2人分のティーセットがウェ이터によって運ばれてきた。温かな紅茶が純白のティーカップに注がれ、焼き立てのスコーンとヨークシャー・プディング、そしてソーセージが白磁の皿に盛り付けられる。伊藤はクロテッド・クリームを塗ったスコーンを頬張り、山本はサンドイッチを口に入れた。

フィリップスは2人の顔色を伺った。「ティフィン・ルームの味はいかがですか？」

「素晴らしい味ですよ」山本は言い、紅茶に下鼓した。「流石はラッフルズ・ホテルのレストラン。やはり他とは違いますな」

「では、本題に入りましょうか」伊藤は言った。

「そうですね。確か “明日” の演習の事でしたな？」

山本と伊藤は頷いた。マラッカ海峡で開催される『第1回アジア合同軍事演習』は明日に迫っており、シンガポール各所では4ヶ国の海軍関係者達がその調整に奔走していた。演習内容、演習の所要時間、開始時の天候、各海軍の状況等、複数の条件が整っていないと、演習も成功しない。

「我が帝国海軍は万事整っておりますが、英海軍はいかがですか？」

フィリップスは頷いた。「我々も同様です。戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』は機関の不調がありましたが、昨日解消しております」フィリップスは言った。「それよりも、『大和』の調子はいかがです？是非、演習には参加して欲しいですからな。それに、英

本国からも要請が来ておりますので……」

山本は頷いた。「それは御心配無く、『大和』も戦いたくてうずうずしてしましよう」

その後、3人は明日についての打ち合わせを続けた。打ち合わせが終わると、伊藤達はティフィン・ルームを後にし、フィリップスは再び店内に1人残された。時は既に夜だ。車中に戻った2人は短い沈黙の後、明日の演習が起こすであろう影響について、語り始めた。

「英海軍の最新鋭戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』は仮にも戦争の抑止力だ。『大和』もそうだと言える」伊藤は言った。「もし、抑止力と抑止力が本当に激突するようなことがあれば……凄惨な結果となるのは明白でしょう」

山本は微動だにせず、渋面を浮かべた。「では、我々は勝ちを譲ってイギリスの面子を守り、そのような結果を起こさないべきでしょうか？」

「それでは『大和』の抑止力としての効果が消え、各国海軍が続ける戦艦の建造競争が途切れてしまうかもしれません。ここは完膚無きにまでプリンス・オブ・ウェールズを叩くか、五分五分かの結果が望ましい」

「では、我々に負けは許されないのですね？」

伊藤は頷いた。「フィリップス大將は本来、去年12月に死を迎える筈でした」伊藤は言った。「しかしその歴史も改変させてしまった。ならば、我々とはとんこの歴史を変え、焦土と化した未来を迎えないようにすべきでしょう」

山本は頷いて言った。「では、変えましよう」

三菱『金星43型』星型14気筒エンジンの咆哮が雷鳴のように

響き渡って艦橋の窓を揺らすと、零式水上偵察機がぼやけて窓の外を飛び去っていく。それが1機、2機と増え、6機が合流すると扇状に展開して、海上索敵を開始する。

戦艦『大和』を先頭とし、戦艦『長門』、『陸奥』と続く単縦陣はマラッカ海峡をひた走っていた。その単縦陣を構築するのは、帝国海軍最強の艦隊『第一艦隊』と、連合艦隊直属艦隊の猛者達だ。

艦隊は旗艦を『大和』として、戦艦『長門』、『陸奥』の連合艦隊直属第一戦隊。『伊勢』、『日向』、『扶桑』、『山城』の第一艦隊第二戦隊所属の戦艦4隻が続く計7隻の陣容である。その単縦陣の左翼には軽巡洋艦『北上』、『大井』所属の第九戦隊と、軽巡洋艦『川内』を旗艦とする第三水雷戦隊所属の4個駆逐隊、駆逐艦計14隻が布陣し、更に後方に第六戦隊所属の重巡洋艦『青葉』、『衣笠』、『古鷹』、『加古』が加わる。

一方、これに対して英海軍は旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』を先頭とし、『レパルス』、『レナウン』の同級巡洋戦艦2隻、戦艦『レゾリューション』、『ロイヤル・サプリン』、『ロイヤル・オーク』のリヴェンジ級戦艦3隻が続く。更に重巡洋艦『エセクタ』、『ドーセットシャー』が続き、その後ろにオーストラリア海軍の重巡洋艦『キャンベラ』が加わっている。その後方にはイギリス・オーストラリア・オランダ3海軍所属の軽巡洋艦7隻、駆逐艦21隻が展開していた。

「数では劣しているが、それは承知の上だ。性能と経験の差で埋められよう」吉田連合艦隊司令長官は幕僚達に告げる。そんな間、帝国海軍が総力を挙げて製作した新型電探と零式水偵が索敵を続けていた。

先に敵艦隊を見つけたのは 電探だった。英豪蘭3国連合艦隊は23 24ノット近い速度でマラッカ海峡を北進している。やがて視認圏内に到達すると、両艦隊は初めて敵艦隊の核たる旗艦の艦影を目視で見張ることが出来た。

「あれがロイヤルネイヴィーの最新鋭戦艦か……」吉田は呟いた。

「巨大で、強そうだ」

「しかし、この『大和』には及びますまい」そう言ったのは、連合艦隊参謀長の伊藤整一少将だった。「あの艦隊は旧式艦と3つの国の海軍から成る烏合の衆といえましょう。その烏合の衆にしても、纏め上げる人間がいれば真価を発揮出来ましょうが……」

「東洋艦隊には居ない か？」

伊藤は頷いた。「冷静且つ適切な対処を行えば、勝機は十分にあります」

「分かった」吉田は頷いた。「全艦砲戦用意！第九戦隊・第三水雷戦隊は敵駆逐艦部隊を迎撃、撃破せよ。第六戦隊も駆逐艦部隊を撃破する為、第三水雷戦隊に続け！」

開戦の火蓋を切ったのは、戦艦『大和』の主砲、三連装45口径46cm砲の咆哮だった。右舷に向けられた全砲門がその砲火を上げ、計9発の演習用砲弾が先頭の戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』に襲い掛かった。

約1分後、プリンス・オブ・ウェールズの周囲に9本の水柱が聳え立った。その大半はプリンス・オブ・ウェールズの艦体に掠りもしていない。第2射もまた同様である。斉射はド派手で威圧的なものだが、その命中率は望まれない。砲術長の西宮勲中佐は『蟹眼鏡』と呼ばれる照準器を覗き、そこに映るプリンス・オブ・ウェールズ目掛けて、射撃を命じた。

「射ッー！」

再び46cm砲から飛び出した砲弾は唸りを上げ、プリンス・オブ・ウェールズに襲い掛かった。砲弾2発が1番砲塔、戦闘艦橋に直撃、判定によって1番砲塔が使用不能となり、艦橋に居たトーマス・フィリップス大将与その幕僚達は沈黙してしまった。

「何だ、今のは……」フィリップスは呟いた。「私は気付かぬ内に死んでしまったというのか？」

その後、第3射、第4射と続き、第5射目でプリンス・オブ・ウエールズは致命傷を負って撃沈判定が下りた。無論、プリンス・オブ・ウエールズもばーっと『大和』の砲撃を眺めていた訳ではない。主砲たる35・6cm砲をもって反撃の砲火を上げていたのだが、理論上『大和』は46cm砲弾の直撃にも耐えうる装甲防御力を持つており、35・6cm砲の直撃弾は全く効果が無いと判断されたのである。

一方で、強靱な防御性能を誇る『大和』が35・6cm砲弾を跳ね返せたとしても、後続の艦はそうもいかなかった。戦艦『長門』は艦尾に直撃弾を受け、操舵不能。戦艦『陸奥』は史実の不幸を表すかのように、英海軍戦艦群の砲撃を次々と受け、弾薬庫の誘爆が生じたという判定で撃沈。『伊勢』は無事だったが、『日向』は1番砲塔付近に直撃を食らい、使用不能になった。後続の『扶桑』、『山城』も小破した。

もちろん、損害の甚大さは日本側だけではなかった。3国連合艦隊は早くも総旗艦を失い、続く『レパルス』は前部甲板、艦橋下部左舷後部のそれぞれに戦艦『長門』の41cm砲弾が直撃し、大破判定を受けた。その後続である『レナウン』は撃沈。戦艦『レゾリューション』は前部甲板に直撃を受け、1番、2番砲塔が使用不能。また、3番砲塔も『伊勢』の砲撃で使えなくされていた。『大和』の砲弾の1発が艦橋に直撃したとして、司令部以下全員が死傷判定を受ける。『ロイヤル・サブリン』は機関部に損傷を受けて停止。『ロイヤル・オーク』は三脚式の前部マストが崩壊し、方位盤測距室は戦艦『日向』の35・6cm砲弾によって一掃された。

これまでの双方の戦果は。

・帝国海軍連合艦隊

戦艦『大和』：小破

『長門』：大破、操舵不能

『陸奥』：撃沈

『伊勢』：小破
『日向』：中破
『扶桑』：小破
『山城』：小破

・英豪蘭3国連合艦隊

戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』：撃沈

巡洋戦艦『レパルス』：大破

『レナウン』：撃沈

戦艦『レゾリューション』：大破

『ロイヤル・サブリン』：大破、機関停止

『ロイヤル・オーク』：中破

重巡洋艦『エセクター』：撃沈

『ドーセットシャー』：大破

『キャンベラ』：小破

性能の差はあれど、旗艦を最初に失い、巡洋戦艦と戦艦と重巡洋艦それぞれを1隻ずつ撃沈され、少なくとも4隻が戦闘で役に立たなくなってしまったというこの結果は、ロイヤル・ネイヴィーにしてみれば屈辱の極みともいえるものだった。同海軍の艦艇が目も当てられない損傷を受けているというのに、オーストラリア海軍の重巡洋艦『キャンベラ』だけが比較的被害が少なかったのも、世界最強の海軍のプライドを傷付けるのに十分な材料であった。

一方で、帝国海軍もこの戦果に喜んでいられる場合では無かった。かつて、帝国海軍の象徴ともいえた戦艦『長門』を操舵不能にされ、『陸奥』を撃沈されたというこの事実には許されない。操舵不能になった『長門』は、場合によっては自沈処分としなければならぬ状況も考えられるので、これは事実上の『長門型戦艦』の消滅に直結する結果なのだ。

「第三水雷戦隊と第五・第九戦隊はどうだ？」吉田は訊いた。

「駆逐艦14隻中、3隻が撃沈、2隻が大破、3隻が中破の判定を受け、軽巡洋艦『川内』が中破に至りました。第九戦隊は『北上』の損傷が小破で抑えられましたが、『大井』は撃沈されました」伊藤は言った。「更に第五戦隊では『衣笠』が撃沈、『青葉』が大破、『古鷹』及び『加古』は小破に留まりました」

「4隻撃沈、3隻大破か……」吉田は呟いた。「敵側は？」

「駆逐艦21隻中、7隻撃沈、5隻大破、3隻が中破判定を受けました。軽巡洋艦は英海軍のものが1隻撃沈、オーストラリア海軍も1隻、オランダ海軍も同様です。大破は1隻、中破は1隻、小破は2隻」

以下の戦果を纏めると。

・帝国海軍連合艦隊

駆逐艦（14隻）

撃沈：3隻

大破：2隻

中破：3隻

小破若しくは損傷皆無：6隻

軽巡洋艦『川内』：中破

『北上』：小破

『大井』：撃沈

重巡洋艦『青葉』：大破

『衣笠』：撃沈

『古鷹』：小破

『加古』：小破

・英豪蘭3国連合艦隊

駆逐艦（21隻）

撃沈：7隻

大破：5隻

中破：3隻

小破若しくは損傷皆無：6隻

軽巡洋艦（7隻）

撃沈：3隻

大破：1隻

中破：1隻

小破若しくは損傷皆無：2隻

帝国海軍側は撃沈5隻、大破3隻。3国海軍側は計10隻という2倍近い撃沈数が算出された。これもまた、戦艦部隊同様にロイヤル・ネイヴィーを傷付けるのに十分な結果と言え、同時に帝国海軍にとっても恥ずべき損害であつた。

「しかしこれは大いなる戦果です」伊藤は言つた。「少なくとも、我々は3つの国の海軍に勝利したと言えましょう。数の劣勢、地の劣勢を覆したのです。『長門』と『陸奥』の損失は甚大ですが、これからは『戦艦』ではなく『空母』の時代なのですよ」

吉田は頷いた。「もしここに『武蔵』が居れば。そして、第一航空艦隊の機動部隊が居れば、我が艦隊は1隻の損失も無くこの海戦に勝てたろう。戦争は『数』と『才能』によつて決まるのだ」吉田は言つた。「戦艦1隻を失つたら、2隻の空母を報復に向かわせるまでだよ、伊藤君」

伊藤はその点については正解とも言え、同時に不正解とも言えると思つた。日本は37年から着実に力を付けてはいるが、工業力を用いた『物量戦』ではアメリカに大敗するだろうと考えていたからである。アメリカなら、1隻の戦艦の喪失に4隻の空母を報復に向かわせることだつて可能だろう。『才能』にしても、年月がそれを解決してくれる。日本がアメリカに見出せる勝機は、緒戦から中期に至るまでの時期に持てる力の全てを投入し、持久戦にアメリカを持ち込ませないことだろう。そう伊藤は考えていた。

第51話 2つの大洋、2つの演習（後）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第52話 西の壁構想

第52話『西の壁構想』

1942年3月18日

ドイツ/ベルリン

3月下旬のヴィルヘルム街では、夕闇が暗い波のように東の空から押し寄せ、そこかしこに淡い明りが付いている。未だ寒気はベルリンを支配しており、日中も十分に寒かったというのに、夜気は容赦無い。ヴィルヘルム通りを緑取る並木は既に濃厚な闇に包まれていた。外務省、法務省、財務省、宣伝省、空軍省といった中央省庁も同様だった。

そんなヴィルヘルム街と直角に面するフォス街も例外ではなかった。黎明の国の総統が住まう『総統官邸』は暗灰色に、そして黒く染まると、完全に闇に没した。一陣の風が外務省に隣接した庭園を駆け抜けて、いたずらに木々を揺らしたかと思うと、航空省の前で呻いて消え去った。それはまるで、今日総統官邸に召集されたヨアヒム・フォン・リッベントロップ外務大臣と、ヘルマン・ゲーリング航空大臣を嘲笑っているかのようで滑稽なものだった。ゲーリングはずんぐりとした黒い車体の公用車から降りてきて、その図体の大きい体を揺らしながら、総統官邸に颯爽と入居した。

「これはこれは……アンソニー・イーデン英首相閣下ではありませんか」

勿体振った口調と手振りを示しながら、ゲーリングはイーデン新英国首相に握手を求めた。「ヘルマン・ゲーリング元帥。お久しぶりです」そう言い、イーデンは握手を返した。「前に会ったのは確かミュンヘン……でしたね」

ゲーリングは頷いた。「ええ。今回は“例”の計画のためで？」
「そう。実現すれば、EUの存在意義の1つが成り立つ大事業のためです」イーデンは言った。「共産主義者に一系報い、チェンバレン郷とチャーチル郷の手向けとなりましょう……」
そう告げるイーデンの顔色は思わしくなかった。チェンバレンはともかく、面識もあり、自分を活躍の場に出させてくれたチャーチルの死は、未だイーデンに暗い影を落としていた。しかし彼は西ヨーロッパの代表として、弱音も哀しみも表に出すことは出来なかったのである。

「『西の壁』構想の原点は、EUの結成に遡ります」

そう声高らかに告げるのは『プロパガンダの天才』と称される男、パウル・ヨーゼフ・ゲッベルス宣伝大臣だった。史実、ヒトラーとともにヴィルヘルム街を手に入れ、ベルリンオリンピックの演出を担った華々しい人物だが、第二次世界大戦に入るとそうもいかなかった。国内外の宣伝の場を奪われ、活躍出来るのが映画とラジオ等に限定化された悲しい人物である。

「我がEUはアメリカ、そしてソ連との対立姿勢を憲章に記名しました。しかし未だ軍備は整っておらず、各軍団も統制が取れず。残念ですが、現状は完全な準備不足とも言えるのです」

一同は渋々ながらも頷き、渋面をゲッベルスに見せた。

「しかし！」ゲッベルスは抑揚を付けて声を発した。「しかしその点は優れた政治家達の指導力と優秀な軍人達の忠誠心により早急に解決しましょう。ここで論議すべき問題はむしろそこではなく、『恒久的』なヨーロッパ防衛に一定の目途を付けることなのです！」

「ありがとう、ゲッベルス博士」そう言ったのは、フリッツ・トート軍需大臣だった。「ここからは私が代わります」

拍手が会議室内に響き渡る中、ゲッベルスは手を振り、いそいそと自分の席に戻った。右隣はトート、左隣は犬猿の仲のリッベント

ロツプの席だった。

「えー、ゲッベルス博士が仰った通り、EUには『恒久的』な防衛構想が欠如しています」トートは単調に、ゲッベルスのように群衆を扇動させるような巧みな話術は用いずに話した。「それは、アメリカ大陸とイギリス本土を隔てる西大西洋域と、東の、全長100km以上に及ぶソ連との国境線を期間限定ではなく、恒久的に防衛することです」更にトートは続けた。「勿論、現在のEU各国の金融情勢はお世辞にも良いものとはいえません。締結後の軍備拡張と再編成に沸く特需もありますが、それらも一部の軍事企業と金融企業が利益を独占しています。この状況では、2方面を十分に守る戦車や航空機、軍艦は到底、造りようがないでしょう」

トートは一問置き、再び口を開いた。「ではどうするか。それは『要塞』を築くことです」

「要塞……といったな」イーデンは言った。「具体的には？」

「イタリアはトリエステから、ポーランドのビャウイストクまで」トートは言った。「イタリア、ユーゴスラビア王国、オーストリア、チェコスロバキア、そしてポーランドの5つの加盟国を貫く長大な要塞防衛線です。それをソ連の大陸侵攻に対する防衛拠点とし、恒久的に存続させます。アメリカへの脅威には、イギリスの海岸線を用いた、西大西洋に面する防衛線を築き上げて、対応します」

その場に居る一同はざわめいた。イギリス案は別として、イタリアからポーランドのヨーロッパ大陸を貫くような要塞防衛線案は、過去に前例が無い。

「試算される総線長は？」ドイツ陸軍総司令官、ヴァルター・フオン・ブラウヒツチュ上級大将は訊いた。

「あくまでも試算ですが、1100km近くになると推測されます」トートは言った。「その要塞防衛線の名称は ヴェストヴァール『西の壁』。完成すればマジノ線をゆうに超え、ヨーロッパに残る偉業として、後世に讃えられていくことでしょう」

「その総工費はどうなるんだ？」アルベール・ルブラン仏大統領

は冷やかに言った。「我が国も、イギリスも、そして自宅の国も財政は良くはないだろ。アメリカの悪夢、世界恐慌は終わった訳じゃない。そんな1000kmも超える防衛線を構築するよりも、経済面での復興を進める必要があるとは思わんかね？」

「ソビエトの赤軍が雪崩れ込んでくれば、財政も何もあったものではないと思いますが」トートは渋面を浮かべて言った。「我々は既に喧嘩を売ってしまったのです。しかし、我々は“攻守”で言えば守りに徹しなくてはならない。要塞は最大の防衛拠点であり、この『西の壁』の構築は目下の最重要課題といえましょう」

その時突然、トートの話にゲッベルスが割って入ってきた。「大統領閣下は1000km超という要塞防衛線の“長さ”を強調しておられますが、では東洋の『万里の長城』はどうでしょうか」ゲッベルスは言った。「数千年前、我がヨーロッパにも猛威を振るったことのある東洋の、その一国にあたる中国は、6000kmを超える『万里の長城』を造りましたね。我々がやろうとしていることはその6分の1に過ぎないことですが、その万里の長城に機関銃や榴弾砲、火炎放射器、そして対空砲がありましたでしょうか」「ゲッベルスは首を振った。「答えは明白でしょう。我々は中国人が築いた万里の長城のような、長いだけで他に価値も無い無用の長物を造るのではなく、有用且つ洗練された障壁を築くのです。それこそが、ソ連軍を妨げる唯一の希望であり、無用な戦争を起こさせない『抑止力』と成り得る存在なのです」

ゲッベルスの演説は一同を驚かせた。まるで見込みのない投資対象は一躍注目を浴び 色んな意味で その場に居た多くの人間に対し、その必要性が当然であるように思わせたのである。

これこそ、『プロパガンダの天才』、ヨーゼフ・ゲッベルスの本領だった。

トートとゲッベルスという、一見して似合わない組み合わせが成

り立った所以は、リッベントロップの台頭にあった。外相であるリッベントロップは、近年日本と親密な関係にあるヒトラー総統がその日本との連絡網として多用され、総統からの信頼の厚い存在だった。一方でゲッベルスはリッベントロップとは対立関係にあった。ゲッベルスは戦争が始まれば自身の権限が消え失せることを薄々気付いており、リッベントロップに不安を抱いていた。

そんなゲッベルスが考えたのは、ナチ党内の有望株であるフリッツ・トートとの結託であった。トートは優秀な土木技術者で、高速道路『アウトバーン』やUボート・ブンカー、ジークフリート線の建設等、様々な成果を挙げてヒトラーにも気に入られていた。

しかしトートは政治的権力を持たなかった。彼は自分の事業の遂行にはナチ党内の後ろ盾が必要なことを薄々考えていた。そこでゲッベルスは政治的パフォーマンズやその権力をもって補佐する代わりとして、自身と結託することを持ち掛けた。そして現在に至る。

「トート軍需大臣」ゲーリングは神妙な表情でトートを見据えた。「この要塞防衛線に関して、我が空軍が如何に関わってくるかを教えてくれないか？」

「は、はあ……」トートは面食らった表情を浮かべた。「私としても知らぬ所は多いですが、この防衛線の周辺には飛行場を設置し、更に防衛線上には空軍管轄の高射砲部隊を配備する予定です」

「ふむ」ゲーリングは言った。「いや、私は一つ妙な話を聞かしてな。何でも、陸軍内で新型の防空ロケット兵器が順次開発中……と」ゲーリングはブラウヒツチュの顔を見据えた。「どうなので、ブラウヒツチュ総司令官閣下。我々空軍は必要なくなるので？」

「それは我輩が説明しよう」ヒトラーの発言に、その場は沈黙した。「空軍は陸軍と協同し、同防衛線を万全のものとするのが、完成後の義務である。よって、君ら空軍は必要なのだよ」ヒトラーは言った。

とはいうものの、ヒトラーは裏ではゲーリングに疑心を抱いてい

た。理由は言わずもがな、未来より逆行してきた『伊藤整一』との会談である。万が一、ゲーリングがクーデターを起こし、政権を転覆させまいか。そんな憶測がヒトラーの脳内を飛び交い、陸軍に空軍の戦力を持たせるような計画を密かに実行していた。地対空誘導ロケット『ヴァッサーファル』や歩兵携行式地対空ロケット砲『フリーガーファウスト』の開発である。

地対空誘導ロケットの『ヴァッサーファル』は、V2ロケットから発展した型である。V2ロケットよりも小型で製造費も安く、運用もし易かったヴァッサーファルは次世代の防空兵器として、アルベルト・シュペーアにも一目置かれる有望株だった。史実では1941年から開発が始まり、1943年には試作第1号が完成した。しかし大半の資源はV2に回されていて、量産とはならなかった。今物語では今年の8月に試作第1号の完成が見込まれており、その設計図やサンプルは日本にも送られていた。

一方の『フリーガーファウスト』は、第二次大戦後期に連合国軍の戦闘爆撃機や戦闘機を歩兵が撃墜すべく、開発された携行式地対空兵器である。その経緯にはドイツ軍の度重なる敗北が関わっていた。

史実の1944年後期、ノルマンディー上陸作戦に勝利した米軍はフランスに橋頭堡を築き、ヨーロッパへと侵攻するという、ドイツへの一大反撃を企てていた。フランスを獲得した米軍は大量の兵員と戦車、物資、そして航空機を送り込む。特に航空機はヨーロッパ戦線の勝利に多大な影響を与える戦力であり、これまではドーバー海峡の制限によって十分な成果を挙げられなかったが、今回の勝利によって米軍はヨーロッパ全土の制空権を獲得するに至る。ドーバー海峡と補給の問題を解決した新型戦闘機のP-51D『ムスタング』や戦闘爆撃機のP-47『サンダーボルト』は、ドイツ陸軍の陸上戦力を削ぎ、同時に迎撃するドイツ空軍を破滅に追い込んだ。空軍の主力戦闘機Bf109は意味を成さず、1941年以来の主力機であるFw190は米英の新型機に苦戦を強いられることとな

った。この結果、前線のドイツ軍将兵の間では、ドイツ空軍がもはや当てに出来ないと考えられるようになる。

こうした現場の声を聞き、誕生したのがフリーガーファウストである。『空飛ぶ拳骨』または『飛行機叩き』の意をもつこの地对空兵器は、1つの発射管を中央に配し、残り8つの発射管を囲むという、計9門のロケット発射管を重ねた外觀が特徴で、発射は2斉射式を採用した。有効射程は500m、最大射程は2000m。量産に不向きとして高価な光学照準器は取り付けられず、照準器は簡易なものだったが、目標に対し弾幕が広がって展開する為、命中率は高かった。というよりも、同兵器は命中率よりも威圧性の方が非常に高かったといえる。9つのロケット弾が弾幕を形成して迫ってくるとならば、たとえ当たらずとも連合国軍のパイロットは怖気付いてその場から逃げ出したことだろう。ドイツ陸軍はその間に別のフリーガーファウストや対空砲を引っ張り出して迎撃の準備をするなり、防空壕に逃げるなり、後退するなりの行動に移れる。しかし積極的な反撃は出来ない。少なくとも、フリーガーファウストは攻守でいえば『守り』の兵器だったといえる。その点でいえば、『守り』の要塞防衛線 『西の壁』とフリーガーファウストの相性は抜群といえた。

しかし、ヒトラーも予想はしていなかっただろうが、今物語の現状ではドイツ空軍を破滅させかねない兵器でもあった。万が一にもフリーガーファウストがソ連、ないしアメリカの手に渡れば、その圧倒的な工業力と潤沢な人的資源にものをいわせ、コピー品を製造するかもしれないからだ。ソ連は決して豊かとはいえない国だが、軍需産業に関しては他の国を凌駕する。プレス鋼板を使用し、小さな町工場でも製造出来たフリーガーファウストが一度ソ連の手に落ちれば、技術者達は肅清を逃れるべく驚異的なスピードでその構造を解明し、数週間後にはソ連全土から工員が召集され、1年も経てばシベリア鉄道を走る列車の中に、これでもかという位に積みまれ、ヨーロッパ戦線に送られることだろう。史実における、T-34中

戦車や地球上に1億丁以上存在する飽和したアサルトライフル『AK-47』の生産実績は周知の事実である。

また、アメリカに鹵獲されても同じことである。米本土で町工場という町工場がこれの生産に本腰を入れ、本土防衛やヨーロッパ侵攻により、EU空軍はどのみち壊滅するだろう。特に、ジェット戦闘機や4発爆撃機にも急降下爆撃能力を求めるような大統領と空軍最高司令官に忠誠を誓うドイツ空軍はなおさらである。ヒトラーは知らず知らずの内に自分の首を絞めているのだが、当人は全く気付いていなかった。

しかしロケット兵器が西の壁に配備されるかは定かではない。ヴァッサーファルとフリーガーファウストの内、ヴァッサーファルは試験段階で、フリーガーファウストは未だ机上の案だったからだ。いざソ連侵攻となればヒトラーはV2ロケットの製造を重視させるかもしれないし、陸軍が優勢であればフリーガーファウストを求める声は出ないかもしれない。また、ヒトラーが何らかの方法でゲーリングを始末し、空軍への危機感を捨てて双方の開発も頓挫するかもしれない。ロケット対空兵器は未だ未知の領域にあり、その実現は定かではないのだ。

だが、西の壁の実現は間近であった。ヒトラーは既にイタリアとオーストリアの両国で防衛線の構築を進めており、EU各国の合意を得られなくとも事業は進める気でいた。それはソ連への危機感の表れであり、ナチ党内の内部抗争の結果ともいえた。

「結構です。総統閣下」

ゲーリングは不満げに言った。

「では」ヒトラーは立ち上がった。「ここで採決を取りましょう。この『西の壁』計画に賛成の方は？」

イギリス首相チャーチンを筆頭に、ムッソリーニ、オランダ王国首相デ・ヘール、スペイン総統フランコ、ポルトガル共和国首相サラ

ザール、ユーゴスラビア王国摂政カラジヨルジェヴィチが次々と拳手した。反対側はフランス大統領のルブランと北欧諸国の数国、そしてギリシャ首相のツデロスだった。建設や維持に関わった財政上の問題や、ソ連を刺激して全面戦争となりたくないのが理由である。

「では、多数決により賛成側が上回りましたので、『西の壁』計画は決定となります」

ヒトラーは嬉々として言った。

第52話 西の壁構想（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第53話 電鬼のごとく

第53話『電鬼のごとく』

1942年6月21日

フランス/フォンテーヌブロー

蛍光灯の弱々しい光が何メートルも続く通路を照らし出す。EU第3軍団第1緊急応応集団司令官のエルヴィン・ロンメル中将は欧州同盟(EU)軍最高司令部の薄暗い地下通路を進んだ。自分が息をする音がやたらに大きく、そして近くに聞こえる。えもいわれぬ圧迫感に気分が悪くなりそうだ。まるで猟犬に追い立てられ、巣穴に閉じ込められた狐じゃないか。ロンメルはそうひとりごちつつも、先を急いだ。

「さながら、ここは臆病者の巣……って所か」彼は思わずそう口にした。フォンテーヌブローのEU軍最高司令部は主要加盟国の陸軍將軍達が集まる首脳部であり、20ヶ国を超える加盟国合同軍の根拠地でもある。ロンメルの居る地下施設は英軍の5t爆弾『トールボーイ』によってようやく打撃を与えられる強度を備え、分厚いコンクリートに覆われている。更に司令部は完全な自給自足型の施設で、12基からなる発電機、1年間は耐えられそうな程の物資を保管出来る食糧庫、雨水や地下水を蓄えて蒸留する設備、英独製の最新鋭無線機等が備わっている。毒ガスや焼夷弾に備えて、空気浄化装置もあった。これらを設計、建設したのは『西の壁』構想でも中核を担う『トート機関』である。

ともあれロンメルは前へ進み続けた。通路はどこまでも続いているように思えた。地下に溜まる淀んだ空気を取り除く為、ファンが絶え間なく唸りを上げている。その間、やはりロンメルは進む。

それからロンメルは進むのを止め、立ち止った。1つの扉が暗闇の中から抜き出てきて、彼の前に立ちはだかった。扉からは物音が聞こえる。人の声らしい。どうやら終点のようだ。

彼は、ドアノブを開けると空気が変わったのが直感で分かった。

口の字型の机には、E U軍最高司令官であるフランス陸軍のフィリップ・ペタン元帥を始め、副司令官のアラン・ブルック英陸軍元帥、参謀総長のヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ独陸軍上級大将と各国陸軍の層々たる面々が軒を連ねていた。そしてその3人の間を大将、中將が固め、少將や大佐クラスの幕僚達が仰ぎ見る。まるで3人を防御するかのような席配置だ。

「遅れて申し訳ありません」ロンメルは「ハイル・ヒトラー」を省略し、E U軍式に折り目正しく敬礼した。「第1集団の訓練期間が長引いたものですから……」

ブラウヒッチュは頷いた。「新兵を育てるのは大変な苦労だろう。まあ、座れ」

ロンメルは言われるがままに席に着いた。何の因果か、右隣から3席目には史実の宿敵バーナード・モントゴメリー中將が座っていた。北アフリカ方面を管轄とする“第8軍団”の司令官でロンメルとは面識はなかったが、遅刻したロンメルに対する彼の視線は厳しいものだった。

「我が軍の試作ジェット偵察機『Ar234』による昨日の偵察だが……」ブラウヒッチュは言った。「レニングラード方面でのソ連軍の活動の活発化が確認された。多数の軍用列車が『KV-1』重戦車の荷下ろしを続け、多くのトラックが市内近郊の仮設キャンプに向かっていて。バルト艦隊は潜水艦による哨戒を増やし、駆逐艦や巡洋艦の入港が多数確認された」

誰もがその真意を理解し、Ar234の搭乗員が撮影した高高度写真を見張った。そこには途方もなく巨大なソ連軍キャンプや航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』の姿が焼き付けられていた。レニングラードは何もかも赤軍色に染められている。そして1番危機感を覚

えさせるのは、その後続く兵士の長大な隊列や無数の軍艦、そして血管のごとく戦車や自動車という血液を供給し続けているシベリア鉄道の光景にあった。レニングラードに集結するのは本隊ではなく、先遣隊なのだ。

この非常に有用な写真を収めるのに成功したのは、Ar234の働きが大きい。Ar234『ブリッツ』は世界初のジェット偵察機であり、爆撃機でもあった。2基のユンカース製『Jumo004』エンジンは途方もない推進力を生み出し、最高速度700km以上を実現している。また主翼には後退翼と同じ効果を持たせる為の工夫が施されていた。その高速性から名付けられた『ブリッツ』“稲妻”の意は伊達ではなく、Ar234はまさにその愛称通りの性能を備え、それによって危険な任務でも有益な情報を持ち帰ることが出来ていた。

やがて戦局の悪化に伴い、Ar234は爆撃機としての能力が付加されると、『高速偵察機』から『高速爆撃機』へと生まれ変わり、ヨーロッパの空を飛び始める。Me262『シュヴァルベ』同様、連合国軍はその速さに圧倒され、完全な制空権下でも爆弾の雨が降るようになった。しかし物資不足や工場の破壊によってAr234は生産が出来なくなり、やがてドイツは降伏する。

史実では初飛行が1943年6月だったAr234だが、『大和会』よりもたらされた『ネ20』の設計図が歴史を変えた。これによつてBMW社は史実よりも格段に早く『BMW003』の完成に漕ぎ着け、ユンカース社もJumo004エンジンの開発を早期に進められた。1年近い開発期間の短縮を果たしたAr234は今年4月に初飛行、5月には生産ラインの整備が進められ、量産機第1号が今月初の実戦に投入された。（因みにMe262は1942年2月、『橘花』は同年3月に初飛行を果たしている）この試作機に対してソ連空軍は成す術もなく、ドイツ空軍機の侵入を許した。そして、Ar234は第3帝国の威光を知らしめたのである。

「諸君」ペタン元帥は言った。「これは危惧すべき問題だ。同盟国　それも“オブザーバー国”への攻撃が間近に迫っているのだ。つまり、敵に侵攻されるまで主戦場となる同盟国に対応戦力を送れない」ペタンはそう説明すると、一言付け加えた。「まだ同盟国だったらな」

ペタンが危惧するのは、圧倒的な兵力によってフィンランドが侵攻され、EUが介入する前に降伏して同盟を脱退してしまうことだった。フィンランドの軍隊が徹底抗戦を唱えても、政府が根を上げれば元も子もない。

「その場合、必要となるのは『緊急即応集団』だと私は考えております」ロンメルは言った。「同軍団はこれらの問題に対処べく、編成された緊急展開戦力で、軽装の機械化部隊ならばノルウェーからの陸路や空輸によって可及的速やかに戦地へと展開出来ます。私の第1集団とイギリス海兵隊基幹の第2軍団第3集団、そしてノルウェーの第6集団を第1波として、次に第2、第3軍団の予備即応集団と主力の機甲師団を送り込めば、十分だと思います」

彼が言う緊急即応集団とは、緊急展開能力に特化した軽装歩兵中心の部隊である。これはEUに所属するオブザーバー国やヨーロッパ本土から離れた地域へ可及的速やかに送り込める戦力を求めた結果であり、派兵地域での戦争初期段階における対応を主任務とし、とにかく緊急展開力と機動力に重点を置いていた。その為、補給や打撃力に難があるのが特徴的で、戦術上の運用には主力の機械化及び機甲部隊の支援が不可欠で単独での運用は不可能である。

ロンメル指揮下の第3軍団第1緊急即応集団は、この即応集団の中でも大規模な戦力を備えた集団といえた。その概要はドイツ陸軍第7装甲師団と第5軽師団からなり、2個戦車連隊・1個戦車大隊・2個狙撃兵旅団・1個砲兵連隊・1個オートバイ狙撃兵連隊を戦力として保有する。

また、合同戦力として第2降下猟兵師団も加わっているのだが、

降下猟兵は空軍管轄なので、ロンメルに実質的指揮権は存在しない。これはE U軍緊急即応集団の中でも特殊なケースであり、ゲーリングのわがままが成就した結果といえた。

「ロンメル中将、君の考えは正しい」ブルックは言った。「基本的な初期戦略はそれで行くべきだと、私は思う。ペタン元帥閣下、貴方は如何ですか？」

ペタンは頷いた。「私も同様だ。だが、補給や敵の戦力の問題もある」ペタンは言った。「中途半端な兵力の派兵は、その部隊の壊滅さえ招きかねない。十分な対抗戦力をその後、すぐに送り込めるような態勢を整えておく必要があるだろう」

史実、^{ゴースト}『幽霊』であり、^{デザート・フォックス}『砂漠の狐』でもあったロンメルは、今度は^{ライトニング}『稲妻』になるうとしていた。その冬、ロンメルは圧倒的な速度で展開し、フィンランドに1番乗りする。そしてフィンランド軍の精鋭とマンネルヘイム元帥とともに共闘し、ゲリラ戦法や次世代兵器をもって、少数の戦力で強大なソ連軍を打ち破る。北アフリカで『砂漠の狐』になり損ねた彼は、フィンランドで『雪原の狐』というもう1つの渾名を冠することになるのだ。

第53話 電鬼のごとく（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第54話 戦車は踊る

第54話『戦車は踊る』

1942年7月15日

ドイツ/ベルリン

信じられない思いで目をパチパチさせながら、ずっと立ち上がった。周囲を取り巻く幕僚達などは視界に無く、眼前の光景に心を奪われ、知識への飽くなき探求心が全ての不安を吹き飛ばしてしまっただ。それと同時に快哉を叫ぶ声が漏れ、見学者アドルフ・ヒトラーは再び独裁者に立ち戻った。史実の1942年中期、この頃にはソ連軍は新型中戦車『T-34』を戦線に逐日投入し、ドイツ軍は恐怖に怯えていた。そんな未来を知っていたヒトラーは同様の感情を抱いていたが、眼に刻まれた光景はそんな恐怖も、あるいはT-34への対抗心も、みんなまとめて忘れさせるものであった。

「やったぞ！」彼は叫んだ。

ベルリン郊外はツォッセンの『クンマースドルフ戦車実験場』は、ドイツ陸軍によって建設された戦車の性能試験場だった。主に戦車実験場では、『ティーガー』、『パンター』といった主力戦車の試作車試験や英仏等鹵獲戦車の性能調査を執り行っていた。また、超重戦車『 Maus』の試験が行われていたことでも有名である。因みに、ツォッセンにはドイツ陸軍の総司令部や『V2』等ロケット試験場もあった。

「こいつは凄い！」ヒトラーは腕を高く掲げながら叫んだ。彼の眼前には一面の野原が広がり、T-34を模した標的戦車と、ドイツ陸軍の新型中戦車？号『パンターA型』が向かい合っている。鈍い輝きを放つ、70口径75mm戦車砲は既に吼えた後で、標的

戦車の45mm前面傾斜装甲を深く貫いていた。

「『T-34ショック』の前に、『パンターショック』を起こしてやれるな。北方の蛮族共はさぞ驚くだろう」彼はぶつぶつ言いながら、ゲッベルス宣伝相の隣に歩み寄った。「その時はゲッベルス、君の力が必要となる。戦う前に敵の氣力を奪ってしまふのだ」

ゲッベルスは頷いた。「西の壁」計画の決定後、ゲッベルスの影響力は強まっていた。手を組んでいたトートも同様である。

T-34の擬似前面装甲を見事撃ち抜いたパンター戦車の主砲をしげしげと眺めながら、ヒトラーは独り言を言った。

「ふむ、お前はもつと強くなる必要がある。まずは史実のアキレス腱となった駆動系、次は装甲、最後は “眼” だな。で、だ……お前を世界に広めてやる……まずは『イタリア』と『日本』だ」目をぐつと凝らし、腕を組んでヒトラーはパンター戦車を見据えた。

史実、パンター戦車の登場は早かった。開発開始は1938年で、当初は20t級の計画だった。要は『?号』の後継戦車である。しかし、実際に計画が本格化したのはそれから3年後の1941年のことで、しかも突然登場したソ連軍の『T-34』新型中戦車に対抗すべく3035t級に引き上げられていた。T-34は前面装甲厚45mmと決して分厚い装甲を備えていた訳ではないが、傾斜が施されていて、当時のドイツ軍主力の37mm対戦車砲は全く歯が立たず 一方で、生産初期の铸造砲塔は脆弱なもので37mm砲弾にも貫通されたという話もある 叩くだけで貫くことが出来ないことから『ドア・ノッカー』の蔑称が付けられた。また、主力戦車の『?号』戦車はブリキの玩具同然に叩き潰され、75mmの砲を誇る『?号』戦車でさえ、側面に回り込んで後部のエンジン部を狙い撃ちするという、こずるかしい戦法に頼らざるを得なかった。もつとも、これは主砲が歩兵支援用の短砲身砲であった?号戦車なら仕方のないこともある。

独ソ戦での登場当初、この強大無比な中戦車に対抗する手段は88mm高射砲や野砲、新型の対戦車砲、Ju87『シュトゥーカ』

が主力であつたが、これらの多くは欠如していた。88mm高射砲や野砲は長大な東部戦線をカバーするためにその数がばらけてしまい、新型の対戦車砲は数が少なく、空軍の急降下爆撃機の多くはソ連各地の軍事基地や物資集積場を襲わなければならないので、単体の戦車部隊を相手にする暇は無かつた。

1942年に移ると、その恐怖は更に増した。西側の連合国軍によるヨーロッパ爆撃でドイツ国内の生産力は低下し、一方で東側の連合国軍　ソ連軍はT-34を逐日生産し、戦線に送り込みつつあつた。この危機的状况でソ連深奥に侵攻し過ぎたドイツ軍は補給線が伸び切つてしまい、そこをソ連軍に分断されてしまつて物資不足に喘いでいた。ドイツ空軍は空輸でこの問題を解決しようとしたが、多数の高射砲と戦闘機の前に輸送機は軒並み撃墜されていた。

この状況下で多数のT-34に対抗するべき手段が限定化され、おいそれと使えなくなりつつあつたドイツ軍だが、その猛攻を彼らは耐え抜いた。

その理由は多くあるが、もっとも大きな要因は『ソ連軍の未熟さ』にあつた。独ソ戦初期の大損害を克服して膨大なT-34を生産したソ連軍だが、1年ばかりで『熟練兵士』を取り戻せる訳ではない。いくら性能の良い兵器があつたとしても兵士の多くは農民出が大半を占めており、しかも僅か数ヶ月の訓練のみで戦場に送られていた。更に、スターリンが行つてきた『粛清』もまた、ソ連軍の足枷となる。ろくな戦術を持たず、集団で、そして雑兵で、とにかく何も考えず突撃してくるソ連軍はこれまで数の劣勢を戦術によつて補つてきたドイツ軍にとっては、恰好の力モといえた。その結果、本来地の理をもっている筈のソ連軍はドイツ軍に地形戦で敗北し、巧妙に配置された対戦車砲によつてT-34も側面から撃破されることしばしばだつた。

しかし一方で、ドイツ陸軍上層部はT-34に対抗出来る新型中戦車の必要性を信じていた。対戦車砲では限界があり、また少しづつ経験を積んでいるソ連軍がいつまでも人海戦術に頼ることはない

だろうと考えていたからである。それに何より、体裁が立たない。

こうした経緯から誕生したのが『?号』戦車だった。後に『パンター』との制式名称を授かるこの中戦車は、総重量45tという計画時点での要求重量を大きく上回るものとなっているのだが、それにはヒトラーが起因している。

最初の量産型である『D型』が生産体制に移行する前、ヒトラーはパンター戦車の装甲厚の強化を強く望んでいた。これはヒトラー個人の判断に基づくもので、将来登場するであろう連合国軍の主力戦車に対抗する為には、60mmの前面装甲厚では十分でないという考えがあったからである。更に戦争の推移後、前面装甲厚はヒトラーの一声により、80mmから100mmに増加された。

実際、米英軍の戦車はともかくソ連軍の戦車は強力な火炮にはパンターも危うかった。T-34は85mm戦車砲を搭載し、ついには80mmを大きく上回る122mm戦車砲を搭載したIS-2『スターリン』重戦車も登場し始めた。これらはドイツ軍の『ティーガー』、『パンター』等新型戦車への対抗手段だが、資源不足で戦車もろくに動かせなくなりつつあったドイツ軍にしてみれば十分過ぎる程だった。

とはいえ、ヒトラーの判断は正しくもあり、同時に間違いでもあった。装甲厚の増大は確かに中戦車T-34に十分対応し、M4『シャーマン』はかつての?号戦車のように、パンターの側面に回り込んで動力部を狙い撃ちするという戦法に頼るしかなかった。M4は4輦1組のチームを作り、これを実行した。しかし、この時点でパンター戦車は45tという重量過多で、これは重戦車級の重量だった。結果的にパンターは最高速度が計画値60キロから5キロも落ちた55キロとなり、その機動力を失ってしまったのである。更に駆動系にも負担が掛かり、ただでさえ精度が落ちている部品類で造られたパンターの駆動系は軒並み悲鳴を上げることとなる。

また、側面装甲を増加しなかった判断も、問題点だった。M4、そしてT-34は正面戦闘ではパンター戦車には敵わないが、側面

からの攻撃ではパンターを粉砕出来た。M4は前述したように4輦1組のチームで側面攻撃を仕掛け、米陸軍の統計ではパンター1輦に対し、M4は平均5輦の損失を出していた、T-34の場合には2つの部隊に分け、その機動性を活かして側面に回り込み、90度の角度を付けて半包囲、斜めの角度から側面装甲を攻撃した。どちらも物量に頼った戦術から成り立っており、パンター1輦に2輦以上の損失は覚悟しなければならなかった。しかしこれがドイツ軍の新型戦車を撃破する確実な方法であり、米ソの国力をもつてすれば痛くも痒くもないものであった。でなければ、5輦と言わず10輦以上の損失もあり得るからだ。

1942年に移り、EUヨーロッパ同盟軍では標準兵器の制式採用に各国が意欲を示していた。早くボフォース社の40mm機関砲が採用され、残る主力兵器の採用を別の国々、企業は狙っていた。その中でも加熱していたのが、『戦車』である。

EUモデルの主力戦車開発は、EU加盟各国軍の急題であった。採用されれば各国の標準戦車として、輸出品の生産やライセンス生産権から多大な利益を得る所となる。対ソ戦が迫り、実際に即戦力も必要だった。

「『パンター』は非常に優れた戦車だ」ヒトラーは言った。「イタリアや日本は既にこの開発競争から外れ、これのライセンス権を得た。残るはイギリスとフランスだが、あの2国がこれ以上の性能の戦車を造り出せるとは、到底思えん」

ドイツが出品する戦車は『パンター』だった。パンターは中戦車にあつて、中戦車にない戦車だが、主力戦車としては世界最高水準を誇るものといえた。長砲身の75mm戦車砲はT-34を容易に破壊し、前面の80mm傾斜装甲は中戦車による一切の攻撃を受け付けず、その機動性は若干低下しながらも許容範囲といえる。攻防速という戦車の3つの重点でバランスが取れ、駆動系や砲に改良の

余地が十分にあるパンターは戦後の主力戦車　M B Tに通じるものがあり、E Uの主力戦車としては申し分ない存在だった。

唯一の問題は　整備性と価格である。当初、パンター戦車の試作車開発にはダイムラーベンツ、M A N、そしてクルップの3社が加わっていた。この内、クルップ社は早々と脱落し、ダイムラーベ
ンツ社とM A N社が軍に開発案を提示した。ダイムラーベンツ社は
独自に開発していた20 t級戦車を拡大設計し直したもので、斬新
な設計だった。足回りが保守的なもので、外見はT - 34に酷似し
ている。一方、M A N社はT - 34にも採用された傾斜装甲に加え、
新型のサスペンションを採用していた。ダイムラーベンツ社の方が
ヒトラーの趣向に合っていた、斬新なもので有力だったが、結局M
A N社の案が採用された。

その理由は　整備性の良さである。

人類史上、ヒトラーは稀に見る独裁者だった。特に、軍隊を私
物化することにおいて、彼以上に強欲な人間は居なかっただろう。
派手好きで、巨大且つ強いものが好きだった彼は、軍の兵器開発に
も度々介入していた。80 c m列車砲『ドーラ』、『グスタフ』。
巨大輸送機M e 323『ギガント』。報復兵器『V1』、『V2』
ロケット。動くトーチカ　超重戦車『マウス』、新旧技術の入り
混じった中途半端な戦艦『ビスマルク』等がその代表格といえる。
マウスなどは完全にヒトラーの趣向に合ったもので、実用性など二
の次のものだったと言わざるを得ない。

まるで『おもちゃの兵隊』でも操っているかのようにドイツ軍を
動かし続けてきたヒトラーだが、相次ぐ敗北は彼の判断力を鍛え上
げた。整備性に優れたM A N社の案が採用されたのも、その為とい
える。

ただ、整備性や量産性に優れていたのは事実だが、M A N社のパ
ンターは足回りが非常に劣悪なものであった。今物語ではその問題

が『大和会』の駐独武官であつた原から伝えられており、1939年の開発本格開始からその改良が進められていた。そしてその見返りとして、ヒトラーは日本に向けたパンター戦車や88mm高射砲のライセンス生産権の売却を約束した。

史実の1937年、日中戦争の折、88mm高射砲は南京にて鹵獲され、『克式八糎高射砲』として使用された。1939年にはデッドコピー品が国産化されたが、日本はクルップ社に対し無断で進められていた。しかし、日独伊三国同盟の締結後にはライセンス料が支払われた。

だが『盧溝橋事件』が解決し、日中戦争の頓挫によつて、帝国陸軍が88mm高射砲を鹵獲する歴史が訪れなかった。他のドイツ製兵器も同様である。1939年のヒトラー・ムッソリーニ訪日の折、88mm高射砲のライセンス生産権の日本側購入が提案され、ヒトラーは快く同意した。

一方、パンター戦車のライセンス権購入は1942年に入つてからである。傾斜装甲を要し、ようやく75mmの戦車砲を搭載した『一式中戦車』を量産化させつつあつた帝国陸軍だが、一式中戦車はM4に対抗出来るだけで圧倒することは容易ではないと判断していた。そこでドイツの新型中戦車であるパンターのライセンス権を買い、国産化しようと模索していたのである。史実でも、帝国陸軍はティーガー戦車をライセンス生産しようと画策していた訳で、645,000ライヒスマルクを用意し、ティーガー1輦が300,000ライヒスマルク、ドイツ側もティーガー戦車1輦を用意していたが、結局その計画は頓挫した。当時の帝国陸軍の技術錬度、財政、そして主戦場を考えれば、無謀な計画であつた。

だが、冶金技術の発達や五輪の成功による経済の発展、史実以上のインフラの拡充をもつてすれば、パンター戦車の国産化は必ずしも不可能という訳では無かつた。一式中戦車のことを考えればパンターの性能は破格であり、ティーガー戦車1輦が300,000ライヒスマルクなのに対し、125,000ライヒスマルクなのでテ

イーガーよりは現実的といえる。日本は20万ライヒスマルク
当時の日本円にして340,000円弱 を払い、試作のパンタ
ー戦車1輦輸入と技術者の招聘を実現させた。帝国陸軍はこれを国
産化させ、平均20万円で生産しようと画策している。かつての主
力戦車である九七式中戦車『チハ』と比べれば高いのは確かだが、
少なくともチハのようにM4に成す術も無く屠られることは先ずな
いだろう。

第54話 戦車は踊る（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第55話 特設空母黒鷹

第55話『特設空母黒鷹』

1942年8月31日

長崎県／長崎市

南山手の丘にある『グラバー邸』は文久3年（1863年）に建てられた、イギリスの商人トーマス・B・グラバーの私邸であった。『ジャーディン・マセソン商会』の長崎代理店として『グラバー商会』を築いたこのスコットランド出身の商人は、植民地国インドの紅茶や中国の絹糸を売るに終わらず、坂本龍馬の名高い“カンパニー”『亀山社中』に武器や弾薬を売り捌いたことで有名である。グラバーはその後、炭鉱の開発や船工場を造るなどして事業を拡大、長崎の工業基盤を築いた。1870年には資金繰りが厳しくなり、破産したが、三菱財閥の相談役として活躍とただでは転ばない人生を歩んだ。

そんな彼が死去したのは明治末の1911年のことである。グラバーの邸宅は、日本人の妻ツルとの間に生まれた子、倉場富三郎の手に渡った。しかしイギリス人と日本人のハーフであった富三郎はスパイ容疑を掛けられ、またこの邸宅を半ば強制的に奪われる形となった。

その理由は、伊藤整一と山本五十六の2人が見据える、その視線の先にあった。

「うむ、ここでは造船所どころか『武蔵』まで丸見えですな」山本は言った。「こう実際に見てみますと、国益の為とはいえ、この家の主には悪いことをしたと思わざるを得ません……。いっそのこと、三菱と上層部に掛け合って返還でもさせますか？」

伊藤は頷いた。「それが宜しいでしょう。しかし……」伊藤は唸り、俯いた。「今や、『武蔵』は世界に公表された存在。戦艦『武蔵』に機密保持の必要性はありませんが、隣の戦艦『ネバダ』にはそれが該当しません」

「更に隣の空母『インディペンデンス』にも ですか」

坊ノ岬沖から近かった為、長崎の海軍根拠地は『夢幻の艦隊』の多大な艦艇を収容する一大拠点であった。本来、帝国海軍が所有する筈の無い米海軍の軍艦は長崎湾に溢れ、此処グラバー邸はそれを見るには恰好の場所だった訳である。また『武蔵』にしても、戦艦『大和』同様にその存在が公表されているとはいえ、そう易々と見られるわけにはいかない代物であったのは確かである。結果的に言えば、この『グラバー邸』を本来の所有者に返還するということは、叶わぬ夢であった。

史実におけるグラバー邸の三菱所有は1939年のことである。

グラバー邸は対岸の三菱長崎造船所を一望出来る位置にあり、戦艦『武蔵』を建造する造船施設も丸見えであった。そこで三菱は機密保持を目的に富三郎から買収した。当の富三郎は亡き父母の形見である邸宅を買収されたことに満足している筈も無かった。これも含め、妻のワカ 同じく日英のハーフ に先立たれたことと、長崎への原爆投下による故郷の喪失という度重なる不幸を経験したこともあって1945年8月26日、失意の内に自殺した。

今物語では、富三郎が邸宅を失ったのはもつと早かった。1938年の3月にはこの買収の話が当人の意思と関係無く強引に進められ、史実通りに三菱の所有となった。これは戦艦『武蔵』の建造もそうだが、既に1937年の時点で長崎湾に多数停泊していた米海軍艦艇の機密保持のためである。それを知った伊藤はこの場に立ち、少なからず罪悪感を感じていた。

「別の根拠地の建設が進まないことにはどうしようもない……、というのは歯痒いばかりです」伊藤は呟いた。「私の成功は人の犠牲が多過ぎた。これからは、私が償いをするか、失敗をするでもし

ないと、罪悪感に押し潰されん限りです」

山本はかぶりを振った。「では、最大限の償いをなさると宜しいでしょう。しかし失敗は、更なる犠牲者を生むばかりですよ」

「必要な犠牲……という奴ですか」

「まあ、そんな所でしよう」山本は言った。「少なくとも、貴方が成功する度、この長崎に10万人以上の死傷者を生み出される……という未来は回避されるのですよ。統計や数字で物事を判断するのは非礼ではあると思いますが……」

「だが、代わりにアメリカで10万人の死者が出たら？」伊藤は言った。「イギリスで、イタリアで、ソ連で、そしてドイツで同じような惨事が起こらないとは言えません。現に、我々は史上最悪の殺人兵器を満州で造らせている」

それは帝国陸海軍協同で行われている原爆開発のことだった。開発は必ずしも上手く行っているとは言えなかったが、完成の見込みは見えてきていた。

「やるかやられるか」山本は言った。「戦争では、そう割り切るしかありませんまい」

山本の声は冷やかだった。

ネクタイの結び目を少しいじり、カンカン帽を被り直すと、山本は伊藤から目を背けた。彼は対岸に広がる長崎湾と、そこに築かれた三菱の造船所を見つめた。そこでは、11月末までに就役を目指す大和型戦艦第2番艦『武蔵』の巨影と、それに連なる一隻の航空母艦の小ぶりの艦影がごく近くに感じる程に眺め渡せた。その小ぶりの航空母艦こそ、2人が今日長崎に来た“理由”である。

「特設空母『黒鷹』」

伊藤は言った。「元がタンカーの『黒潮丸』というこの特設空母は、他の特設空母と一線を画す存在といえましょう。米海軍の『サンガモン型』護衛空母、そして『コメンズメント・ベイ型』に酷似

した運用思想・設計思想に基く同艦は、帝国海軍初の“純粹”な護衛空母です」

「“純粹”……ですか」山本は言った。「具体的には？」

「まず、基本速力が20ノットで、艦隊随伴は難しいですが、対潜・対空戦闘に特化した仕様となっております」伊藤は言った。「また、これは2タイプの空母に分かれています。即ち、サンガモン型のようなタンカー自体を改造した『中津』型空母と、コメンズメント・ベイ型のような船体設計を流用して当初から空母として建造された『葛西』型空母の2タイプです。後者はブロック工法及び電気溶接を全面に採用したもので、完全な量産型空母といえますし、前者は海軍の助成金をもって各海運企業に造らせ平時には商船として、そして戦時には軍の指揮下に入らせて空母に改装します。この点は、艦隊型空母としての側面が強い他の特設空母とは異なる点といえましょう」

伊藤の説明する通り、同空母は純粹な護衛空母且つ量産を想定した空母であった。

その性能諸元は。

『黒鷹型航空母艦』性能諸元

基準排水量：11,000 t

全長：160.55 m

全幅：22.0 m

飛行甲板長：154.0 m

吃水：8.8 m

機関

主缶：川崎ラ・モント汽罐×4基

主機：石川島タービン×2基2軸

出力：11,805馬力

最高速力：19.5ノット

兵装

40口径八九式12.7cm連装高角砲×2基

65口径九六式25mm三連装機銃×10基

航空機搭載量：22機（常用）

：3機（補用）

空母『黒鷹』の基となった油槽船『黒潮丸』は、1940年に至るまでの日本のタンカーで、最大速度を誇った高速船であった。それまでディーゼル機関に頼っていた日本のタンカーで、初めてディーゼルからタービンに代わったタンカーで、画期的な新機軸を生み出し、その後の戦時中の計画造船において、油槽船の全てがタービン船として建造されるに至る先鞭をつけた船である。

1939年に播磨造船所で建造された黒潮丸は、中外海運の油槽船だった。この時期までの主力であったディーゼル機関に代えてタービン機関を搭載した同船は、当時のタンカーとしては最高速だった20.6ノットを記録した。戦時中は軍に徴発され、激戦の南方海域を原油を運んで回った。そして1945年1月、米海軍の空襲を受けて撃沈する。

しかし今物語では全く違う歴史を『黒潮丸』は辿ることとなる。

1939年、有事を口実に『ノモンハン事件』 徴発された黒潮丸は三菱の長崎造船所へと送られ、空母として改装工事を受けることとなった。そこで飛行甲板、格納庫、カタパルトの増設、機関部の改装がなされ、現在に至る。

「『黒鷹』は続く『中津』型、『葛西』型空母の実験艦 いわゆる“プロトタイプ”です。この黒鷹の運用が成功すれば、2つの空母の建造にも弾みがつくというものでしょう」

但し、『中津』型は前述したように平時は商船であった。戦中のみ軍部に徴発され、特別輸送艦か『中津』型航空母艦へと改装される手筈で、新たに開設された大神海軍工廠とこの長崎には、その設備一式が揃えられていた。海軍ではこの改装工事を最長でも1年半

の内に終わらせ、伊藤が司令長官を務める護衛艦隊に編入させることを計画していた。

一方、『葛西』型は各造船所にて、既にその建造が進められていた。葛西型は黒潮丸の船体を流用し、若干の修正を加えた艦で、飛行甲板、乾舷の延長と艦幅の縮小、そして対空兵器の増設が組み込まれている。

そんな葛西型航空母艦の特出すべき点は、帝国海軍において初めて『ターボ・エレクトリック方式』と『ギャラリデッキ』、そして『開放式格納庫』を採用したことにあつた。ターボ・エレクトリック方式とはエンジンで回すタービンで発電し、モーターで推進器を回す方式である。ボイラーやタービンの操作が単純化でき、速度の急変に対する対応が容易なのが利点だ。一方のギャラリデッキとは飛行甲板の構造の一部のことで、飛行甲板直下と格納庫直上の間に位置する層のことである。これは格納庫の強化も図り、運用上の利点となる。その3つはどれも米海軍の伝家の宝刀であり、米海軍が太平洋戦争において勝利した要因であり、敗北した要因ともいえる。

但し、ターボ・エレクトリック方式に関しては、全ての艦が採用している訳でもなかった。この慣れない方式に現場が当惑し、またコスト面においても馬鹿にならないと判断されたからである。1番艦『葛西』がこれを最初に採用したが、他の艦には『中津』型の通常機関を採用したものもある。

これらの方式を葛西型が獲得するに至ったのは、言わずもがな『夢幻の艦隊』の空母『サラトガ』や『インディペンデンス』があつたからだ。この2つの艦はこれらの方式を採用した画期的な空母で、水中防御においては脆弱だったが、抗堪性の高い飛行甲板を有していた。また、ターボ・エレクトリック方式はシフト配置を実現し、1箇所の被弾被雷で一気に航行不能になることはない。また、発電力に関しても余裕があり、他の箇所に十分な電力を送ることが出来た。

帝国海軍は『マル5計画』で、『葛西』型空母を15隻建造『黒鷹』も含む することを決定した。新機軸のこの空母の全ては海上護衛隊から解消発展した『第一護衛艦隊』へと編入されることとなり、これで遂に『シーレーン防衛』という軽視される戦略の下に運用されてきた第一護衛艦隊は、『航空母艦』という機動戦力を有することとなった。最低でも計16隻の護衛空母が1945年までに編入され、戦時となれば更に10隻の『中津』型特設空母が編入されることとなる。

つまり、第一護衛艦隊は最終的には計26隻の空母を保有する一大機動艦隊となる訳である。この隻数は第一航空艦隊のそれを凌ぎ、艦載機数に関しても合計650機なので、やはり一航艦を凌ぐ戦力といえる。基地航空隊のような陸上航空戦力を加えれば、その総数は1000機を下らない。とはいえ、護衛空母1隻は正規空母の4分の1にも満たない戦力なので、それでいえば第一護衛艦隊のこれらの護衛空母は、正規空母6隻と半分にも満たない戦力ともいえる。しかしそれでも、陸海多方に与える影響は凄まじかった。空母の数だけでいえば、あまりにも桁違いの数なのでおかしいという意見が続発し、司令長官の藤伊中将による戦力・権力の一極化とみて『藤伊集権艦隊』などという渾名が第一航空艦隊に名付けられることとなった。

そう騒ぎ立てている陸海軍の人間だが、この26隻という数が決して多くはないとは思わなかっただろう。戦時は軍令部に居て、戦後はレイモンド・A・スプルーアンス大将と談話した伊藤だから知り得ているが、米海軍は同型艦と位置付けられる『コメンズメントベイ級』だけで35隻の建造を予定していた。更に“週刊空母”で知られる『カサブランカ級』で50隻、『ボーグ級』でも34隻が建造されている。アメリカはそれをイギリスへ貸与したのだから、その国力は底知れない。日中戦争の頓挫、五輪の成功、EUからの経済援助によって飛躍的發展を遂げた今物語の大日本帝国といえど、この26隻の護衛空母を造るので精一杯なのだ。

「新しい空母が26隻増えるということは、新しい責任が26個も増えるということだ」山本は空母『黒鷹』を見据え、言った。「アメリカはそれ以上の責任をいっぺんに抱え込んだというのだから、彼等の国力にはやはり歯が立たんというものですな。我が国では、これから3年に分けて増やしていかなければ、懷が破産しまいかねないというのだから、何とも情けない話です」

伊藤は頷いた。「とはいえ、これで形勢は逆転しました。少なくとも、内地や連合艦隊が食糧や鉄、そして油不足に喘ぐことはないでしょう。EUの誕生によって戦線も縮小されましたので、アメリカ戦線までの延び切った補給線ぐらいなら、これだけの護衛空母でカバー出来る筈です」

第55話 特設空母黒鷹（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第56話 東條死すとも日本は死せず

第56話『東條死すとも日本は死せず』

1942年10月4日

東京府/世田谷区

用賀1丁目。ほんのりと黄を混じらせた薄紅色が、濃黒の闇を1枚ずつ剥がしながら、穏やかに暁鐘を鳴らす。それが天の上のこと。しかし地は違う。むせび泣くようなサイレン音が鳴り響き、夜気を引き裂いた。漆黒に包まれていた大地には人工の光が灯った。また1つ。さらにもう1つ。やがて一軒の邸宅が数え切れないほど沢山の小さな光に満たされた。直径数cmから数mまで、各種様々な光芒がちらちらと瞬いている。

その時、伊藤整一を乗せた黒塗りの公用車は世田谷の住宅地を爆走していた。目的地に到着すると、伊藤は急いで車を降り、警察車両や軍用車両の犇めく横道に出た。警察官と憲兵が睨み合う只中を潜り抜けて、封鎖線の内部に入った。すると、現場の警察官を率いる岡警部補と憲兵隊を率いる中溝中佐の姿が視界に飛び込んできた。

「先刻連絡を入れた、帝国海軍の藤伊中将だが……」

仁王立ちしていた2人ははっと振り返り、その藤伊中将と視線を合わせた。

「承知しております、閣下」中溝は言った。「どうぞこちらへ」警察と憲兵隊の両者は対立しているが、実質的に現場を支配しているのは憲兵隊だった。何しろ今回の事件の被害者は陸軍関係者であり、それも中将だったから当然といえる。そんな中を全くのお門違いの海軍中将が介入出来たのは、やはり『大和会』あつてのことだろう。もっとも、今回の事件は『大和会』に関わるものだったか

ら、お門違いともいえない。

「これか？」

書斎の一角に敷かれた、純白の布を指して伊藤は言った。布は若干膨らんでいる。「顔を見ても？」伊藤は訊ねた。

「大丈夫です」中溝は答えた。

伊藤は1本の指でそれに触れてみた。布のさらさらした表面の下から、冷たげな感触が伝わってくる。そして静かに布を捲り上げると、その中を恐る恐る覗いた。

伊藤は眉を顰めた。「やはり……」

中溝は頷いた。「東條閣下は 死去なさいました」

『東條英機暗殺事件』

後世にも語られる今回の事件は、帝国陸軍史を震撼させる一大事件であつた。

事の成り行きはこうだつた。1942年10月3日午後、東京は世田谷区用賀に私邸を構える東條英機陸軍中將は、土曜日ということもあり私邸で休暇を取っていた。そこに共産主義者の暗殺者が侵入、持っていた拳銃を東條に発砲し、逃亡した という。これにより東條は死亡、帝国陸軍も共産主義者に中將 それも新職の『陸軍航空總監』を暗殺されてしまったということで、面子が立たなかつた。犯人はその後、陸軍の懸命な搜索によつて捕縛され、尋問の末に犯人は自殺してしまい、事件は収束する。

「腑に落ちませんな」

事件の数日後、藤伊邸に訪ねた山本海相が発した第一声がそれだつた。

「……腑に落ちないとは？」伊藤は鋭い口調で訊いた。

「何故、共産主義者が一介の……それも変哲も無い陸軍中將を暗殺しますか？」山本は低い声で言つた。「どうせ暗殺するなら、重

職の陸軍三長官を狙うでしょう。それに、ご存知とは思いますが、今回の事件の捜査の裏には、“あの男”の存在がありますよ」

「石原莞爾」伊藤はすぐに言った。「あの男なら、確かに陰謀の1つや2つを思い付くのはお手のものです。事実、彼は『英国首相暗殺計画』の中核にあり、東條とは犬猿の仲ですからね」

「共産主義を憎んでいるのもお忘れなく」山本は言った。「あの男がEUに『共産主義打倒』の精神を吹き込んだ張本人ですから。今回の一件で共産主義者に罪を擦り付ければ、事件に加担した証拠を抹消でき、後の共産主義者の摘発強化も行えて一石二鳥というものでしょうから」

「成程……」伊藤は頷いた。「それに付け加えてですが、一言言わせて頂いても？」

山本は頷いた。

「どうやら、陸軍内では東條は疎んじられていたようです。約束されていた筈の次期首相の地位も危うくなり、航空総監も来年には辞めさせられて、要塞司令官のような閑職に左遷されようと中枢部が考えていたらしいです。それを一早く察知した東條は、中枢部にこの『大和会』の存在を報告して、面子を保とうと画策していたようです」

「我々を……売ると？」

伊藤は頷いた。「あれは陛下には忠実な男ですが、人間誰しも自身の保身が最優先です。『P-51』のような戦闘機を造るという時と金が途方も無く掛かる計画を考案したり、『ノモンハン事件』でソ連軍の追撃に積極的でなかった以上、その能力が中枢部に疑われるのは当然のことでしょう。それで『大和会』の全貌を暴露しようと考えたのでしょう」伊藤は言った。「もつとも、これは石原の受け売りですが」

「結局、今のこの会話も、今後我々が行うであろう我々の行動も、全ては石原のシナリオ通り　ということですか」山本は言った。「何とも後味が悪いですな、これは……」

伊藤は静かに頷いた。

「憲兵隊と警察双方の筋の話では」伊藤は言った。「東條私邸を度々訪問する軍人が居たらしいです。何でも、仕草や外見が特徴的な男で、階級は中佐。そして眼鏡を掛けている　とか」

「それは……まさか？」

「恐らくですが、辻政信でしょう。あれは東條の懐刀ですから」伊藤は言った。「問題は、辻が石原の腹心となったことと、その辻が事件当日にも東條邸近くで目撃されていることです」

山本は言った。「歴史とは数奇なものですな。東條はどうやら懐刀を鞘に差し間違えて、腹を裂いてしまったようだ。東條の人徳も地に墜ちたと見える」

「辻は合理的な男です。東條に利用価値が消えたと見れば、例え旧知の関係でも容赦はないでしょう」伊藤は言った。「事実、辻はそれを証明してきていますから」

「これからどうなりますかな？」山本は言った。「このまま米内閣下主導の海軍内閣が続けばいいが、東條が消えた今、もし陸軍内閣になりでもすれば、『大和会』は国政に手出し出来なくなりますよ」

「むしろ、石原はそれを狙って今回の一件を起こしたのかもしれない」伊藤は言った。「東條が逝き、対ソ戦の迫る今、近い内にもこの日本に政変が起こるでしょう。そしてその政変によって日本に成るのは、陸軍による実権の支配、アメリカによる介入の余地、そして軍部支配の確立……。石原はそれらを自らの手の内で動かし、歴史の舞台の主役として戦争を迎えようと考えているのかもしれない」

「つまり……」

「そうです」伊藤は頷いた。「石原は首相の座を狙っているのです」

第56話 東條死すとも日本は死せず（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第57話 賽は投げられた

第57話『賽は投げられた』

1942年11月30日

東京府/千代田区

霞ヶ関の一角、海軍省は1丁目2番地1号、現在の農林水産省の敷地に建っていた。『赤レンガ』の俗語で海軍内に知られるその施設はイギリス人建築家、ジョサイア・コンドルの設計によって築かれたもので、ヴィクトリアン・ゴシックの雰囲気がある。

この日、そんな煉瓦造りのこの建物の海軍大臣執務室には、山本海相と山口多聞海軍少将の姿があった。部屋の真ん中には彫刻の施された長いテーブルが置かれ、そのまわりには、部屋の雰囲気からすると少々華奢な感じの椅子が並んでいた。そしてその部屋の全てを、見事な東郷平八郎の肖像画が見おろしている。

山本がデスクに座り、肅々と書類整理をしている間、山口は東郷平八郎を仰いでいた。黒いフロックコートの正装が黄土色の肌と口や顎に蓄えた白髭と黒い瞳を引き立てている。胸には幾つもの勲章がちりばめられていて、それらが誇らしげに輝いている。一方の東郷平八郎は威厳に満ちた顔をしていたが、それは画家による意図なのか、不機嫌にも冷徹にも見えるよう描き出されていた。

「提督、山口提督」

はつと我に帰り、山口は呼び掛けの声の先を見据えた。

「いやはや、つい夢中になってしまいました」山口は微笑して言った。『鬼多聞』の異名を持つ彼にしてみれば、珍しい顔である。少なくとも、10月までの海上生活で彼はこんな顔を一度も見せたことが無い。「偉大な方です、東郷元帥というのは」

山本は頷いた。「しかしそんな栄光も、帝国が灰塵に帰せば意味を成さないのだよ」山本は神妙な顔を浮かべた。「つい、一週間前まではそんなことも考えなかったよ。世界戦争が再勃発してしまうとは」

1942年11月26日午後、『マイニラ砲撃事件』が史実通りに勃発した。

事件の舞台は“マイニラ”と呼ばれるフィンランド・ソ連国境線上に位置するソ連の辺鄙な村である。この何の変哲も無い村落に訪れたのがフィンランド軍の榴弾だった。このフィンランド側の砲撃でカレリア地峡付近の国境線を防衛していたソ連軍兵士13名が死傷するという事件はソ連側から発表され、それを口実に『カレリア地峡付近の国境線からのフィンランド軍の後退』という一方的な要求をフィンランド側に求めたのである。

無論、フィンランドがそのような要求を呑める筈も無かった。元々、今回の『マイニラ砲撃事件』はソ連による自作自演で、ソ連軍兵士13名を死傷させたのもソ連軍の榴弾であつた。フィンランドは外交的解決を望み、共同調査を要求した。

しかしソ連はフィンランド側の要求を退け、同日、1932年に締結した『ソ芬不可侵条約』の破棄を通告してしまった。そして29日には国交断絶を通告し、ソ連軍の越境、侵攻が開始された。時に明日、1942年11月30日のことである。

「ソ連というのは、これまでもフィンランドの批判キャンペーンを展開していたと聞きますが」山口は言った。「外交的な面では沈黙が続いていたと聞きます。今回の一件は外国の目を惹きつけ過ぎでしょう。少々横暴が過ぎる……というものですな」

「スターリンの暴虐は今に始まったことじゃない」山本は言った。「粛清、強制労働、情報統制。例に挙げ切れない横暴がソ連国内では続けられていたんだ。むしろ、犠牲が13人に済んだのが奇跡と

いづべきだろうよ。奴なら村1つ滅ぼしかねない」

「奴は何を狙ってあの小国に戦争を仕掛けたのでしょうか？」山口は訊いた。

「さあて」山本は言った。「特に意味はないと俺は思うね。フィンランドの戦略的価値は確かにあるが、EUの軍事拠点としては制約が大き過ぎるから必ずしも使えない。あの国は駐留軍を許さないオブザーバー国だからな」

山本は顎を擦った。「マンネルヘイム防衛線とか、バルト艦隊の障害の排除とか、EUの援助で造ったロバニエミ空軍基地とかは確かに有用だとは思うがね。それにしたってたかが知れてるというもんだよ。むしろスターリンはそういう設備とかフィンランドの資源とかじゃなくて、EUと全面戦争に打って出る時の保険が欲しかっただけなんだよ」

いわばソ連にとって、フィンランドは敵軍の侵攻路だった。

史実、ソ連はナチス・ドイツの急激な『東進政策』に怯えていた。ドイツはチェコスロバキアを解体し、オーストリアの併合を実現させるなど、東欧への進出を進めていて、将来的にはソ連領内へ侵攻することも視野に入れていた。

その中で、ソ連はフィンランドがドイツ軍の侵攻拠点とされることを危惧した。ドイツがソ連との戦争を行うにあたり、そのドイツ軍の左翼がフィンランドを通してソ連領内に攻め込んでくる見込みがあるとして、安全保障体制の確立のためにフィンランド島嶼の割譲を内密に要求していたのである。結局それは実現せず、39年の『冬戦争』に至る。

「スターリンは臆病者ですね」

「“病的”な程にな」山本は言った。「だからこそ肅清なんてことをやっているんだ。スターリンの考えはどうか知らんが、ソ連の人民と軍需産業が本腰を入れたら、EUだろうがアメリカだろうが、敗北を喫してしまうだろうよ」

山口は咳をした。「で、ご用件とは？」

「ああ、すっかり話込んでしまったな」山本は言った。「山口少将、君を『遣欧艦隊司令官』に任命する。第一航空戦隊並びに第三航空戦隊を中核とする1個機動艦隊を指揮し、フィンランドにて悠久の大義を貫いて作戦を遂行せよ」

当の山口は 呆気に取られていた。

「だが、悠久の大義を読み間違えるなよ。君には陛下より預かった『遣欧艦隊』と乗員をヨーロッパの海に沈めさせない責任がある」山本は言った。「無論、その守るべき乗員の中には君も含まれていることを忘れるな」

史実、『悠久の大義』という言葉に良い意味など無かった。本来は『国家・天皇への忠義』を意味するのだが、大抵その言葉は『死』や『犠牲』を伴っているからである。

「これは……その……何というか……」山口は途切れ途切れに言った。「ですが、私は“少将”です。1個艦隊を指揮出来ません。『艦隊参謀長』や『戦隊司令官』なら分かりますが……」

山本は頷いた。「そうだ。だから君には『戦時特例』に則って“中将”に進級してもらう。それなら異存はなかるう？」

「戦時特例？」山口は聞いた。信じ難くて聞き返したのだ。

「今年決まったものだ」山本は静かに言った。「君がその第1号だよ、山口少将。いや、中将か。未だ正式なものではないから、そうホイホイと進級もさせられんのが残念だがね。だが、帝国海軍の年功序列制度では、秀逸な人材も活かされんというものだよ」

史実、帝国陸海軍では『年功序列制度』が根強く残っていた。これは卒業年次が人事異動における絶対基準とされ、先の卒業生を後の卒業生が追い越しような昇格は許されなかった。

では、先の卒業生が同じ階級に居続けた場合はどうなるか。その場合は、先の卒業生はとっとと予備役に編入され、その席を後輩達に譲るのである。こうなってくると、もはや病的と言わざるを得ない。とにかくにも帝国陸海軍はそうやって人事を決めてきた。

今回決まったという『戦時特例』は、そんな軍を根底から覆す新

たな試みとっていいものであった。戦時に限り、有能なものを追い越し昇格させ、要職へと優先的に着ける。ただ、逆に失敗続きのものは、積極的に降格させる。とまではいかなかった。しかしながら、これは『第2の南雲』の到来を予期させるものだった。

「し……しかし……」

山口は渋った。特例とはいえ、帝国軍の上下関係は世界に誇るものだった。いうならば、この人事は誇りを捨てさせるものである。

「何だね。司令官職は要らんのかね？」山本は言った。「まあそういうなら、他にも候補がいるから、私としてもいいのだが」「いえッ！謹んで、拝命致します！」

山本は笑みを浮かべ、琥珀色に輝くウイスキーを山口に勧めた。

1942年11月30日

イギリス／ウェストミンスター地区

ホワイトホール　と呼ばれるこの道は、『イギリスの霞ヶ関』と言うべき官庁街だった。パラメント・スクエアからトラファルガー広場にまで至る通りに面して政府の各省庁の建物が立ち並んでおり、政府の中枢というべき道だった。その道、ホワイト・ホールという名称の由来は1698年に焼失した『ホワイト・ホール宮殿』だが、今やその姿は無い。

その日、軍高官を乗せた公用車がこのホワイト・ホールに長大な一列を築いた。その内、パラメント・スクエアから進入した車列には、イギリス海軍本国艦隊司令長官のジョン・C・トーヴィー大將や北アフリカのEⅧ第8軍を指揮するバーナード・モントゴメリー中將の乗車する車もあった。彼らは夜中や朝方に叩き起こされ、このホワイト・ホールの一角にある『国防省』へと召集されたのである。

最初に目に飛び込んできたのはケンブリッジ公爵ジョージの騎馬像だ。パラメント・スクエアからホワイト・ホールへと至る道の入口に鎮座している。馬にまたがったイギリス陸海軍最高司令官がトーヴィーには慈悲深い目で自分を見下ろしているように見えたが、モントゴメリーには威厳に満ちた、将来を有望するような目で自分を見おろしているように見えた。道はやがて十字路に行き着き、右に曲がると壮麗な国防省庁舎が眼前に溢れ返った。

「……ジョン・クロニン・トーヴィー大将」

そう告げたのは、イギリス首相アンソニー・イーデンだった。「ついにソ連は我々EU諸国に宣戦布告を叩き付けた。貴官の意見を聞きたい」

「はッ。私の見解ですが、このまま何もせず動かないというのは得策とはいえないでしょう」トーヴィーは言った。「フィンランドという同盟国が不当な攻撃を受けたのです。これはEU憲章にも明記されている『外の敵』からの攻撃です」

「では、即時に艦隊を派遣すべきと？」

トーヴィーは首を振った。「いえ、首相閣下。これは海軍に限る問題ではありませんが、戦争拡大や今後の補給体制の確立を考えても、形振り構わない行動は慎むべきです。ここはあえてドイツに先鋒を任せ、我々は中堅としての最大の努力を成し得ましょうぞ」

「ならば可能な範囲で艦隊を送ることでしょう」イーデンは言った。「しかるに、海軍からどれほどの戦力を割けるかね？」

「まず、東洋艦隊に派遣した『リヴェンジ級戦艦』を2隻と、巡洋戦艦『レナウン』は引き戻すべきだと思います。それに派遣が決定していた空母『イラストリアス』はとりあえず、本国に残留させます。地中海艦隊からは空母2隻と戦艦の一部を引き上げさせ、本国艦隊に加えましょう」トーヴィーは言った。「問題は『フッド』です。現在、41cm砲への換装と装甲強化がなされていますが、戦線復帰にはまだまだ時間を要します。ですから、フッドは今戦争

には除外すべきかと」

「潜水艦部隊はどうする？」

「ドイツ海軍のUボートと連携を固め、ソ連軍艦への攻撃を開始させます。通商破壊作戦が今回、功を奏するかどうかは正直わかりませんが……」トーヴィーは言った。「何しろ、奴らは陸続きで膨大な物資を送り込んできます。フィンランド湾が機雷封鎖されたとなると、バルト艦隊との直接対決はずっと後になるでしょうね」

「それだよ、トーヴィー大将。私が危惧しているのは」イーデンは言った。「旧式艦ばかりとはいえ、奴らも海軍には違わんだ。勝算は如何ほどかね？」

「ロイヤル・ネイヴィーはいつも世界最強であります！首相閣下」トーヴィーは声を張り上げて言った。「戦艦が砲を並べ、航空機が制空権さえ確保すれば、万事全てが上手くいきましよう」

イーデンは頷き、窓からロンドンの朝陽を仰ぎ見た。

1942年11月30日

ドイツ/ベルリン

所変わってベルリン、フォス街の總統官邸。朝を心地良く目覚めるに至ったドイツ總統アドルフ・ヒトラーは總統執務室で横一列に並んでいる3人の男達の前に立ち、窓のカーテンを豪快に開け放った。ヴァルター・フォン・ブラウヒッチュ陸軍上級大将、エーリヒ・レーダー海軍元帥、ヘルマン・ゲーリング空軍元帥の陸海空三長官は微動だにしなかったが、目は絶えず動いていた。

「諸君、遂に私はドイツの黎明を示したぞ！」

ヒトラーの言葉に、3人は目を白黒させた。

「総統閣下、それは一体……」ブラウヒッチュは言った。

「それはつまり 我が国はEU加盟国のどの国よりも早く、ソ

連に宣戦布告したということだ」ヒトラーは言った。「宣戦布告の通告は現在時刻の午前6時00分、リッベントロップの使節団がスターリンに送り付けた。眠りを乱されて、あの男はさぞ怒っていることだろう。ソ連の外交官に肅清の嵐が吹くかもな」

3人は顔を見合わせた。

「一体何故？」レーダーは言った。「EUでは、オブザーバー国に対しては『軍事支援』という名目での介入のみが原則とされ、敵対国への直接の宣戦布告はしなくていいと明記されています。我が軍は新兵器開発とその導入態勢の構築の為、三軍ともにまだ戦力が整っていません。ソ連との全面戦争は時期尚早です」

「レーダー元帥、君は大げさだよ。問題無い」ヒトラーは言った。「野蛮な北方民族が西ヨーロッパという聖域に踏み込んだのを、ただみすみす傍観する気かね？それがEUかね？『集団的防衛』という理念に沿わないではないか」

「いえ閣下、私が申し上げたいのは」

「レーダー元帥、總統の命令は絶対だよ」そう言ったのはゲーリングだ。「相手は力押しが自慢のソ連赤軍だ。あんな奴ら、華麗且つ大胆な我がドイツ軍の足元にも及ばぬ虫けらだよ。フィンランド戦線での制空権を私が取り、バルト海と北海の制海権を君が取れば、もはや隔たる障害は消え失せよう。ブラウヒツチュ君がしかるべき制裁を地上の野蛮人共に思い知らせてくれる」

ブラウヒツチュは嫌々ながら頷いた。

「しかるのち……」ヒトラーは言った。「しかるのちフィンランドで一定の決着が着いたら、我々は更に東へとその進路を進める。ソ連領内だ。そしてスターリンと取り巻き共の居るモスクワまで赴き、今回の償いをさせてやろう」更にヒトラーは続けた。「そして建国するのだ。『東方ゲルマン帝国』を！」

「ハイル・ヒトラー！」ゲーリングは叫んだ。

「ハイル・ヒトラー！」ブラウヒツチュも続けて叫んだ。

「……ハイル・ヒトラー！」渋々、レーダーも叫んだ。

ヒトラーは満足したように頷いた。「ブラウヒツチュ上級大将、守備はどうだ？」

ブラウヒツチュは頷いた。「上々です。ロンメル中将の第1緊急即応集団を乗せた船団はドイツを発ち、明日にもフィンランド入りをはたします」

「ゲーリング元帥、空軍はどうか？」

「ロンメル中将の第1緊急即応集団傘下にあります第2降下猟兵師団が、当時国フィンランドを除けばEUでもっとも早くフィンランド入りを成し遂げた戦力となります。次に続々と降下猟兵師団がフィンランドの各都市へと降下をはたし、フィンランド軍とともに防衛体制の構築に移りました」ゲーリングは言った。「更に、ロバニエミ以下フィンランド空軍の各飛行場に爆撃機、攻撃機を配置。メッサーシュミット、及びフォッケウルフの戦闘機パイロット達は、ソ連空軍との対決を心待ちにしています」

ドイツ軍のフィンランドにおける基本戦略はまず、ロンメル第1緊急即応集団と空軍の降下猟兵師団を中心とした先鋒を各都市、並びにマンネルヘイム線上に集中配備して防衛体制を構築。続いて『ヒトラーの火消し屋』の異名を持つ防衛戦の天才、ヴァルター・モデル大将の第3集団が中堅としてフィンランドの防衛体制を盤石化、そして予備兵力を逐次投入し、防衛しつつもソ連への侵攻を目指す。というものだった。ヒトラーはそうして、フィンランドを橋頭堡にソ連へと侵攻しようと画策していたのである。

「リーダー元帥、海軍はどうだね？」

「UボートというUボートをバルト海、及び北海に投入し、狩りを開始しました」リーダーは言った。「『ビスマルク』、及び『テイルピッツ』を主軸とする派遣艦隊を編成し、我が海軍初の空母『グラーフ・ツェッペリン』も投入しました」

ヒトラーは頷いた。「ついにドイツは空母を持ったか」

「ええ、しかしながら『Z計画』はまだ未完遂であります」レ

ダーは言った。「私が危惧しますのも、それが要因にあります。我が海軍は主力艦を殆ど保有していません。ソ連の貧弱な海軍ならともかく、今回の一件でアメリカなどが介入するとなれば大問題ですから」

ヒトラーはかぶりを振った。「それは杞憂というものだよ、元帥。アメリカとソ連というのは、水と油だ。決して交わらんものなのだ」
「ですが、油に水を注げば、油に着いた炎はより燃え盛るものです」

「なら、空気を抜いてやるまでだ」ヒトラーは言った。

1942年11月30日

アメリカ合衆国／ワシントンD・C・

時にイギリス人によって焼き払われ、時に白ペンキを塗ってその焼き跡を誤魔化したという歴史を持つ大統領官邸『ホワイトハウス』は、再び新たな歴史をその身に刻もうとしていた。第32代合衆国大統領のフランクリン・D・ルーズベルトの提案により、『イーストウィング』を増設することになったのだ。防空壕を備えたそれは、不況に喘ぐ人々に雇用を与えるという意図もあつて計画された。

EUに経済上の締め出しを食らったアメリカ合衆国の上向き傾向にあつた経済は、急降下していた。海外向けの輸出が滞ってしまつたことと、『チェンバレン・チャーチルショック』がいまも尾を引いていたからだ。各地で暴動やデモが勃発、数千万単位の間人が動かないということによって産業活動は停滞し、消費は委縮した。すると“不思議”なことに収入は減少して支出が増大した。

この“不思議”な状況を脱する方法を、ルーズベルトは心得ていた。戦争である。

「ミスター・プレジデント、本当にソ連に軍事支援を？」

陸軍長官ヘンリー・L・ステイムソンは眉を顰めて訊いた。

「ステイムソン君、フィンランドは本当に砲撃したのだよ。ソ連側にね。その事実において、どちらが正義か悪かははっきりするじゃないか」

「その言葉は本気ですか!？」ステイムソンは悲鳴に似た声を上げた。「あんな茶番劇を本当に信じるんですか。貴方はスターリンみたいな大根役者がお好きなのですか。フィンランドの悲劇の主人公の方が、よっぽと上手い演技ですよ。まるで“本物”みたいにね!」

「さて、君に批評の才能があつたとは驚きだ」ルーズベルトは言った。「そこで劇を見た君は左隣に座っている男の姿を見なかったかね? 彼の名は“アメリカ”だ。ついでにいうと、右隣に座っている人相の悪いちよび髭の男の名は“ドイツ”で、背後からナイフで刺された可哀想な老人の名前は“イギリス”だよ」

「全身真っ赤っ赤でも体の芯まで冷たい“ソビエト”なら、舞台裏でフアンの老人と握手を交わしていますよ。老人の名前を教えましょうか?」ステイムソンは皮肉を込めて言った。

「いや、結構だ。私が何を言いたかつたかというのだ」ルーズベルトは言った。「アメリカは今や死亡宣告同然の体なのだ。経済は立ち直らず、国際的信用を失い、孤立してしまった」

「だからといって」

ルーズベルトは頷いた。「だからといってソ連と手を組むのかと聞かれれば、私はそれに『イエス』と答えよう。ドイツの不正を正し、世界を元の秩序あるべき世界に還すのが我々の責務だ。そのためなら、いまさら手段は厭わんよ」

「しかし……」ステイムソンは言った。「しかし共産主義者に手を貸すのはやり過ぎでしょう。あまつさえ、軍需品を奴らに渡すなど言語道断です」

「『昨日の敵は今日の友』というだろ?」ルーズベルトは言った。「我々は中立を守るが、軍需品の供給をソ連に向けて行つ。どうせ

EUは公には買ってくれんだろうし、買ったとしてもその数は知れてる。建前上はソ連が悲劇の主人公な訳だから、既に敵と思ってるEUはともかく国内の人間には、それを前提として言いくるめてやるさ」

「国民は憎むでしょうね」

「憎めばいい」ルーズベルトは言った。「憎しみはやがて金に代わる。ソ連が軍需品を買い、その特需が生まれれば経済は立ち直るだろう。戦争の推移によっては参戦し、更に経済は復興するだろう。最終的にドイツの不正が暴かれれば、我々の勝ちなんだからな」

「分かりました、ミスター・プレジデント」

ルーズベルトは頷いた。「では、スティムソン君。報告を聞こうか」

1942年11月30日

中華民国／延安

中国大陆を貫くように流れる黄河の上流や中流域に広がるおよそ40万 50万平方Kmの規模を誇るその高原は、岩石の多い山地を除きどこまでも黄土色の大地が広がっている。黄土の高原には、まばらに草木が生え、緑の川が何本か広い間隔をあけてくねくねと縞模様を描いていた。

そこは俗にいう『黄土高原』であった。黄土高原はその名の通り黄土で覆われた高原で、炭酸カルシウム・リン・カリウム・ホウ素・マンガンといった農作物を生育するのに必要な栄養分を豊富に含んでいる。故に黄土は洪水などを経て堆積し、土地を肥やして農耕文化や黄河文明誕生の一因となった。一方で、膨大に生育していた森林は要塞、長城、武器といった戦争の道具に利用され、多くの国家を滅ぼしてきた。また、数多の戦争の舞台となり、多くの屍とともに

に不毛の大地を築かれていった。

不毛の土地といえば、黄土高原には水が無い。年間降水量は400mmに満たず、地下水脈はあっても深過ぎて入手するのは困難であり、黄河はあっても他の河川は貧弱なものしかない。よって、水の確保は長大な黄土高原に住む人々にとっては、死活問題なのである。

一方で『自然環境』というもう1つの死活問題も存在した。黄土高原は内陸に位置するため夏は35度を超す酷暑で、冬は零下20度を下回る酷寒という厳しい自然条件なのだ。黄土高原に住む人々はそういった問題を解決する為、『^{ヤオトン}窑洞』と呼ばれる横穴式住居を造った。井戸水の温度が一年を通じてあまり変わらないように、地下の家は夏涼しく、冬は暖かく、黄土高原の厳しい自然から人々を守っている。

そんな窑洞の恩恵を毛沢東も享受していた。『長征』と呼ばれる中国国民政府から逃れるために1934年から1936年の2年間にかけ行われた中国共産党の脱出と再編の取り組みは、結果的な大勢の死者と共産党の新たな拠点を生み出した。それが『窑洞』であった。

共産党は『長征』を英雄叙事詩的に仕上げて、「長征の過程で多くの革命根拠地を設営し、数千万の共産党シンパを獲得した。そもそもが戦略の失敗で始まった長征であったが、巨大な革命の種まき期であった。物資の調達などで略奪を厳禁したので、このことによる中国共産党に対する人民の信頼を勝ち得た」と宣伝した。実際の所、中国ソビエト共和国が潰え、活動拠点が首都瑞金から辺境の穴ぐらに代わってしまったことを考えれば、『終わりをければ全て良し』とはお世辞にもいえなかった。『信頼を勝ち得た』と自負する点についても、実際は人民裁判による地主・資本階級の処刑と資産没収、そして小作人からの『革命税』の徴収によって食いつないできたというのが実態であり、一概に『信頼を勝ち得た』とは言い難

い。

そして、そのことをもつとも意識していたのは中国共産党の毛沢東であった。毛は共産党内の深刻な食糧不足によって痩せ細り、着ていた軍服はサイズが合わなくなってきた。黒ずんだブリキのコップを手にベッドへと腰を下ろし、水を飲み干す。やがてコップの表面に付いた露が滴り落ちた。

「主席閣下！」

食糧不足にも関わらず恰幅の良い共産黨員、李国貴が慌ててやってきた。髪はボサボサで臭いがした。薄暗い静かな部屋に居た毛は不意に現実へと引き戻された気がした。

「何だ、騒々しい……」

「急報です！ソ連とフィンランドが戦争に突入しました」

李の言葉を聞いた毛は一瞬仰天したような顔をしたが、すぐにまた平然とした表情を取り戻した。疲れた老人のような顔である。

「これで我々もこの穴ぐらからさよならできますね！」

「穴ぐらも住み慣れれば悪くない。我々みたいな鼠にとつてはな毛はうんざりしたように言った。「フィンランドとソ連が戦争に突入して、お前は何でそんなに喜んでいられる？」

「しゅ……主席閣下」李は呆気に取られながら言った。「今回の一件はソ連がついにEUと全面戦争に打って出たからではありませんか。これで『日本』と『中華民国』は名実共に敵となったのです。ソ連軍が中国大陆を南下する日もそう遠くないでしょう」

「スターリンは我々を生かしても活かす保障は無い」毛は言った。「例えソ連が今回の戦争に勝利し、中国大陆を我々とともに征服したとしても、満州国のように飾りだけの傀儡政府に成り下がるのが関の山。あの男にそれ以上を期待するのは止した方がいいぞ」

李の目を、かすかな驚きがよどった。毛沢東は何もかも承知なのだ。

「とはいえ、ソ連と合流するのも手かもな」毛は呟いた。「よし、近く遠征に行くでしょう。今の時期は本当に好都合だ。あの“王明

”はモスクワに出張中だからな。奴の居ない内に事を進められるのは、実に好都合だ”

この時、中国共産党員の王明 一時期、中国共産党の最高指導権を掌握した男 はある理由からモスクワへ行ったということになっているが、実際に彼が向かったのは日本であった。これは日本で匿われているボルシェビキ レフ・トロツキーと会うためであった。トロツキーはそれまでドイツに居たが、SSやゲシュタポの捜査網が迫っているのをアプヴェーアが察知し、駐独武官にして『大和会』の一員、品川海軍大尉の手引きによって日本入りしたのである。コミンテルンの力では毛には勝てないと考えた王明は、『第4インターナショナル』の代表であるトロツキーと日本からの協力を得て中国共産党内の主導権を奪回し、中国国民党と国共合作を結んでソ連を撃退、それによって中国共産党を復興し、指導者の地位を確固たるものにしようと画策していた。

「では、始めるとしようか」

毛は立ち上がり、蟹股で部屋を後にした。

1942年11月30日

ソビエト社会主義共和国連邦／モスクワ

旧ロシア帝国の遺産、ロシア語で『城塞』を意味する“クレムリン”は現在、共産主義の根城として機能していた。南をモスクワ川、北東を『赤の広場』、北西をアレクサンドロフスキー公園によって囲まれたほぼ三角形の形をしている。城塞に囲まれた構内には、大小新旧の宮殿、^{バラダー}聖堂、そして20の塔が立ち並んでいる。^{パシニャ}その一角である『カザコフ館』 かつての元老院 にはソ連最高権力者がその執務室を置いていた。

ソ連の最高権力者、ソ連共産党中央委員会書記長のヨシフ・スタ

スターリンは、まるで短剣のように細くて鋭い眼光を取り巻き達に振りかざした後、巨大な円卓に広げられた世界地図を見た。そこに広がるのはソ連が中心の世界であり、アメリカやイギリスが辺境に追いやられた世界であった。スターリンはゴブリンのような醜い鼻をフンと鳴らして、腕を組んだ。

「ドイツの腐れヒトラーめ。宣戦布告するも奇立つが、あまつさえ儼の眠りを妨げおつて！」スターリンは唸った。「フィンランドはEUへの見せしめにしてやろうと考えていたが、こうなると大幅な修正が必要なようだな」

スターリンはご立腹だった。午前6時に行われた宣戦布告により、スターリンの側近達はそのことをスターリンに伝えなければならず、就寝していたスターリンは無理矢理起こされたのである。その起こされたことと、ドイツが宣戦布告を成してしまったことに激怒したスターリンは、眠りを妨げた共産党員の1人にその怒りをぶちまけた。結果として、そのスターリンを起こした共産党員は少なくともクレムリンから姿を消した。

「ヴォロシーロフ、どうだ。対抗し得る戦力はあるか！」

「はい、同志スターリン」ソ連国防人民委員（国防大臣）にして、ソ連邦元帥のクリメント・ヴォロシーロフはきびきびと答えた。「EUによる軍事支援を予想し、予備戦力を十分に用意しております。万が一、戦況が悪化しても農民などからの徴兵で、十分に補填して戦争を遂行出来ましょう」

但し、ソ連陸軍に『電撃戦』という概念が無く、史実よりも烏合の衆に近いものであった。そんなものが何十、何百万いたとしても、フィンランドという大規模戦に向かない地理的条件を含んだ今回の戦争は、ソ連にとっては過酷な戦争であった。

「問題はドイツの重戦車だ。確か……『ティーガー』とかいうスターリンは言った。「勿論、勝てるんだろうな？」

「はい、同志スターリン」ヴォロシーロフは言った。「現在、陸軍では『T-34』新型中戦車の製造と、対ティーガーの重戦車の

開発を進めております。ティーガーは88mm戦車砲を搭載する怪物ですが、製造はまだまだ先でしょう。我が軍がそれまでに対抗重戦車の製造まで漕ぎ着ければ、この戦争は我々の手の内です」

スターリンは口髭を擦った。「よし、しくじるなよ」

「同志スターリン、質問があります」

ヴオロシーロフは言った。「アメリカが我が国に支援を行うというのは本当なのでしょうか。今後の戦略のためにも、真偽の程をはっきりしたいのです」

スターリンは頷いた。「事実だ。アメリカはささやかな“プレゼント”を送ってきた」スターリンは言った。「M3軽戦車やM3中戦車、P-40『ウォーホーク』にP-38『ライトニング』だ。アメリカも洒落たプレゼントを送ってきてくれたもんだ」

「奴ら、何を考えているのでしょうか？」

スターリンはヴオロシーロフに笑みを浮かべた。「我がソビエトとアメリカの溝は深いが、その幅が広いとは限らない。その幅にしても、手を伸ばせば、かろうじて手と手を触れ合せるだけの余裕はあるうよ」

1942年11月30日

イタリア／ローマ

首相官邸であるキジ宮殿でのベニート・ムッソリーニの気に入っている点は、『マルクス・アウレリウスの記念柱』がたえず目に出たことである。『トラヤヌスの記念柱』に倣ったもので、五賢帝の1人、皇帝マルクス・アウレリウス・アントニウスの栄誉を讃えたものである。円柱はカラーラ産大理石のブロックから構成され、内側には螺旋階段が掘られている。また、外側には螺旋状のレリー

フが刻まれ、マルコマン二戦争の物語が描かれていた。

「閣下、ドイツがソ連に宣戦布告しました」

イタリア陸軍参謀総長、ピエトロ・バドリオ大將は言った。「ドイツは軍の派遣を決定し、第1緊急即応集団と降下猟兵師団による緊急展開を開始。また、イギリス陸海空軍には厳戒態勢が敷かれ、既に先発の海兵隊召集が始まっています」バドリオは言った。

「で、君は何か違和感を覚えているんじゃないのか？」

「ええ」バドリオは言った。「何故、ドイツは宣戦布告を……」

「愚か……というべきかね？」

バドリオは頷いた。「あえていうなら」

「むしろこうなるのが遅すぎたと予は思う」ムツソリーニは言った。「どれだけ時間的・戦力的余裕が無くても、ドイツは“1942年”までに戦争をしなければならぬからだ」

「戦争を……ですか？」

「ああ。これはヒトラーの私利私欲という訳じゃないぞ」ムツソリーニは強調した。「ドイツは戦争を起こして、敗戦国から資産を獲得しなければ経済が崩壊してしまうんだよ、来年までにな。何故なら、ヒトラーはドイツを復興するために膨大な負債をしたからだ」

ヒトラーはケインズ政策 国家が公共事業を始めとする投資をして、有効需要を生み出す を実行した1人であった。このケインズ政策には、通貨発行量の増大するので通貨紙幣の下落、いわゆるインフレが発生するものだが、ドイツ国立銀行総裁と経済相を兼任していたヒヤルマー・シャハトはインフレを抑えて好況を実現し、溢れ返っていた失業者を激減させたために『マルクの魔術師』と呼ばれた。

しかし、このマルクの魔術師の扱うものは大きな代償を負うものであった。『アウトバーン』や再軍備といった事業には巨額の資金が必要だったが、この財政は適正な財政規模を遥かに上回る巨額の赤字国債で賄った。しかしこれでも賄いきれなくなると、『メフォ手形』を導入した。

メフォとは『金融調査会社』のことで、いわばダミー会社である。兵器購入をする時、このメフォ社を通してしか購入出来ない仕組みにし、代金は全て『手形』で支払った。但し、これは国立銀行によって完全に保証する。

手形の償還期間は3ヶ月だったが、期限がくると自動的に3ヶ月延長され、5年まで延長を繰り返すことが出来た。これは確かに一種の国債による方式での通貨増発を伴わないので、インフレは起こさないが、いわば『偽装国債』であった。その為、一般には会社の性質は機密とされた。

1934年から1937年に渡り、ヒトラーはその性質をいいことにメフォ手形は増刷され、総額は204億マルクにも上った。しかし既に1930年半ばからは、欧米のあらゆる所で流通して、償還するにも償還できない程、莫大に発行されていた。その為、その莫大な手形を現金に換えるには、ドイツをハイパーインフレに再突入させるほどの通貨を刷らなければならなかったのである。

ただ唯一、ハイパーインフレ以外にメフォ手形の負債を償還する方法があった。『戦争』である。戦争によって敗戦国から資産を奪取し、負債を償還出来る。実際、史実でもヒトラーはこの問題を解決すべく、東ヨーロッパへの占領政策を推し進めた。

「ヒトラーに残された最後の選択は戦争だ」ムッソリーニは言った。「ドイツが日本や我が国に『パンター戦車』といった兵器のライセンス生産権を売った理由には、危機的な経済を救う『外貨』取得もあるだろう。いや、むしろその一点に絞られているのかもしれない」

「では、ドイツは全面戦争を？」

ムッソリーニは頷いた。「このフィンランドの一戦線で終わらせる気はないだろう。ポーランドがソ連との全面戦争を恐れて宣戦布告をしていない以上、ドイツはポーランドや他の中立地域からソ連に侵攻出来ない」ムッソリーニは言った。「と、なるとドイツに残された道はフィンランドだけだ。フィンランドを橋頭堡に、ヒトラ

「は最後の一兵が死ぬまで戦い続けるだろう」

「我が国はどうします？」バドリオは言った。「私としては、積極的な介入は反対です」

ムッソリーニは頷いた。「予も同意見だ。我が国には時間的余裕も、財政的余裕もあるが、軍事的余裕はない。その軍事的余裕の欠如は多岐に渡り、技術的不足・人力的不足、経験的不足が挙げられる。せいぜい、漁夫の利を狙うとしよう……」

ムッソリーニは立ち上がり、窓の外を仰ぎ見た。

「 Alea . jacta . est（賽は投げられた）」

第57話 賽は投げられた（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第58話 雪原の狐

第58話『雪原の狐』

1942年11月30日

フィンランド／東スオミ州

車はぐつとスピードを落としていて、窓が開けてあった。その窓枠の中に、灰色の髪を短く刈り込んで目鼻立ちが整った若年の男の顔が浮かんでいる。彼は洋服屋に仕立てて貰ったオーダーメイドの革コートを身に纏い、その下にヴァイマル共和国軍の将校用野戦服を着用していた。その隣には、オーバーコートとドイツ国防軍のM36野戦服に似た形の軍服を着用した将校クラスと思われる人物が鎮座していた。彼は物珍しそうに、また凍えるな表情を浮かべ、右隣に座る革コートの男の顔を覗き込んだ。襟元には、ドイツ国防軍の徽章が付けられている。

「ここはどういう所なんですか？」将校、もといフリッツ・バイエルライン中佐は革コートの男に訊いた。「気温は零度を軽く下回り、吹雪は止む事を知らず、一面は銀白に染まっている……。このような環境は全く初めてです」

「そうか、君も初めてか」

革コートの男は言った。「やはり紙の上に並べられた言葉だけでは、この状況は想像し難かったのだろう。私も全くその通りだよ」車はとある師範学校の前で停まった。

「さつさと出てさつさと入るんだ」革コートの男は学校の正面入り口を指して急ぎ言った。「天候が悪い。これではゲーリングの支援は受けられんな！」革コートの男は苛立ちながら言い、車のドアをぴしゃっと閉めた。そして十数mの白い道を駆け走った。

学校の中に入ると、淡い白熱電球の光が微かに瞬いていた。まるで光の聖霊が宙を舞い、2人の来訪者を幻惑しているかのようだった。一方、床は大量の紙と、色どり豊かなコードと、山積みの学習机に包まれていた。

「ここで何があつたんだ？」バイエルラインは不安を滲ませた声で言った。彼が常に見ている“最高司令部”の姿は埃ひとつ、黴菌ひとつに至るまでないような清潔で実用性に満ち溢れた場所である。しかし、『ミツケリ』という小さな町に佇むこのフィンランド軍最高司令部は、そんなイメージからは完全になかけ離れていた。戦力が不足し、一兵卒に至るまで最前線に駆り出されている今のフィンランド軍の現状から司令部には衛兵の姿が見えず、故に師範学校時代の散らかったゴミを片す人手も足りない。そんな結果から誕生した空間を見つめるバイエルラインの顔には表情が無く、何も言いたくないとでもいうように口はきつく結ばれていた。

しかし、革コートの男は気にせず進んだ。床には絶望的な点数が書かれた答案用紙の他、つま先に大きな穴の開いたぼろぼろの白い靴下が一足と、踏み潰されて粉々になったチョークと、薄汚れた歯ブラシ等が落ちている。恐らくソ連軍の侵略と、フィンランド軍からの接收命令を受けて疎開を急いだ生徒達の置き土産なのだろう。その恐怖の色が垣間見えた。

「ソ連軍には無能な指揮官が多い。故にそこへ付け込むのが最高の戦術だ」

フィンランド軍最高司令官、カール・G・マンネルヘイム陸軍元帥は幕僚達に言った。しかし、彼は思わず胸の中で悪態を吐く。自分やフィンランド人ではなく、ロシア人の失敗が頼みの綱だというのは、職業柄にしても私的感情にしても悲し過ぎる事実だからだ。

彼はEUからの十分な支援がくるまでフィンランド軍が持つかどうか確かめようと、円卓の上に広げられた巨大な地図に目を通した。

そこから、マンネルヘイムはフィンランドの生命線が『カレリア地峡』にあることを再認識出来た。

カレリア地峡は天然の要塞である。ソビエトとフィンランドの領土を貫くラドガ湖とフィンランド湾によって両側面からの敵の侵入を許さず、左右翼から回り込んでの包囲殲滅作戦も成り立たないもので、ソ連軍は正面から侵攻せねばならない。しかしインフラ設備は最悪で、鬱蒼と生い茂る森林には対人・対戦車地雷やブービートラップ、更には方向を見失うという思わぬ障害が立ちはだかる。故にソ連軍は20万人以上の兵士と1400輜を超える装甲車両を通過させるのに、未舗装で雪の堆積した道路を使用しなければならなかったのである。

一方、フィンランド軍は地の理を得ていた。元々戦車を殆ど保有していないので劣悪な道路で装甲部隊を運用するという問題自体が存在しない。また、ソ連軍にとっては忌々しい森林も、フィンランド軍にとっては裏庭のようなものであり、防衛の要でもあった。フィンランド軍は森林各所に地下壕や偽装トーチカを設置し、敵の通過を見越して奇襲攻撃を掛けるなり、後方の砲兵や空軍機や装甲列車にその位置を報告して間接攻撃を仕掛ける等の手段を講じていた。更にフィンランド軍はスキー部隊やマンネルヘイム線を有している。

しかしその一方で、フィンランド軍は少数の兵力をもつて50万を超えるソ連軍と正面を切って戦わねばならない　という事実にも対峙していた。フィンランド軍は圧倒的に戦力が不足しており、主戦線となったカレリア地峡には3個師団、約6万5000名のフィンランド守備戦力が集結していたが、一方のソ連第7軍は7個歩兵師団、及び5個戦車師団、更に予備の6個歩兵師団を含めた計20万名以上の大軍勢である。同軍だけで装甲車両1400輜、重砲及び迫撃砲1000門超を保有している。これはフィンランド軍の総兵力29万6000名に肉薄する程の数であり、戦車や砲に至っては百倍程は数の差がある。

「アイロ、やはり部隊を後退させて正解だったな」

マンネルヘイムは親しい友人であり腹心でもあるアクセル・アイロ少将に言った。フィンランド軍の補給・戦略の最高責任者たるアイロは数々の作戦を立案し、それをマンネルヘイムが実行することによりフィンランド軍は常識では考えられない程の戦果を挙げた。

「EU、特にドイツ軍からの情報は正確です。20万をくだらないソ連カレリア方面軍に真つ向から戦力をぶつけるよりは、地峡深部に侵攻させて消耗した所を叩くのがこの場合は正解といえる戦略ですよ」と、アイロは言った。

史実でもそうだが、兵力に劣るフィンランド軍はカレリア地峡を攻略するソ連第7軍と国境付近で交戦することを良しとせず、マンネルヘイム線まで後退させた。同時に、ソ連軍の進撃を少しでも遅らせるべく、フィンランド軍はありとあらゆる破壊工作を行って遅滞戦術を展開した。利用可能な道路や橋を破壊し、避難が完了した村落もソ連軍が暖を取れないように焼き払い、井戸も埋め立てて撤退した。また、フィンランド軍はこのような焦土作戦と並行して、ブービートラップを用いていた。体重計や腕時計に爆弾を仕込み、ソ連軍兵士を葬ったのである。特に腕時計による被害者は後を絶たなかった。

アイロが練る戦略は、こうした焦土作戦・ブービートラップ・ゲリラ戦術といったありとあらゆる破壊工作を用いてソ連軍の進撃を停滞させ、フィンランドの酷寒と食糧不足と過酷な行軍によって疲弊したソ連軍に前進・後退を繰り返して攻撃を断続的に浴びせ掛けるという残酷且つ合理的な遅滞戦術で戦争緒戦をしのぎ、EUの本格介入を待つ　というものであった。

「しかし、それはソ連側も織り込み済みでしょう」アイロは言った。「ソ連軍はラドガ湖北から第8軍を進撃させ、後方から我が軍の本体に迫り、その退路を断つ筈です。もしそれが成功すれば、ソ連軍は史上最大規模の包囲殲滅作戦を展開させ、我が6万5000

余名の兵を葬ったとして、後世の歴史に書き連ねられることでしょうね」

実際、アイロの予想は正しかった。ラドガ湖の北ラドガレリア地区には、6個歩兵師団と1個戦車師団からなる第8軍が配置されていた。同軍はラドガ湖の北を回ってカレリア地峡の背後を突き、主力の第7軍を助け、一部はそのままフィンランド中央部に侵攻する予定だった。

また、さらに北、クフモからサツラにかけては中部攻略を担うソ連第9軍が布陣していた。この地域はインフラ設備が万全ではなく、『ノモンハン』の教訓によって得た機甲戦力集中式の兵力配置は難しかった。その為、第9軍は分進合撃してフィンランド中央部を一気に分断、ボスニア湾まで到達して、スウェーデン経由のEU支援ルートを遮断する。その後、南下してフィンランド南部を後方から制圧する。というのが、第9軍に課せられた命令だった。

そしてその第9軍のさらに北、フィンランド北部には第14軍が配置されていた。3個師団、約5万名からなる軍で、各方面軍の中ではもつとも弱小の軍であった。しかしながら、当初から第14軍が攻略するフィンランド北部には全くといっていい程、抵抗戦力が残されていなかった。フィンランドの北極海の出口、ペツァモ市には装備も貧弱な歩兵300名余りからなる2個中隊しか配置されていなかった程だ。第14軍はペツァモ地区を押さえ、北極海の出口を確保して内陸部に侵攻するのが主な戦略だった。

これら3つの方面軍が命令通りに事を運べれば、まずフィンランドは1週間足らずで墮ちる筈だった。史実では『ノモンハン事件』の戦績や、ポーランド侵攻時のドイツの電撃作戦の模倣からソ連のみならず世界がそうなるだろうと予測していた。

しかし、マンネルヘイムと不屈のフィンランド兵はその運命を否定した。祖国を踏み躪ったこと、ソ連の捕虜の扱いのこと、そして粛清のことから『敗北＝死』に繋がると思ったフィンランド兵は、むしろ祖国の地で勇敢に戦い、ソ連軍に出血を負わせて死ぬことを

望んだ。マンネルヘイムと軍上層部は徹底的なゲリラ戦によって戦い抜くことを決意し、緒戦での無用な戦闘を控えて戦力を温存した。そして小国は1週間、1ヶ月とその命を繋ぎ、やがて海外もその不屈の意志を実行するようになった。そうして、フィンランドは奇跡的な講和を成し遂げたのである。

しかし今物語では、『冬戦争』は全く違う始まりと終わりを迎える。

「マンネルヘイム元帥閣下ですね？」

だしぬけにその聞き覚えの無い声は最高司令部の作戦室に響いた。マンネルヘイムが見てみると、部屋の出入口の前に、革コートの男とその付き添いと思われる2人の軍人が立っていた。革コートの男だけが部屋に入り、2人は廊下に残った。

「EU第1緊急応応集団司令官、エルヴィン・ロンメル中将であります」革コートの男は口を開いた。「本日付でフィンランド軍の指揮下に編入され、本日出頭致しました」

マンネルヘイムは彼に訊いた。「もう到着したのか。速いな」

ロンメルはゆっくりと首を振って、彼に全てを伝えた。「残念ながら、私が現時点で直接指揮しているのはそのバイエルライン中佐とレーマー少尉、そして運転手のランツ軍曹の3名だけです。残りはバルト海の船上であります。私は一早く、飛行機で到着したに過ぎません」

「それは残念だ。残念だよ」彼は長いため息を吐いた。「我が軍には対戦車戦力が欠けている。それを補う為にも、早急に戦車や対戦車砲を得たいのだよ。そうでなければ」

「あつという間にフィンランド軍は崩壊 ですか？」

「あつという間？」マンネルヘイムは狼狽えたように顔を顰めた。

「ええ、本当にあつという間」ロンメルは言った。「報告ですとEUの支援した戦車を併せても全軍の戦車保有台数は100輜に満

たないと聞きます。それに対戦車砲は博物館並の骨董品とか。このままでは、ソ連軍に屠られて終わりですよ」

マンネルヘイムは悲しげにぎゅっと唇を結んだ。

「いえ、その点に関しては対応策を出しています」アイロは言った。「『スペイン内戦』の折に使われた火炎瓶です。国内に生産プラントを数箇所確保しており、既にその増産を進めています」

火炎瓶 後に『モトロフ・カクテル』の名で知られるこの対戦車兵器は、スペイン内戦やノモンハン事件時にも活躍した。ガソリンエンジンの使用が大半を占めていたソ連軍戦車や装甲車のエンジン部にこれを投げつけることで、フィンランド軍はソ連機甲部隊を翻弄し、甚大な損失を与えた。

「では、それで急場をしのぐとして、第1緊急即応集団の？号？号戦車や37mm対戦車砲の配備を急がせましょう」ロンメルは言った。「問題はラドガカレリア地区とフィンランド中部の防備です。フィンランドの守りが薄く、突破されるのが目に見えています」

「君の意見は？」マンネルヘイムは訊いた。

「第1緊急即応集団と、南北フィンランド軍の戦力を集めて第9軍を葬るべきかと。第9軍はその交通路事情から中部戦線に薄く広く配置されています。師団、連隊規模での各個撃破を進めていけば、第9軍は弱体化して崩壊します」ロンメルは言った。「ラドガカレリア地区への対処は第1緊急即応集団と第2降下猟兵師団以下空軍の空挺戦力で何とかします。空軍の空挺兵は精鋭揃いで、非常に優秀な対戦車兵器を優先的に保有しています。それにフィンランド軍のゲリラ戦術を併用すれば、カレリア地峡に対するソ連軍の攻勢は押さえられます」

「各個撃破か……」マンネルヘイムは唸った。確かに第9軍は排除すれば、ソ連軍のEUとの支援ルートを遮断する という戦略は瓦解する。上手く持久戦に持ち込めるだろう。それにさらなる増援が加われば、今度はこちら側が攻勢に移り、第8軍も撃破できるかもしれない。

「但し問題もあります」ロンメルは言った。「増援と兵力配置の間、敵の侵攻を停滞させる必要があります。戦車の到着と揚陸作業にも時間を要しますし、空挺師団は空軍管轄ですので、私の一存で指揮は出来ません」

「何か策はあるのだろうか？」マンネルヘイムは笑みを浮かべた。

「戦車の戦線到着は1週間後です。それまでは、乗用車を改造した偽装戦車や偽装迫撃砲を配置しておいて、ソ連軍の進撃を牽制します。また、スピーカーを用いてキャタピラの駆動音やエンジン音、さらには歩兵の行軍の足音を流すなどして、聴覚の面でも欺きます」ロンメルと言う偽装戦車とは、軽自動車等に木製の板や棒を取り付けたものである。史実、ロンメルはアフリカ戦線でこれを使用し、イギリス軍に戦車の大群が来たと思わせて退却させた実績を持つ。その時には付随のトラックが砂塵をばら撒いて砂煙を上げ、偽装戦車とばれないようにしていた。今回はその役割を雪が担う。

「そして88mm高射砲を周辺に配しておけば、その圧倒的な破壊力が戦車によるものと勘違いする筈です」ロンメルは言った。

88mm高射砲の対戦車使用は、既にドイツ陸軍の中で戦術研究の一環として進められていた。それは実験の域を出てはいなかったが、ロンメルは88mm高射砲であればありとあらゆる戦車を撃破できると確信していた。

「視覚、聴覚による欺瞞工作」マンネルヘイムは言った。「それはいいかもしれない。だが、空軍の問題にはどうやって対処する？」

「それは総統閣下に上申し、総統閣下からゲーリング元帥へ、ゲーリング元帥から現地指揮官へという形で解決していくしかないでしょう。時間を要すとは思いますが、既に総統閣下はその案を快諾してくれましたので」

「元帥閣下！」アイロが2人の間に割って入り、蒼褪めた表情を向けた。「緊急事態です元帥閣下！」

「どうした」マンネルヘイムは言った。

「先程、ドイツ空軍からの緊急報告を受けました」アイロは言っ

た。「ソ連空軍による空襲です。ヘルシンキ以下各都市に爆撃機が向かっています！」

ロシメルとマンネルヘイムは互いに顔を見合わせた。

第58話 雪原の狐（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第59話 あの侵略者を撃て

第59話『あの侵略者を撃て』

1942年11月30日

フィンランド／カレリア地峡

11月30日1500時、ソ連軍はフィンランド－ソビエト間国境線に4個軍、計50万名以上の兵士を布陣して、攻勢の準備を整えた。『冬戦争』の始まりである。2000門を超える野戦砲が火を噴き、アーチのように弧を描いて、フィンランドの大地に出血を強いる。それと同時に、ソ連軍装甲偵察車両と航空機による威圧偵察が開始された。それから1時間も経たない内に、歩兵は前進を始めた。

その日ソ連陸軍は、南はカレリア地峡から北は北極圏まで1200キロの国境地帯の内、27箇所を突破してフィンランド領内に侵攻を開始していた。その兵力は歩兵50万 60万、戦車2600輜、航空機3000機を数えた。フィンランド湾、及びバルト海を機雷で封鎖したソ連海軍はバルト艦隊の主力艦をもってフィンランド近海に布陣し、コイヴィストを始めとする湾岸都市に容赦無い艦砲射撃を敢行した。

一方、フィンランド軍の総戦力はお粗末なものだった。歩兵29万6000名、戦車150輜、航空機300機、艦艇13隻。EU

特にドイツ の支援を受け、戦車や航空機は史実よりも増えたが、歩兵や艦艇の兵力差は以前として変わってはいない。そもそもフィンランド軍はこの全戦力が非常に質の悪いもので、常備軍兵力20万名に戦時緊急徴兵を掛け、9万6000名を用意したに過ぎない。それにしても、軍服の支給も無く、家族や自宅を守る為

仕方なく軍に入ったというのが実情だった。つまるところが“民兵”である。それに戦車にしても、ドイツから供与された『?号戦車』や、イギリスから供与された『ヴィッカーズ6t戦車』だった。ソ連の『BT』や『T-26』軽戦車程度なら互角、『KV-1』重戦車や新型の『T-34』中戦車なら勝ち目は無いだろう。そもそも、マンネルヘイム元帥は今回の冬戦争で、新規の戦車兵育成には多大な資金と時間が必要であり、この何時戦争になってもおかしくない情勢下では、フィンランド軍初の機甲師団が誕生するまでに戦争が開始されてしまうだろうと考えていた為、その大多数がマンネルヘイム線上の固定砲台として機能していた。

しかし、空軍戦力は随分と代わり映えしたと、フィンランド空軍のエイノ・A・ルーカッネン中尉は胸の内に呟いた。1940年以来、このバルケアラのウツティ空軍基地には、多数のMe109が投入されており、なかには新型機のFw190の姿もあった。これらドイツ空軍の先進的戦闘機を所有する第2航空団は、史実で伝説的な戦果を挙げた第24戦闘機戦隊と第26戦闘機戦隊を抱えた、フィンランド空軍の核ともいべき部隊だった。

第24戦闘機戦隊は本来、オランダ製の『フォッカーD21』装備の戦隊であり、第26戦闘機戦隊はイギリス製の『ブリストルブルドッグ』装備の戦隊であった。D21は元がオランダ領東インドの為に作られた機体で、ヨーロッパ戦線では平凡機の部類に入る。一方のブリストルブルドッグはイギリスのブリストル社が製作した複葉戦闘機である。1927年に開発された旧式機で、新型機の『ホーカーハリケーン』と交代する1937年までは、イギリス空軍の第1線機であった。最高速度300kmと、ソ連空軍の主力機である『I-16』とは300km近い速力差があるのだが、それでもフィンランド空軍の第26戦闘機戦隊は多大な戦果を挙げていた。このように、史実のフィンランド空軍の航空戦力はお世辞にも優れているとはいえないものだった。しかしフィンランドの勇猛なパイロット達はこのようなハンデにめげることもなく、冬戦争を戦い

抜いた。

まず、フィンランド空軍は冬場の厳しい寒さで凍った湖を滑走路として、D21をゲリラ的に運用していた。ソ連軍は偵察機によって各地のフィンランド空軍基地を捕捉、榴弾砲や爆撃機による攻撃で人工の滑走路を破壊することは出来たが、天然の滑走路を全て破壊することは出来なかった。何故なら、フィンランドには湖が多いからである。その数は1000を超す。そして、その全てをソ連軍が確認することは出来ず、フィンランド空軍はそれによって地上で戦闘機を失うという事は殆どなかった。

そして次に、パイロットの技量がずば抜けていた。フィンランド空軍は史実、1:10という驚異的なキルレシオを叩き出し、10倍以上の戦力を誇るソ連空軍の度胆を抜いている。D21やブルドッグの性能では、到底考えられない数字である。もともと伝説的な記録を持つ第24戦闘機戦隊に至っては1:35。戦争を通しての全損失機数15機にして、ソ連側の損失機数は450機以上にのぼる。まさにソ連空軍にとっては悪夢だったに違いない。

このように圧倒的に不利な状況下でフィンランド軍は最善の戦果を挙げた。そして今回もまた、史実に違わぬ戦果を挙げようとしている。EU、特にドイツ空軍からのMe109供与により、フィンランド空軍の質は一気に上がったのである。

また、他国もそれに倣い、自国の航空戦力の供与を検討し始めていた。

もっとも早く行動に移したのは、隣国スウェーデンの義勇航空隊である。イギリス製の『グロスターグラディエーター』戦闘機を主体とした義勇航空隊は、質こそ劣るが熱意に満ちた戦力であった。

続いて立ち上がったのはイタリアだった。史実でもそうだが、イタリアのムッソリーニは冬戦争に対しては積極的だった。マンネルヘイム線の建造に協力する一方、ソ連に航空機等の戦力を提供したという独ソ不可侵条約の関係上から、裏表で両国を支援した姑息なヒトラーとは違い、ムッソリーニは表立って共産主義に反旗を

翻した。史実、唯一自国空軍の最新鋭機をフィンランドに供与したのは、イタリアでありムツソリーニである。ムツソリーニの贈り物である1938年製のフィアット『G・50』戦闘機は、複葉機や旧式単葉機が目立つ供与戦力の中でもっとも優れた機体といえる。33機がフィンランドに供与され、後方部隊であった第26戦闘機戦隊に配備された。冬戦争中には1機の損失と引き換えに11機のソ連空軍機を撃墜、継続戦争中には実に88機の敵機を撃墜した。これはひとえに、気候と技量の問題が大きかったといえる。

次は大日本帝国であった。史実とは違い零戦を入手し損ねることはなく、更に一式戦闘機『隼』と、九六式陸攻10機の供与が実現した。零戦は初期型の一型だが、金星エンジンを搭載して防弾設備が充実した優秀な機体である。防弾設備乏しく、速力にも恵まれないD21のことを考えれば、願ってもない機体といえた。

そしてイギリスとフランスである。イギリスは『ホーカーハリケーン』、フランスは『MS406』をフィンランドへ送り込むことが決定したが、それは戦争開始から実に1週間後のことであり、23日で即決した他国に比べれば、幾分かは対処が遅いといえた。

このように『Me109』、『G・50』、『零戦』、『隼』、『ホーカーハリケーン』、『MS406』と、多種多様な戦闘機を供与されるに至ったフィンランド空軍だが、問題は山積していた。整備の問題、運用環境と設計理念の違いという問題、そして燃料と人員という問題だった。

まず、6種類の戦闘機から分かるように、他国から供与された戦闘機には統一性が無い。史実でもそうだが、整備員はこの多種に渡る外国製航空機の整備を一から覚えなくてはならず、泣かされることが多かった。現状は何時ソ連軍に防衛線を突破されるか分からないものであり、その不安と恐怖の中で死に物狂いで覚えていかなくてはならないのだ。しかも超短時間で。即戦力は不可欠だった。次に設計者とフィンランドの自然環境が上手く噛み合っていない、という問題が存在した。例えば、地中海特有の温暖な気候下で設計

されたG・50は、フィンランドの-20度を下回る気温によってエンジンが回らず、風防は絶えず曇り、機銃も作動しなかった。それに勿論、D21のように氷結した滑走路に車輪が対応出来る筈も無かった。D21の後継機として絶大な希望を寄せていたフィンランド空軍上層部と現場は、その希望が可動不可能となってしまうその現実に、ただただ戦慄するしかなかった。

最後は燃料、そして人員の問題である。戦闘機があっても、それを動かす油と人間が居なければ意味を成さない。パイロットと整備員を育成するには膨大な資源と時間を要するし、スウェーデン経由で入ってくる燃料は少ない。ソ連が元々、EUの介入を許さない超短期決戦で挑んでくる以上、タンカーによって海路でノルウェー・スウェーデンに供給され、陸路で運ばれてくるといった燃料は充てに出来ないのである。燃料が届いた頃に終戦　という事態にもなりかねない。

とはいえ、航空戦力の充実という事実が無かった訳ではない。史実では機体不足に指を咥えて戦争を見ているしかなかった空軍の予備士官達に十分な数の機体が供給され、フィンランドの防空体制は非常に堅牢なものになった。

「ルーカッネン中尉、司令が代わりました」

そうルーカッネンに報告するハンス・H・ウィンド少尉もその1人だった。ウィンドは撃墜機数75機を誇るフィンランド空軍第2位のエースであり、冬戦争は機体不足という理由から戦争を傍観するしかなかった人物である。「今後、第2航空団の指揮を執られるのはロレンツ大佐です」

ルーカッネンは唸った。「唐突だな。まあこの非常時だ。とやかく言ってもらえん」

その最中、ウッティ空軍基地に甲高い警報が鳴り響いた。天を衝くような音で、2人は思わず顔を顰めた。

「空襲……か？」

ウィンドは呟いた。ウツティ空軍基地は森林深くに築かれた施設だ。そう易々とは見つからないが、一度敵の目に入ってしまったら、格好の標的として爆弾の雨が降るだろう。

そんな中、新司令となったロレンツ大佐が司令舎から慌てて飛び出てきた。彼は憤りの色を浮かべ、忌々しそうに空を見上げた。

「一同集合！」

ロレンツの声が響き、第24・26戦闘機戦隊の隊員達が駆け集まった。彼らの大半は、後のエースである。その中には第24戦闘機戦隊第3中隊を指揮するルーカッセン、及びその部下であるウィンドの他、同様にルーカッセンの部下であり、未来のフィンランド空軍トップエースパイロットであり、実兄が未来の英雄でもあるエィノ・エ・ユーティライネンの姿もあった。

「本日1500未明、ソ連軍は国境を越えた。陸空からの大攻勢だ」ロレンツは叫んだ。「その内、ソ連空軍の爆撃機多数が現在、ヴィープリに向けて進撃中との報告がたった今入った。ただちにこれを迎撃、撃墜せよ！」

管制官に送られて戦闘機が次々と鉛色の空を駆けのぼっていく。

機首が一斉に立ち上がり、首を伸ばして前後に揺れている。そして機首はさつと前を向き、カレリア地峡の北西端の都市“ヴィープリ”を指して走り始めた。

ヴィープリのすぐ手前で迎撃機の編隊が突入体勢を整えた。と同時に銃声が空を横切り、ヴィープリから轟音がわき起こった。編隊は動揺した。フィンランド第2の都市、人口8万人の頭上に爆弾を落とされてしまった。ヴィープリにはおどろおどろしい炎の弧が出現し、濃厚な黒煙と紅蓮の雨が降り注いでいた。

『あのろくでなし共を地獄に叩き落とすぞ！』

ルーカッセンは檄を飛ばした。第24戦闘機戦隊の内、ルーカッ

ネン指揮の第3中隊が先頭に躍り出て、ソ連空軍の戦略爆撃機隊に襲い掛かった。

グイープリの空は鮮血に染まった。準備万端の高射砲部隊は無数の砲火を天に向けて撃ち込み、猛烈な砲火の中に第3中隊が参戦する。FW190を駆るルーカッネンを先頭に、Me109戦闘機のみで編成された第3中隊はMGFF20mm機関銃を咆哮させた。相手はソ連空軍の主力双発爆撃機『SB-2』であった。ひとつ、またひとつとグイープリの空に火の玉が形成され、漆黒に包まれたSB-2は落ちていった。

市内の西からは、あとからあとからSB-2とI-16戦闘機が市内中心部を目指して駆けてくる。彼らは後方に展開していた第26戦闘機戦隊に阻まれていた。すると、I-16が前に躍り出てきた。どうやら第26戦闘機戦隊を物量で打ちのめし、力押しで市内へ雪崩れ込もうとしているようだ。

「現実には甘くないぞ」

ルーカッネンは呟いた。プリストルブルドッグを装備とすること、第26戦闘機戦隊ならともかく、D21とMe109を装備する今の第26戦闘機戦隊なら、30機を超すI-16であれ対処出来る筈だ。

「クソ……」

I-16を操るソ連空軍の1パイロットもそのことに気が付いていた。軽快な機動で翻弄するMe109、そして巧みな操縦技術で質の差を埋めるD21。それら戦闘機を操るパイロット達は勇猛果敢に数で勝る相手に挑み、なんとこの空戦の優位を確立してしまっているのだ。一介の人間が成し得られる業ではない。ソ連空軍のマニユアルは通用しないし、上層部がひたすら宣伝していたフィンランド兵の弱さとは正反対だ。

“あの侵略者を撃て！”

怒号に近いその声の主は、第26戦闘機戦隊隊長のものだった。その言葉が向けられたのは、第26戦闘機戦隊所属のオイヴァ・E・

トウオミネン フィンランド空軍第4位の未来のエースパイロットだった。

「了解！」

Me109を駆る彼はレヴィ12D照準器でI-16を捉える。そして猛烈な銃撃をI-16とソ連空軍の1パイロットに向けて撃ち放った。

I-16に閃光が迸り、鈍重なその機体が太い弧を描き出した。グイープリ郊外に爆音が轟き渡った。不揃いで不気味な弧は徐々に下へと向かっている。操縦席では、ソ連空軍の1パイロットが頭を仰け反らせ、絶望からの笑みを浮かべていた。

やがて機体は地を衝き、水と土煙が舞い上がった。

第59話 あno侵略者を撃て（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第60話 ヘルシンキは燃えているか？

第60話『ヘルシンキは燃えているか？』

1942年11月30日

フィンランド／ラップランド州

雪、忍びやかに降り続く。

そんな白銀に包まれたロヴァニエミはフィンランド北部ラップランド州都。つまり言い換えれば北国の厳寒地、辺境の中の辺境だった。北極圏の入口に位置する都市で、非常に厳寒な地方に属している。そんなロヴァニエミが今日まで発展したのは、1800年頃から始まった“資源開発”の賜物と言えよう。

ドイツ空軍第2急降下爆撃航空団第1飛行隊所属のハンス・ウルリヒ・ルーデル中尉は、愛機であるJu87『シュトゥーカ』とともに『EU空軍・ロヴァニエミ空軍基地』に着任していた。ロヴァニエミ空軍基地に降り積もった雪を蹴散らしながら、けたたましく鳴り響く警報音に従って滑走路を駆け抜けた。急降下爆撃航空団のJu-87急降下爆撃機、戦闘航空団及び駆逐航空団のMe109駆逐戦闘機、そしてフィンランド国民に対して今回の報復を約束した爆撃航空団のHe111双発爆撃機が飛行場内を縦横無尽に駆け回っていた。

フィンランド北部、ラップランド州に位置するロヴァニエミ空軍基地は、EUによる技術・経済支援によって完成した飛行場である。北欧では最大規模の空軍基地で、長距離爆撃機対応の大型滑走路や優れた整備用設備は、300機に満たない航空機を保有している程度のフィンランド空軍には贅沢過ぎるものだった。

オブザーバー国のフィンランドにとって、空軍基地は欠かせない

要素であつた。EU加盟の1941年、フィンランド政府はソ連との戦争を危惧し、正規加盟国や準加盟国ではないオブザーバー国となった。しかし、それは同時に常備軍の欠如を意味する。万が一ソ連と戦争となり、領内へと侵攻された場合を想定するフィンランド軍はソ連との戦争に備え、ラップランド地方の国境防衛 ということ を名目とし、EUの駐留軍を要請すべきだと政府に促した。これはEU加盟国のスウェーデン軍と両国間の国境線を相互防衛していく というのを口実に、事実上ラップランド地方にEU軍を置こうという考えであつた。

しかし政府は納得しなかつた。そんなことをすればソ連への刺激となり、戦争になりかねないと考えたからだ。そこで双方は議論を続け、折衷案として採用されたのがこの『ロヴァニエミ空軍基地』であつた。

ロヴァニエミ空軍基地は多数のEU加盟国によつて資金が用意され、建造された軍事拠点である。しかし当初、その建造の折に加盟国の大半は、1930年代から尾を引く経済不況を背景に乗り気では無かつた。そこで政府は資金提供の見返りとして、フィンランドは戦争時にはこの基地を加盟国に貸与することを提案した。平時はフィンランド空軍の拠点の1つだが、戦時には他国へと貸与され、EUの戦略航空拠点として機能するという訳である。そしてフィンランドの為に物資流入の拠点として、航空迎撃の要として、そしてフィンランド空軍が持たない“戦略爆撃部隊” の前進基地として活動する。それがフィンランド側の思惑であつた。

その日の午後、宿舍の談話室に居たルーデルは出撃命令の有無が頭から離れず、第1飛行隊の同僚達との談話もすっかり上の空だつた。どうにも落ち着かず、自分の部屋にも居たくない気分だったので、地上待機の暇な時間を同じ急降下爆撃機乗りとの談話で潰そうと思つたのだ。彼らの談話は基地内の食事の話から始まり、8歳の

頃によらかした無謀な少年物語で盛り上がった。それでいつもならそれなりに幸せで満足出来るのだが、その日はどうも心ここにあらずといった様子であった。

「各員集合！」

それは第1飛行隊長、フレデリック・ビンデバルト大尉の声だった。

「第200爆撃航空団の偵察部隊から連絡があった。ソ連軍がフィンランド国境を突破し、領内に侵攻してきた　とのことだ」

「それは本当ですか！」ルーデルは訊いた。

ビンデバルトは額に皺を寄せて、重苦しく頷いた。

「嬉しくもあり、残念でもあるが事実だ。既に国境沿いのフィンランド軍部隊が全滅して、多数の死傷者が報告されている。遺族のことを思うとやりきれん話だよ」

「今回の戦争の原因……」第1飛行大隊の同僚、オイレ少尉は言った。「今回の戦争の原因について言及するのは時期尚早だとは思いますが、大尉は何か見解をお持ちで？」

「さてね。さっぱりだ。お手上げだよ。ロシア人の考える事は、俺にはよく分からん」ビンデバルトは言った。「だが、1つだけ言えることがあるぞ。お前達が1輦でも多くのソ連軍戦車を破壊すれば、その分だけ早く戦争は終わりに近づく……」そう言つて、彼は窓の外に降り止まぬ雪景色を見た。

このところビンデバルトは、第1飛行隊の中に、戦いを望んでいるとは言うがこの北方の地から早く抜け出したいと考えている隊員が増えていることに気付き始めていた。人間観察癖のあるビンデバルトは、その隊員の多くが目前に迫る“敵”ではなく、間近に存在する“寒さ”にせいせいしているに違いないとふんでいた。

人間の皮膚には温点　即ち暑さを感じる感覚センサーが3万個存在する。しかしその一方で、冷点は約25万個も存在する。これは元々、人間というのはアフリカという温暖な地で誕生し、進化したことに起因しており、同時に人間が寒さに弱いことを示唆してい

る。

ロヴァニエミは北極圏から8キロ程度の地点にある街であった。11月の平均最低気温は-8度に達し、最高気温も-3度と、零度を抜けない。早急な出征で寒さ対策もろくに出来ず、祖国ドイツと全く異なる体感温度に大きなギャップを感じ、鬱となるのは仕方がないことである。

「空軍最高司令部（OKL）の通達を伝える。『第5航空艦隊一下、所属する各航空団は奮励努力せよ』」ビンデバルトは読み上げた。「その第5航空艦隊司令部より命令だ。第2急降下爆撃航空団は第2航空軍団と協同して、カレリア地峡方面空域に展開する。そこでソ連第7軍に対地攻撃を実施、撤退中のフィンランド軍を援護し、後方からの補給線を断つのが我々に課せられた任務である。なお、ソ連空軍は第2戦闘機集団が対処するが、各員とも覚悟しておけ！」

1942年11月30日

フィンランド/南スオミ州

TB-7 ソ連空軍の次世代型戦略爆撃機は、旧式機のTB-3と護衛のI-16戦闘機を伴い、ヘルシンキ上空を爆進していた。まるで絵に描いたような、戦略爆撃隊の行進である。ヘルシンキ市内では断続的な、それでいて4発爆撃機にはちっぴけな小抵抗が繰り広げられてはいたが、それはソ連長距離航空軍に淡い自信を与えるに過ぎなかった。

「“電波管制”は解けないのか？」

TB-7の1機で、同戦略爆撃機部隊を指揮するドミトリー・アクシヨネンコ大佐は部下の通信兵に訊いた。

「ダー（はい）」通信兵は言った。「ヘルシンキ市内、及び各都市で同様のジャミングが実施されているようです。これではラジオ

放送を利用した情報の受信は困難となりますが、

「構わん。これだけの大軍を前に、フィンランド空軍が対処出来る筈が無い」

アクシヨネンコの考えは甘かった。ヘルシンキ付近には既にロヴアニエミを出発していた第7教導航空団が展開していたのである。

第7教導航空団は、ヒトラーの勅命により編成された人員・技術実験部隊である。『大和会』より提示された“未来のエース・パイロット”を招集して育成させ、Me 262『シュヴァルベ』やAr 234『ブリッツ』といった新型ジェット航空機を運用させる。それが第7教導航空団の正体だった。即ち『未来』の航空部隊である。

1942年11月時点で、Me 262は試験用機が3機開発され、その内2機が実戦投入可能であった。そしてその1機に、かのアドルフ・ゲーランド中佐の姿はあった。ゲーランドは史実、総撃墜機数104機のエース・パイロットで、ジェット戦闘機部隊として名高い『第44戦闘団』の指揮官でもあった。この時、編成の自由を与えられたゲーランドは名だたるエース達に声を掛け、ゲルハルト・バルクホルン（301機撃墜）やヴァルター・クルピンスキー（197機撃墜）といった隊員の編入を成功させた。

今物語で第7教導航空団司令を務めるゲーランドは、ヘルシンキ防衛の重責を担っていた。指先で操縦桿を転がすとMe 262はスムーズに、且つ緩やかに旋回した。それからすぐ前にあるレヴィ12D照準器の輝点をTB-7の機首辺りに定めた。

「やあ、ヘルシンキにようこそ」

ゲーランドは晴れやかに言うと、Me 262機首部に備えられたMk 108機関銃6門が30×90RBmm弾を一斉に放った。そしてTB-3は一斉射で完全に爆砕し、Mk 108は予想通りの性能を見せ付けた。

このMe 262に搭載されたMk 108機関銃は非常に優れた重機関銃である。史実、ラインメタル社のベンチャー企画として誕生

したこの兵器は第2次世界大戦中盤から登場し、Me109を始めとする多種の空軍戦闘機に搭載された。このMe262も例外ではない。平均4発でアメリカ陸軍航空軍の『空飛ぶ要塞』、B-17を撃墜出来るというその破壊力は、Me262の高速性と合間つて活躍した。

「やれやれ、弱過ぎて張り合いが感じられん……」

ガーランドは肩をすくめた。ちらりと目をやれば、どこそこかしこでMe109とFw190が飛び交い、まるで性能が違い過ぎるI-16を追い立てている。護衛を失ったTB-3、TB-7戦略爆撃機は慌てて爆弾を投下し、一目散に退散を始めた。しかし一方で、後続の爆撃部隊が市内に侵入し、まるで第7教導航空団をせせら笑うように、爆弾投下ポイントに前進していたのである。

「先遣隊を殺ったのはフィンランドの豚野郎共じゃない。ヒトラーの子飼いかだ！」

アクシヨネンコは無線機越しに叫んだ。「護衛戦闘機を全機、奴らの迎撃に回せ。爆撃本隊を攻撃されないよう、鋼の壁を築くのだ！」

ヘルシンキ上空が激震する。ソ連長距離航空軍の戦略爆撃機編隊は爆音を轟かせ、長太い白い尾を曳きながら突き進んだ。砲金色の閃光が迸り、無数の胡麻粒のようなものが落ちたかと思うと、ヘルシンキ近郊の森林地帯は一瞬の内に鮮紅に包まれてしまった。

「まるで煉獄だ」

驚きと不安が入り混じった声で、エーリヒ・アルフレート・ハルトマン中尉は言った。このドイツ空軍第7教導航空団所属の中尉は、ご存知だと思うが未来のドイツ空軍のトップ・エースとなる男である。受領機のMe109に搭乗し、第1飛行隊第3中隊指揮官となつた彼は今、ヘルシンキ上空にて司令官ガーランド中佐の指示に従い、右翼防衛に務めている。

ハルトマンは空の幾筋にも入った飛行機雲を見張り、それが戦略爆撃隊本隊のものであると分かった。しかし、その爆撃隊の前にはI-16戦闘機の大群が待ち構えているのだ。その数は実戦経験の無い者にとつては、恐怖を感じざるを得ない。彼は密かに、これが準備不足なこの自身の戦争の、終わりになるのかもしれないとさえ考えた。

しかし『ハルトマン』はその名のごとく、“不屈の男”であつた。ハルトマンは旋回して、I-16編隊の後方に着いた。そして急上昇、高空を目指す。そして 急降下。

その時、I-16のパイロット達は、背後から微かな震動とダダダダという轟音が響いていることに気付いた。刹那、編隊のI-16の1機の両翼に穴が開き、機体が黒煙を噴き上げた。その機体はミシミシと鈍い悲鳴を上げながら、錐揉みして堕ちていく。続いて1機が爆散し、更に被害は続出した。計5機のI-16がそれで再起不能となり、4機が壊滅的打撃を受けて帰投を余儀無くされた。そして、I-16の編隊には、ぽっかりと大きな穴が開いていた。

ハルトマンは第3中隊の僚機を率いて、そんな敵戦闘機の編隊の下を潜り抜けた。液冷エンジンによって尖った機首に、翼端が丸みを帯びた主翼を持つスマートな戦闘機が、赤き戦闘機の足元を駆け抜ける。ハルトマンは操縦桿をぎゅっと握んで、頭上に広がる敵機の大群に見入りながら、ぶるつと身震いした。一歩間違えればシュートアウト（銃撃していた敵機の前に出してしまうこと）してしまう。そうなれば、さしものMe109も只では済まないだろう。上空の鉄の空間に注視しつつ、加速してI-16の編隊から離脱した。

「やったぞ！」

興奮が抑え切れずに叫ぶようにハルトマンは言った。

「第3中隊、初陣にしては中々だったぞ」ハルトマンは息を整え、無線越しに第3中隊隊員達を労った。「だがこれではまだ駄目だ。再度、奴らを叩くぞ！」

1942年11月30日
フィンランド/カレリア地峡

ハルトマン率いる第3中隊が再度、敵戦闘機編隊の高空を制そうと行動を起こしている時、第2急降下爆撃航空団はカレリア地峡上空に展開していた。フィンランド軍最高司令部の諜報部の手柄により、敵の第1攻撃目標は『ラウツ』と呼ばれるカレリア地峡の都市であることが分かったからだ。ドイツ空軍第5航空艦隊司令部はこの都市を囷に敵を引き寄せ、多数の航空戦力をもってソ連第7軍に甚大な損害を与えようと目論んでいた。

He111が空を覆い尽くす。滑らかな曲線を描く楕円翼と、ほっそりとした胴体が特徴的なこの双発爆撃機はドイツ空軍の主力爆撃機で、史実では大戦を通じて生産された機体であった。爆弾を垂直に搭載するという特殊な爆弾倉を持ち、爆弾搭載量は2500kg。圧倒的な破壊力と高速性で、大戦中は空軍力に劣るソ連に大損害を与えていた。

そんなHe111は新たな歴史の中で、輝かしい1ページを捲ろうとしていた。爆弾倉の扉が低い呻き声を立てて開き、250kg爆弾が落とされたのである。1機、また1機と同調するように落ちていく爆弾は無数となり、数キロメートルに渡る爆撃を実現した。

「空襲だ！」

つい先程まで、ラウツへ凱旋パレードでもしているように無血侵攻を果たしていたソ連第7軍第70狙撃師団と、第40戦車旅団は戦慄した。空から降り注ぐ爆弾への対処手段を彼等は殆ど有していない。ソ連軍上層部とスターリンが、近接航空防御の何たるかを理解しようとはせず、胡坐をかいた結果である。

空からゆらめくように落ちてくる爆弾が、舐めるように1個狙撃師団と1個戦車旅団を倒し続けた。ラウツ周辺の森林が燃え出し、右から左までひだのように波打つ炎の壁が形成された。これに退路

を失われたソ連第7軍は成す術もなく、Ju87による急降下対地攻撃に晒されることとなる。

「退け、退け！」第40戦車旅団長、ユーリー・バタノフ大佐は悲鳴に似た声を上げた。He111の第1波が過ぎ、これが部隊後退の好機だと考えたからである。しかし、第40戦車旅団は先の爆撃で指揮系統が混乱し、大急ぎでこの忌々しいラウツを脱したかったバタノフの想いは届かなかった。その内、急降下爆撃航空団のJu87が低空飛行で近付き、MG151/20mm機関砲と250kg爆弾による鋼鉄の洗礼を戦車部隊に浴びせ始めた。

そして、その中にはハンス・ウルリツヒ・ルーデルのJu87の姿もあった。ルーデルの放つ20mm弾は厚さ15mmしかないT-26軽戦車の装甲をいとも簡単に穿ち、撃破した。続いてBA-20軽装甲車のエンジン部を20mm弾が貫き、爆散しながら宙を舞う。そして旋回し、再度攻撃を仕掛けてくるというルーデルの銃撃の往来は、地上のソ連軍戦車兵にとってはまさに悪夢そのものだった。

「くそッ、堕ちやがれ！」バタノフは拳を握り締め、低空を飛来するJu87に呪詛の言葉を吐いた。しかしJu87は一向に墜ちる気配が無く、そこどころか数を増やしていた。そして、いつの間にか装甲列車からの砲撃と、背後からフィンランド軍ラウツ防衛大隊の反撃を受け、包囲殲滅されようとしていた。

「分が悪すぎる。負傷者に構わず、とにかく後ろを目指せ！」バタノフは遂に旅団撤退を決断した。数では圧倒的優勢な筈なのに、彼は胸の中で愚痴るしかなかった。戦車が後退を始め、爆撃と銃撃にうちのめされたソ連兵は見殺しにされた。既に第2波のHe111爆撃編隊が迫っており、実際に彼等を救う時間的猶予は残されていなかった。

「ソ連空軍だ！」

急降下爆撃機乗り達は叫んだ。ソ連空軍の戦闘機編隊が遂に到着したのである。その大半はI-153 『究極の複葉戦闘機』

とI-16、そして新型機のYak-1から構成されていて、対地攻撃を実施するHe111やJu87を撃墜するのが任務であった。I-153やI-16はともかく、Yak-1の機動性・火力は十分な脅威と言えた。

『第1飛行隊、撤退せよ!』

ビンデバルトの声が響き、ルーデルを始めとするJu87は帰投を開始した。

そしてその一方、突撃する戦闘機部隊の姿もあった。第2戦闘機集団の第52戦闘航空団である。ラウツ上空に並べられたMe109の中には後の『アフリカの星』　　ハンス・ヨアヒム・マルセイユ中尉の姿もあった。

「ぐあああッ!」

白、白、目が眩むような白で瞳の中が真っ白になり、ピリピリと突き刺すような痛みと、身を焦がす真っ白な光の前に、I-16のパイロットは絶叫した。彼は、自身が白い虚空に浮かぶちっぽけな点になるのを感じた。それから白い光は視界全体を包み込み、焼けつくような感覚も次第に薄れて、まるで全宇宙が消滅したかのような真っ暗な静寂が訪れた。

その時、鉛色のカレリア地峡上空で1機のI-16が爆散した。と、同時に1機のMe109が空を駆け抜け、パイロットであるハンス・ヨアヒム・マルセイユ中尉は初勝利に歓喜していた。史実、ドイツ空軍最年少の大尉となるこの22歳の青年は本来、2ヶ月前に死を迎える筈であった。

しかし今、彼は一歩間違えば死を迎える戦場でだが　　生きていた。

『Yak-1!』

「あれが……」

無線機から響き渡る、悲鳴に似た声からマルセイユは自身の眼前に居る敵の正体を知った。Yak-1戦闘機、ドイツ空軍最高司令部や第5航空艦隊も注意を促す難敵である。

体勢を立て直して背筋を伸ばすと、マルセイユはMe109を加速させた。Yak-1も同様である。双方は接触し、刹那銃撃戦を繰り広げた。Me109のMG151/20mm機関砲とYak-1のShVAK20mm機関砲が咆哮し、両モーターカノン砲から放たれた砲弾が空中で交差する。そして両機は旋回を始めた。

『マルセイユ中尉、殺れるか？』第2戦闘機集団の上官が無線で訊いた。

マルセイユは答える代わりに肩をすくめた。Gの衝撃を肌で実感し、身を捻じらせながら敵機の未来位置を予測する。

そして 一斉射。

Me109のMG151/20mm機関砲の威力とマルセイユの偏差射撃能力は完璧だった。Yak-1の機体に大穴が開き、瞬間に火が付いた。Yak-1はコントロールを失い、墜落した。

1942年12月1日

ソビエト社会主義共和国連邦／モスクワ

カザコフ館、冬戦争勃発の張本人であるヨシフ・スターリンは嬉々として、昨日からのソ連軍の戦果を聞いていた。その全てがソ連側の勝利を示しているが、実際50万の大軍で30万足らずの雑兵を叩いたのだから、当然と言えば当然のことであった。しかしそれでも、スターリンは数字と統計には喜びを隠し切れなかった。

事件が起こったのはそんな報告の最中、ソ連空軍の戦果報告のことだった。

「どうだ、同志モロトフ。ヘルシンキは燃えているか？」

スターリンの片腕、外交の長たるヴァチエスラフ・モロトフは渋

面を浮かべ、かぶりを振った。

「ニエツト（いいえ）、レニングラードが燃えています」

1942年12月1日、ドイツ空軍はフィンランドに対するソ連の行為の報復策として、戦略爆撃機による『レニングラード空襲』を決行した。軍需工場、飛行場、鉄道、弾薬補給廠、物資集積所といった軍事目標が壊滅的被害を受け、民間人にも1000名の死傷者を出した。

これを機にソ連空軍はベルリンへの報復空襲を計画し始めた。

第60話 ヘルシンキは燃えているか？（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第1話 昨日の友は今日の敵（前書き）

机上の戦争が開戦す。

第1話 昨日の友は今日の敵

第1話『昨日の友は今日の敵』

1945年8月14日

東京府/千代田区

1942年11月30日から勃発した『冬戦争』は、それから1年ほど経った1943年9月17日に急転した。ソ連第7軍が壊滅し、ドイツのEU第3軍団がソ連領内への侵攻を開始したのだ。同年11月2日、ソ連第2の都市レニングは陥落した。これを機に、フィンランド・ソ連間国境沿いで繰り広げられていたフィンランド戦線 通称“代理戦争”はEU対ソ連の『全面戦争』に発展したのだった。スターリンはEU全加盟国に宣戦布告、ポーランド及び満州国への奇襲侵攻を敢行する。

しかし、スターリンの思惑は外れ、ソ連の一大攻勢は頓挫した。原因はEUの要塞防衛線『ヴェストヴァール西の壁』と虎頭要塞による予想以上の抵抗である。また、一方的過ぎる宣戦布告の仕方と拙い奇襲戦法が軍、そして現地民の憎悪の対象となり、徹底抗戦を構えることとなる。1944年2月には防衛ラインを死守していた関東軍が反撃に転じ、プリモルスキー・クライ沿岸地方への侵攻を開始、4月上旬には州都“ウラジオストク”を包囲した。

ウラジオストクに司令部を置くソ連赤色海軍太平洋艦隊はこれに対し、帝国海軍の連合艦隊に正面から艦隊決戦を挑むべく、8割強の艦艇を北海道沿岸域に差し向けた。湾を包囲され、出れずに敗北を迎えるよりは潔く戦って死にたい という悲痛な想いの結果である。帝国海軍はこれに対し、連合艦隊主力艦たる戦艦部隊をもつて挑むつもりであったが、時の連合艦隊司令長官山本五十六大将

新内閣の要職に就けず、現場復帰を果たした。は第一、第二、第五航空艦隊による機動艦隊を編成、戦艦『ソビエツカヤ・ロシア』を旗艦とする太平洋艦隊に機動戦を展開する。結果、旗艦及び所有戦艦の全てを喪失、唯一の航空母艦も大破して日本海海戦以来の大敗北となった。更にウラジオストクが攻略されたことにより、ソ連太平洋艦隊は事実上 消滅した。

一方、ヨーロッパ戦線もEUの優勢が続いた。ポーランド侵攻が難航し、東部戦線で戦力を消耗する中、北部戦線ではロンメル元帥指揮下の第3軍団が電撃作戦を展開、首都モスクワの周辺都市が次々と占領され、その行軍の足音はクレムリンにも迫っていた。しかし1月、電撃侵攻を続けていた第3軍団は行動限界点に到達、進撃速度が停滞した。原因は冬將軍の到来と補給物資の不足である。その間、スターリンはモスクワ等主要都市の軍需工場を内地部に疎開させ、焦土作戦を展開しながらソ連軍の戦力補強を推し進めた。

同年5月、東部戦線においてEU軍がポーランドからソ連軍を撃退し、ポーランド・ソ連国境間に設置されていた要塞防衛線『スターリン・ライン』を突破した。ドイツ本国軍、イギリス・ヨーロッパ大陸派遣軍、フランス軍、イタリア軍の空軍力・陸軍力の賜物であった。東部戦線はソ連が一方的に押され、北部戦線の防衛戦力を補充せざるを得なくなった。それを好機と見たロンメルは進撃を命令した。

そして6月3日 モスクワが陥落し、クレムリンにドイツ軍が入城した。

1週間後、EUは占領都市モスクワからソ連政府に対し、講和の要求を勧告した。その結果、急転的・反スターリン派の若手陸軍將校によるスターリン暗殺未遂事件が勃発、ソ連赤軍は戦時中だといふのに空前の粛清が実施され、その全体戦力を大幅に減少させてしまった。戦争の早期終結を望んでいた英仏は落胆したが、独伊だけは思わぬ副次的効果に歓喜した。

3ヶ月後の9月17日、EU軍がソ連領に侵攻してから丸1年経

過したこの日、EU南部方面軍団はスターリングラードを攻略した。それから約2ヶ月間に渡って繰り広げられる『スターリングラード攻防戦』は両陣営を疲弊させ、大勢の死者と多数の兵器を失う壮絶な戦いとなった。この時、全体戦力に余裕があったEU軍は史実の『ブラウ作戦』のように2個軍団によってスターリングラード・バクーの両都市を攻略する計画を立てていた。ドイツ軍が最前線に陣取り、イギリス・フランス・イタリアがそれに続く。後方防衛、主力援護、及び各所の制圧には宣戦布告によって戦争に引き摺り込まれたカナダ軍、オーストラリア軍、オランダ軍、ベルギー軍、ポーランド軍等が協同してあたり、その中には遣欧戦力である帝国陸軍独立機甲師団の姿もあった。

そして1945年1月21日 戦争は停戦した。バクー油田を制圧され、内陸部の疎開地域にも戦略爆撃部隊が台頭するようになり、既に100万名以上の死者を出していたこともあって、スターリンは止む無く交渉のテーブルに着いたのである。

交渉のテーブルでEUのドイツ・イギリス・フランス・イタリア・オランダの代表団は、戦争時の占領の全てをEUのものとし、アルハンゲリスク・アストラハンを引くライン上以西の全領土を割譲することを要求。また、極東戦線での大日本帝国に対する樺太島・沿岸地方・ユダヤ自治州の割譲とEUに対する多額の賠償金も要求された。

無論、スターリンはこれを呑む筈が無かった。しかしEUは強硬な姿勢を崩さず、返答次第では即時攻勢を再開する、とソ連側に通告した。

これに顔色を悪くしたスターリンは結局、講和条件に署名した。アルハンゲリスク・アストラハンの通称『AA線』が敷かれ、樺太・沿岸地方・ユダヤ自治州が帝国領に編入され、ソ連はEUに対する多額の賠償金を迫られた。これに独裁的権力を失ったスターリンは失脚した。同年2月に新政権が誕生し、経済的締め付けの緩和の為に被告人ヨシフ・スターリンはEUに引き渡された。

4月、世界を恐怖と悲嘆のどん底に引き摺り込んだソ連指導者達を捕らえ、裁判に掛けるという大作戦が決行された。ドイツはニュルンベルクで行われたその裁判は『ニュルンベルク裁判』と称され、ソ連国内外に潜伏していた指導者が各国諜報機関の努力もあって逮捕されていた。被告人の代表はスタフカ ソ連軍総司令部の面々で、ヨシフ・スターリンを筆頭にヴァチエスラフ・モロトフ、クリメント・ヴォロシロフ、セミヨン・プジョーンヌイ元帥が並んでいた。一方で、証人席にはニコライ・クズネツォフ元帥やゲオルギー・ジューコフ元帥の姿があった。彼等は新政権派であり、軍縮に基き編成された『ソ連国防軍』の中核を担う存在でもあった。この2人を始め、大勢の証人が名指しでスターリンを批判し、他の被告人達も同様に批判の言葉をぶつけられた。この裁判でヨシフ・スターリンに死刑が宣告され、他数名が死刑や終身刑、禁固数十年の刑に処せられた。

スターリンの最期は悲惨なものであった。刑の執行を待っていたスターリンは独房内で青酸カリのカプセルを噛み締め、自殺したのだ。

ヨシフ・スターリン 享年64歳。祖国ソビエトではなくドイツの、それも刑務所の独房内で死を迎えたこの大量殺戮犯罪者は、恐らくこのような死の訪れを予期していなかったであろう。数十、数百の民衆の悲嘆の声が轟き渡る中、逝去。そしてその棺がクレムリン内に弔われるという世紀の国葬を望んだだろう。

もしくは、不老不死の身でソ連を永世統治することを望んだかもしれない。ユダヤの老いばれが海を真つ二つに割り、フランスの女が神の声を聞いたのなら、俺が不老不死の身体を手に入れたってちつともおかしくないじゃないか。そう考え、淡い夢物語の中で永久の時を過ごしたのかもしれない。

しかし、現実には看守とE.U.の監査官数名に弔われての終焉だった。遺体は“磔”や“焼却”といった処分も検討されたが、ごく自然に故郷へと埋められることとなる。

「こう振り返ると、戦争はごく最近まで続いていたのだな」

大日本帝国新内閣総理大臣の窪田角一は唸った。

それは1945年7月のことであつた。ドイツは他のEU諸国に対し、バクー油田の分配比率を一方的に変更する通告を出した。これまで、占領地でもっとも重要且つ高価な戦利品であるバクー油田は、独3：英2：仏2：伊2：他の加盟国1の割合で分配されていた。そこにドイツはケチを付け、独7：英0.5：仏0.5：伊1：他のEU諸国1に変更したのである。バクーを取り仕切っていたSS装甲師団は戦力強化を図り、その影響力を増大させて他国の駐屯軍を牽制した。

一方、ドイツ側の条件を受け入れないとして、英仏が早く声明を発表。7月24日、オランダ・アムステルダムでEU緊急総会が開催され、ドイツのEU除名処分を検討した。当初、英仏に賛同して処分可決に回る陣営が上回ったのだが、それはドイツによる声明によって一転することとなる。

8月8日、ドイツ総統ヒトラーはバクー油田及びソ連資源分配比率に対して妥協しないことを発表し、それと同時に批准しなければ宣戦布告することを表明した。そして早くイタリアがこの分配比率に批准したことを発表し、イタリア軍が戦闘態勢に移行していることも発表された。これに顔色を変えたギリシャ・ポーランド・ユーゴスラビア王国が分配比率に批准し、スペイン・フィンランドが中立を宣言した。そしてソ連がドイツとの同盟締結を表明した。イギリス、フランスは勿論賛同する訳もなく、ドイツのEU除名を完全表明した。

そして昨日の8月14日、ドイツを中心とした『枢軸国』陣営はイギリスを中心とした『同盟国』陣営に宣戦布告を表明、同盟国陣営の北欧、フィンランドを除く、とフランスへ電撃侵攻を開始した。また、AA線以西のEUが統治するソ連領内ではドイツ軍・

イタリア軍・ソ連国防軍が同盟国陣営の駐屯軍に攻撃を開始し、大打撃を与えるとともに多数の資源を確保するに至った。

そこに唐突に関与してきたのがアメリカ合衆国であった。英仏諸国は米との同盟締結を承認し、経済的・軍事的支援を要請した。アメリカはそれに応える条件として 暫定的に存続するEUの完全解体、英仏等ヨーロッパ諸国との国交回復、今後30年間の対外輸入での米製品優遇、そして今戦争の主導権を要求してきた。圧倒的な攻勢を見せるドイツを十分な脅威とみなし、未だ膨大な国力を備えるソ連を敵とするのは過酷だと判断した結果である。これに対し、ドイツはアメリカに宣戦布告した。

「うむ……現時点で優勢なのはドイツ陣営の枢軸側だ。資源・人員・兵器の保有数もつと多く、また技術水準も最高だ」窪田はそう言い、整然と並ぶ窪田内閣の閣僚達を見張った。「この点も鑑み、一連の戦争をどう乗り越えていくか……その政策を出して貰いたい」

一同は腕を組み、顎を擦り、隣々の人間と言葉を交わす。今回の決定が過去数十年、しいては100年先にまで影響しかねない。そう考えると、慎重になって複数の思案を巡らすのは当然の行為と言えた。

「要は西に向かうか、東に向かうか ということですね？」志村正海軍大臣は言った。志村の言う通り、この戦争は西か東かに侵攻する戦争となるのは必然であった。アメリカ陣営に着けばヨーロッパ本土の西へ、ドイツ陣営に着けば米西海岸の東へと進む事になる。そして、その選択次第で陸海軍の戦略、貯蓄物資の使用量、戦時国債の数、そして死者の数が変わってくる。北はソ連、南はオーストラリアというように、本土への侵略軍もまた変わってくるのだ。

「総理、私は東に向かうべきかと存じます」

そう告げたのは白井正辰陸軍大臣だった。「常識的に考えれば、それがもっとも妥当な案ではないでしょうか。アメリカは不況に喘ぎ、軍も縮小されていて脆弱です。ハワイを早期陥落させ、西海岸

に侵攻すれば、短期で戦争を終結させられます」

「うむ。成程……」窪田は唸った。

「私はその案には賛成し兼ねます」

志村は腕を組み、渋面を浮かべて言った。「ここは敢えて、西に向かうべきです。その理由ですがまず、アメリカを盟友とすれば少なくとも背後を敵に取られる心配は無くなります」志村は言った。

「そして第2に、アメリカの国力は衰えてはいません。軍事力は戦争開始から数年で2倍、3倍と増えていくでしょう。しかしドイツは、先の戦争で得たものを、先の戦争で失ったものに補充しただけに過ぎません。ガス欠になった戦車にようやくガソリンを入れるようになったに過ぎないのです。長期的に見ればアメリカの勝利は必至でしょう」

志村の意見はもつともだった。アメリカ領であるフィリピン・ハワイは戦争準備を進めていて、防衛策は万全である。奇襲ならともかく、完全防備のその2箇所に同時攻勢を実行するのは至難の業である。確実に戦線は長引き、資源確保の為の南方進出にも大きく影響してくるだろう。そうなれば戦力の分散を招き、各個撃破や背後からの攻撃を受けてしまうことだろう。この志村の案は戦の基本である背中を取られない事を前提とし、ソ連国防軍の錬度の低さ、アメリカ陣営のオランダ領東インドからの石油の確立、フィリピンでの戦闘の回避、そしてアメリカの国力を判断材料とし、導き出した最善の答えであった。

「それはもつともである。背を取られては勝てる戦も勝てん」窪田は言った。「では採択を取ろう。対米宣戦布告に賛成の者は？」

白井を筆頭に、文部大臣や鉄道大臣が挙手した。しかしその数は一部で、対独宣戦布告が多数を占めていたのである。

「では、我が大日本帝国は ドイツに宣戦布告する」

決断し、席を立った窪田だが、壁に掛けられた時計を見て人を変

えた。今までは内閣総理大臣としての威厳と品格、そしてリーダーシップを発揮していた彼だが、今や一介の商社員と変わらない、温和で物腰の落ち着いた男となっていた。

「今日はここまでだ。明日は対独宣戦布告からの満州戦線への対応策を検討し、その防衛概算と米国からの予想戦力支援を照らし合わせて演習を進めていく」

閣僚　であつた男達は立ち上がり、笑みを浮かべた。いがみ合う仕草を見せていた白井と志村は互いに肩を叩き合い、微笑を浮かべて談話する。犬猿の仲の陸海軍大臣としては異例の行動だが、現実には軍1個を背負っているエゴイズムの塊では無い彼等にとつて、いがみ合う理由は存在しなかった。ただ、シミュレーションを完璧にする為、口論していただけであつた。ディスカッションは異なる意見の衝突によつて成立し、発展するものである。

「藤伊閣下、これで宜しいので？」

窪田総理は閣議室内で沈黙を貫いていた1人の海軍提督に告げた。本来なら、閣下と呼ぶにふさわしくない階級の藤伊一海軍中將は静かに頷き、満足気に笑みを漏らした。

「それで良いのです」

1942年12月1日

東京府/千代田区

史実、『総力戦研究所』は内閣総理大臣直轄の特務組織であつた。国家総力戦　即ち『日米戦争』を想定した机上演習計画シミュレーションを行い、演習用の青国（日本）模擬内閣も作られた。模擬内閣閣僚となつた生徒達は研究所から提示される想定状況と課題に応じて軍事・経済・外交の各局面での具体的な事項について各種データを基に分析し、日米戦争の展開を予想した。その結果は太平洋戦争の推移と殆ど同じで、最終的なソ連対日宣戦布告も的中させていたのだ。唯一彼等

が予想出来なかったのは、真珠湾攻撃と原爆投下の2つだが、前者に関しては緒戦に『奇襲作戦』が成功していたとしても、持久戦に持ち込まれて戦争が推移していけば日本は負けると予想していた。

今物語で『総力戦研究所』は1942年10月に誕生した。迫る『冬戦争』に対応し、伊藤ら『大和会』が昭和天皇に上奏した結果といえる。

天皇直属機関として、『大和会』の特務組織として新たに誕生した総力戦研究所の初仕事は『対独戦』の机上演習であった。これはドイツが将来、脅威となりかねないと判断している伊藤の個人的意見によって成立したもので、この時期には異例なものといえた。本来なら、対ソ戦を想定していくべきなのだ。

しかし、対ソ戦はヨーロッパを主軸とする戦いであるのに違いは無かった。フィンランドから戦線が拡大されるのは何時になるかも分からず、ヨーロッパ方面での情報収集には限界点があった。『アプヴェーア』はSSやゲシュタポにマークされていて、『第4インターナショナル』も現在ではアジアを活動の拠点としている。ならばこの際、将来必ずや勃発するであろう対独戦に備え、準備を整えておくべきだと伊藤は考えたのである。

「現実はどうなると思います？」

窪田は訊いた。

「……戦況が好転すれば、軍部は必ずやその矛先をアメリカに向けることだろう。アメリカは東西からの侵攻を受け、建国以来未曾有の侵略戦争を経験することとなる」伊藤は言った。「だが、その先はどうする？アメリカに勝利しても、ドイツに敗北すれば事は更に悪化する。これは私が保障しよう。ヒトラーは世界の半分を掌握しただけでは終わらん野心の持ち主だよ」

1945年8月15日、大日本帝国はドイツの枢軸側に宣戦布告、米英との同盟締結を宣言した。これに対し、アメリカのハリー・S・

トルーマン大統領とイギリスのアンソニー・イーデン首相は歓迎した。翌月、アメリカで武器貸与法案である『レンドリース法』が可決、対日・対英軍需物資の輸出が開始され、その見返りとして両国への米軍の駐屯が始まった。帝国陸軍は満州国、及び先の戦争で獲得した旧沿岸地方、樺太、ユダヤ自治州の防衛強化を推し進め、レンドリースで到着した『M4』中戦車や『M1』重戦車が関東軍に配備されるようになった。

そして帝国海軍は 地中海を目指す。

1945年8月15日、ここに『第二次世界大戦』は勃発した。

第1話 昨日の友は今日の敵（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第61話 バルト海の死闘（前）

第61話『バルト海の死闘（前）』

1943年1月18日

フィンランド沖／バルト海域

北岸にヘルシンキ、南岸にタリン、湾の奥にはレニングラードと、フィンランドとエストニアとソ連という3つの国にとって重要な価値を持つフィンランド湾の入り口で、第三航空戦隊司令官の角田覚治海軍少将は艦橋の壁に凭れ掛かっていた。もう一度、懐中時計を確認してから、ソ連海軍の潜水艦が現れるのをもう5時間も待っているのか、と胸の内に吐き出した。これ以上は無理だった。貴重な時間を大井に無駄にしたなど、角田はやはり胸の内に呟くしかなかった。

このフィンランド湾OR-16区画は、EU海軍の制定区画ではもつとも最前線に位置する区画のひとつだった。その区画防衛と通商破壊任務に着くのは、何を隠そう帝国海軍第三航空戦隊 通称『角田機動艦隊』である。

空母『鳳翔』を旗艦とし、睦月型駆逐艦『菊月』、『三日月』、『夕月』の計3隻からなる第七駆逐隊を随伴戦力とする第三航空戦隊は山口多聞中将（戦時特例）を司令長官とする『遣欧艦隊』の一部隊であった。史実、軽空母2隻と駆逐艦3隻から編成された第三戦隊は、『赤城』や『加賀』が所属する第一航空戦隊のような主力航空部隊を集結させ、『第一航空艦隊』として航空戦力の大艦隊化を図る計画の下に生まれた戦隊であった。帝国海軍は第一航空艦隊の編成によって航空戦力が欠如する『第一艦隊』の補佐的役割としてこの第三航空戦隊を編成し、そしてがら空きとなるであろう本土

近海や主力艦隊の航空防衛の為の貴重な戦力となった。

しかし、今物語ではまた異なった歴史を迎えた。カタパルト等の近代改装を受け、対潜・対空戦力を拡充させた2隻の軽空母を持つに至った第三航空戦隊は、通商路防衛の要となったのである。この遣欧作戦においても、第三航空戦隊の主要任務はバルト艦隊との直接対決ではなく、EU艦隊の補佐や通商路防衛であった。

「北方艦隊司令部より入電！」通信兵は透き通った声を上げた。

「どうした」角田は素気なく言った。「また異状なしの定時連絡か？」

通信兵はかぶりを振った。「いえ、敵艦発見の報告です！」

航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』

ガングート級戦艦第3番艦『ポルタワ』を改造した装甲航空母艦であり、ソ連海軍初の航空母艦であるこの艦は、25mmの飛行甲板装甲と76mmの主甲板装甲による防御能力と、55口径15cm単装速射砲のような対巡洋艦戦闘を想定した砲戦能力を併せ持った艦であった。2040機程度の艦載量を備え、高角砲や対空機銃も比較的充実していた。これまでは機雷封鎖に伴いフィンランド湾の奥部に潜んでいた同艦だが、EU海軍に所属するFW200『コンドル』長距離哨戒機からの報告により、その存在が確認されたのだ。

「ソ連海軍の空母はミハイル・フルンゼ1隻のみだ。奴を倒せば、ソ連海軍は洋上機動戦力を失う」角田は言った。「報告された位置情報から、このミハイル・フルンゼにもっとも近いのは我々第三航空戦隊だ。これは帝国海軍の誉れである。この機を見逃す訳にはいかんぞ！」

角田は拳を振り上げ、甲高い声で叫んだ。居るか居ないかも分からない潜水艦など相手とするよりも、戦艦と空母のキメラ的存在である『航空戦艦』を撃破する方がよっぽど良い。角田はそう考え、

東を指差して艦隊の出撃を促した。

1時間後。FW200からの逐次報告を頼りに、第三航空戦隊はその足を進めた。駆逐艦『夕月』を先導に湾口を越えてフィンランド湾内に侵入したが、そこで角田の脳裏に一抹が過った。

「敵は我々を湾内に誘い込もうとしているのではないか？」

そんな角田の問いに、参謀長の飯島一志海軍中佐は首をかしげた。「と、言いますと？」

「敵は潜水艦と偵察機による索敵線をこの狭いフィンランド湾内に張り巡らしている。敵の艦隊運動がそうだ。既に輪形陣を敷き、対空戦闘に懸命になっているとドイツ空軍からの報告もあった」角田は洪面を浮かべた。「奴らは速力の問題から……いや、ここでEU海軍に一系報いるが為、敢えて我々と海戦を仕掛ける気かもしれない。そうになると、性能と数に劣る艦載機よりも陸上の航空戦力に頼る気なのだろう」

「閣下。ならば零戦や彗星の出番ですぞ」

飯島は意気揚々と言った。「I-16やSu-2の行動限界範囲はせいぜい350kmと聞いております。零戦や彗星の航続距離であれば、十分に凌駕出来る範囲です」

「だが、もう少し飛行隊の連中を満足させる環境を作ってやりたい」角田は言った。「出来る所まで敵艦隊に近付き、肉薄するのだ。それで航続距離を短縮してやれる」そう告げる角田の視線は、徐々に灰色の雲が立ち込めつつあったフィンランド湾の空に向けられていた。

空母『鳳翔』の艦戦・艦爆隊が着々と発艦準備を進める中、航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』を中核とした小艦隊は出せる限界以上の速力で猛進、第三航空戦隊と一騎打ちに臨もうとしていた。ミハイル・フルンゼ艦長であり、同小艦隊の司令官であるイワン・N・

ホロストロフスキー大佐は艦橋に仁王立ちし、極寒のフィンランド湾の鼠色の海をみはった。

「この戦闘は血を見る」

ホロストロフスキーはぽつりと呟いた。「どちらかが一方的にな」
青年参謀、セルゲイ・サハロフ少佐がゴクリと唾を飲み込んでから告げた。「それは勿論、奴らですね」若き青年参謀の言葉は熱を帯びていた。「我々は過酷なソ連赤色海軍の中でも、更に過酷な環境で日々を生き長らえてきました。西ヨーロッパでぬくぬくと育ってきた奴らとは乗り越えてきた苦労が違い過ぎます」

ホロストロフスキーは何かに悩み始めたように頬の内側を噛みながら、少しの間黙り込んだ。

「クロンシュタットの海軍司令部を通じて、ソ連軍最高司令部より下命が届いた。『敵艦隊を殲滅せよ。撤退は許さない。そしてくれぐれも気を付ける』と」

サハロフは齒軋りを立てた。「全く、モスクワは何を考えているんですか。何に気を付けると言うんですか」サハロフは渋面を浮かべた。「ああ、海は濡れているから気を付けるといことですか」

「足掻いて死ぬか、足掻かずに死ぬか」俺の座右の銘だ」ホロストロフスキーは言った。「同じような言葉がある。『生か死か、それが問題だ』……ウィリアム・シェイクスピアは生きるか死ぬかをまるで今後のタイムスケジュールのように言葉で表現した。それほどまでに、死とは平等なものなのだ。我々のような空母乗りであれ、イギリス人であれ、スタフカの高官であれ……な」ホロストロフスキーは言った。「残念ながら、我が海軍の艦上航空機はEU諸国のどの海軍機よりも貧弱だ。通常の空戦では万に一つの勝利も望めんだろう。だからこそ、対潜空母としての任務をこれまで担ってきた」

「では」参謀の脳裏に1つの戦法が駆け巡った。

「そうだ」ホロストロフスキーは言った。「“砲戦”だ」

「FW200からの定時連絡です。敵艦隊ヨリ艦載機発艦セリ、1300。数25」飯島は電信文を読み上げた。「敵は質より量で立ち向かってくる筈です。更に、ソ連・エストニア領内に配備された海軍航空隊は多数の陸上航空機を発進させた……との報告も入っております。一方で、我が方の零戦は6機。敵の艦載戦闘機は恐らくI-16でしょうが、最低でも1機が2機以上の敵を相手にせねばなりません」

角田は頷いた。

「海軍航空隊はドイツ軍と陸軍の連中に任せるとして、だ。問題は目前の航空戦艦だ」角田は言った。「飯島、貴様があの機動部隊の指揮官だとして、艦載機を全て失ったらどうする？」

「全滅 ですか」飯島は片眉を上げて呟いた。「それは母港に帰投し、新たな艦載機を受領して戦線復帰するでしょう。この戦争はまだまだ始まったばかりですから」

「そりゃあ正論だな。まあ、俺はちよつと違うが」角田は言った。「ソ連の空母は戦艦でもある。15cmの艦砲も7、8基ぐらいは備えてる。それを使わない手は無い。俺なら、最高速力でこの艦隊に接近し、駆逐艦と合わせた砲戦で一糸報いる筈だ」

「空母対空母の砲戦……」飯島は唸った。

「戦艦とまではいかなくても、軽巡洋艦並の戦力だからな」角田は言った。「もしその砲戦が現実のものとなるなら、この戦いは一変する。攻守の戦いだ。我々にとつての戦いは『攻撃こそ最大の防御』となり、奴らにとつては『防御こそ最大の攻撃』になるだろう」

元々が戦艦であり、それを改装して誕生した航空戦艦『ミハイル・フルンゼ』の装甲は強靱であつた。一方、空母『鳳翔』は純粋な空母設計の下に誕生した航空母艦であつた為、その防御性能は貧弱である。仮に空戦を諦め、砲戦と水雷戦をソ連艦隊が繰り広げてくれれば、非常に過酷な状況に鳳翔は引き込まれることだろう。敵は駆逐艦4隻と軽巡洋艦並の砲戦能力を持った艦艇1隻を有する。しかし

第三戦隊は駆逐艦3隻に貧弱で小規模な小型空母1隻である。

「要は間合いの問題だ」角田は言った。「砲戦範囲内に入らせなければ砲弾は飛んでこないが、航空機はそれ以上の攻撃範囲を持っている。そして、爆弾だろうが魚雷だろうが、搭載出来うる兵器の全てを近距離から直撃させることが可能なのだ」

角田は従来の航空戦によって決着を着けることを決意したが、本懐ではなかった。彼は機動部隊を指揮する立場には居るが、大艦巨砲主義者なのだ。史実、角田は戦艦、駆逐艦、巡洋艦の乗組を繰り返し、1923年には巡洋艦『夕張』の砲術長に任命されるなど、典型的な『鉄砲屋』の道を歩んでいた。そんな男が航空屋になったのは、1929年の第一航空戦隊に転属したのがきっかけである。その後、重巡洋艦『古鷹』や戦艦『長門』の艦長職を担うなどして再び鉄砲屋の道を歩んでいたが、1940年には第三航空戦隊司令官となり、再度航空屋となった。

1941年から始まった太平洋戦争中も、角田は第四航空戦隊司令官、第一航空艦隊司令長官を歴任と、航空屋の道を歩んでいた。山口多聞に並ぶ『闘将』であつた彼は「見敵必勝」を前提とし、空母を縦横無尽に走らせ、強引な用兵手腕で戦つた。時には付属の駆逐艦などのことを考えず、最大戦力で空母を突出させたこともある。また、空母の高角砲で艦艇や基地を攻撃したこともあつた。しかしこれらの戦法は結果的には成功し、多大な戦果を挙げる所となつた。しかし一方で典型的な大艦巨砲主義者である彼にとって、機動部隊の司令官という職は本意でならなかつたことだろう。闘将で知られる山口多聞は独自の航空研究を行い、また同じように闘将であつたウィリアム・F・ハルゼーは自らパイロットとなつた。そんな航空分野に情熱的である2人に比べれば、角田はその戦闘手腕も未熟で、知識も乏しい。彼が勝利した理由は空母を失うという恐怖を覚え、損失を顧みない戦法によるものだったのだろう。

「出来れば砲戦で決着を着けたかった」
角田は静かに呟いた。

第61話 バルト海の死闘（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1156s/>

時空戦艦『大和』

2011年10月10日10時55分発行